

# 浅野誠

## ワークショップ・授業

### 2007~2014年

ホームページやブログで2007~2014年に書いた記事のなかで、授業・ワークショップにかかわるものから選んで編集した。

配列は、項目ごとに、主として記事の掲載年月日順。タイトルの後に掲載年月日を記した。



# 目次

## 1) ワークショップ

### 保育・学童保育

7

- 「夢の学童クラブ」リレーお絵かき 夢が現実になりそう 西原学童指導員研修 2013年5月15、17日
- 「トトロの森で遊ぼう」「南城市おじゃまします」 いろんなアイデア噴出 南城市学童保育研修 2013年2月15日
- 溢れてしまうほど充実した学童研修ワークショップ 2012年12月12日
- 「なのはな保育園」で、子どもとの付き合い方ワークショップ 2012年5月21日
- お話をリレーでつくっていく 沖縄保育問題研究会ワークショップ 2007年9月20日

### 児童生徒対象

15

- 楽しみ、緊張のある小中高生への授業・ワークショップ 2010年5月11日
- 沖縄工業定時制「進路講話」ワークショップ 2010年5月19日

### 学校教師研修

19

- 小学校教師たちのリレーお絵かき 日生連ワークショップ 2014年12月21日
- ワークショップ「ワークショップ型授業づくり」開催の案内 2012年8月16日
- 教室設計・設営ワークショップ 2010年11月7日
- 八重山ワークショップの感想が届く 2010年10月
- 「相手をやる気にする仕掛け・働きかけ」を見つけよう・創ろう」 浦添市教委主催ワークショップ 2009年8～9月
- ワークショップ「肩の力を抜いて楽な気持ちで子どもたちと向き合い自分らしく成長するために」  
那覇市教委主催 第6回小・中学校生徒指導主事連絡協議会 2008年1月11日
- 沖縄アメリカンスクールでのワークショップレジメ——英語版ワークショップ初体験 2007年6月25日

### 大学専門学校教員研修

31

- 「学生がノル授業」へのワザとリクツ 沖縄リハビリテーション福祉学院の教育懇談会 2014年11月29日

高知看護教育研究会の風景 2009年6月  
 学生の意欲を高め、学生が動く授業へ 沖縄県立看護大学FD 2007年9月29日

## 大学生対象 42

琉球大学「特別活動に関する研究」「生活指導」ゲストティーチャーでのワークショップ 2007年5月14日  
 いろんな人とつながりながら、人生創造していこう  
 名桜大学教職サークル主催 ワークショップ 2007年5月19~20日  
 沖縄県立芸術大学『教育方法』ゲストティーチャー  
 ワークショップ授業「生徒がのる授業」への感想 2007年2月6日

## 同友会大学（沖縄県中小企業家同友会主催） 55

創造的討論が夜まで渦巻く 第20期 2014年9月17日  
 学校・企業・社員 どんな力をつけるか 第19期 2013年08月12日  
 ベルトコンベヤー対応型業務から物語創造型業務へ 卒論と私のコメント 第19期 2014年03月07日  
 私のワークショップへの興味深い多様な反応 第18期 2013年2~3月

## 多様な場面で 62

夫婦で“ている”「支援に役立つ家族関係講座」ワークショップ 2012年8月24日  
 シュガーホールのワークショップ 運営と方向性について 2009年5月  
 読谷村社会教育団体合同研修会 大成功 多様な企画が登場 2008年6月  
 多様な社会で、生き活きとしたPTA活動の実践 首里地区PTA協議会主催ワークショップ 2007年10月26日

## ワークショップ論 67

上田信行・中原淳「プレイフル・ラーニング」2013年三省堂を読む 2014年04月22日  
 ワークショップ本6<世界発見・共同活動創造・・・>刊行 2012年8月30日  
 音楽・演劇表現によるコミュニケーション・ワークショップ 2010年5月19日  
 カウンセリングとワークショップ 1~4 2010年4月  
 私のワークショップの変化 2009年9月2日  
 ワークショップについてインタビューを受ける 2008年5月4日  
 私のものとは随分異なる「ワークショップ型授業」土作彰『ワークショップ型授業』（学陽書房2005年）を読む  
 2007年7月27日

## 2) 授業 (大学・専門学校での)

### 大学をまたがったの記事 77

|          |    |
|----------|----|
| 2014 年前期 | 77 |
| 2013 年前期 | 83 |

### 琉球大学「特別活動の研究」 88

|          |     |
|----------|-----|
| 2014 年後期 | 88  |
| 2014 年前期 | 100 |
| 2012 年後期 | 109 |

### 沖縄リハビリテーション福祉学院 言語聴覚学科

#### 「実践的教育学 対人援助とコミュニケーション」 123

|               |     |
|---------------|-----|
| 2014 年        | 123 |
| 2013 年        | 128 |
| 2012 年        | 131 |
| 2011 年        | 137 |
| 2010 年 (一部掲載) | 140 |
| 2009 年 (一部掲載) | 141 |

### 沖縄県立看護大学 150

#### 「教育学」

|               |     |
|---------------|-----|
| 2014 年 (一部掲載) | 150 |
| 2013 年 (一部掲載) | 153 |
| 2012 年        | 156 |

#### 「教育原論」

|               |     |
|---------------|-----|
| 2011 年        | 169 |
| 2008 年 (一部掲載) | 176 |

2007年（一部掲載）

180

## 沖縄大学

184

「生徒指導論」2014年

184

「教職論」2013年

197

「専門演習」「問題発見演習」「教育方法論」2012年度後期 200

「教職論」2010年前期

216

「問題発見演習」

2012年前期

225

2011年後期

230

2011年前期

242

愛知教育大学大学院「教育方法特論」2009年

252

沖縄国際大学「教職演習」2007年

254

## 授業についてのエッセイ

258

私の学生との接し方の変化物語

258

2013年3~4月

1. 鬼の浅野から、仏の浅野、そして仙人の浅野へ

2. 多様な学生に関心をもつ仙人スタイル

3. ほめる

4. 学生たちに頼む 学生と目線の高さを同じにする

講義式から学生たちの知的共同創造活動へと授業の転換

261

2013年05月13日

おじいちゃん先生=私を助ける、やさしく勢いのいい学生たち

262

2013年06月26日

沖縄県立芸術大学大学院で「芸術表現総合比較研究Ⅰ」の

授業担当 我ながら驚き

263

2013年8月9日

大学授業での、身体交流・人間関係・レクチャー

264

2012年09月13日

前期の授業終了 学生から発見する特徴 後期の授業準備へ

264

2012年08月08日

「ためぐち」で話す学生 気になる学生への対応

266

2011年07月19日

|                                |     |               |
|--------------------------------|-----|---------------|
| 学生参加型授業アイデア                    | 266 | 2011年4~5月     |
| 1. 学生発行の授業通信                   |     |               |
| 2. 30分以上を討論・共同作業に              |     |               |
| 3. 教員と学生の委員会で授業運営              |     |               |
| 4. 学生が現場で実践する授業科目              |     |               |
| 5. 学生アシスタントの活用1                |     |               |
| 6. 学生アシスタントの活用2                |     |               |
| 7. 学生参加と成績評価1                  |     |               |
| 8. 最終成績評価 成績評価2                |     |               |
| 9. 学生参加と成績評価3                  |     |               |
| 10. いろいろなアイデア                  |     |               |
| マニュアルへの対応が上手い学生 下手な教員 マニュアルの功罪 | 274 | 2011年5月7日     |
| 私の授業参加原点                       | 275 | 2011年4月16日    |
| うまい講義の仕方                       | 275 | 2011年4月19日    |
| 学生と教職員がいっしょに大学授業改善を考える         | 276 | 2011年4月23~25日 |
| 私の授業は「一番、頭を使って体を使う」という学生の声     | 278 | 2011年3月7日     |
| 「人見知り」「人前で話すのが苦手」という学生たち       | 279 | 2011年2月23日    |
| 大学授業で人間関係を育てる                  | 280 | 2011年2月21日    |
| 学期末最後の私の授業とする自己評価・他者評価はドラマが多い  | 280 | 2011年2月20日    |
| 学生が、テスト問題・レポート課題をつくる           | 281 | 2011年1月29日    |
| 大学非常勤講師での担当科目と来年の授業計画          | 282 | 2010年12月15日   |
| 成績評価を、100点満点方式以外でやってみてはどうか     | 283 | 2010年12月7日    |
| 学生が企画運営する授業——沖縄大学の挑戦           | 285 | 2009年5月       |
| 教員の物語と学生の物語——大学教育・授業の物語性       | 285 | 2010年07月23日   |

# 1) ワークショップ

## 保育・学童保育

「夢の学童クラブ」リレーお絵かき 夢が  
現実になりそう 西原町学童指導員研修

2013年5月15~17日

13日と15日、西原町の社会福祉センターで、学童保育指導員の研修ワークショップ。子どもたちが豊かな世界を築くことをおおいに応援する行動力ある指導員19名が集合。優しさが溢れ、暖かいムードに会場が満たされる。

13日は色々な活動をしたが、最後にやった「夢の学童クラブ」リレーお絵かきが圧巻だった。4~5名グループで、リレー式に描いていく。最後に、最初に描いた人の所にもどり、一文字漢字でタイトルをつけ、全体で物語をプレゼンテーションする。

19枚すべてが個性的で豊かさあふれるが、ここでは7枚に絞って紹介しよう。見るだけで、夢がふくらむ。







15日  
午前、2  
回目のワ  
ークショ  
ップ

1) 参加  
者の希望  
があって、



私がハーブ持参。参加者がお湯ポットとコップ持参。全員が、ハーブティーを飲んでからスタート。皆びっくりと穏やかな笑顔

2) ハーブの葉5種を混ぜたものの中から、各自一枚取る。同じ葉を取った人でグループを作る。微妙な違いの葉が多いなか、うまく嗅ぎ分けて成功。



3) 物語をつないでいく。今回は、言葉ではなくて、ジェスチャー



チャーをつないでいく。そして、次はグループ単位でのストップモーションで物語を表現し、それを見た次のグループが物語をつなげていく。10秒ぐらいの相談時間でつなぐので、テキパキ。こんな難しいことが即興相談でできるとは、驚きの想像創造力と行動力をもつ参加者たちだ。

4) 私のワークショップでの定番の説得ロールプレイ。

- A「元気がとてもある子に、孤立気味な子どもといっしょに遊ぶことを勧める」
- B「やんちゃな子どもに、遊び道具を一人占めしないで順番にやるよう頼む」
- C「人前に出ることが好きでない子どもに、自慢大会にエントリーさせる」
- D「地味でおとなしい保護者に、学童クラブの役員になってもらう」

こんな場面を演じてもらった。学童クラブに来る子ども・保護者と日常的に展開する物語。個性的であり、相互にヒントを得るところが多かったろう。

5) 2日間のオオトリの活動は、学童クラブ活動アイデア大会。

一人一人が書いたアイデア数十枚から、人気投票で下記の5つに絞られる。そのなかから希望するものを選んで、グループで具体化作戦。それをポスターに描いて貼りだし、ユンタク。





- ☆ 誰の匂いか当てる大会 子どもたちはこれが得意だそうだ。
- ☆ 10日間無人島体験
- ☆ 旅先で現地集合！ (泊イユ町編) (美ら海水族館編)
- ☆ 泥んこ滑り込み大会
- ☆ 穴掘り大会



現実的なものが多いので、アレンジして実施されそうな気配を感じる。

## 「トトロの森で遊ぼう」「南城市おじゃまします」 いろんなアイデア噴出 南城市学童保育研修

2013年2月15日

14日午前、南城市役所大里庁舎会議室で、南城市の約10の学童保育から集まった指導員の方々の研修会・ワークショップを、私がコーディネートした。



最初から最後まで、すごく明るく楽しい雰囲気。それに加えて、エネルギーと創造性。出されてくる数々のワザ・アイデアには、健康と知性が溢れる。

掲載した写真は、5つのグループに分かれて作成した、学童の取り組みアイデアのポスター。





こんなアイデアが、各学童に持ちかえられて、子どもたちの新たな創造的取り組みが始まることだろう。

このアイデアづくりに至るまでのワークショップの流れを紹介しておこう。

1. アイスブレイキング「出会い」

じゃんけん列車 ⇒ 輪をつくる ⇒ 手のひらで伝える ⇒ あいさつを送る



2. ほめながら頼む

物語づくり

ほめ言葉・叱り言葉づくり

隣の人にほめながら頼む 「けん玉が下手で嫌いな指導員に、けん玉大会の仕切り役をやってもらう」

3. 頼む・断る

ロールプレイで、指導のワザを発見し・磨く

A「元気がとてもある子に、孤立気味な子どもといっしょに遊ぶことを勧める」

B「やんちゃな子どもに、遊び道具を一人占めしないで順番にやるよう頼む」

C「閉じこもり気味な子どもに、近所発見大会に参加するよう働きかける」

D「人前に出ることが好きでない子どもに、自慢大会にエントリーさせる」

E「お片付けをすることが減多にない子どもに、お片付けをさせる」

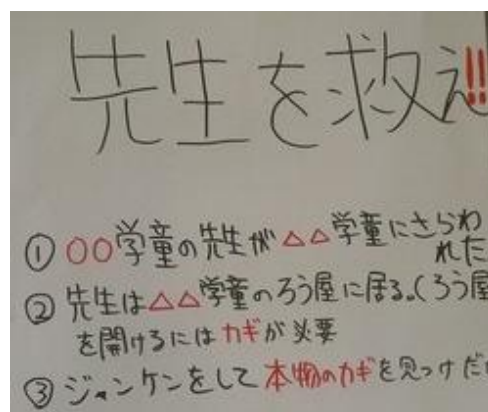
F「地味でおとなしい保護者に、学童クラブの役員になってもらう」

4. 夢の学童

夢リレー 「〇〇学童夢物語づくり」 最初は、言葉で

次に、リレーお絵かきで。

できあがった絵に、タイトルとお話をつけて発表







## 溢れてしまうほど充実した学童研修ワークショップ

2012年12月12日

9日、午前午後と長丁場のワークショップをした。参加者の豊かさ熱心さで、中味がとても濃くなり、ワークショップをすすめた私も満腹感にひたった。

研修会の正式名称は、「2012年度放課後児童クラブ指導員専門研修会」というもので、沖縄県総合福祉センターで、沖縄県の補助金で行われた。

私が担当したのは、Aコースで「子ども理解と子どもとの関わり」（人間関係を育てるワークショップ①② 保育実践の記録の取り方）という中味だ。参加者は、指導員歴1~5年目ということで、若い人中心ではあるが、多様な世代の方がおられた。指導員歴は浅くても、関連した経験が深い方が結構おられた。

流れの主なものは、次の通りだ。

アイスブレイキング「出会い」

物語づくり

ほめ方・叱り方

頼む・断る

夢の学童 夢リレー

夢の学童 リレーお絵かき（学童勧誘ポスター）

苦手な子どもとの付き合い方

取り組みアイデア大会

実践記録を書く

活発に進行したので、時間不足になり、「取り組みアイデア大会」が溢れだしてしまった。次の機会に是非やりたいと思う。いくつか、印象に残った事を書こう。

1) 参加者である学童指導員は、とても行動的だ。私がすすめるワークショップで行動的というと、看護師さんたちもそうだが、看護師さんの「行動的」は、「救急医療」のイメージだ。学童指導員の「行動的」は、「子どもたちと並行する」イメージだ。中には、子どもそのままというタイプ、子どもを「見守る」タイプ、子どもを「励ます」タイプ、子どもと「一緒に楽しむ」タイプ、子どもに「暖かさ、安心、落ち着きを提供する」タイプと色々だ。このようにタイプが異なる指導員数人で、日ごろの学童保育の生活が進んでいる。そこが学童保育の豊かさをつくり、さらに豊かになる基盤になっているのだろう。

2) 明るいけど、冷静。リズムカルだけど、ゆったり。活動的だけど、頭を使う。こんな二つの組み合わせが、日ごろの学童保育現場を豊かにしているのだろう。そして、今回のワークショップも豊かにしてくれた。



3) 参加者相互は、全沖縄から集まっているので、ほとんどが初対面だ。私もどこかで会った人だなと気付いたのは1割もない。だけど、ほんの数分で、お互いがつながりあうという感覚になるほど、つながりの雰囲気を作り出す方々だ。

4) 多様なアイデア・行動・提案が流れ出た。とくに「リレーお絵かき」「苦手な子どもとの付き合い方」は壮観だった。これに時間不足でできなかった「取り組みアイデア大会」が加われば、会場は『爆発寸前』状態になっただろう。

## 「なのはな保育園」で、子どもとの付き合い方ワークショップ 2012年5月21日

19日午後、南風原にある、なのはな保育園の保育者・保護者とともに、「子どもとの付き合い方」のワザ発見ワークショップ。私がコーディネートした。



- ・ 肩もみで「あいさつ」(上写真)

- 2) 「ほめ言葉」尽くし  
これまた、たくさん登場

隣の人に、「あなた~~~~なので、是非トイレ掃除をお願いしたいんだけど」と、ほめながら説得する場面を展開。隣の人は、最初は「いや」というが、「引き受ける気持ちが出てきたら、ハイと言う」ということで進行。

これまた、豊かに進行 (右写真)

- 3) 6グループをつくる  
手をつないだ4人グループが、相互にくぐり合うゲーム  
二人ペアになって、目をつむった自動車を、運転手が指先で操縦





### するゲーム

ゲーム終了で、目をあけた瞬間。(左写真)

#### 4) 効果的「叱り方」尽くし

以上の活動のなかで発見したワザをポストイットに書いて、大きな紙に貼りつける。

#### 5) ロールプレイ 6～7人チームで

子ども A      子ども B (A の仲良し)      保育者 C

同僚保育者 D

A の保護者 E      子ども FG (A とトラブった)

泣いている A を見つけて、C が対応する。 DE は途中から登場する。

3 グループが予行プレイの後、全体の前で演技  
演技のなかから参考になる点を発見して発表

即興だが、大変素晴らしい演技で、参加者にいろいろと参考になることが多かったようだ。

右写真は、ロールプレイの一場面



6) 保育者一人が、「椅子取りゲーム」を進行。

終了後、「椅子取りゲーム」のアレンジをグループごとに考え合い、提案。

7) 浅野が、協同関係を育む方向でのアレンジの提案。

「川を渡る」「クリスマスツリー」など

2時間足らずで、以上の展開。

濃密度がすごい。

## お話をリレーでつくっていく 沖縄保育問題研究会ワークショップ

2007年9月20日

19日、沖縄保育問題研究会主催でワークショップをした。90分のうち70分は、次のように、最近の定番の流れの活動を参加者の状況に沿いながらおこなった。

輪をつくる→あいさつをつないでいく(言葉、動作)→お話をつないでいく→やる気ができる言葉がけ→「やりたいこと」をポストイットに書いて床にはる→「やりたいこと」を共有する人とグループをつくる→グループで「やりたいこと」の

リレーお絵描き→絵にお話をつける→発表会

そして最後に、20分間、感想・発見・説明質疑をおこなった。

保育士の特徴といえるかもしれないが、参加者は、とても動きが早い。動作・表情を豊かに出す表現がとてもうまい。お話をどんどんふくらませていくのが、うまい。リレーお絵描きなどは、想像を絶するほど、リレーでどんどん豊かになり、それにつけたお話も実に豊かである。さすがプロといった感じ。絵もうまい。これまでリレーお絵描きは何十回というほどしたが、これほどの絵はめったにみられないというものが続出。

ワークショップに限らず、私のこのごろの実践は、物語をみんなで作り出していくことに焦点化している。リレーお絵描きにしても、リレーお話づくりにしても、そんな体験をもっていない参加者がほとんどだ。しかし、この活動を通して、協力して作りだしていくことの楽しさを、自然な流れのなかで、皆さんが味わっている。

スポーツをはじめとして、競争での楽しみ（しばしば悲哀）にはしょっちゅう出会うが、物語をつくっていくことにはなかなか出会わない。

人生の大半は、競争ではなくて、物語づくりなのに、である。物語づくりをいかに豊かにやっていけるかは、人生をどれだけ豊かにできるかの鍵だと思う。



# 児童生徒対象

## 楽しみ、緊張のある小中高生への授業・ワークショップ

2010年5月11日

来週、沖縄工業定時制で生徒対象の進路指導をテーマにした講話=ワークショップを行う。6月に入ると、伊江島の小中学校で授業をする計画の相談が進んでいる。

3月の那覇西高校での進路のシンポジウムは、こちらから話すことが中心だが、上の二つは、生徒自身が考え、行動しながら学んでいくことを、私がコーディネートするものなので、一層の楽しみがあるし、緊張感もある。

緊張があるというのは、学校・クラスによって子ども・生徒の雰囲気はずいぶん異なるので、うまく彼らとかみ合えるか、彼らが十分に動けるか、などが気がかりだからだ。それだけに、新しい出会いとなるので、楽しみが大きい。

生徒や子ども対象のワークショップも色々やってきたが、それだけに、思い出もたくさんある。

その一つは、30年ぐらい前の沖縄水産高校での体験だ。

きっかけは、高校教師の研究会で、生徒の動かし方について、私がいろいろと発言したのだから、「実演してくれ」という話がでたことにあった。沖縄水産高校の生徒は、当時の高校教師にとって、一番「動かしにくい」部類に入る生徒たちであったらしい。この生徒たちが動けば、私の生徒の動かし方を信じるという感じだった。

高校3年生の学年全員200名余りが対象だった。9月だったと記憶しているが、暑い日の午後、運動場での体育祭予行練習終了後、生徒たちはグッタリした雰囲気で、三々五々体育館にはいってくる。想定外のスタートだった。多くの生徒は、壁面にもたれて様子をうかがう感じだった。疲れているのに、さらに「何をさせるんだ」というメッセージが伝わってくる。そして、いろいろな高校から集まった10~20名の教師が参観している。

当初のシナリオ（指導案）でいけるわけがない。まずは、生徒が集まって、何かを一緒にできる態勢をつくらなくてはならない。

そこで思いついた。疲れた中でもこちらに合わせてくれる「私にとって神様」のような生徒数人に、体育館倉庫から、クラス数だけの大型マットを持ってきてくれるように頼んだ。

「一枚のマットのうえに、クラスの何人が乗れるかな。クラス対抗勝負だ」と、私は叫んだ。「クリスマスツリー」とか、「団結の樹」とか呼ばれている集団遊びの一つだ。数人で構成する班の対抗で遊ぶ例が普通だったが、30人以上のクラス対抗でやるのは、私も初体験だった。

最初のうちは、各クラス数名だったが、それをうんと褒めた。そのうち人数が少しずつ増え始め、壁を「愛していた」生徒も立ち上がって、マットの上に集まってきた。

そのあと、いくつかの活動をしたのだが、今では全く覚えていない。この最初の緊張感溢れすぎのシーンだけはよく覚えている。

そして、「図に乗って」200人の大群読大会をさせようとしたら、うまくいかなかった。そこで、現役高校教師にバトンタッチしようとしたが、引き受け手が誰もいない。やむをえず、時間切れを口実に、「みんな張り切ってくれてありがとう」と話して終了した。

「図に乗りすぎて失敗したな」という思いで、振り返りの研究会に参加した。驚いたことに、高校教師たちは、「水産生がこれほど動くのを見たことがない」と発言。ともかくも、それなりの「成功」を取めたのだ、ということが、その時分かって、ほっとした。

こんな冷や汗体験、喜び体験いろいろと経ながら、今日に至っている。

## 沖縄工業定時制「進路講話」ワークショップ

2010年5月19日

18日19時過ぎより、約1時間、全生徒50名を対象におこなった。

会場の視聴覚室の中央に広場を作り、周りに楕円形に椅子を並べた。開始前に、その椅子の一つに腰掛けて、生徒を待った。生徒何人かと声を掛け合う。

予想以上に、気楽な会話が進む。恥ずかしそうにする生徒もいるが。

「この形、見たことがない。どうして、こんな形にするの」

「これが、私流なんだ」

「でも、普通じゃないよ」

「私にとっては、これが普通なんだ。じゃ、君たちには、どんなのが普通なの？」

といった会話もした。

私にとって、ワークショップ開始前のいつもの光景だ。参加者とつながりを作り始め、今日の「出だし」をどうもっていくか、予定通りで行くか、修正を加えるか、考えるのだ。とくに今回のように、参加者が自主参加ではなく、学校が設定したものである場合はそうだ。



開始して、「進路を作っていくには、仲間を作ることが大切」などという2, 3分の話の後、誕生日日順に一つの輪を作る。初体験にしては、かなり早く1分半で、輪ができる。

私のワークショップの定番の挨拶送りをはじめが、大きな輪だと、恥ずかしすぎて、テレしてしまう生徒がたくさん出そうなので、1, 2, 3, 4, 5, 1, 2・・・という番号をかけて、5人単位の小グループを作り、その中で、名前を言って挨拶を送っていく。

ここで、当初計画のショートカットを決断。

大半の生徒が、大人数前で自分を出す体験が少なく、その場から「ひいてしま」いそうなので、小人数のグループ単位の作業に、すぐに入ることにした。

5人の小グループで取り組んでもらったのは、「〇〇さん・君物語」だ。

以下の項目についてのA4大記入用紙を、全員に配布した。

名前

昼ごはんを食べたもの

好きなもの

好きな色

自慢・ウリ  
 仲間  
 頼れる人  
 将来の仕事の候補1  
 将来の仕事の候補2  
 将来の進路にかかわって、知りたい事  
 将来の夢  
 学校や先生にしてほしいこと  
 ○○さんへの期待 ( ) から  
 ○○さんへの期待 ( ) から  
 ○○さんへの期待 ( ) から  
 私の言葉1  
 私の言葉2

各項目には、記入例を書いておいた。

まず、名前欄に、本人が書く。書いた後、用紙を右隣に渡す。右隣の人は、2段目の「昼ごはん食べたもの」を、1段目の「名前」の本人にインタビューして記入する。終わったら、さらに右隣に渡す。同じ要領で、3段目について、用紙を持っている人が、「名前」の本人にインタビューし記入する。

同じ要領で、まわしては記入するということが続けていく。「○○さんへの期待 ( ) から」の個所は、用紙の持ち主が、( ) に自分の名前を書き、○○さん、つまり1段目の名前の人に「期待するもの」を書く。

最後の「私の言葉」は、1段目の名前の本人に、用紙を渡し、本人が記入する。

こんな要領だ。進路創造は、仲間関係がとて大切になるということ、この活動を通して気付いてもらおうという願いをこめた活動だ。お互いの事を知りあいながら、自分自身についても発見しようというものでもある。とくに肯定面の発見を大切にしよう、というのだ。

この活動は、私が今回初めて作ったもので、むしろ初公開初実施のものだ。若者、とくにエリートコース、「ストレーター」コースの道を歩むわけではない多くの若者の進路創造にとって、仲間関係が大変重要になるという多くの調査データをもとにしたものだ。

また、私のワークショップでよく行うリレーお絵かきの方法を転用したのもでもある。

ワークショップ初体験の生徒たちは、戸惑いながらも記入作業を開始した。リレー式に、しかもインタビューをしながら書くという、ややこしい作業ということも、戸惑いを増したようだ。しかし、いつものワークショップのように、やりながらだんだん飲み込めていくはずという「確信」で進行させていく。無論、生徒は多様だし、なかでも恥ずかしがり屋は、誕生日順という偶然でできたグループでの作業で過剰緊張したようだ。おしゃべり雰囲気を作って、緊張を解いていた生徒たちもいた。

驚いたのは、どんどん書き進んでいく生徒がいたことだ。まわして記入し合うことをしないで、自分自身で全部書いてしまった生徒が、数名いた。

ということで、予想以上にテンポよく、記入が進む。結果的に、7割以上の生徒が、期待通りに記入してくれた。中には、「照れて」、冗談風に記入したのもあったが。

当初予定では、このあと、これらを生徒全体に見せあって、いろいろと語りあい、発見し考えていくというものだったが、生徒たちは疲れたようだ。集中作業を30分も続けたわけだから。

そこで、記入しおえた段階で区切りにし、私から簡単なコメントをして終る。

コメントは数分だったが、こんなことも語った。

どんどん自分で書いて行った生徒の二人の記入欄の中の「頼れる人」の欄には、一人は「自分自身」、もう一人は「周りのみんな」と書かれていた。これから生きていき、進路を創っていく上で、この二つはとても大切だ、と絶賛する。二人にインタビューを試みたが、元気者の二人ですが、照れて無言だった。

こんな風にして、1時間のワークショップを終える。

当初のプログラム通りにはならなかったのですが、参加者の状況を踏まえて、自在に進行を変化させるワークショップでは当たり前のことだろう。

また、こちらの要請通りに記入した生徒は7割程度だが、その他の生徒も自分なりのやり方で記入していた。私の準備の仕方に、もう一段の工夫が必要だったようだ。

それでも、参加した生徒全員が関わってくれて、大変うれしく思う。また、グループ人数が足りなくなったグループに応援参加して下さった先生の協力も大変力になった。

終わった後、生徒がこんなに活発に動いたことがうれしかったと先生方が語って下さったことは、私にもうれしい事だった。これを機にワークショップ型の取り組みをしたいと語る先生もおられた。今後の挑戦・発展に期待したい、と思う。

# 学校教師研修

## 小学校教師たちのリレーお絵かき 日生連ワークショップ

2014年12月21日

20日午後、沖縄国際大学で、沖縄の日本生活教育連盟の人たちが集まって、ワークショップを体験的に学ぶ学習会をした。

私がいつもしているワークショップのなかで、小学校のクラスで取り入れやすいワークショップをいくつか候補にあげ、そのなかから要望が強かった「なりきろう」「リレーお絵かき」をした。

さすが小学校の先生らしいものができあがってきた。「なりきろう」では、豊かな創造／想像が繰り広げられる。



リレーお絵かきは、この活動を始めるとき、「キツネにつままれた」顔をなさっていたのが、終わってみれば感動の雰

囲気が立ち込める。絵の共通テーマは、「3月の学年最後のクラス」だ。

左写真は、子ども相互がほめる場面だ。

参加者相互の雰囲気がとてもよくて、アイスブレイキングをする必要もなく進んだが、アイスブレイキングのやり方についての紹介が必要だろう。それと、今回候補に挙げて、時間の都合でしなかった活動を含めて、次の機会に、ということになった。小学校は、多様なワークショップを創造していけるし、その基盤が強く存在しているところだと、改めて感じる。

特筆したいのは、おかあさんといっしょに参加していた小学3年生が、すべての活動で生き生きと参加していたことだ。「ほっとするもの」として「木の葉」を見つけ、「木の葉」になりきって、物語をつくるなど、素晴らしかった。ワークショップは年齢差を越えてやれるから、とてもいい。



## ワークショップ「ワークショップ型授業づくり」の案内

2012年8月16日

9月8日に、沖縄民間教育研究連絡会研究集会（略称「沖民教」）主催の教員対象の研究会で、やることになりました。その案内文には、次のように書きました。

ここ20年余り、世界の産業と教育のありようは激変しています。大量生産大量消費を支えた、ベルトコンベア型やコールセンター型の業務は、賃金の安い発展途上国に移されています。

大量生産にふさわしい人材を養成するためのつめこみ・くりかえし型受身型学びスタイルを、共同創造型の学び、ワークショップ型授業に変える流れは、圧倒的な勢いです。フィンランドとかカナダとかいった国だけではありません。上海・香港・シンガポールと言ったところもそうです。また、発展途上国と言われる所でも、住民自身が『開発』をすすめることを重視するところでは、ワークショップ型の展開が、20年以上前から重視されてきました。

日本の教育行政は、ようやくそのことに気付いて、少しずつ試み始めました。それに対して、日本の民間教育研究運動のなかには、そうしたことを40年以上にわたって追求してきたところがあります。そうした蓄積を背景に、日本の小学校教師の授業は、世界的にも高く評価されてきましたが、伝達詰め込みドリル型に圧倒される傾向が、沖縄では強く存在していました。

今回は、そのワークショップ型授業づくりを体得するための、さわりの活動を行います。時間的制約のために、授業プラン作成の1/3くらいで終わりますが、ここでの体験をもとに、自らワークショップ型授業を作るスタートにして下さい。すでにそうした授業を始めている方は、さらに発展させるヒントをつかんで下さい。

当日の流れの概要は、次の通りです。

- 1) アイスブレイキング
- 2) 授業タイトル集め
- 3) 授業アイデア集め
- 4) 授業タイトル絞り 制作グループ作り
- 5) 授業構想ポイント作成
- 6) プレゼンテーション
- 7) ポスター討論
- 8) 振り返り

※ 時間の都合で、授業案作成まではいけませんが、その寸前の準備まで行く。

## 教室設計・設営ワークショップ

2010年11月7日

私は、授業する際、机・いす・教室形態・配置をすごく重視してきた。説明だけの授業なら、それほどの関心を持たなかっただろうが、多様な活動を行う授業をしてきたので、いやおうなしに工夫が必要だった。ほとんどの教室が、そういうことを想定していないので、なおさら工夫が必要だった。

教室設計に強く関心をもったきっかけのもう一つは、琉球大学教育学部が、首里から現在の敷地に移転する際、教育学部の移転委員になり、建物構想づくりにかかわったことだった。教育学部らしく、小中学校の授業創造をする将来の教師



のための、大学の授業自体を豊かに展開できるように、と考えたのだ。

当時の委員の方々には、優れた方が多く、独自のものを創造していこうという機運が生まれた。全国いくつかの大学を見学し、参考にしつつも、琉球大学独自のものを創造していった。その一つに教室の工夫があった。大量生産方式の大教室をできるだけ避け、多彩な授業展開が可能になるような教室づくりを追求した。展示教室、レッスン教室、畳間教室なども生まれた。

こんな風に、授業をする教員自身が、教室設計にかかわることは当然のことだが、実際には小中高校も含めて稀なことだ。建築家任せ、ないしは「基準」任せなのだ。

こうした状況を打破し、また魅力的な授業づくりのために、大学教師対象の授業づくりワークショップでは、教室設定の活動をしばしば行ってきた。

これをさらに生徒や学生にしてもらうことを最近思いついた。教室設計設営に生徒学生が関わることなど、前代未聞のことだろう。実際にそこで長時間過ごすのは、かれらなのにもかかわらず。

だから、生徒や学生たちは、教室のありように関心をもたない。教室を自分たちで工夫することなどは思いもつかない。関心をもつのは、せいぜい壁面を飾る美化委員ぐらいであることが普通だ。また、「ゴミを落とすな」とか「余計なものをなくす」とかいう、「消極的な」発想がはびこり、美しく快適に、かつ授業を盛りたてる教室という「積極的な」発想は稀だ。その点では、保育園・幼稚園などは優れた実績がある。学びたいことだ。

という実情になんとか一石を投じる気持ちをこめて、生徒や学生たちが考える教室設計・配置のワークショップをしてみた。

流れはシンプルだ。

次のような授業例を示し、参加者一人ひとりがそのうちどれか一つを選んでグループをつくり、それにふさわしい教室設計を図示するというものだ。

- 英作文「クリントン国務長官に、沖縄について訴える手紙」を書く授業
- 受講生の寿命予測を算出する確率計算の授業
- 詩『雨ニモマケズ』の授業
- 豚の心臓の授業
- 受講生相互の顔をデッサンする授業
- 疲労を取るストレッチ体操の授業
- サプリメント過剰依存を防ぐ授業
- できるだけ一人でいたい生徒に配慮した教室
- 視力0.1以下が数名いるクラスに合わせた教室
- 学園祭での学級共同巨大折り紙「幸せ」の制作のための教室
- 病弱な先生が、授業を長く続けられる教室
- 校舎新築のための仮プレハブ教室を快適にする
- クラスの90%以上が発言して、活気のあるクラスを生む教室
- クラスの過半数が家庭的雰囲気知らないクラスむけ教室

グループで横造紙にプランを書く形で進める。プランの絵のほかに、「大切にしたいポイント」「アイデア」なども書き込む。

「大切にしたいポイント」例としては、「討論のしやすい机配置」「家庭的雰囲気を生むリビングルーム家具の活用」、「ア

アイデア例としては、「ヨガマットをひく」「ダンボールの活用」「背面黒板・壁面利用」などがある  
こうしてできた「教室の設計図・設営図」を全体場でプレゼンテーションし、討論する。

こうした体験はどこでやっても初体験になり、かなりの盛り上がりを見せるだろう。そして、実際に、教師も生徒も、その後の教室づくりに生かすことができていこう。

## 八重山ワークショップの感想が届く

2009年10月

沖教組八重山支部教育研究集会で「『地球起こし 沖繩起こし 人生起こし』の教育へ」というワークショップをした。  
後日、主催者から、参加者が記入した当日終了後の感想が送られてきた。

それらを原文のまま、転記しよう。

- ・子どもたちの学習の原点を広げさせる素敵な研修でした。
- ・ワークショップを基にした緊張感を持たずに、子ども心に楽しく研修できました。
- ・良い講演会でした。参加できたことに喜びを感じます。
- ・楽しい時間を過ごすことができました。浅野先生ありがとうございました。
- ・講演会（ワークショップ）はとても良かったです。また石垣に来てほしいです。
- ・良かったです。
- ・人生起こし 宿命・レール型→自主創造型 経済停滞→高度成長→安定円熟・衰退 の縦軸、横軸の参加、あいさつ、ほめる、ボディアクション、「恥ずかしい」が先に立ってすぐにはできませんでしたが、みんなの中で過ごせたことがとてもありがたかったです。
- ・あっという間に時間が過ぎました。ワークショップの良さを知ることができました。ありがとうございました。
- ・あと30分ぐらい聞きたかったです。

感想をよせていただきありがとうございました。

ワークショップは、講師が一方向的に話す講演とは異なり、参加者自身が作り出すものです。参加者の力をうまく出し、相互に絡み合って深めていくようにすることが私の役目です。

当日の質問の一つに、私からのメッセージが分からないというのがありましたが、参加者自身が作り出すというありように私のメッセージがあります。また、いろんな活動を参加者の皆さんが展開していくのを「お膳立て」することのなかに、私の強いメッセージがこめられています。

八重山の皆さん、またお会いして、ワークショップができることを楽しみにしています。

## 「相手をやる気にする仕掛け・働きかけ」を見つけよう・創ろう」

浦添市教委主催ワークショップ

2009年8～9月

8月27日午後、小中学校の生徒指導主事・心の相談員対象。「「相手をやる気にする仕掛け・働きかけ」を見つけよう・創ろう」がテーマ。とっても創造的で、素敵なものを出す。

コーディネータをつとめた私自身が、参加者が作り上げ表現したもので、超「満腹」状態。これだけ参加者の皆さんは創造的なのだ。そんな方々がだすものをお互いに学びあうものだから、皆さん、超生き生きだ。

ワークショップのレジメを紹介しよう。

いつものことながら、レジメはレジメで、当日に実際の進行は、参加者との協同作業のなかで、どんどん変化していく。今回も、数か所以上変化した。それでも、ワークショップの流れの概要紹介には、このレジメが便利なので、レジメのまま紹介しよう。

\*\*\*\*\*

浦添市教育委員会 小中学校生徒指導主事、心の相談員合同研修会  
「相手をやる気にする仕掛け・働きかけ」を見つけよう・創ろう

講師 浅野誠

2009年8月27日15時～16時45分

浦添市ハーモニーセンター

参加者 小中学校生徒指導主事（小11校中学校5校）、心の相談員（15名）、青少年センター、教育研究所等教育相談員 合計約48名

研修概要 「公文」より

「夏休み明け」の生徒指導を、生活リズムの立て直しを図る等の取組の充実を図るとともに、「夏休み明け」を学校生活の節目ととらえ、子どもたちが「今度は頑張ろう」という気持ちになるだろうと推測した上での積極的生徒指導が重要である。節目を機に心機一転するチャンスととらえ、教師は意図的に普段以上に様々な仕掛けをする必要がある。

本研修は、生活指導で定評のある浅野誠氏を講師に招聘し、子どもたちの声に耳を傾け、子どもたちが主体的に活動する楽しい学校・仲間作り等を意図したワークショップを開催する。

#### キーワード

6月25日研修会（実施済の別のもの）より

- ①出番創り・・・活躍の場の創出
- ②役割を与える
- ③承認する・・・認め、ほめる→意欲

加えて

- ④子どもの良いところ探しの天才
- ⑤教職員間・学校間連携
- ⑥肩の力を抜いて楽な気持ちで、発見創造
- ⑦仕掛け

進行

第一部 アイスブレイキング・ほめ言葉・仕掛け・取り組み発見（35分）

- 1) 誕生日日順などで輪をつくる
- 2) 創造的あいさつ送り 言葉で



3) 創造的あいさつ送り 動作で

4) 5グループに分ける

5) くぐりあいゲーム

6) 古今東西 ほめ言葉

例 すてき あなたの話ジーンとくるわね

あなたの〇〇、何度でもやってほしいね

7) 同 9月にやってみたい仕掛け・取り組み

例 クラス大笑い大会 サプライズ▽▽君誕生会

黒板に、「すごい! 〇〇さんが」と書いておく。

8) 隣の人に、「あなたは、こんないいところがあるから、こんなことをしてみたらどうですか」と、さそいかける。隣の人を、子ども・保護者・教職員に見立ててもよい。

例 あなたはじっとしていないで、体を動かすことが好きだから、「運動場で盛り上がる会」のリーダーになってほしいな。

順番にまわしていく。

9) 隣の人に、「対応に困っている一人の子ども」に、一緒にめんどろを見てくれるように頼む

例 私は、おとなしすぎる子どもの対応が苦手だけど、あなたは、ゆったりと相手のペースに合わせて、相手が動き出すようにすることがうまいから、今度一緒に対応してくれませんか。

逆方向の順番にまわしていく。

\* コツ——隣人のいいところをほめて、「できそうだ」「やってみたくなる」という気持ちにさせる

## 第二部 働きかけ方発見・創造 (55分)

1) 並べられたカードのなかから、いまから考えてみたい働きかけが書かれてあるカードがあるところ集まる。

2) 同じ番号の人たちで、グループをつくる 7～8名で1グループ。3名以下の場合は、他のグループに移ってもらう。

3) グループのなかで、働きかけられる役1名を決める。

そのほかの人は、働きかける役を順番にする

\* 状況に応じて、そのほかの人を、アドリブで必要な役にしてよい

4) 交代で働きかけてみる

5) 働きかけのなかで、印象的なもの一つを選び、全体演技役とする

6) 全体の場合、各グループの演技を一つずつ紹介する

7) いくつかのシーンをまとめて、発見したことの全体討論

8) 全体のふりかえり

## 働きかけシーンの題材

1) 9～10月に〇〇〇〇というとっても面白いことをしようと、沈滞気味のクラスの役員のAさんに

2) 注意散漫で教室のなかをしばしば動きまわるBさんに

3) 掃除をよくさぼるが、なかなか面白いことをするグループのリーダー格のCさんに

4) 朝食抜きが多く、遅刻・欠席もしばしばで、友達も少ないDさんとその親に

5) 子ども間のトラブルで悩んでいるが、他の人に相談できないでいそうなF先生に

6) 子どもが出している〇〇のような赤信号・黄信号に気づかず動こうとしないG先生に

7) 目立たないけど、この先生と組んで〇〇のような取組をしたいと思うH先生に

8) 引っ込み気味だが、▽▽という特技があり、子どもたちに慕われそうなIさんに、◆◆の取り組みへの参加を

ワークショップの参加者が、終了后感想を書いてくれました。

- ・ アイスブレイキングやロールプレイなどの参加型の手法ってやっぱりいいですね。大変、勉強になりました。お疲れ様でした。
- ・ とても楽しい研修でした。学校にもどり、活用したいと思います。ありがとうございました。
- ・ リアルな声が聞こえて良かったです。私の悩みに近い（最後のワーク）ものがあって、とても良いアドバイスがもらえました。最初は溶け込めないかと思ったけど、みんなが優しくてうれしかったです。若々しい先生のお姿に感動しました。
- ・ 一人より二人、またそれ以上集まれば、人の力で、自分も影響を受け、はっと気づくものもあれば、アイデアもどんどん倍増していく楽しさを感じました。きっと子どもたちも、集団の力で、たくましく育っていくのだと思います。そのためにも、大人の意識の持ち方や、環境の整え方が、とても大切だと感じました。
- ・ とても参考になりました。浦添ドラマプロジェクトもまたよろしくお願いします。
- ・ 私は知らない先生方といきなり話したりするのが苦手で、今日の研修は前半苦しかったです。しかし、終わった後のすがすがしい気持ちはなんだろう！ ありがとうございました！
- ・ 教師、児童、保護者などの様々な視点から考えたロールプレイングや和気あいあいできるゲームなどが良かったです。現場でも活用していきます。
- ・ 聞くだけでなく、話し合う時間が多かったことと、シュミレーション的なことが多かったので、いろいろな先生方の手法を知ることができて良かったです。
- ・ とてもやわらかい雰囲気、何のプレッシャーもなく、楽しんで行うことができました。浅野先生のやわらかな雰囲気があればこそだと思います。
- ・ 浅野先生の授業は2度目です。前回はそうでしたが、またまた浅野ワールドへ引き込まれてしまいました。楽しかったです。ありがとうございました。
- ・ 浅野先生。今日は「お土産のたくさんつまった講義、ワークショップ」を有り難うございました。他校の先生とコミュニケーションをとり楽しい時間になりました。学校においても、様々なワークショップ（エンカウンター）を取り入れ、校内の先生が連携が取りやすい雰囲気になると良いと思いました。
- ・ 本日は楽しい研修ありがとうございました。他の先生方の生の声、経験談をたくさん聞くことができ、とても充実した研修になりました。
- ・ ワークショップ最初から受けられず残念です。受講者の皆さんの笑顔で内容の素晴らしさを感じました。すこしでも参加できたことに感謝もうしあげます。
- ・ 今日をご指導ありがとうございました。楽しく、自分自身の発見もありました。寸劇が楽しかったです。大人も（たとえ嘘でも）ほめられることばがけは、うれしく思うもの。子どもはほめていく必要がありますね。
- ・ 体験的なワークショップで楽しい時間を過ごすことができました。理論より体験、行動から学ぶことも多いと気づかされました。
- ・ とても勉強になりました。ワークショップはすばらしいものなので、学校の校内研でも活用してみたいと思います。
- ・ 関わることのすばらしさ。そして、その子、その人の良いところを多く見つけられる努力をしたいです。笑顔でワークができました。
- ・ 今日のワークショップ大変楽しかったです。いつもの研修より他の方と関わりができましたし、多くの考え方が得ら



れ、即実践に持って行けそうで得るものが大でした。ありがとうございました。

- ・ なごやかなワークショップ大変楽しく過ごすことができました。働きかけシーンのロールプレイでいいところ探しを伝え合うことは大変すばらしいことだと思います。浅野先生本日は本当にお世話になりました。今日のような研修はぜひとも何度も取り入れていただきたいです。仲盛先生の情熱と想いが伝わってくる研修、いつも本当にありがとうございます。
- ・ 他の人の考え（経験）を話し合う場！ こんな研修を待っていました。一人がただならぬ（いい話かもしれないが）よりも、色々なパターンを（悩みを）話し合うことがためになるとあらためて感じました。ぜひもう一度ワークショップやりたいです。ありがとうございました。
- ・ 第一部で、一人一人発言する場を設けることで、他人とのコミュニケーションをすることで、うちとけやすかった。子ども達（クラス）にも使っていけると思うので良かったです。第二部、いろんな先生の働き・声かけを聞いて、気づかされるのがあって良かったです。ありがとうございました。
- ・ 生徒へのアプローチ等大変参考になりました。
- ・ ゲームの中のほめ殺しにはまいりました。夫にも言われた事がない言葉をすてきな男性から言っただき超感動！！プレゼントをたくさんいただきました。ありがとうございます。ロールプレイでは、子どもの気持ちがよくわかり両親がそろっている事の重要性をあらためて感じました。ありがとうございます。
- ・ さすがは、学校現場で日々、子ども達と向き合っている先生、相談員の方々です。今日のワークショップでは、そのマンパワーを感じる事ができました。良い学びの機会をありがとうございました。

## ワークショップ「肩の力を抜いて楽な気持ちで子どもたちと向き合い自分らしく成長するために」 那覇市教委主催 第6回小・中学校生徒指導主事連絡協議会 2008/1/11

※当日配布したレジメを紹介する。

ねらい ワークショップを通して生徒指導主事としての肩の力を抜いて楽な気持ちで子どもたちと向き合い自分らしく成長するためにどうするべきかについて考える

コーディネイター 浅野誠

進行

第一部

- 1) 誕生月日順で輪をつくる
- 2) あいさつ送り こんにちは ハイ!
- 3) 手をつないで信号を送る
- 4) 4グループに分ける 1/1, 4/1, 7/1, 10/1生まれを先頭にして
- 5) 創造的あいさつを送る 言葉で
- 6) 創造的あいさつを送る 動作で
- 7) 古今東西 ほめ言葉



8) 隣の人に、「元気がよすぎて、指導に困っているAさん」のめんどろを見てくれるように頼む 順番にまわしていく

9) 隣の人に、「元気がなさすぎて、指導に困っているBさん」のめんどろを見てくれるように頼む 逆方向の順番にまわしていく。

\* コツ——隣人のいいところをほめて、「できそうだ」「やってみたくなる」という気持ちにさせる

## 第二部

1) 裏返したカードから一枚をとる。

2) 同じ番号の人たちで、グループをつくる 6～7名で1グループ

3) グループのなかで、説得・指導される役1名を決める。(Cさん～Kさん)

そのほかの人は、説得・指導する役を交代でする

\* 状況に応じて、そのほかの人を、アドリブで必要な役にしてい

4) 交代で説得・指導を試みる

5) 説得・指導のなかで、印象的なもの一つを選び、全体演技役とする

6) 全体の場で、各グループの演技を一つづつ紹介する

まず、生徒説得シーンの1～3グループ

7) 三つのシーンについて、発見したことの全体討論

8) 同僚説得シーンの4～6グループ 6) 7) と同様

9) 親説得シーンの7～8グループ 6) 7) と同様

10) 全体のふりかえり

### 説得・指導シーンの題材

1) 注意散漫で教室のなかをしばしば動きまわるCさん

2) 仲良しグループとつるんで、掃除をよくさぼるDさん

3) 「友達はいらん」というほど、人をバカにして孤立しているEさん

4) 子どもを頭ごなしに叱りつけて、逆に子どもをきれさせてしまうことが多いF先生

5) 子ども間のトラブルに出会うと、すぐに「仲直り」といって処置したつもりになっているG先生

6) 子ども間のトラブルをめぐる、子どもが出している赤信号・黄信号に気づかず、動こうとしないH先生

7) 事件を起こしたけれど、自分の子どもには何の責任もないというはるIさん

8) 保護者を叱りつけることが多くて、親との関係を悪くしているJ先生が、子どもにまじめにかかわっているが、うまくいなくて困っているKさんと話しているシーン

\* 8) のみ、説得・指導され役は二人

## 沖縄アメラジアンスクールでのワークショップレジメ

### 英語版ワークショップ初体験

2007年6月25日

※ 私がアメラジアンスクール・イン・オキナワの校長に就任する以前に、同校の教職員対象に行ったもの。その後もしているが、この時のワークショップの紹介に留める。

## Workshop: Inter-connectedness, discovery and co-creation toward ‘AmerAsian school in Okinawa’ Dream

沖縄アメリジアンスクールの夢に向かって、つながりあい、発見、協同創造

2007/07/06

Coordinator: Makoto Asano

\* My English is very poor. Please support me.

### Purpose

1. Promoting inter-connectedness among staffs  
教職員のつながりを深めるために
2. Discovering various ways to guide students  
生徒を導くためのいろいろなやり方を発見
3. Sharing tasks and prospects of ‘AmerAsian school in Okinawa’  
沖縄アメリジアンスクールの課題と期待を考えよう

### Procedure

※ Some activities may be left out because of shortage of time

The first section: **Convivial communication** 40minutes

楽しいコミュニケーション

1. Form a circle according to the size of your most favorite animal, silently using only gestures and mime.  
一番好きな動物の大きさ順に一列に並ぼう。声を出さずに身振りだけで。
2. Communicate through various ways  
Waves of body actions quietly and hotly  
いろんなコミュニケーション方法 身体の動き 静かに 激しく
3. Making a relay story お話をリレー式につくっていきこう  
for example 1?this morning 2?I got up at 7'o'clock 3?and had breakfast ‘Goya champroo’ 4?after that, I drove to the school 5 just on the way I happened to met Robinson 6?he was a neighbor when I lived in California.....
4. A short group game 集団遊び  
Members are divided into three groups, and each group forms a line by shaking other’s hand. Hearing ‘right!’ signal, the right member of each group leads her/his members to go through the other group. And ‘left’ .....as above.....  
---plenary session  
Talking about what you feel and think in these processes through a magic microphone  
魔法のマイクを使ってふりかえりの話し合い
5. Say in turn various key-words about ‘AmerAsian school inOkinawa’  
沖縄アメリジアンスクールのキーワードを順にいったいこう
6. Discover best qualities each other  
お互いのいいところ発見  
All members each have a sheet pinned to their backs.  
Each person writes positive statements about each member on small slips of paper and paste it onto the sheet on her/his back.
7. Talk to the next person to give an incentive for her/him willingly to do works in this workshop, using your favorite words which promote your students.  
生徒たちをやる気にするために使っている「得意ことば」を使って、隣の人の「やる気」を出させよう。

## 8. Introduce yourself in a special way

## 変わり自己紹介

If you were a part of human body, it is .... (ex. hair, stomach, leg.... )

Ex. I am a lever, because I continue to work always and silently

The second section:

### How to get along with a student whom you feel difficult to get along well with

40minutes

## 苦手な生徒とのつきあい方発見

1. Write on a small paper how type is a student whom you feel difficult to get along well with.

苦手な生徒はどんなタイプなのか、紙に書いて、床に並べてください。

2. Lay it on the floor and classify all of them into some groups

3. Divide all of you into some groups according to similar writing

似たものを書いた人たちでグループをつくってください。

4. Play in turn a short scene of not getting along with the student by each group as role-playing in plenary session 全体の前で、グループごとに、苦手な生徒に困っているシーンをロールプレイしてください。

5. Other members think some advices how to cope with them, write it to a small sheet of paper, and hand it to the group.

そのグループ以外の人は、そのグループに対してアドバイスを紙に書いて、そのグループに渡してください。

6. Each group chooses the best advice out of sheets received, and invite as adviser her/him who wrote the best advice.

各グループは、一番いいアドバイスを選んで、それを書いた人をアドバイザーとして招いてください。7. The second

role-playing scene is played by the group on the basis of the advice

そのアドバイスをもとにして、うまくやっていくシーンをロールプレイしてください。

--plenary session: Speak what you discover through these processes through a magic microphone.

The third section:

### Relay-draw excellent prospects of 'AmerAsian school in Okinawa'

40minutes

沖縄アメリジアンスクールの素晴らしい将来をリレーでお絵描きする

1. Writes in several words on problems and dreams in future of 'AmerAsian school in Okinawa' to small slips of paper, and place them on the floor, or onto the wall. Each member had better write several slips.

沖縄アメリジアンスクールの将来の問題と夢を短文にして、紙に書いて並べてください。

2. An A3 or B4 Kent paper and a set of several color felt pens are distributed to each member.

3. Referring some slips out of all of them, s/he starts to draw a picture about what s/he imagines as an excellent prospect of your class or 'AmerAsian school in Okinawa' only in 3 minutes.

書かれた短文をいくつかを参考にして、クラスか、沖縄アメリジアンスクール全体かどちらかの素晴らしい将来像をイメージして、3分で絵を描いてください。

4. The picture is passed to the next left member, who starts to draw an additional picture only in 150 seconds on the picture painted by the former member.

書いた絵を左隣の人に渡してください。左隣の人は、その絵に書き加えていってください。150秒で。

5. As above the third member draw the third additional one only in 120 seconds

こんな風にして、どんどん左となりの人に渡して行って、書き加えていきます。

6. After finishing to be drawn by several members, the picture will be passed to the first member, who makes a narrative about the picture.

The narrative will be presented in the plenary session.

数人の人が書き加え終わったら、その絵は最初に描いた人に戻します。その人は、その絵につける物語をつくり、それをみんなの前で発表します。

—plenary session:

Speak what you discover through these processes through a magic microphone.

If we have more time rest, we will have free discussion.

# 大学専門学校教員対象

## 「学生がノル授業」へのワザとリクツ

沖縄リハビリテーション福祉学院の教育懇談会

2014年11月29日

27日夕方、沖縄リハビリテーション福祉学院の教育懇談会で、全教員を対象にして、「「学生がノル授業」へのワザとリクツ」というタイトルでのワークショップを行った。この種のワークショップは、県下では三つの大学でしたが、専門学校では初めてだ。

参加者を学生に見立てた1コマの授業形式で行った。写真は、そのレジメで、授業進行を示す授業ノートのイメージだ。同校の言語聴覚学科は、私も非常勤講師としてかかわってきたので、顔なじみの先生ばかりだが、他の先生がたは初対面だった。

作業療法士、理学療法士、言語聴覚士といった医療現場で活躍する人材の養成を目的とするだけあって、先生方の動き・雰囲気・真剣さはすごい。

そのなかで、授業のためのいろいろなアイデア

|                               | 予定時間 | レクチャポイント・テキスト参照箇所        | 提示する実例                                | 討論作業                                    | 留意点                        |
|-------------------------------|------|--------------------------|---------------------------------------|---|----------------------------|
| 授業を動画にする                      | 0分   | ノートを取る以外に、学生が動くこと P60~63 |                                       |   |                            |
| 授業ノート (ワザ1)                   | 5分   |                          | このプリント                                |   |                            |
| 興味関心を高める (ワザ2)                | 10分  |                          | 前年度受講生の作成物                            |   | いくつか特筆                     |
| 「密議」を超える (ワザ3)                | 15分  |                          | 教室の後ろから話す                             | 後ろに椅子をもっていき、大きな輪を作っている                  |                            |
| おまけ1<br>アイスブレイキング             | 20分  | 授業にリズムをつける (集中と弛緩)       |                                       | 創造的挨拶<br>パスあり                           |                            |
| 発問・課題設定 (ワザ4)<br>作業課題設定 (ワザ6) | 30分  | P34~35                   | キーワードを並べて構造図をつくる<br>実演実習<br>またはロールプレイ | 発問コンクール<br>作業課題コンクール<br>人気投票&解説宣伝<br>大会 | P24を項目ごとに切って床に置く           |
| おまけ2                          | 55分  | 受講生の発言を誘う                | 魔法のマイクroフォン                           | ここまでの感想                                 |                            |
| グループ作り (ワザ5)                  | 60分  |                          |                                       | じゃんけん列車→一つの輪→番号かけ→同じ番号で集合               | 5人グループ                     |
| 多様な討論形式 (ワザ7)                 | 65分  |                          | ポスター討論<br>紙飛行機討論<br>マトリックス討論          | 私のアイデア大会&グループ代表1~2枚の解説宣伝                | P19、22の一部を床に置き、サンプルポスターにする |
| おまけ3                          | 85分  |                          |                                       | ほめ言葉尽くし<br>調の人をほめる                      |                            |
| ウララ                           |      |                          |                                       |   |                            |



が飛びかった。ワークショップの最後に行った『授業アイデア大会』では、次のようなものが続出した。

- ・前もって試験問題を配布しておいて授業中に解答する
- ・実際に患者さんに来てもらって、患者さんとの関わり方を見てもらう
- ・気分転換に体操やレクを行う
- ・身体の一部に触れたら専門用語を言う
- ・いじられキャラを一人作る
- ・おとなしいクラスの場合には、授業開始前に一分間スピーチをさせる（学生に）
- ・区切りのいいところで、休憩を入れてリフレッシュ
- ・前回の内容（講義）を講義前に学生に話をさせる
- ・テスト予想問題を一問作らせる
- ・試験問題&答案用紙は必ず学生に返却し、自分でフィードバックするように促す

## 高知看護教育研究会の風景

2009年5月

看護教育に携わっておられる方々対象の、授業づくりワークショップだ。

60名以上の、とても熱心な先生がたが集まった。

10の授業プランができ、それらについて、ポスター討論。すごい盛り上がり。

右下は、父性学のプランづくり。母性学はあるが、父性学はないだろう。その科目を設定するとしたら、どんな授業にするか、熱心にプランづくり。



看護教育の方々の教育熱心さには驚くばかり。

そして、女性が圧倒的に多かったが、高知の女性の素晴らしさによるものか。

終了後に回収されたアンケートのコピーをいただいたが、今後の授業改善にのぞむ積極的姿勢がすごい。

私もつられて盛り上がりってしまった。



## 学生の意欲を高め、学生が動く授業へ 沖縄県立看護大学FD企画 2007年9月29日

※当日配布したレジメに、短いコメントを最後に加えて掲載する。

## ① 趣旨と進め方

- 1) 一方通行型説明中心型授業から、双方向型多方向型授業で、学生の意欲を高め、学生が動く授業へと、授業を転換していくことを主なねらいにする。
- 2) そのために、参加者のもっている・考えている多様で豊かな資源を出し合い、協力しあって、新たな授業イメージを作り出す。そのなかで、授業改善のたくさんのワザを習得する
- 3) 協力しあって授業創造作業をするなかで、FD・授業改善を促進する雰囲気・環境を育てる。
- 4) 進め方は、多少のレクチュアをはさみながら、参加者自身の共同作業を中心にするワークショップスタイルで行う。
- 5) 進行を、参加者が受講生で、私が担当教員であるかのように、「模擬授業」として進める。とくに、講義開始早々の時期を想定しながら。数十人の受講生がいる「講義」の例として。

## ② 看護大学での2年間の「教育原論」経験を通しての学生・授業の感想

- 1) 真面目で熱心な学生たち——他の分野の学生などと比べて  
看護系学生の特徴でもある  
行動がてきぱきしている。  
将来志向がはっきりしている  
学生間のつながりが強い（学年を越えて、ということかというと、それほどでもないが）  
（仲良しのウチウチの関係にとじこもりがちの傾向もみられるが）
- 2) 実習体験を経て、一回り大きくなる。  
将来志向と現実と結びつきが、実習を契機に一步步深まっている印象  
2年生と3年生との違い
- 3) 座学授業への不満が聞こえてくる。  
一方通行型授業で、眠くなったりする。受け身的になってしまう。覚えることがたくさんで大変。
- 4) 看護系大学の教育における条件の良さ  
実学である。  
学生の将来志向性の明瞭さ  
小規模大学  
社会人体験のある学生がかなりいる  
教室などの施設がよい。
- 5) 看護系大学の教育における厳しさ  
量的にかなりなものを習得させなければならない。 つめこみになりがち  
同じ分野の学生ばかりで、「世間」が広がりにくい  
実習が多くて、カリキュラムが窮屈になりがち

### ③ 全国的なFD動向と看護大学の位置

#### 1) FDの第二段階の展開

FDの三段階

第一段階 スタート段階（「啓蒙」ないしは「アリバイ」段階）

第二段階 具体的な授業改善へ

第三段階 授業改善の営みの恒常化

全国的な共通動向は、2002～3年ころ、第一段階から第二段階へという流れが始まり、近年では、第二段階の本格化に挑む大学が多い。

多くは、「外圧」のなかで、トップダウンの形で進行してきたものを、「潜在している」ボトムアップ的動きと結合していくことが求められている。

#### 2) FDの第二段階のいろいろな企画例

授業改善のための研究会、ワークショップ

公開授業

授業の具体的過程にかかわる学生による授業評価 授業改善に結びつく評価

授業環境の改善 教室改良 授業予算の編成（文房具、多様な企画）など

教育紀要の刊行

研究業績だけでなく教育業績の評価

推進機関の設置、専任スタッフの配置、FD委員会活動の日常化

新任教員などへのサポート体制

学生参加システムの構築

※ FDが近年の教員繁忙化の一因になっている状況があるが、そうならないような工夫も必要。

#### 3) カリキュラム改善だけでなく、授業そのものの改善も並行させてすすめること

例

- ・高校の時までの、与えられたものを丸暗記するという受け身的スタイルからの卒業。  
大学入門期の特別な設定 「大学入門」
- ・受け身的な選択として入学してきた学生に、看護の仕事への興味関心を高める
- ・学生相互の関係を豊かにしながら、学んでいくことを促進するために、演習時間を特設する
- ・講義そのもののなかに、学生と教員との双方向的場面を増やすだけでなく、学生相互の共同活動の場面を豊かにつくる。
- ・講義・演習のなかで、問い・問題設定を重視し、それに向けて、学生たちが能動的積極的に取り組むようにしていく。
- ・学生相互の人間関係を豊かに育みながら、対人関係能力を高める（対人関係の職業である看護にとっては不可欠なこと。しかし、近年の若者には、それを苦手とするものが多い。少人数のウチウチの関係だけにとじこもりがちである。）
- ・学生の学習態度上の問題の解決は、学生自身にやる気を出させることが基本。そのためには、授業そのものの意味の了解、興味をわかせるような授業、学生自身が授業の組み立てに参加できるような授業が大切。
- ・授業の仕方のトレーニングを受けていない大学教員がほとんど。

自分のめがねで、学生をみて、学生にそのようにすることを求めてしまう。自分の研究成果の発表のような授業（学会発表のような授業）。学生の顔を見ない先生。自分一人で完結してしまう先生。授業は、当事者である学生自身が知的に動くということ。その知的な動きを促進することが授業の大きな役目。たんに授業内容の伝達提示だけが役割ではない。

・授業は、芸術創造に似ている。授業にはリズム・メロディー・ハーモニーが大切？  
授業は看護活動に似ている（？）。授業は、ケア、ヒーリングの過程でもある？

そこで、本日は、双方向型、さらに多方向型の授業、[参加型]の授業創造のためのいくつかの提案を、ワークショップ型で行うことにする。

#### ④ ウォーミングアップ的活動 人間関係を育てる

ウォーミングアップも兼ねて、授業での討論の多様なアプローチ（とくに、誰も発言しない、したとしても発言が限られた学生だけになってしまうのを超えるために）を実演的にやっていく。浅野式討論——多様な初歩的形態をくりかえすなかで、受講生の圧倒的多数が参加する討論へ

学生は、中学校以降、授業で発言する体験がまれにしかないため、発言することすら思いつかない。だから、「発言してもよい、発言した方がよい、発言しなくてはならない」という感覚をもたせ、「発言をどのようにすればいいのか」を実習的に学ばせ、「発言する上でのハードルを下げ」「発言体験を蓄積する」ことが必要。最初は低レベルでいい。徐々に質を高めていけばよい。

##### アクティビティ

[その1] 一列をつくる（私が4月に多用する方法）

教壇の上にとっている時間 100%から0%まで

※ 教師はどの位置にたって授業をしているか

教壇愛好派 ←→ 学生接近派

正面向かいあい型

横並び型（教員も正面黒板をみる）

学生のなかに入り込む型

##### ズラシ討論

「どうして、列のなかのその位置にいるのですか」お互いに聴き合う。

[その2] 輪をつくって、伝えあいながら、人間関係づくり

上着の色の濃淡順で。

あいさつ

「授業のワザ」で連想ゲーム →ポストイットに書いて貼りだす。

隣の人がやる気ができるように、言葉がけをする

※ 多方向型授業を展開するには、学生相互間の人間関係づくり、雰囲気づくりが大切。

学期始めには、そのことにできるだけ力を注ぐ。

ゲーム感覚で、体を動かしながら、進めていく。

肯定的な言葉がけをして、やる気を出させること

※ 日本の教員（大学に限らず、小中高校全体）には、下手な人が多い。



## ⑤ 一方向的授業から学生自身が知的探求をする授業へ

1) 説明型=学会研究発表型は、参加者自身の高度な知的探求力量を前提にして成立している。それを、その科目分野での知的探求では初心者である学生に、説明だけで成立させるということは、信じられないほど高度な技術が必要。そして現実には、限られた学生だけにしか成立していない。しかも、入門的な科目で採用される傾向が強い。

こうした事態への無自覚性 受講生の知的活動の進行状況の把握が少ない、あるいはしないまま。

2) すでに活字化された、あるいはビジュアル化されたものがたくさんあり、それを活用すればうまくいくなかで、授業時間での口頭説明に頼っているのだろうか。頼っている人は、50~90分も、学生を集中させられるから、口頭説明がとても上手なんだろう。

3) 授業におけるこれまでの改善への関心の焦点—授業内容と口頭説明を中心とする伝達方法にあった。

そこには、教える内容をすべて説明しなくてはならないという強迫観念がありはしないか。

4) 学生の学習=研究への関心

それをどう育てるか それを授業のなかにとり入れていく。

「伝統的大学教育」論では、学生の自己学習が重要であるということだが、それへの関心の低さ

5) 授業内容のなかに、学生自身による知的探求を含ませる

知の創造の場としての授業 たとえ確定的な知にしても、受講生にとっては、知の創造・再創造である。

→研究創造型授業へ

knowledge と knowing

個別学習・自習とは異なって、授業は多様な受講生が集って展開される場。その多様さの出会いのなかで知的探求を

→共同創造型授業へ

授業改善への多様なアプローチのなかの強力な傾向（80年代から）としての「講義の演習化」 講義のなかに、演習で展開するような共同作業・討論過程をいれこんでいく。学生自身の能動的な活動をいれこみ、受講生と教員、受講生相互の間に、知的探求活動を成立させていく、ということ。

授業の知的過程を個人内レベルだけでなく、相互関係レベルで成立させていくということ。

アクティビティ 発問をつくってみよう。

仮に、「看護原論」という科目があるとして、その冒頭に「看護とは何か」を教えるとしたら、どんな発問をして、学生の関心と意欲を呼び出しつつ、学生に、正確にかつより深く、「看護とは何か」を学ばせるか、そのための発問をつくってみましょう。

私のアイデア1. 看護の「看」という字は、「みる」と読みます。では、他にどんな「みる」という漢字があるでしょうか。でてきた漢字と「看」の違いを一杯出し合ってみましょう。

同じようにして「護」の字は、「まもる」と読みますが、他にどんな「まもる」という字があって、それらと「護」はどんな違いがあるでしょうか。

私のアイデア2. 「看護」している場面を、絵に描いてみましょう。描いた絵を貼りだしてください。

貼られた絵のなかで、とても印象的で、話し合いたい絵を二つに投票してください。投票の多かったもの5つを選びます。この5つの絵について討論しましょう。

では、皆さんのアイデアを出してください。ポストイットに書いて貼りだしてみましょう。

6) 名詞型授業から動詞型授業へ

これまでの授業の多くは「名詞型」で、存在するすでに確定した知識を教員が学生に提供し、それを学生はそのまま受取ることが主軸であった。学生にとっては、それに疑問をさしはさむというより、「丸暗記」でそれをうけとることに結果的になってきた。○○学、△△論といったような科目名、理論的体系を細分化しただけのシラバスなど、授業にかかわるものは、ほとんどが名詞型で描かれていることもそれと関係していよう。

学生たちにとって未知の分野の体系が書かれたシラバスは、かれらの関心をほとんど呼ばないできており、どこの学校でも、シラバスを読まないで受講する学生がかなり存在する。

ここでは、しばしば固定化した「死んだ知識」になりがちで、学生が知の創造に参加するということにはなりにくかった。そうした事態のなかで、学生たちは課題探求意識を希薄にしていく事態が一般化し、広がってきた。

授業で、知に向かって、学生が何をすればいいのか、が不鮮明であった。また、知的創造に学生が参加するというイメージが稀薄であった。

そこで、授業で学生が何をするのか、学生の知にかかわる創造活動はどう展開するのか、といった「動詞型」の授業が求められる。

※ コーディネーターとしての教師

#### 7) シラバスの書き方

これまで、教員の立場で、教員がどういう「情報提供」をするのかが中心であった。シラバスを読む学生自身の立場にたって、学生自身がどういう知的活動をするのかを明示するものへ

とくに、科目のサブタイトルをどうつけるかが重要

#### 8) 学生の課外自習を促進する

学生の授業外学習を組織する。たんに授業を補充するものとしてではなく。

学生からの知的発信の基盤としてみていく。

授業外での学習を、授業での学生からの情報発信に向けていく。

その利点は、教員だけの情報提供よりも広がるということだけでなく、なによりも学生たち自身の知的活動の展開である。

#### 課外学習のさせ方

課外の学習をしてこなければ、授業場面に対応できない仕組みをつくる。たとえば、1時間目の授業、もしくはシラバスで、「テキストの○○～△△ページのキーワードを20個抜き出し、カード化して、2時間目の授業に持参のこと。2時間目の授業では、それらのキーワードを構造化することにかかわって授業を展開する。

#### 9) 浅野の授業の流れ

教員から問いを発する（第一回目の授業、もしくは授業開始前のシラバスから）



教科書・資料などをもとに学生の準備作業



学生からの問題提起・情報発信



討論・共同作業 ※ このプロセスのなかで、教員からの問題提起・情報補足などをからめていく



問いを発する（学生から、教員から）



教科書・資料などをもとに学生の準備作業  
（以下、このくりかえし）

## ⑥ 学生相互間の教育力・取り組みへの注目を

討論・共同作業を多分にふくみこむ

- 1) 学生たちのなかに「知的うねり」をつくりだす 相互に刺激しあつて知的探求へ
- 2) 教員对学生の一对一だけでは、まずは時間的にいつて限りがある。

熱心さだけではカバーしきれない。

※ 双方向型が求められるが、それを「マジに」やったら教員が大変だ。ごく限られた学生だけが、質問にくるくらいが対応としては限度である。かりに50人の受講生が、毎回一回質問したらどうなる？

私の失敗。受講生全員対象で面接式添削をしたら、毎日6～8時間やって、一カ月必要だった。その後、同僚がはじめた3人組添削にヒントをえる。

双方向型から多方向型への転換の必要

多方向型 学生間の多様なかわりあいを組織する。学生たち自身の教育力を活用する。さらに、受講生外の力量を活用する。 卒業生・社会人・上級生・TA・・・・

浅野の例

- ・ 学生相互の多様なからみあい・共同作業を工夫するために、グループを活用することが多い。
- ・ 授業の「歴史性」の活用（前年度の成果を生かす、先輩を生かす）
- ・ 教員の過重負担を避ける 教員が一切をひきうけるのではなく。

学生間の教育力を発揮できるように、教員は「手抜き」をする

3) 学生は知的な共同作業や知的討論の経験がほとんどないために、それを求めてもイメージがわからず、躊躇してしまう。

4) そのことができるようになっていくための、指導の工夫。

- ・ 授業での発言・作業を促進する環境をつくる。（含む評価）
- ・ 学生が発言・作業しやすい形態から入る。
- ・ 書き言葉・話し言葉・身体表現・行動表現など多様な表現を活用する。

こうしたことの経験の積み重ねのなかで、たとえば、50分で、15人以上の学生が発言し、かつ内容的にもその授業のねらいに対応した深まりへとひっばっていく。

5) その点では、看護という実学にかかわる授業の場合は、大変有利。実践・実物などがイメージしやすいから。

6) 授業における共同作業の仕方

7) グループ編成の方法

アクティビティ

参加者の皆さんがもっておられる、授業を活性化させ、学生の学習を活発にさせるための、ワザ大集合。

教員をやっておられる方はどんな方でも、いろいろなワザを実際におもちです。ですが、それは「ヒミツ」にされがちです。「自信がない」「こんなワザでは恥ずかしい」「私だけにしかできないもの」「公開するとまずい」「盗まれるとまずい」などといった理由で。ここでは、大胆に公開してみましよう。

ただし、氏名を書かないで。一枚だけ。「どうしても」という方は2枚以上OK

記入例 90分授業のなかで、冗談を必ず一つは言う。

看護の実際場面での例を話す。

学生との質疑応答を必ず一名以上する。その際に、学生の名前を呼んであげる。

授業の最後に5分間とって、ミニ感想・質問メモ(20～40文字)を書いて提出させる。

授業開始前に教室に行き、学生と雑談をして仲良くなる。

授業で実物・写真を必ずもって行って、それをもとに説明する

写真をみせて、そこからたくさんの発見をさせる

書いたアイデアを、貼りつけましょう

休憩

## ⑦ 参加者の知恵を集めて、授業づくりを展開しよう アイデア大集合

アクティビティ 授業改善構想づくりへ

参加者のアイデアを「無責任」に「夢をもって」出し合おう ポストイット貼り大会

1) 「こんな科目を担当したい」「こんな科目を新設したい」なども含めて、担当科目名を、ノート型ポストイットに記入し、ホワイトボード上部にポストイット間の間隔をあけて貼る。(一人あたり2～3枚)

2) 貼られた科目名の下に、科目のキャッチフレーズ(自分が貼りだした科目に限らず、どの科目についてでもよい。一人あたり3～4枚)をポストイットに書いて貼りつけよう。

教員から学生へのメッセージであるので、その授業でやることを示し、かつ学生の学習意欲をかきたてるようなものにする。

授業科目一覧やシラバスに書く「サブタイトル」のようなものでもよい。

例 △△が身近になる

苦手な英語への裏ワザ教えます

患者との出会いを楽しくするヒミツ技

健康イメージがひっくりかえる

国家試験突破ヒミツ技伝授

先輩と交流できる

あなた自身の発見の場

3) 発問・課題設定 (一人あたり4～5枚)

例 「～～」の気持ちになって、△△を表現してみよう。

◇◇と〇〇の違いを表にしよう。

ハンマー投げでベストなのは、何回転か。

〇〇を☆☆ようにする理由を探そう

どういう条件があるときに、□□というやり方を採用できるか

4) 発問・課題に取り組むための方法。組織形態にも留意しつつ。

(一人あたり3～4枚)

例 ・小テーマを共有するものでグループをつくって、実験しながらワークシートに記入していく

・統計データをまず個人で読み込んで、発見できる3ヶ条をつくり、それを5人グループで見せあって討論し、グループ内での見解がわかれた事項を全体場で発表させ、それにもとづいて全体討論する



- ・グループで、テーマについてのキーワード10個の関係図を作成し、それを壁面に貼り、貼られた関係図10個を見比べながら、全体で検討する
- ・共同作業課題を、模造紙に図示する形で発表させ、それを壁面にはり、対照的な図を書いたグループ間に注目しながら、全体討論する。
- ・「○○」というテーマでの表現を二つ発表させ、それをさらにすぐれたものにするためのアイデアを出させ、練り上げていく。
- ・△△場面をロールプレイで英会話させ、それにコメントしながら、よりの確な会話表現を学ばせていく。
- ・授業時間の最後に5分とって、発問・課題への学生の答をミニ用紙に記入させ、次の時間にそれこたえる。
- ・発言した学生には、日常点を加点する
- ・課外学習をしてこない学生には、入室させない
- ・友人5人に聞けば、調査ができるような簡単なものから、調査体験をはじめめる。
- ・食品を何品か用意し、それを使ったゲームをさせる。あつた学生にその食品を賞品としてあげる。
- ・グループごとに(身近な人も含めて)人物例を調べて、発表し全体討論する

## ⑧ 授業構想づくり

- 1) つくってみたいくなったポストイット群の前に集まって、グループをつくる 3～5人くらいで
- 2) グループで作成
  - 科目名
  - キャッチフレーズ
  - 主要発問
  - 方法
  - 教室配置(机・椅子配置など)
  - 流れ(数コマ分でも、1コマ分でもよい)
 以上を模造紙に書き込んでいく。

## ⑨ 授業構想宣伝・討論大会

- 1) プレゼンテーション
  - 模造紙をホワイトボードに貼りだす。プレゼンテーションは、この授業構想の魅力を宣伝することを中心にして、持ち時間30秒(厳密)
- 2) ポスター討論
  - 自分たちのポスターの説明役を、交代でいつも1人置きます。説明役でないメンバーは、興味をもった他グループのポスターの前に行って質疑討論をします。

## ⑩ 質疑応答・まとめなど

~~~~~

下写真は、ワークショップ風景だ。

記事タイトルは、このワークショップのタイトルでもある。

ここ10年間あまり、全国各地の数十の大学で、大学教員対象に授業づくりのワークショップをおこなってきた。今回は、最後には先生方による4つの授業プラン作成までにいたった。とても充実した内容で、これからの授業に生かされていくことだろう。そして、先生方自身の相互交流にとっても役立つとのことのお話を、何人かの先生からうかがった。

驚いたことが二つある。一つは、5人の方が、かつて、私の授業をとったことがあるとおっしゃる。10数年~30年余り以前のことで、琉球大学教育学部、保健学科、教養部での授業であった。「鬼の浅野時代」の方が多く、レポートを3回も書き直してやっと通ったと話された方もおられた。恥じ入るばかりである。

もう一つは、学長の野口先生とは、20年余り前の日本生活指導学会でお会いし、討論し、相互に学びあった関係で、今回とても久しぶりにお会いすることになったことである。先生の方は私の発言をととてもよく覚えておられ、最近の学会でも論及されたとのことである。私の方は、記憶力が弱いのだが、先生の「世話され上手」という提起がとても印象的で、その後何度も引用させていただいたことは覚えている。

こんなにたくさんの発見・出会いがあったワークショップであった。



# 大学生対象

## 琉球大学「特別活動に関する研究」「生活指導」ゲストティーチャーでのワークショップ

2007年5月14日

琉球大学の「特別活動」と「生活指導」の授業でゲストティーチャーをしてきた。受講生相互が知り合い・協同創造するなかで、次時間以降の取り組みへの広がり深まりをつくり出すことと、ワークショップ型授業の進め方を体験するなかで学ぶという目的であった。

受講生相互の顔見知りかほとんどいず、また何が起こるのだろうと、静かにじっと待つという雰囲気だったが、進行のなかで燃え上がっていき、最後にはついに爆発にいたった。

最後は、「したい特別活動プラン」と「私の10年後」についてのグループでのリレーお絵描きとそのプレゼンテーションである。

とんでもなく多様な物語が登場し、受講生全体の驚きと発見の連続となった。

この授業では、私自身も新たな出会いをたくさんつくった。玉城・与那原の学生、そして高校時代の私のワークショップに参加した学生がいた。最後の学生は、この授業の受講生ではないが、私のこのブログを見て参加してきた。

以下は、そのワークショップのレジメだ。

※ 文中で「生活指導」「特別活動」クラスバージョンとあるのは、別々の2クラスで行ったワークショップなので、クラスに合わせて行ったことを指す。バージョン指定のないものは、両者に共通して行っている。

### 1) 目的

- ・特別活動、生活指導についての関心を深めること
- ・多様な考え・体験・人柄があることを発見しあいつつ、協同創造していく体験をする
- ・ワークショップ型授業について学ぶ

### 2) 流れ

#### 2-1) 準備

ネームプレート、またはA6orB7大厚紙を二つ折りにして胸ポケットに入れて代用したものを、各自一枚配布。  
サインペンを各自一本配布。(もしくは、前週授業で、学事が準備してくるよう要請)  
なお、ネームプレートには、何も記入しないでおくこと。記入はワークショップの流れのなかですのため。  
ポストイット(7.5×7.5cm大)を一人あたり5枚配布

#### 2-2) 小さな輪をつくる

一人ひとりが、大好きな単語を、ポストイット一枚大きく記入して、ネームプレートに貼りつける

例 愛 子ども 地球 食べ物 車 真剣 チャレンジ

- ・単語の字数順に一例に並ぶ 同数の場合は、画数の多少順

・1. 2. 3. . . . 10, 1. 2. 3. . . . 10, の番号をかける。（「10」は、必要なグループ数にする）  
同じ番号の人が集合して小さな輪をつくる

### 2-3) 一風変わった自己紹介

- ・自分の名前をポストイットに書いて、好きな単語の下にはりつける
- ・<「子ども」が大好きな〇〇〇〇です。> といった自己紹介を輪の全体に向けて順番にしていく。
- ・「自分が属しているもの」一つをポストイットに書いて、はりつける。  
例 物理学科 音楽専攻 野球部 〇〇青年会 △△郷友会
- ・順に右となり、<□□に属しています。 . . . . . >  
. . . . . の個所は、「よろしくお願ひします」「おもしろいところですよ」といった風な挨拶言葉を言う。ただし、前にでてきた言葉でないものを言うこと。
- ・「私のウリ」一つをポストイットに書いて、はりつける。  
例 ノーテンキ まわりを明るくする 笑顔
- ・順に右となり、<□□がウリです。 . . . . . >  
. . . . . の個所は、ウリを動作で示してください。

クイズ 1 「ウリを発表する活動」は、日本の子ども・若者の状況を考えると、大切なことです。どうしてでしょうか。

### 2-4) 言葉かけ練習

- ・輪の順を少しずらします。
- ・物語づくり
- ・隣の人のやる気がぐんぐん増すような言葉かけをしよう。  
例 「さっきのウリのあなたの話しは、〜〜という点でとってもステキなので、私もあなたから習いたいなあ、とおもってしまいました。それを今度教えてくださいませんか」

クイズ 2 どうして、こんなことをするのでしょうか

### 2-5 A) こんな企画を子どもたちしてみたいなあ

——「特別活動」クラス バージョン

特別活動には、いろいろなものがあります。

取り組みをとっても豊かにしていくためのアイデアを考えましょう。

例 森の生き物探し遠足 四人五脚サッカー 給食盛りつけコンクール

病気から復学した△△さんを励ます会 校内サッカー大会

一人3枚 アイデアをポストイットに書いて、該当領域のポスターに下にはりましょう。

似たもの同士はくっつけてはりましょう。一枚書いたら、まず貼りつけ、他にどんなアイデアがでてくるから見てから、2枚目を



書きましょう。同じようにいろいろ見てから3枚目を書きましょう。

領域

遠足・修学旅行 学芸会（学習発表会） 体育祭（運動会） 学級お楽しみ会・誕生会  
当番活動・係活動 音楽会（合唱大会） 卒業式 ホームルーム 問題解決 部活  
ボランティア活動 林間学校・クラス合宿 進路指導

## 2-5 B) 『10年後の私（希望バージョン）』

——「生活指導」クラス バージョン

生活指導は、子どもたちの生き方の指導でもあります。子どもたちが将来どんな生き方をつくっていくのか、それはとても多様です。教師自身が多様で豊かなイメージをもちたいものです。そこで、まずは皆さん自身の将来イメージを豊かに交流しあいましょう。

（ただし、今日に限って、「責任」をとらなくてもかまいません。イメージを豊かにするものですから、「うそっこ」でもかまいません。）

参考例 恩納村のホテルのレセプションで修行中

得意の野球ではなく、相撲部の顧問になって苦しんでいる

指導に注文を出した親と逆に意気投合して、夏休み親子合宿を企画中

フリーターをしながら司法試験学習中

コールセンターでコンピュータトラブル解決の仕事

育児休暇をとって奮闘中のパパ

スウェーデンの大学院で福祉研究

開業資金稼ぎのため豊田の季節工

カラーゴーヤを生産して注目の農業協同経営

一人3枚 アイデアをポストイットに書いて、該当領域のポスターに下にはりましょう。

似たもの同士はくっつけてはりましょう。一枚書いたら、まず貼りつけ、他にどんなアイデアがでているから見てから、2枚目を書きましょう。同じようにいろいろ見てから3枚目を書きましょう。

領域

芸術系の仕事（修業中を含む） 観光業 販売業 公務員 教師 製造業 育児 自営業 健康回復 精神修  
業 肉体労働 研究技術職 フリーランサー IT関連業 大学院・専門学校通学 福祉職 農林漁業 国  
際関係職

## 2-6) グループづくり

一番やりたい取り組み群のところに集合。



関心が同じ・似ている  
4～6人でグループを  
つくります。

一枚の横造紙の最上段  
に、取り組みを書いた  
ポストイットをはりま  
す。

2-7) アイデアふく



らまし

貼られたポストイットから浮かぶもの・アイデアを、ポストイット一枚に書いて貼りつけます。

貼られたものを見て、また浮かぶもの・アイデアを、関連するポストイットの下に貼りつけます。これをくりかえしていきます。各自4～5枚書きます。

ポストイットは、模造紙の上部1/3に収まるように貼りつけてください。

#### 2-8) リレーお絵描き

貼られたポストイットを参考にして、模造紙の中～下にカラーマジックで順番に絵を描いていきます。ただし、ひとりの持ち時間は1分。2～3周するはずで。

クイズ 3 この方法のプラスは何でしょうか。

#### 2-9) 物語づくり

できあがった絵をもとに、グループ討論で物語をつくりましょう。

時間が余ったグループは、その絵と物語発表の予行演習をしましょう。

音楽やお芝居歓迎

#### 2-10) 全体に向けて発表

持ち時間、各グループ30秒

#### 2-11) ポスター討論

各グループは、交代で説明役2人をポスターの前にたたせておく。説明役以外の方は、他グループのポスターを見て回り、その説明役と討論していく。

クイズ 4 この方法のプラスは何でしょうか。

#### 2-12) ふりかえりの全体討論



## 『いろいろな人とつながりながら、人生創造していこう』

名桜大学教職サークル主催ワークショップ

2007年5/19～20日

学生サークル主催の企画で、意見交換しながら進めていく。

まず私の第一次案を紹介しよう。

### 第一次案

## 1) みんなとつながろう 1時30分~2時45分

輪づくり動作伝えゲーム

つながりながら動こう

伝言式物語づくり

3人組発見ボディランゲージ大会

3人組物語の解説大会

## 2) 私のグチとウリ 3時~4時15分

列討論 「押す」タイプと「引く」タイプの比率順でならぼう。

ペアになって、グチを聞きあおう

列を少しずらして、「私のウリ」を教えよう。

「ウリ」をポストイットに書いて貼りつけて、売り出そう

貼りだされたウリへの「買い注文」「ウリをさらに高く売るアイデア」「期待」を書こう。

「注文」「アイデア」「期待」に応えよう

## 3) 懇親会企画オーディション? 4時30分~

夜の懇親会のなかでの企画をグループで考えて提案しよう。

企画の重点

- ・つながりが広がり・深まること
- ・イヤな思いをする人がでることはしない。
- ・楽しもう。
- ・夢をふくらませよう。

企画アイデア大会

「夢は大きく楽しく」アイデアを書きまわろう

例 楽しい席決め 花を飾る 即興劇大会 名前覚えゲーム

夢を歌にする会 輝きのある切り絵を貼ろう みんなが花開く進行

これはというアイデアに集合して、企画実施グループをつくろう。

全体調整グループは必ず置く。

企画案をポスターに書こう(ポストイットに書いて貼りつけよう)

企画人気投票(賛成・拒否、両方とも)

※ 拒否があったものはやめる

企画への追加アイデアを出そう。

企画実施への取り組み

グループ間調整・時間配分などは、全体調整グループが進行する。

各グループの持ち時間は1~15分

## 4) つながりが深まり、発見があり、夢が広がる懇親会 7時~9時

つくった企画を実行しよう

## 5) 人生創造提案大会(教師などの職業、カップルなどの人間関係、衣食住などの生活スタイル、収入支出などの財政計画なども含めて) 9時~10時15分

広場にキーワードを書いて、どんどんキーワードをふくらませていく。

「○○になりたい」→「△△というのもありだよ」→「それは□□でやるのが一番だよ」→「それには☆☆さんに相談する  
といいよ」・・・

一番気になるキーワード群にいて、グループをつくる。

タイトルを決める

リレーお絵描き

できた絵をもとに、物語をつくる。

物語をもとにして、ミュージカル・ロールプレイ・ストップモーション・ポスターをつくる

6) 発表会 10時30分~11時00分

グループ発表 持ち時間は、5分

7) ふりかえりの大討論 11時15分

発見・創造した「人間関係を豊かにするワザ」大集合

ふりかえりの討論

## 第二次案

第一次案には、いろいろな方から意見をいただきました。それをもとに第二次案をつくりました。参加対象を「教師になりたい人」だけに限らず、『広く多様な人とつながりながら、人生創造をしていこうとする人』を対象にすることになりましたので、さらに豊かな出会い・発見・創造になると期待しています。

この第二次案にも、いろいろな意見を寄せていただければ、と願っています。

流れ

1) みんなとつながろう

輪づくり動作伝えゲーム つなぎながら動こう 伝言式物語づくり 「大好き言葉」グループづくり

リレーお絵描き

2) 私のグチとウリ

列討論 「押す」タイプと「引く」タイプの比率順でならぼう。

ペアになって、グチを聞きあおう

私のウリ 発表会

ウリへの期待・提案会

3) 多様な人といっしょに企画をつくろう

夜の懇親会のなかにかくつかの場面を設定し、その企画をグループでつくろう。

4) つながりが深まる懇親会



つくった企画を実行しよう

5) 人生創造提案大会 (教師になることも含めて)  
広場にキーワードを書いて、どんどんキーワードをふくらませていく。

「〇〇になりたい」→「△△というものもありだよね」→「それは□□でやるのが一番だよ」

→「それには☆☆さんに相談するといいよ」・・・

一番気になるキーワード群にいて、それをさらに深める。

物語にして、ロールプレイ式に発表

#### 6) ふりかえりの大討論

大集合「人間関係を豊かにするワザ」

### 当日の様子

19~20日と「いろんな人とつながりながら、人生創造していこう」のワークショップをした。名桜大学の教職サークル「MKC」主催で、学生だけでなく若い教師たち何人も含めて20名近くの参加であった。

合計8時間近くのワークショップに加えて、泊まりの語らいもあり、すごく深まった出会い、発見、創造の場となった。少人数で長時間であるので、相互のつながりが深まるだけでなく、一人ひとりの個性が豊かに発露し、それに相互がかかわりあう、というとても豊かな場となった。泊まりの語らいなどは、私は12時過ぎに中座したが、朝まで語り明かした学生もいたようだ。

語らいだけでなく、ストレッチ体操、身体感覚の発見、集団遊び、大縄跳びなどと、身体も使い、また共同の炊事、後片付けなどと、生活感覚までもにする楽しさ連続の企画であった。

一人ひとりの参加者がもっている個性的豊かさが、ワークショップと語らいを通して、各々の特性がより深まりつつ、つながりへと発展していく、まさしくワークショップの豊かさが生きていった。私も、沖縄内外から集う、若者たちの豊かの生き方創造を目の当たりにする場面の連続であった。これについては、また別の記事に書きたい。

そして、これがこのサークルの記念すべきスタート企画となった。今後のますますの豊かな発展を期待したい。

おそらく、この記事のコメントには参加者からの声を書かれていくことだろう。

学生たちと泊まったところは、ヤンバル東村の慶佐次。すばらしいマングローブ林が復活。朝の散歩でエンジョイした。次の機会にはカヌーでと思ってしまう。

懇親会・宿泊会場は、これまたすばらしい古民家。いろりがすばらしい。この上に大きなナベをかけて、エンジョイ。沖縄にいろり?なんて思ってしまうが、すてきに雰囲気をつくる。100年近くなる赤瓦の民家が、現実に生きている。

こんな雰囲気だから、学生の話はぐんぐんはずむ。各々の生き方のこれまでとこれからが創造的にすすむ。

もう一つステキなことは、学生たちがよく働くことである。だれかに任せきりにして手抜きするものがない。朝私が散歩にでかけるころ、



かれらはまだ眠っていたり、まだ語り合っていた。帰ってみると、後片付けすべて完了。こんなによく働く若者に会うのは久しぶり。

## 沖縄県立芸術大学『教育方法』ゲストティーチャー

### ワークショップ授業「生徒がのる授業」への感想

2007年2月6日

1月19日の芸大でのワークショップ授業への感想を綴った「浅野誠先生にお手紙を書こう！」を担当の芳澤先生からいただきました。とっても心のこもったうれしいお手紙ばかりでした。できることなら、全文を掲載したいのですが、「私は〇〇さんの親戚です」（〇〇さんは私の近隣の方）「飲みましょう」といった個人的な文もあるし、全文がとても長いので、抜粋することにします。また、対照的な印象も示す文もありますが、受講生の皆さんにはいろいろなタイプの方がおられますので、当然だと思います。その多様さをもつ人が出会って、発見・創造することを私は願っています。

なお、-----の後に書いたものは、私のコメントです。

#### 1) 全体印象など

- ・ すごくアクティブでパワフルでリズムカルな授業だと思いました。
- ・ 久しぶりに元気ある授業だったので、よかったです。
- ・ パッパ、パッパ事が運んでいっていたので、少し速くてついていけなかったです。でも、移動していく授業だったので、たいくつにならず、皆の発表も楽しかったので良かったです。発見が多い授業でした。
- ・ めちゃめちゃハイテンションでしたね。いつもそんな感じなんですか？ 大人なので、少しは落ち着いた方がいいと思います。でも、授業は楽しかったです。  
-----自分では、そんなハイテンションと思っていないのですが、どちらかというと、別の人がいったように、テーゲーで多少醒めているつもりですが。
- ・ 始めは先生の勢いに圧倒され、流れにもついていけなかったのですが、授業が進むにつれ知らない間に、授業にのせられていました。後半は、自らの意志で授業を受けることが出来たと思います。知らず知らずのうちに人を引き込むテクニックはすごいと思いました。
- ・ 浅野先生のワークショップの授業は、私の人生のなかで、とても印象に残っています。また、マネをしたくなる授業でもあります。あまりかかわることのできない科の人たちとの交流もとても自然に楽しくできました。私は浅野先生のパワフルな一げ一精神(?)が大好きです。浅野先生の素晴らしい授業を活かして、私が先生になったらおもしろい授業をしたいです。  
-----私にとって嬉しい文です。授業で「こうでなくちゃ」と押しつけると、ついていけない生徒、ついていけない生徒が沢山できてしまいます。私は多様な反応があつていいと思っています。静観する生徒、ゆっくりと対応する生徒でいていいのです。そんな気持ちでやっているのだから、「テーゲー」なんです。
- ・ 自分が等身大でいても大丈夫だと安心できる授業でした。  
-----こういう感想を出していただくのははじめてですが、とっても気に入りました。
- ・ 浅野先生のペースに乗せられてしまい、あっという間に授業がおわってしまいました。



- ・ 動きまわることが多くて、あっという間に90分が過ぎてしまいました。
  - ・ 動きまわったり、全員参加できる授業いいですね。
  - ・ 先生の授業は「動いた」という実感がある授業だった。普段座って聞いているだけの授業とは違い、「次に何をしなければいけないのかな」と周りを見る力がつくのではないかと思った。今回の授業ではコミュニケーションって難しいなと思った。
  - ・ とても楽しい授業をありがとうございました。いつもは長く感じる授業時間も、立ったり話したり、体を動かすとあっという間に過ぎていって、気付いたときには授業が終わっている感じでした。こんな授業ができたらなーと思いました。
  - ・ 動く授業が楽しいととても感じました。静かに座って、同じ作業を続けているとやっぱり楽しくないですし、眠くなります。わたし自身、もしも教壇に立つ機会があれば、皆が楽しめる授業をしたいです。ただ楽しむだけではなく、意義のある授業をします!!
- 
- ・ 浅野先生のような授業は、たぶん小学生以来な気がします。
  - ・ 初めてやる授業なのに、小学生や中学生でやったことのあるような感じの授業だった。なつかしい気分になった。
  - ・ 大学に入ってこういう授業は初めてでびっくりだった。小学生のころ、授業は楽しく、嫌ではなかった。小学生のころの授業を思い出した。
  - ・ 大学でまさかこんな楽しい授業をするとは思っていませんでした。小学生の頃にもどったような気分でした。楽しく授業をするるととても早く時間が過ぎました。生徒が授業を楽しむかどうかは先生がカギをにぎっているだと思いました。
  - ・ とてもおもしろかったです。まさに魔法のようでした。。。。。
- 
- ・ 初めてのことばかりですごくとまどいました。導入で各グループを作ってお互いの緊張感をとくといったゲームをしました。けれど私は気持ちがいっぱいになり鼓動が早くなりました。しかし知らない相手とゲームをするということは相手と関わりを持つことなので、そんなことがめったにないので、相手との関わりを持つ近道だと思いました。そしてキーワード大会で自分の自由な発想が出せる、そして人のアイデアに考えさせられるといった内容で、すごく楽しかったです。授業でなかなか自分の考えや思いを伝えることはないので、紙に書くことで誰が書いたか分からないアイデアに刺激されて、自分のヒントにつながったりする発想がたくさん出てきました。
- 
- ・ 他専攻のおもしろい発想などが聞けたので、参考になりました。
  - ・ アイスブレイキング、あいさつづくりや、物語づくりは少しとまどった所もあるが、どこからか、突拍子もないアイデアやあいさつを聞いて、他の人たちはこんな考えがあるのかと、勉強になったし、私の番に回ってきた時の助けにもなりました。やはり、この大学の生徒は芸術にたずさわっているだけあって、すごい豊かな想像力や創作力があると思います。
  - ・ 授業始めは、本当にとまどいました。しかし、まったく関係のなかった科の方とお知り合いになれて、よかったです。いまだに朝会うと「おはよう」などといったあいさつを交わしたりしています。先生の授業は、とまどいが多かったのですが、おもしろい授業でした。90分を有効に使う授業はスゴイ。
  - ・ とても楽しかったです。いままでしゃべったことない人とお話したり、授業を考えるきっかけをゲーム形式でやったりと本当に楽しかったです。
  - ・ 普段交流のない音楽の人たちとわきあいあいと話したり、一緒に絵を描いたりして。授業を自分で組むことを難しいと感じていた私は、出てきた言葉を組み合わせるので簡単にできるんだと思って、少し気が楽になりました。
  - ・ 普段人と接するなかであまり心の窓をあけて話すことがない方々と触れ合うことができ、本当に嬉しかったです。芸術を通して身近な所からこんなにも多くの知識とアイデアがあることに驚かされました。未知の自分を知るきっかけとなる授業だったように思います。

- ・ 普段交流の少ない違う科の人ともたくさん話すこともできたし、みんな素晴らしいアイデアを持っていて、本当にすごいって思いました。でも、一番驚かされたのは、先生のエネルギッシュなことでした。やっぱり、先生が元気！！だと、生徒もやる気がでるのでは?! また、前回のような授業があると嬉しいです。

- ・ アイデア出しの授業、とても自由で初めての体験でした。

―― ワークショップ型授業というのは、多様な参加者自身も持っているものを出し合ってお互いに学びあうということをととても大切にします。そんな点では、学生生徒をととても信頼し期待してすすめているのです。しかし、現実の多くの先生方は、しばしば学生・生徒を「ダメ」だと思いきがいて、学生・生徒からでてくるものを信頼期待していないのが残念です。

- ・ とてもびっくりしました。ワークショップとかグループとかそういうものを長い間やっていなかったの、とまどいました。でも、昔小学校や中学校の頃によく授業でやったワークショップを思い出しました。ワークショップは生徒自身が参加して完成する授業なのだろうと思いました。

- ・ ああいった事を実際にやるのは初めてで、テレビや資料で客観的に見るのとまた違うな、と感じました。

- ・ 非常におもしろかったです。あれだけのことを一時間半で終わらせることができるのはスゴイと思いました。想像力を高める授業で、一つのことからたくさんことを連想したりなど、いい意味で頭をたくさん使いました。とくに一番おもしろかったのは、みんなが描いた絵を、曲やストーリーを作って発表したものです。音楽と美術が一体化して芸術ってすごいと感じることができました。

―― 音楽と美術の二つの専攻がいる皆さんならきっと創造的につくってくださるという予想と期待で、この授業を構成しました。期待通り、というより期待以上のものを皆さんが創造して下さって、大変感動しています。実は、こうした創作は30年近く前からやっています。無論、毎年毎年バージョンが高まっていますが。そして、とくに沖縄の学生はこうした創造活動がとともうまいですね。このあたりの創造のアイデアは、いろいろな所で私は書いていますので、もしかすると図書館で本を探すとみつかるかもしれませんね。

## 2) 前半

- ・ 授業の最初は意味がわからなくて、とまどいました。でも、気付いたら遊んでいる自分がいて、ニコニコしてました。

―― 最初からリクツを並べて、受講生をリクツで納得させてから活動させようというのでは、頭→体になってしまっ、それほど動けないものです。それに芸術分野というのは、頭から入るのではなく、感性を豊かに出し合いながらすすめるものだと思いますので、こうした運びにしたのです。異なる専攻分野の学生ですと、もう少し説明してから始めることもあります。

- ・ 始まってからのいきなりの意思伝達ワークショップに少し驚き、しどろもどろしました。恥ずかしかった面もあります。しかし、先生の強烈的な授業の進め方で次第に打ちとけることが出来ました。私にも、このような生徒を引っ張り、のせてゆけるような先生になりたいと思いました。

- ・ いままで一緒に講義を受けていたのに一度も話したことのない人たちとも自然に話せる環境（雰囲気）づくりがされていて、その後の授業がスムーズになっていて、素晴らしいと思いました。

## 3) 後半

- ・ 最後の劇みたいな発表（プレゼンテーション）がおもしろかったです。最初に関心させてから、のびのびと発表させるのはとても良いことだと思いました。

- ・ 最初の「変わったあいさつをしよう」というのは、すごくとまどいました。恥ずかしいというのが頭にあって、さらに普段から話すことが嫌いな（苦手な）私にとっては、変わったあいさつどころか普段から何気なく使っているあいさつもどんなものがあったかとつさに思いつけなくて大変でした。後半の「好きな授業を作ってみよう」というのはとても楽

しかった。絵を書いたり、音楽をつけたりしながら、授業を作るのはすごく勉強になり、みんなの意見もとてもおもしろくて、よかったです。

- ・ 模造紙にリレーお絵描きはとてもいいアイデアだと思います。
- ・ 最後のグループごとの発表が、各グループおもしろい発表が見れたのが良かったです。
- ・ はじめは、朝っぱらからテンションも高く、ペースも早かったのですが、後半のグループ連想ゲームは楽しかったです。
- ・ チコクしてしまいはじめは意味がわからなく輪の中に入りました。でもだんだんと楽しくなって、これって本当に授業なの？って思いました。最後にグループで発表も恥ずかしかったけど、おもしろかったです。いろんな絵とかストーリーが出てきてすごいと思いました。毎日がこんな授業だったら……。それは難しそうですね。わたしはもう実習が終わってしまったので、行く前にこの授業うけたかったな。

#### 4) 今後に生かしたいこと

――このワークショップ授業の後、学生さんたちは、このクラスの授業で、「こんな授業をやってみたい」という学習指導案発表を行うので、そのヒントになること、さらに教育実習に役立つこと、さらに教師になってからに役立てたいことなどが、多く書かれています。

- ・ どんなモノでも教材になるんだなあと思いました。
- ・ 浅野先生を見て思ったのは、先生側が元気にノリよく話をする事で生徒ものせられるんだ、ということです。教室の空気をいかに使うか、が大切なのかなあ、と思いました。
- ・ とても楽しかったです。最初は浅野先生のパワフルさに圧倒されましたが（笑）、途中から私たち生徒の方もテンションが上がってきて、今までにない楽しい授業になりました。先生のパワーは生徒に伝わるんだなあ実感しました。
- ・ 先生の若さには負けました。先生のテンションに引っ張られていつの間にか授業が終わっていたという感じです。教師の「ノリ」って大事だと思いました。つかみどころのないキャラクターもポイントですか？！ それとも素であんな感じなのでしょう？？面白かったです。あと、ポストイットはなかなか使えるアイデアだと思います。

――「つかみどころのないキャラクター」こんな風にかかれたのは初めてです。でも、なんかうれしいような不思議な感じがします。

- ・ 授業というどうしてもイスに座って先生の話を聞くものというイメージがありましたが、こんな風に体を動かす授業もあるんだととても新鮮でした。大学に入って体を動かすこともほとんどなかったのですが、この日だけは幼稚園や小学校にもどったみたいに体を動かして楽しかったです。「楽しい授業を作る」ということをやりたいと思っていたので参考にしようと思いました。
- ・ 先生も生徒も楽しめる授業を目指したいです。
- ・ どんな授業を作っていくか。一人では出てこないことがみんなで考えることでたくさんのアイデアがでてきてすごいなと思いました。
- ・ 色々なアイデアであんなに沢山の授業を考えることができるのが驚きでした。今後の授業作りの参考になりそうだなと思いました。
- ・ どのように授業をくみだてていくかという迷いが見事打ち破られた気がしました。今度また先生の授業をぜひ受けたいです。
- ・ 先生の講義を受けてとても楽しかったです。みんなで席を立て、初めてしゃべる人とワークしたり、ポストイットをいろんな所にはりにいたりしたのに、とてもスムーズに講義が進んでいてびっくりしました。浅野先生のテクニック

を盗みたいです。

——大いに盗んでください。テクニックは本にもなっています。『授業のワザ一挙公開』（大月書店）は残念ながら絶版で、古本市場では取得可能です。最近出版した『ワークショップ・ガイド』（アクアコーラル企画）はすぐに手に入ります。

- ・ あの授業の学習指導案がこんなにも考え込まれて作られているとは思いませんでした。
- ・ 浅野先生の授業を受けてプロの授業の進め方を学べて、導入、展開の様子がとても勉強になりました。！！ とっても楽しい授業で、私もこんな授業をやってみたいと思いました。
- ・ 先生の授業を受けて、学習指導案をどうやって書けばいいのかとても不安だったのですが、それがすっかり消えて気軽に書けるようになりました。美術作品の材料はどのようなもの（ゴミになるようなもの）でもいのように、授業の材料（内容）はどのようなものでも工夫すればいいのだと気付かされ、とてもよい勉強になりました。
- ・ 私が得たものは、まずアイデアを沢山出すこと！（限りなく出す）そこから、自分がやってみたいと思うジャンルを絞り出し、みんなが書いた中からヒントを得るといこと！ 一人で悩まずに、人から得るといことを知りました！ 私もおもしろい授業をつくりたいです。

・ 「授業」といものを絵や歌でつくりあげ、それを表現するむつかしさ、楽しさを学びました。

・ とにかく印象的だなあと感じました。「覚えられる先生」ってすごいと聞きました。先生はまさにその通りですね。私も自分なりに覚えられる先生を目指したいと思います。

・ 浅野先生はとても明るくユニークな方で親しみやすい方でした。先生の面白さ、いままでやったことのないような楽しい授業は本当に新鮮だったので自然と授業に入っていました。先生対生徒という関係だけでなく生徒同士での関わりも多く持つことができ、すごく楽しかったです。「イメージする」という感覚をフルに活用できた時間でした。ここで得た感覚は、指導案作りで悩んでいた私にとってとても役に立つものとなりました。

・ 大学生の私達でもとてもワクワクするような授業でした。言葉もはっきりしていて、「元気な先生」というイメージがとても強かったです。やはり、先生の雰囲気教室全体の雰囲気を作るんだなあと感じました。自分が授業をする時も、生徒から「この授業楽しい！！」「この先生の授業スキ」って思われるような先生になりたいです。

・ こんな授業ができるようになるために、たくさんの苦悩をのりこえていかないといけないんだと思いました。

——私の場合も実際そうです。授業がうまくいかなくて、ヤケ酒を飲んだこともありました。大学教師になって数年間はうまくいかないことばかりでした。また、大学を移ったときも、3年間試行錯誤の連続でした。大学教師を35年やってようやく最近、授業に行く時、「どんな学生さんたちと会えて、どんな物語を学生さんたちがつくってくれるのだろうか」と楽しい期待をもてるようになりました。

・ 先生のような授業を、私は初めて受けました。教師が何より楽しそうで、はつらつとして……。よく「もっとやる気をだしなさい」とか「ハキハキしなさい」とか言う教師がいたけれど、よく思い返してみたら、果たしてその本人はやる気満々でハキハキとしていたか……。と思うと何とも言えない。机について行はずの教科を、体を動かすことによってハツラツとしたムードで、楽しくかつきちんと授業に参加できていたと思う。体育や音楽、美術で生徒が輝くのはやはり体を動かすからなんだと思う。私がもし教師になったときは、きっと浅野先生を思い出すと思います。そして、先生の授業で味わったような感覚をどうしたら生徒とともに作り出していけるかを常に模索しつづける、そんな教師になりたいです。

・ 楽しかった。みんなで動きながらも授業なので、フルーツバスケットしてる気分でした♪♪ 浅野先生って何者ですか？？？（中略 書いた人の年齢が書いてあるので） 中学校・高校は正直ちゃんと授業とか受けてなかった……。でも、大学に入って久しぶりに授業楽しかったって思いました。（中略）浅野先生から得たものは、「授業って活動する



もの」って思った。ただ聞くだけじゃダメなんだって実感しました。

- ・ 浅野先生の講義は「生徒とふれあう」ということの大切さがわかりました。先生が心を開いて生徒に接することで、生徒も明るく元気に接してくれると思いました。
- ・ とても楽しい授業でした。小学校から考えてあまりワークショップの授業をやってこなかったのですが、最初は当惑のこともあったけど、先生の畏に上手にはまって楽しむことができました。活動型の授業ではなくとも子どもたちをひきつける先生の力はとても大きく大切だと思いました。いったん世界に入った子どもたちの集中力が続くような授業の作り方を研究していかなければならないと思います。
- ・ 浅野先生の授業は全くの未体験のものでした！ 私たちの専門分野は「教える」という観念を持つべきでないと思うのです。楽しく沢山の発見と発想力、自己の世界観の貴重さを実感してもらえるようにきっかけをあげたいのです。
- ・ 授業の中での先生側のテンポのよさが大切なんだと思いました。はじめてのことにとまどっている生徒たちをのせていき、ひっぱってあげれば、みんな授業に楽しみながら参加していけると思いました。歌ったり絵を描いたり楽しい授業でした。

## 5) その他

- ・ 先生は保育園の先生の経験とかありますか？ 話し方が丁寧でした。  
―――保育園の先生経験はありません。1~2時間ぐらいなら、何回か保育園で子どもたちにいろいろやったことはありますが。保育園実践について考えたことはたくさんあります。「保育園の先生の経験」「話しがていねい」ということをいわれたことは初体験で、とってもうれしく思います。
- ・ こんなふうにして、学校の先生も授業をつくっていったら、先生たち自身が楽しく過ごせるのでは？と思いました。  
―――そうですね。このごろ先生たち自身が「つらい」思いが多くて「楽しい」思いが少なくなっているようなのが残念ですね。
- ・ 最初は訳が分からなくて戸惑いを感じたけど、先生の人柄と授業のやり方にひきこまれました。
- ・ 先生の授業は参加する形の授業だったので印象的でした。先生、元気（天気？ 判読困難）でした。私は午前という事でテンションがあがらなく、すごいと思いました。プライベートでも毎日楽しいですか？ 私には毎日楽しく過ごしたいと思っています。笑顔は本当に大切だと思います。

―――「また授業にでたい」とかの希望がありましたが、それが芸大のなかでできるかどうかは私には決められないことですので、大学にお任せです。ただ、私の家でとか、いろいろな形でワークショップをしていますので、それへの参加は大歓迎です。他の大学でも時々非常勤で授業をしていますので、それに「モグリ」にきてください。モグリ大歓迎です。というのは、いろいろな専攻の多様な学生が参加すると、授業がおおいに充実するからです。

長い大学教師の間、芸術系の学生だけの授業ははじめてで、とてもワクワクしてやりましたし、終わったあともとてもうれしくてしょうがありません。またいつかどこかでお会いしましょう。



# 同友会大学 (沖縄県中小企業家同友会主催)

2009年から毎年、沖縄県中小企業家同友会主催の同友会大学で、「教育」講座の担当をしてきた。毎年一回の2時間余りだが、大変充実したワークショップになっている。そのなかのいくつかを紹介しよう。

## 創造的討論が夜まで渦巻く 第20期

2014年09月17日

13日夕方、私が担当する「学校・企業・社員 どんなちからをつけるか」を、例年通りワークショップ形式ですすめた。今年の特徴と、印象的な発言などを紹介しよう。

1) 3連休初日のためか、諸行事と重なり、参加者11名と少なかったが、社長さんたちから超若手までと世代幅が広く、大変興味深い討論の連続となった。私も初耳の創造的発言の連続となった。

2) 最初に、近年の産業界・学校教育界の世界的動向について短くレクチャした後、アイスブレイキングを兼ねた物語づくりから、独創的な話で盛り上がった。参加者が少ないことに加えて、同友会大学後半の山場のころなので、参加者相互に気心知れた関係が築かれていることも大きかった。

3) 2番目の討論は、この2年間の定番「沖縄の教育は、先進国型か途上国型か沖縄独自型か」の討論だ。全員発言は言うまでもなく、何度も充実した発言をする人もあり、最後には、発言時間を1分に制限しないといけなくなるほどだった。今回は途上国型を選ぶ人が多かったが、討論の深まりの中で、位置を変える人もいた。いままでに出会ったことのない発言にいくつも出会えた。

- a これまで途上国的性格が強く先進国を目指してきたが、そろそろ沖縄独自を目指して創造していく時代だ。
- b 先進国的振る舞いをしてきたが、沖縄独自の世界へと展開していく時期だ。
- c これまで沖縄独自であったが、世界の動向を見据えて、世界の先進国として展開していく必要がある。

などなど

4) どんな力をつけるか、という問いでグループ討論して、表に記入し、それをプレゼンして討論した。写真は、一つのグループ例だ。

「今の沖縄の学校で育てているもの」では、2つのグループが、「読み書き算。知識量」をあげたが、1つのグループが「協同力・人間関係力」を挙げた。早速質問がでた。そのグループの意見を引っ張った若手参加者が、部活などの諸活動でうんと活躍できたから、

|           | 今の沖縄の学校で<br>育てているもの | 同友会社社員への提案 | 同友会社社員への期待 |
|-----------|---------------------|------------|------------|
| 読み書き算・知識量 | 50                  | 50         | 10         |
| 協同力・関係力   | 10                  | 15         | 40         |
| 意欲・努力力    | 10                  | 20         | 25         |
| 協同力・人間関係力 | 30                  | 15         | 25         |
| 計         | 100%                | 100%       | 100%       |

という応答をした。それは実業高校での経験を基にするものだった。どうやら、多くの学校が「読み書き算。知識量」のようだが、学校によっては生徒によっては、諸活動でうんと充実した学校生活を送っているようだ。

「同友会社員の現実」では、「読み書き算。知識量」では十分だが、不足している「創造力・思考力」などを、「同友会社社員への期待」ととらえ、そういう社内教育を展開していく必要がある、というのが多数派意見のようだった。これについても、それとは異なる少数意見グループが登場し、喧々諤々の討論となった。



5) 最後に、社員教育、学校教育への提言をポスターに書いてもらい、並べた。(写真参照)  
これまた多彩なものが飛び出してきた。

6) ちょうど時間通りに終了したが、もっと議論したいというので、夕食会をすることになった。ほとんどの受講者が参加し議論がどんどん続いた。何年も同友会大学の講師を務めてきたが、こんなことは初体験だ。会場は、中国から来た受講生が馴染みにしている中華料理。とっても美味しい料理がふんだんでできて、頭も腹も満腹を越えて、食べ過ぎになってしまった。

楽しく有意義な5時間余りだった。

## 学校・企業・社員 どんな力をつけるか 第19期

2013年08月12日

10日午後産業支援センターで、沖縄県中小企業家同友会主催の第19回同友会大学の講座を担当した。ここ数年連続して担当しているが、最近はタイトルのような内容で、ワークショップスタイルですすめている。

今年は、最初に多少のレクチャをした後、アイスブレイキングで、「いろいろなあいさつ」「いろいろなほめ言葉」「物語を作って回す」といった、私の定番を展開した。パスする人がとても少なく、どんどん進んでいく。何回目かの講座なのだが、参加者の人間関係が深まりつつあるので、勢いのある進行になったのだろう。



その後、少しのレクチャをして、沖縄の学校教育は、「先進国型? 途上国型? 沖縄独自型?」という、これまた最近の私の定番の討論を展開した。参加者は支持する考えのグループの所に行き、3グループ対抗の討論をする。「未定」グループもできて、4つがからんだ。発言は、自分なりの定義と事実把握に基づいて、沖縄の学校教育を判定しながら、課題を提起するといった、素晴らしいものが続いた。さすが、社長・幹部社員の皆さんだ。

この討論風景が、写真だ

三つ目の活動は、右写真のような表に、グループ討論で、数値を記入していく。下写真は、その活動をしているグループ風景だ。

3グループとも、かなり共通する主張が多かったので、ここでは写真掲載したグループに基づいて、いくつかを紹介しよう。

1) 沖縄の学校教育は、『読み書き算・知識量』に圧倒的な比重をかけて展開している。写真グループは60%とした・対照的に、「創造力・思考力」は、5%と低い。

2) 同友会会社社員は、「協同力・人間関係力」で優れており、写真グループは50%とした。「意欲・粘り強さ」は、かなり高い評価だが、「創造力・思考力」は、業種による違いがめだち、結論が出しにくかったようだ。

3) 同友会会社社員への期待としては、下の三つを挙げるグループが多く、「知識量」は、下の三つに引っ張られるようにして高くなるはず、という考え方が目だった。

|           | 沖縄の学校で<br>行っているもの | 同友会会社社員が<br>優れているもの         | 同友会会社社員への<br>期待 |
|-----------|-------------------|-----------------------------|-----------------|
| 読み書き算・知識量 | 60                | 15                          | 10              |
| 創造力・思考力   | 5                 | <del>10</del> <del>50</del> | 30              |
| 意欲・粘り強さ   | 20                | 35                          | 30              |
| 協同力・人間関係力 | 15                | 50                          | 30              |
| 計         | 100%              | 100%                        | 100%            |



このような討論は、沖縄の学校教育への発言になるとともに、企業が自ら行う企業内教育などにも示唆になりそうだ。

今年は、例年より人数が少なめだけに、討論内容に深みが出たようだ。私の方も、盛りだくさんになり過ぎたこれまでの例を反省して、集中して論議できるように組み立てた。

楽しく濃厚な2時間余りだった。

## ベルトコンベヤー対応型業務から物語創造型業務へ

卒論と私のコメント

第19期

2014年03月07日

昨年8月に開いた私が担当する講座「学校・企業・社員 どんな力をつけるか」は、例年同様ワークショップ形式で行ったが、その「卒業論文」が届いた。

そのなかのいくつかを紹介しながら、コメントしよう。

「講義方法がとても斬新でひきつけられました。聞くだけの講義よりもとても印象に残るので、取り入れられる状況があればぜひ取り入れたいと思いました。」

「枠に入れて、枠外しをしていく発想が面白いと思ったので、機会があれば利用したいと思いました。」

「まず自分が、自分の環境が置かれている立ち位置を把握することで、そこから課題が見えてくること、それには正解

はなく今の自分が置かれている環境をステップアップするキーワードが個々人でみえてくるのがワークショップスタイルの醍醐味だと感じる事ができた時間でした。」

知識の提供よりも、知識を活用し創造するありようを取得することを主眼にしたワークショップの成果が出てうれしく思う。今後の会議進行・社員教育などに大いに活用して下さることを期待している。

「ベルトコンベヤー対応型業務から物語創造型業務ということを知って面白いと思いました。全員でやった、物語作りは相手をほめるなど、初めての体験で楽しかったです。マス目を利用し、数字で良いところ悪いところを出して、グループ討論をしたが、社内でも楽しく分かりやすくミーティングなどで活かしていける内容だった。」

中小企業は、大量生産ではなく多様な顧客の多様な要求に対応する業務が中心だ。世界的に見ると、大企業でもそうなりつつある。学校もそうだ。数百人以上の学校、30人以上の教室での大量注入訓練は化石になりつつある。

関係者の皆さんが、挑戦の気持ちを高く持って、創造の道を歩んでいって下さることを期待している。

## 私のワークショップへの興味深い多様な反応

## 第18期

2013年2~3月

昨夏開かれた沖縄県中小企業家同友会主催の第18回同友会大学の「卒業論文」へのコメント依頼があった。

私は、もう数回目になるが、毎年、教育問題の講座をワークショップ形式で担当している。「卒業論文」といっても、通常の卒業論文イメージではなく、受講生の各講座への意見・感想などの小文だ。担当講師にとって、受講生の反応を知ろうと貴重なものだ。

たとえば、

「今までに無い授業で、最初はとまどいましたが、とても楽しく過ごせました。グループで話し合い意見をまとめるのが楽しかったです。」

「浅野先生の講義はとても独特で、今までになかった講義内容でした。

体を動かし、考えるという講義内容でした、学校で学んだ事が今に生きているか?想像力、開発力、はどうか?の問いには思わず考えさせられました。」

というコメントがあった。

これらは、私のワークショップに限らず、他の人がするワークショップにあっても、その多くに出てくる反応の一つだ。これまでの学習とか研修とかでは、講師が提供する知識・主張・メッセージを聴きとることがまずは中心となる焦点となりやすい。そこで受け取った知識・主張・メッセージを、記憶することなど自分自身のものとするのが次のステップだ。それらを批判的に検討する、ないしは自分が置かれた場で応用発展させることへとつなげる人もいよう。

だが、ワークショップでは、講師は知識・主張・メッセージを直接的な形では提供しないのが普通だ。それらは、参加者自身が出し合い、作り合うのだ。その出し合い、作り合いがうまく進むようなコーディネイト的な役割を果たすのが講師の仕事だから、コーディネイターとかファシリテーターとか呼んだりする。

だから、次のような反応が出てくるのも想定内というか、予想通りである。



「話の内容にまとまりがなく何を言いたいかさっぱりわからない。ワークショップらしきものも「沖縄の学校の場合は？」といったかと思えば「自分の行った学校の場合は？」と試してみたりそこから何がひきだされるのか意味不明。グダグダ」

「正直言って、浅野先生の講義は何か言いたいかよく解らなかつた。先生が言う「慣れ切り過ぎ」のスタイルにはまっているのだろうか。ワークショップ形式の討論に慣れていない事が原因なのか、みんなで輪になってゲーム的に話を進めていく事に違和感を覚えた。楽しかったと思うが、結局の所なにを言いたいか解らなかつた。」

「講師」からの直接的な強いメッセージを期待して参加される方が、このような反応を示されるのは予想できる。そういう方は、「講師」「講義」という用語が使われることが多いが、「講師」がする「講義」はそういう性格のものだからだ。

それに対して、ワークショップではまったくといってよいほど異なる。私の場合は、直接的なメッセージを出すことを極力避ける。さらにいうと、多様な考えが出てくるように、意図的にすすめる。一つの考えにまとまり過ぎる時に、あえて少数意見、あるいはそれまでに出てこなかった意見を私が出すことさえ多い。だから「なにを言いたいか解らなかつた」という反応がでてくるように進めたのだ。その中で参加者一人ひとりが自分なりの考えを作り深めていくことを、共同の場ですすめるように運んだのだ。

だから、私のメッセージは、共同作業・討論のなかで、参加者自らが発見創造してほしいという間接的なものであり、それはかなり強力なメッセージなのだ。次のコメントは、そうしたことに対応するものといえよう。

「講師が一方向的に説明し受講生は聴くだけという「慣れ切り過ぎ」スタイルにこのワークショップ形式の導入は斬新で画期的なアイデア。また、このワークショップ形式は、企業が社員に求める「提案能力」「実行能力」「コミュニケーション能力」等と連動し、遊びの感覚で学べる点は集中力を高める効果がある。それに、学生や社員がワークショップ形式で問題や課題等をテーマに取り上げ、議論し問題を共有することができるのもこの形式の利点で様々な意見を集約できる。

しかし、大事なのは、この形式の本質を学生や社員が理解し、意見を出し合い、考え方や能力を引き出すことが重要で、方向性を間違えるとゲーム扱いで流される可能性があり、まとめ役を置く必要がある。」

このように、ワークショップ経験をほとんどもたれない参加者が、とまどわれることは当然だ。「とまどわないとまずい」といってよいほどだ。「模範生」タイプにありがちな、自分の考えを抑えて講師迎合的な受講態度をもっていたとしたら、『とまどい』をその態度変更のきっかけにしてほしいからだ。

15コマも継続するワークショップ型の大学授業では、数回ぐらいうると、戸惑いが消えるのが普通だが、一回目だとまだ半分ぐらいの学生はとまどい状態にある。特に、自分の意見を出すことに慣れていない受講生はとくにそうだ。

だから、今回のように、2時間ぐらいの長さだと、最後まで戸惑う人がいることは当然だろう。

それにしても、私は、間接的な形であるが、『参加者が共同で発見創造をすすめることが重要だ』という強いメッセージを出している。

このワークショップを通して得たものとして、参加者は多様なことをあげておられるが、3点ほど紹介しよう。まず異なった視点で物事を見ることに関わって、次のような記述がある。

「違った目線で物事を評価する事も大事だと改めて思いました」

「いろいろな考え方があると言う事で、それぞれの考えの歯車がかみ合えば、会社・社会・子育て環境が良い方向に改善されるのではと思いました。」



次に「考える力」に関わってである。

「座学ではない、グループワークが多く自分で考えることをテーマにした講義で大変有意義な時間を過ごせました。面白かったのは、どんな力をつけるかの討論の結果グループ内外で意見が大きく分かれたこと、当グループでは沖縄では横の繋がりが強く人間関係力は高いはずとの意見でしたが、沖縄おこし人生おこしになるとそれらはさほど重要視されず粘り強さや創造力が大切なのはとの意見になったことです。」

沖縄の教育の特質に関わっての指摘もいくつか出された。これなどは、私の間接的なメッセージ（やや直接的だったかもしれないが）を受け止められたものと言えよう。学校教育と企業における教育を結びつけて考えておられる点も特徴的だ。

「講師のキャッチフレーズは「沖縄おこし、人生おこしの教育」。一方的に偏りがちの学校教育に対し、今回の講義をとおして、学校教育に対して関心を持っていくことも必要であることを痛感しました。発見、創造については正解がない、むしろワークショップ形式で参加者がお互いに知恵を出し合っていく過程が進歩発展の原動力になることを感じました。

今回のグループ討論のなかで、現状の把握とこれから求められるものについて、評点を行いました。グループによって異なり、とても興味深い結果となった。ただ共通性があったのは、将来の沖縄そして個人の人生観において最も必要なのは、意欲、粘り強さ、創造力、思考力である。

これまでは、企業の成長のためには、社員への教育をどうすれば良いのかを中心に考えていたが、今回の講義をとおして、これから社会人として巣立つための教育の場である学校教育に対しても目を向けて、創造性、思考力を重視した教育に賛同し、子供たちの企業見学など、積極的に協力していきたい。」

「先生の講話を聞いて考えさせられたことは「今後の学校のあり方」であります。現在のような教育を続けるのか。教育先進国の事例を取り入れていくべきなのか。全員で真剣に考えていかないと私達もそうだが国際化社会から取り残されてしまう。学校では生徒の考え方・意見を発表させる場を多く作りコミュニケーション能力を高めていく。企業・社員では競争意識を高めないと力はないと思います。あとは創造力・思考力を発達させて、意欲・粘り強さを持っている人を多く育成することが大事だと思います。」

「今回の講義のテーマの一つ「沖縄おこしの教育へ」は、確かに新聞やテレビ報道からも就職進学に親と教師が奮闘し、金を使い、休みが取れず疲弊し、本来の人間教育、生活指導、沖縄の将来性を話し合う機会を失っている感じがする。また、企業も社員に「沖縄おこし」を教育する時間と取り組む余力がなく、沖縄の将来に危機感を待ちながらも前に踏み出せない状況と思う。

このワークショップ形式で社会に通用するある一定程度の「ちから」を身につけ、「沖縄おこし」につながるかどうかは、情報の中でしか判断できないと思うが、しかし、今の「慣れ切り過ぎ」教育よりは、一歩進んだ教育ができると思う。

教育の先進国が活用した実績から、学力テスト全国最下位の汚名返上とコミュニケーション能力の向上により「いじめ」問題の改善、沖縄おこしの「そこちから」が身につくと期待しワークショップの導入を提案する。」

いずれも、私からのメッセージにとどまらず、御自身の創造的思考を書いておられる点が注目される。

次の「卒業論文」は、さらに提案的色彩が強く、学校や企業を含む多くの人に受けとめてもらいたい提言とも言えよう。

「21世紀に入り、既に12年が経過しヨーロッパが模索したグローバル化とアメリカの生んだITによって急速な進展をしてる世界情勢の潮流を掴まなければならないとおもいます。

私たちは、人を育て、その人財が強みを発揮できるようにいかにしてかかわるか？ これからは、相手を説得するには、論理だけでなく、相手を思いやり共感すること、問題の焦点を追求するだけでなく、全体のバランスを図る、二者択一でなく、ストーリー性のある物、商品でいえばインパクトの強い物である。これからは、真面目さだけでなく、遊び心が必要だという事、みんなを巻き込みいっしょに歩んでいくことが大切だと気づかされました。」

「学校・企業・社員はどんな力をつけるか？という設問に対し私自身が考えた答えは...  
その人自身の“感性を磨く力”なのではないかと考えました。

- ・知識を増やし経験を積む
- ・自分の目で見て、体験する
- ・物事に対し、「何か得られないか」「感じるものは何か」と常に意識化する

物事を常に意識化し、体験する事で信用され、どんな場面でも必要とされる力が付いてくるのではないかと考えました。」

以上のように、多様で豊かな反応、さらに深め創造性提案性に満ちた反応をえることができ、受講生の皆さんも私も、次の過程への新たなスタートを切ったといえよう。

今後の展開が期待される。ワークショップは、そうした「その後」の展開を生みだして行くところに重要な意味がある。場合によっては、焦点をさらに絞って、連続ワークショップを行うことになるのもよいだろう。

## 多様な場面で

夫婦で“**ているる**”「支援に役立つ家族関係講座」ワークショップ 2012年8月24日

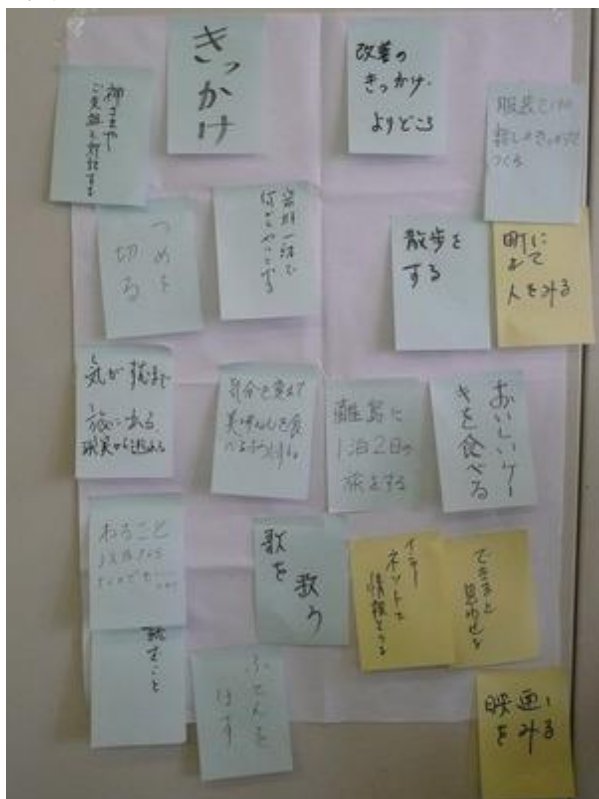
22日午後、沖縄県と(財)おきなわ女性財団との主催で、沖縄県男女共同参画センター“ているる”で、行う。

日ごろ、“ているる”をはじめ県内各地で電話相談などを行っている相談員を主対象にしたもの。相談に応じている方々がぶつかる話題に家族関係が多いことに対応して、相談をより効果的なものにするためのもの。

前半は、詩朗読、父母子どもの三者関係のロールプレイを中心にして恵美子が担当。後半は、前半を受けて、相談への多様なヒント発見のワークショップを私が担当。

大変熱心で真面目な方々の緊張した表情から始まったが、進行につれて、笑いと豊かな表現を伴うドラマが次から次へと展開していく。

夫婦でのワークショップも何回かになり、二人のアブ



平成24年度 第1回 相談員研修

### 支援に役立つ家族関係講座

8/22(水) 14:00~16:00

**場所** 沖縄県男女共同参画センター会議室(2階)

**対象** 男女共同参画センターに属する相談員

**定員** 20名(定員に達し次第締め切り)

講師 浅野恵美子氏(沖縄キリスト教学院大学非常勤講師・カウンセラー)

講師 浅野 誠氏(沖縄大学客員教授・フリー教育研究者)

**研修内容**

夫婦・家族関係は、楽しさと辛さが同居していることが多い。そして、夫婦・家族に他の人が関わることは少ないと、関係が悪化し、いきづまってしまうことが少なくない。家族だけの関係だと、知らぬ間に「思い込み」や「決めつけ」に囚われる。近すぎ、甘えも手伝って客観的になれず上手くいかないことがみられる。

ところが、これらのことを誰か他の人に話し、聞いてもらうと、ほんの一言のアドバイスだけで「なーんだ、そうなのか」と自分で気づき新しい関係の物語へと進むことができる。また、他の家族と一緒に遊んだり会話したりするだけで、「こんなやり方もあるのか」と手エを得ることができる。

本講座では、ワークショップやミニ・レクチャーで、また参加者相互の出会いと話し合いで、さまざまな夫婦・家族の共存・共栄の関係を見出していきたい。

主催 沖縄県・(財)おきなわ女性財団

ローチの違いが微妙に興味深くからまっていく。

また、いろいろな場でやる機会も増えそうだ。

下の写真は、三者関係発展のポストイットに書かれたヒントが貼りだされたポスターのうちの一つ。「きっかけ」「第三者」「見方」「相談者」「その他」に分類されたこれらのポスターをもとにしたプレゼンテーションもとても楽しいものだった。

## シュガーホールのワークショップ

### 運営と方向性について

2009年5月

シュガーホール運営審議会で、ホールの運営と方向性をテーマに行う。

わずか15分で100以上のアイデアが。

豊かなアイデアがいっぱい登場

さすが、いろいろな分野で活躍する人たちだ。

これらをもとに、たくさんの議論が発展

私がコーディネーターをつとめた。



## 読谷村社会教育団体合同研修会

## 大成功 多様な企画が登場

2008年6月

読谷でのワークショップは大変な盛り上がりでたくさんの企画の登場で大収穫であった。

最近、社会教育関係団体の活動を活発にするにすることがなかなか難しくなっているといわれる。そうした団体の活動を活発にするためのワークショップを、ということで読谷村教育委員会から依頼を受けてのワークショップだった。



婦人会、老人会、青年会、子育て支援グループ、子ども会ジュニアリーダー、PTA、社会教育職員、合計30数名の参加であった。朝から夕方まで長時間を、楽しみながら進化した。

中味は、こうした組織での活動に広がり、新機軸をつくりだすために、発想を豊かにして、多様な活動例をつくってもらい、そのなかのいくつかについて具体的な活動計画をたててもらって進化した。

いくつかの写真例にもあるように、実に多様な活動計画が登場した。いずれも実際にやってみたい、との声があがるものであった。

一番若い参加者は中学3年生、そして上は60代まで世代を超



えた多様な参加者が、多様なグループ活動をしていくなかで、入り交じって、いろんなプランができあがってきた。

私の印象としては、読谷はさすがであるということが第一点。社会教育諸活動での長くて豊かな蓄積があるので、こうしたワークショップで出てくるアイデアの豊富さには驚かされた。そして、第二点、若いジュニアリーダーの活躍はみんなが一致して認めるところだった。こうした若いエネルギーを育てている点でも、読谷は注目される。

こうしたことは、実は地域起こしでもある。そして、私が日頃主張している、「人生起こし、地球起こし、地域起こし」の三つが見事につながっている。

参加者の皆さん、および所属諸組織の今後の発展をおおいに期待している。

私自身も「満腹」ならぬ「満頭」状態で帰宅した。

こうした多様な世代・多様なメンバーでのワークショップは、私にとっても大変新鮮なものである。こうした企画でのワークショップをどんどんやりたいな、と思う。

左中写真は、紙芝居で発表

右中写真は、丸太渡り交流宿泊企画 不登校生が楽しく学校に行きたくなる



このほか、左下写真のように、たくさんの取り組み企画が登場した。



山小屋でビーチパーティー!? 門中対抗バーベキュー 校長バス停清掃

右下写真は、個性が強い読谷ジュニアリーダーたち。アイデア超溢れ、大人を驚かす。彼らが、今回のワークショップの活動をぐんぐん創造的におすすめていく。

本人たちが「個性強すぎ」と自己表現。とてもすごい力を発揮。人前で物おじもせず、どんどん提案。実に頼もしい。将来、うんと期待できる面々。





## 多様な社会で、生き活きとしたPTA活動の実践

首里地区PTA協議会主催ワークショップ

2007年10月26日

26日19～21時、首里中学校で、首里地区PTA連絡協議会主催のワークショップをおこなった。与えられたタイトルは「多様な社会で、生き活きとしたPTA活動の実践」だ。首里地区にある9つの小中学校の、PTA役員と校長教頭、約30名が参加したが、参加校長教頭の1/3以上が、かつての教え子や研究会仲間、20年以上ぶりに再会した方が多かった。

ワークショップは、異常にといいほど盛り上がる。年齢層を考えれば、なおのことそうである。まさに不思議。

最後には、やってみたいPTAの取り組み企画が6つできあがった。親子逆転授業参観、ナイトラーニング、ユニークなマラソン、親子カラオケ大会・・・などなど、興味深い企画ができあがる。それをめぐってのポスター討論も盛り上がるなかで、これは実際にやってみよう、という声もあちこちからあがった。

PTA活動は、役員の方々のご尽力に支えられる要素が多分にあるが、よくみられるマンネリ化傾向を打破し、新たなPTA活動の躍動が期待されるワークショップになった。

終わった時点での、みなさんの充実した明るい顔がとても印象的であった。  
以下は、当日配布したもの。

### 要請文より

- (1) 何故PTAに、関心を寄せないのか
- (2) 親が、子どもの家庭教育に、困っているのは何か
- (3) PTA活動に、不満を抱く父母が増えているのは何故か
- (4) 何故PTAに、関心を寄せないのか
- (5) PTA活動で、無くしていけないものなはなにか
- (6) 教育に関する、課題は増えているのに、人と人の関係が希薄になるのはなぜか
- (7) PTAの、共感のすすめ
- (8) 重点目標をどのように、進めるか

## 平成19年 首里地区連絡協議会方針

### 1. 重点目標

- (1) 家庭教育の向上を図る。(明るい家庭づくり)
  - ① 家庭での基本的習慣や躰を見直し、望ましい生活習慣の確立を目差す。
  - ② 児童・生徒の家庭での手伝いを推進し、生活体験の中で生きる力を育む。
  - ③ 家庭の日(第3日曜)は、家族全委員で夕食をとるようにする。
- (2) 非行防止、被害防止の徹底を図る。(明るい学校、明るい地域づくり)
  - ① 防犯パトロールを実施し継続を目指す。
  - ② 小学生には、被害防止、中学生には、非行防止指導を実施し継続を目指す。
  - ③ その他(インターネット、携帯電話、有害図書など)防犯対策の実施を目指す。

ワークショップとは 参加者による共同創造

**趣旨** 要請テーマをもとに、PTA活動をすすめるための《ヒント・てがかり・イメージ》を、参加者による共同創造活動を通して得る。

## ポイント

1. マイナス思考ではなく、プラス思考
2. 親子・家庭の孤立傾向からつながりへ
3. 学校にかかわる人々（子ども・保護者・教職員・地域住民・各種専門家など）の交流・共同を豊かに築きながら
4. 提案・アイデアを出しあい、いろんな試みを楽しみながらつくっていく  
「下手な鉄砲も数打てば当たる」

## 流れ

1. 参加者の緊張を解き、共同創造の雰囲気をつくる  
輪をつくってあいさつ  
ユニークな自己紹介  
物語をつくる（PTA物語）  
ほめ言葉大会。
2. PTAのイメージを広げよう 古今東西  
子どもなんでもキーワード探し  
学校なんでもキーワード探し  
PTAなんでもキーワード探し
3. 取り組みのアイデア大会  
「えーっ！ こんなものも！」
4. やってみたい取り組みでグループをつくる
5. グループで、取り組みアイデアを出し合う  
ベスト3を選んで、模造紙に書く
6. ベスト3の発表 ポスター討論
7. 振り返りの討論

**会場設営** 参加者全員が入れる広場をつくり、そのまわりにホワイトボード数台を置く。難しければ、いろいろな工夫で間に合わせます。当日早めにかがって配置などをする予定です。

# ワークショップ論

## 上田信行・中原淳「プレイフル・ラーニング」2013年三省堂を読む

2014年04月22日

店頭で見つけた本。30年間ほど、ワークショップに関わりつつ、多様なワークショップの動向に関心を持ってきた私にとって大変魅力的な「ワークショップの源流と学びの未来」というサブタイトルにひかれて購入し読書した。

著者の上田さんの専門は教育工学で、中原さんは経営学習論ということで、私とはずいぶん異なる分野だし、こうした分野でもワークショップが展開しているということに興味を持たれる。

上田さんの長年の取り組みにかかわって、中原さんが解説風なものを書いている。それによると、「1970年代の学びのデザイン」は「効率的かつ魅力的に知識を伝達するための」P49ものだったという。

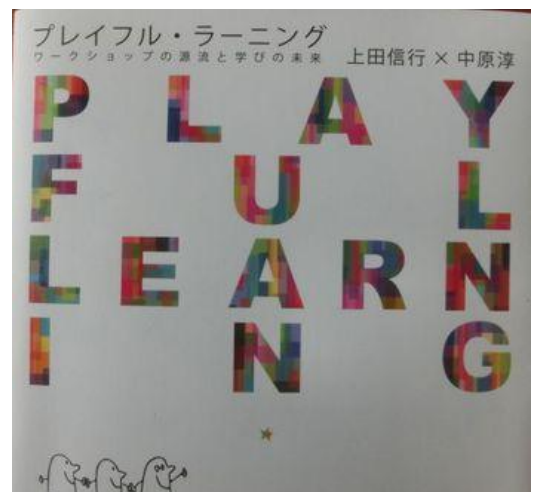
確かに、当時私が出会った教育工学からのアプローチはそうした性格のものが圧倒的だったが、コンピュータが登場する時代まで、その傾向は変らなかつたような印象をもっていた。そうしたところから、まさかワークショップ的な取り組みが現れるとは想像外であった。20年近く前の私のワークショップを、情報工学的アプローチから考えようとする人に出会ったことがあるが、私への刺激はゼロに近かった。

そうしたなかで、上田さんは、1980年代には「教授から構成へ」、1990年代には、ヴィゴツキーの再評価動向ともからみつつ、「コミュニティの中で学ぶ、強調して学ぶ」P90という流れに乗って、ワークショップ型展開を本格化させる。こうした流れを本書では「ワークショップの源流」といっているのだろう。上田さんだけなのか、教育工学全体の動向なのかは、私にはわからない。

こうした変化の動向、そして取り組みについて考え方やアイデアは、アメリカの動向と深く結びついているのが一つの特徴をなしている。また、モノや場環境の工夫に特質があるのは、こうした分野からのアプローチだけにそうだろう。なにせ、上田さんは、そうした場として自分自身でネオミュージアムという建物を作ってしまった。そして本書の実践例紹介は、その場で行った100人参加のワークショップのものだ。建物を作ってしまうという発想には驚きというか、畏敬の念さえ抱いてしまう。私などは、ワークショップとして使いにくい教室などを、ワークショップに使えるように工夫することが中心だったからなおのことだ。80年代初頭の琉球大学教育学部移転の際、レッスン教室と当時は呼んだ教室設計にかかわり、移転後多用したその教室だけが、私のただ一回の体験だ。

その100人ワークショップは、応募した参加者が集まり、参加者自身がアジェンダを作成し、グループを作ってセッションを作っていく。そして希望するセッションに参加して、正解のない議論を行うというものだ。最後に、実況中継的な感じのビデオをみんなで見ることをはじめとする振り返りが進行する。

全国から集まった参加者の能動性は極めて高い。私などが行うワークショップは、希望者が参加する例もあるが、多く



が大学から小学校までの子ども・生徒・学生対象で、本人希望ではなく、参加しなくてはならないという要素が高いものだから、ずいぶん様相が異なる。著者たちが、そうした場面ではどうやっておられるか、興味を持つ。

それにしても、こんなありようもなかなか面白い。私自身も挑戦してみようかな、とも思う。その条件作りは大変だが。「人生創造ワークショップ 人生後半期向け」というものを、10年ほど前に日本生活指導学会でしたが、そんなものを、全国募集でやってみるのも面白いだろうと思う。

## ワークショップ本6 <世界発見・共同活動創造・・・>刊行 2012年8月30日

タイトルの正式名は、[浅野誠ワークショップシリーズ№6 <人間関係・人生創造・世界発見・共同活動創造>]です。

このシリーズは、№5まで発行後、しばし間があきました。浅野誠「沖縄おこし 人生おこしの教育」(アクアコーラル企画2011年発行)の出版作業などがあったためです。

これまで、ワークショップを展開する多くの方たちに活用していただくとともに、私が担当する受講生の皆さんにも活用していただきました。

今回の№6は、とくに私の授業の受講生の皆さんに使用していただくことを主眼に編集しました。また、在庫ゼロに近い状態の№2と№5のなかで、今後も活用頻度の高い一部を加筆再録しました。

第三～五部の、世界発見、沖縄おこし・教育、共同活動創造は、全くの新規収録です。

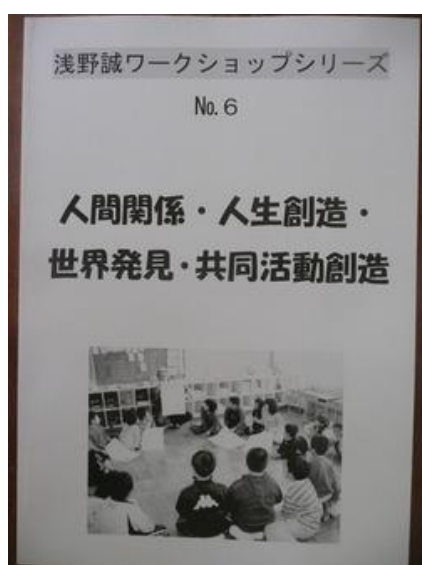
目次を紹介しておきましょう。

### 第一部 人間関係

|     |                                          |    |
|-----|------------------------------------------|----|
| №1  | 自己紹介・他者発見ビンゴゲーム                          | 4  |
| №2  | 列討論 聴き上手と話し上手の比率で並ぼう 別名 列討論 話し好き順に並んでみよう | 7  |
| №3  | リレー式に物語をつくる                              | 9  |
| №4  | グチの聞きあい                                  | 11 |
| №5  | やる気を出させる言葉がけ大会 「ほめる」大会                   | 12 |
| №6  | ボディランゲージで仲間発見                            | 14 |
| №7  | 身体を感じあう                                  | 16 |
| №8  | 誘うー断る・受ける                                | 18 |
| №9  | 苦手な人(子ども)とのつきあい方発見                       | 20 |
| №10 | リレーお絵描き                                  | 25 |
| №11 | 「つながる・つなげる」ワークショップ                       | 27 |

### 第二部 人生創造

|     |                    |    |
|-----|--------------------|----|
| №12 | 将来設計 尋ね人           | 30 |
| №13 | いろいろな生き方を見つけよう     | 32 |
| №14 | ○○さんの人生            | 34 |
| №15 | 大切にしている価値を順に並べよう   | 38 |
| №16 | 進路選択の時に、一番大切にしたいこと | 40 |
| №17 | 進路物語を創ろう           | 42 |



|                               |     |
|-------------------------------|-----|
| №18 「人生おこし」へのヒント発見            | 44  |
| №19 人生でいくつの職業をするか             | 47  |
| №20 ○年後の年収は？                  | 49  |
| 第三部 世界発見                      |     |
| №21 20年後の地球・日本                | 51  |
| №22 地球を創ろう                    | 54  |
| №23 古今東西 世界・地球発見              | 55  |
| №24 列討論「地球へのやさしさ」             | 57  |
| №25 キーワード発見「地球と沖縄の情勢」         | 58  |
| №26 世界での取り組みプラン 国際会議          | 60  |
| №27 ロールプレイ「親を説得する」「親の心配」      | 61  |
| №28 なりきろう                     | 62  |
| №29 「言葉を作ろう」大会                | 64  |
| №30 女の仕事・男の仕事といえるか            | 65  |
| №31 これから50年の私の家族予想            | 66  |
| №32 一大「健康」マップづくり              | 68  |
| 第四部 沖縄おこし・教育                  |     |
| №33 こんな科目をなくして、こんな科目をつくったら    | 70  |
| №34 「地球起こし 沖縄起こし 人生起こし」の教育へ   | 71  |
| №35 沖縄・子ども若者・教育の「いいところ探し」     | 73  |
| №36 いろいろな沖縄                   | 74  |
| №37 沖縄の教育は、先進国型？ 発展途上国型？ 独自型？ | 76  |
| №38 地域と子どもたち自身の物語をつくる         | 77  |
| 第五部 共同活動創造                    |     |
| №39 ○○大会アイデアづくり               | 82  |
| №40 共同創造取り組みイメージを作る           | 85  |
| №41 共同創造取り組み企画を作る             | 86  |
| №42 学級分析・方針づくり                | 88  |
| №43 こころとからだをひらく文化表現           | 92  |
| №44 サークル・部活・会・NPOなどの組織を新たに作る  | 94  |
| №45 「特別活動」を構想する               | 99  |
| №46 企画書をつくる                   | 109 |
| 第六部 小論                        |     |
| A 人間関係を育てるワークショップのねらい         | 111 |
| B ソーシャルスキル 対人関係と文化 物語づくり      | 113 |
| C なぜ人生創造ワークショップか              | 115 |



## 音楽・演劇表現によるコミュニケーション・ワークショップ 2010年5月19日

長ったらしいが、正式名称が、琉球大学教育学部・沖縄県立総合教育センター編『音楽・演劇表現の基礎行動によるコミュニケーション・スキル向上のための研修教材集』（2010年琉球大学教育学部・沖縄県立総合教育センター発行）という冊子を、編者の一人である中村透さんと、私のワークショップシリーズと交換した。

彼とは、1978年か1979年か、琉球大学の共同授業でミニ・オペレッタづくりをしたが、その時のことを思い出される。文化表現系のワークショップの先駆けだろう。

音楽や演劇の世界では、日本の教育の世界とは異なって、ワークショップの歴史は長く、蓄積も多い。

そうした蓄積をもとに、教員研修の世界でワークショップが行われることは大いに歓迎される。1970年代に、演劇での蓄積をもとに、竹内敏晴さんが宮城教育大学などで「レッスン」を行ったことが、先駆的なものだろう。当時の琉球大学教育学部でも、彼をよんでワークショップをおこなった。

本書の中には、中村さんに加えて、演出家の佐藤信さん、音楽教育研究者の牧野淳子さんが行ったワークショップが掲載されている。半分ぐらいは私もなじみのある活動だ。それにしても、演劇や音楽はワークショップ展開になじみやすいものを持っている。それを、教育界になじませることはいいことだし、必要だが、かなりの苦勞をする。そのワークショップ自体は盛り上がるが、ワークショップ参加者自身が、コーディネイター、ファシリテーターになって、子どもたち相手にワークショップをすることへとどう展開していくか、そこがポイントになる。「教え込み主義」が根深いどころか、最近では強化される傾向さえうかがわれる中で、この課題は焦点的問題になるう。

それにしても、沖縄県立総合教育センターが関与していることに見られるように、教育界でもワークショップへの関心を寄せ始めていることは、遅ればせ感があるにしても、いいことだ。

本書のワークショップのなかで、個人的には興味を持つが、私自身が展開するには大いなる困難を感じるのは、音楽のワザを使ったものである。たとえばリズムを使ったものは、音楽家には初歩的なものであっても、リズム感到に乏しい私が使うことには、絶望的なほどの距離があるからだ。それだけに魅力的だ。いつか使える日が来るだろうか。

## カウンセリングとワークショップ

2010年4月

### 1. クライアントの物語創造

山内暢子さんのカラーセラピーの一場面を拝見したことをきっかけに、ワークショップとカウンセリングについて、いろいろと思い浮かび、考えた。書きつらねることにしよう。

山内さんのカラーセラピーは、いろいろな形で行われているようだが、今回拝見したのは、一対一のカウンセリング場面だった。一対一の場合も含めてカウンセリングは、その場で完結するものではなくて、その場での対話・会話・話し合いを通して、多様な物語を生み出していききっかけをつくるものだ。その場で事柄が解決するというより、今後作られ発展していく物語が前向きに生み出されるようにするために存在すると言ってもよい。

その物語の作者は、カウンセラーではなくて、クライアントなのだ。そこを間違えてはならない。カウンセラーが書いたシナリオをもとにクライアントが動くと考えてはまずい。クライアントが自らの物語を自ら作り、自ら演ずるのだ。それにヒント、手掛かりを与え、物語創造を励まし、誘う役割をカウンセラーがとるのだ。それはワークショップの場での、コーディネーター、ファシリテーターの役割と同じだ。

選んだカラーが意味すること、ヒントとなることを、カウンセラーが話すことはあるのだが、それは、『その通り』にしろと指示することとは違う。そのカラーが示唆する情報を語りながらも、それをきっかけに物語を作るのは、クライアント本人なのだ。

「情報提供は、物語指示・行動指示である」と思いこむ人がいるが、それでは上下関係、指示命令関係になってしまい、ワークショップやカウンセリングとは正反対の世界だ。それにしても、教師・生徒関係、親子関係も含めて、そういうものが多すぎる。また、カラーセラピーの財産が余りにも豊かなので、それに目がくらんで、そうしたものに陥る危険があることは、自戒しなくてはならない。カラーセラピーに限らず、豊かなものを持つ人には、二の自戒が大切だ。

授業には、こうした性格が強い。だからこそ、ワークショップ型の授業を私は強調するのだ。にもかかわらず、上下関係・指示命令関係を『緩和』するために、ワークショップを「利用」する人が結構いる。カウンセリングでも、同じような傾向を見ることがある。カウンセリングの世界では、指示的り指示的、あるいは構成的・非構成的といった二つが話題によくなるが、こうした問題が底流にはありそうだ。

一対一カウンセリングの難しさも、二のこことかかわる。カウンセラーとクライアントの関係は、片方が『強く』で、片方が『弱い』という非対称的なものであることの方が普通だ。それは、権威主義的關係でもあり、また過剰信頼関係でもあり、結果的にクライアントの自立成長をおしとどめることになりやすいからだ。

だから、そのことを自覚しつつ、そのことが物語づくりに悪影響をもたらさないようにしなくてはならない。

そうしたことを防ぐ意味で、一対一だけにとどめないで、第三者が入り、さらに人数を増やす中で、物語づくりを展開することは大切だ。その意味で、一対一カウンセリングをグループカウンセリングやワークショップとつなげていくことは有効であろう。

私が、ワークショップにおける物語創造的性格を強く押し出しているのも、こうしたこととかわる。

## 2. つながり創造へ

1 回目「物語」について書いたが、物語は多様なつながりを作るということでもある。だがそれは、クライアントが自分一人で物語を書き演じるというのではない。まず、カウンセラーとのつながりがある。そして、自分自身とのつながりがある。カラーセラピーでは、潜在と顕在という表現を使っているようだが、自分で意識しているものと意識していないものをつなぐということがある。それは両者を一致させるという意味ではない。両者をつなげるのだ。誰も多様な面をもっている。それら相互の間をつなげるのだ。

さらにクライアントの周りの人間とのつながり、さらにはまわりの社会や自然とのつながりをつくっていくことがある。既に存在しているのだが、無意識に潜在しているものを、意識化させ顕在させるということもしばしばある。そのことを通して、それらの意味を発見し、物語づくりをさらに推し進めるのだ。

カウンセリングという内側に向くイメージを強くもつ人がいる。またカウンセリングが好きという人には、自分の内側に向き過ぎの人がいる。外とのつながりに傷ついたので、内にこもりたいという人もいる。それも一時はいいだろう。でもつながりの傷をいやし、修復し、つながりを再構築することがいずれ求められる。無論、以前のつながりから離れて、

新たなつながりを求め育てるということもある。

こうした過程を、自己内対話を通しての自己発見だ、ということもできる場合がある。だが、それも実は自己外対話が並行的に進行していることを忘れないでいたい。

だから、多様な人と出会うことを大切に作るワークショップは絶好の機会だ。一対一カウンセリングも、そうした多様なつながりへのきっかけとして大切にしたい。カウンセリングだけで、ことが終わるわけではないのだ。

このあたりの山内さんのカウンセリングは、実に絶妙だ。クライアントがいろいろなつながりを発見・創造することをどんどん促進していく。

### 3. 物語と知識、発見解放と創造

カウンセリングにしる、ワークショップにしる、そこでなんらかの情報・知識を伝えることは補助的なものだ。クライアントや参加者がつながりを作り出しつつ物語を作っていくことを助けるために、情報・知識が補助的に活用されるのだ。

その意味では、カウンセラーやコーディネーターから何かを伝える過程と、クライアントや参加者が何かを受け取る過程は、一方向的というより双方向的であり、かつ同時進行である。

また、ワークショップやグループカウンセリングの場合特にそうだが、カウンセラー・コーディネーターが発信役で、クライアント・参加者が受け取り役と固定されるものではない。双方が両方の役割をとることの方が普通である。

また、ワークショップやグループカウンセリングの場合、カウンセラーやコーディネーターが発信者でもなく、受け取り役でもないことがある。クライアント相互、参加者相互の間にかかる発信・受け取りの多様な過程を促進する役割になることが結構多い。

また、カウンセリングやワークショップの過程で生じる発見と創造の過程も、同時進行であることが多い。発見してから創造に向かうという二段階ではないことの方が普通なのだ。カウンセリングの過程でクライアントが何かを発見する時、すでに自己の再創造・再構築の過程になっているということは、多くに人が経験していることだ。

また、吐き出す（カタルシス）形で、カウンセリングが進行することがあるが、それもまた創造の過程だと言っていいことが多い。吐き出すことによって、「気持が解放」されると表現されることがあるが、解放が終わってから創造へと移るという二段階でもない。解放と創造は並行しているとらえた方が、実相に近いだろう。

### 4. 言葉・位置・特性など

カラーセラピーの場合は、クライアントが選んだ色をもとにした、ある種の診断がある。だが、それは最終結論ではない。クライアントが物語を作り出すための契機（きっかけ）・ヒント・手掛かりとしてある。

クライアントが物語創造へと向かう際に、そのヒントをもとに、より豊かな物語作りへと向かうように、カウンセラーの役割を果たす必要がある。その際、カウンセラーが、「診断」をどれだけ豊かなイメージ・言葉で話せるかが重要になる。しかも個々のクライアントに適切な、ということが求められる。

その意味での専門的知識が必要だし、イメージの豊かさ・語彙の豊かさが求められる。それは、専門的厳密さより以上に、クライアントのイメージ・物語を広げ・ふくらませるようなものである。

その点で、達人の山内さんは、豊かなものを持っておられるように思う。

一対一の場合、グループを相手にする場合、いずれにおいても、カウンセラー・コーディネーターとクライアントの位

置・関係などが重要だが、そのことが気づかれていないことが意外に多い。

両者の位置（向き合い、横並び、斜めの位置など）、両者の視線の高さ（たいていは同じ高さなのだが、どちらかがより高く・低くなることもあるが、その使い分け）などに留意したい。

また、どのような小道具を使うかも重要だ。イメージを豊かにするため、作業を分かりやすくするため、だけでなく、カウンセラーとクライアントをつなぐ役割を果たしたり、両者が共有する世界を持ちやすくしたりすることにも役立つ。

会話のテンポ、声の高低・大小も大切だ。わけても「間（ま）」の取り方は絶大な役割を果たす。緊張と弛緩、集中・没頭と息抜き、これらを適切に配置したい。

こうしたことは、クライアント次第であるだけでなく、カウンセラー次第、正確に言うと、両者の関係次第なのだ。その意味では、カウンセラー・コーディネイターは、自分の特性をできるだけ知るように努めたい。

この自己特性も成長変化することを知っておきたい。私自身のことでいうと、年齢とともに、静か、ゆっくりの傾向が強まっている。

このあたりは、経験の蓄積は大きいですが、録音したりして振り返ってみることはかなり有効だ。

また、山内さんのような達人のものを見るのもいいし、スーパーバイズしてもらおうとか、お互いにコメントしあうこともいい。ワークショップの場合、活動を終えた後、私が「いいところ探し」をすることが多いのも、そういう意味なのだ。

## 私のワークショップの変化

2009年9月2日

いくつかの執筆作業を並行して進めている。その一つは、『浅野誠ワークショッププログラム集』だが、今、その第2集「人間関係を育てる」の作業をしている。

ワークショップごとに作成してきたこれまでのレジメを編集加筆しているのだが、作業中に、自分自身のワークショップの持ち方に変化があることに気づくことが結構ある。

たとえば、この第2集のテーマでは、2004～5年ごろに変化がある。それは、子どもだけでなく、大人もふくめて、人間関係のありように変化が進行し、それまでのワークショップでは、対応できないということがある。子ども・若者たちの孤立傾向が強まり、人と人をつなぐ、もっともっと丁寧なワークショップの展開が必要になってきたということだ。

そして、いままた次のバージョンへと向かわなくてはならないという予感もする。

こんな風に、私のワークショップは、参加してくださる皆さんとの出会いのなかで、変化していく。私のワークショップは、参加者との協同作業で生まれてくるから、当然のことだが。そして、その過程で、私自身も変化してきた。

変化時期ときっかけを描いてみよう。

2004～5年 沖縄での新たな出会い

1999～2000年 カナダでの出会いをもとにした、日本での新たな出会い

1995～6年ころ 中京大学での文系学生との出会い 世界のワークショップとの出会い

1990年 中京大学での体育系学生との出会い 愛知出身学生との出会い

1985～6年 子どもの変化 異質協同、集団づくりの新しい展開の模索と並行して

1978年ころ 大学実践がものになりはじめる

1972年 大学実践での模索開始 集団づくりを学ぶ

(1967～71年は空白期間)

1963年 高校生徒会活動 演劇との出会いなど



## ワークショップについてインタビューを受ける

2008年5月4日

今日の午後、『授業づくりネットワーク』の、わざわざ仙台からお見えになった上条さんから、雑誌のインタビューを受ける。

私の30年あまりのワークショップとのつきあいについて、質問を受けながら語った。

ワークショップは実に多様なのだが、インタビューを受けるとあらためて、私とワークショップとのつながりの独自性に気づかされる。私の場合、特定の誰かのワークショップに強い影響を受けて、その考えを広めようとか、その考えを発展させようとか、というのではなく、まったく私独自のやり方の追求しながら、いろいろなワークショップと交流をしつつ深めてきた。そして、長い期間追求し、発信してきたものだから、あらためて質問されることで、私なりのワークショップについての、とくに私なりのワークショップの変化展開について、私なりの自己理解を深めるきっかけとなった。

その他にも、こんなことも話題になった。日本の学校における授業枠組みの硬さ、とくに伝達型の枠組みの硬さをどのように打開していくのか。国際的な「授業・学び・学習の転換」の動きと、日本の流れとのズレをどう理解するのか。多様なワークショップの形、相互間のつながり。参加・体験・発見・創造といった、ワークショップのキーワードをめぐる多様な理解・展開。

このように実に多様なことを語った。どのような記事になるのかが楽しみである。

## 私のものとは随分異なる「ワークショップ型授業」

土作彰『ワークショップ型授業』（学陽書房2005年）を読む

2007年7月27日

小学校の国語・算数・社会・理科を中心に、著者のいう『ワークショップ型授業』の実践例を集めた書籍である。「部首別漢字辞典を作れ」「説明文の構造を見抜こう」「重さ・バッチリ量りましょう」「神飛行機・スピード大会」「室町時代のテストをつくろう」「面白実験コーナーを作ろう」といった具合にである。

「一斉型授業」とは異なるが、「一斉型授業との調和をめざした新しいタイプの授業」ということで、かなりマニュアル的に提出されたものである。これらの授業では、子どもたちは楽しく活動を展開するであろう。そしてその結果、一定の力量を獲得するであろう。だから、読者の小学校教師たちも、これを活用して一定の成果をうるだろう。

ワークショップ、そしてワークショップ型授業も多様であるので、こうしたものもあるだろう。というよりも、多数を占めているといった方がよいのかもしれない。そして、日本の学校現場になじみやすいものであろう。

しかし、私の「ワークショップ型授業」とは大きく異なる。どこが異なるかという点、予め「正解」が用意されたもの、あるいは最終的に教師が「正否判断」をするもの、つまり、教えたことが確定していて、それに向けて、子どもたちが活発に活動していくというスタイルであるという点である。共同作業場面も多様に展開されるが、それは新たなものを創造していくというよりは、既定のものに、いかに速く楽しく到達するか、といった感じなのである。

そういう意味では、「一斉型授業」で教える中味を、体験とかゲームとかグループ活動といった、ワークショップで使われる手法を活用して、おしすすめるものである。だから、まったく新たなものを共同創造していくという形ではないし、教師は、コーディネイター的な要素をもちつつも、最終的正否判定者的な色彩を濃厚にもつ。

といっても、この授業のなかで、子どもたちが新たな共同創造へと赴く可能性は秘めている。その意味で、こうしたタイプの授業を展開するなかで、まさに共同創造的な「ワークショップ型授業」へとつながっていかれることを望みたい。



## ソーシャルスキルのワークショップ

2007年6月14日

ある養護学校からソーシャルスキルのワークショップの要請を受けた。近年養護学校では軽度発達障害の子どもたちに対するソーシャルスキルを育む指導が一つの焦点的課題になっているようだ。

そんなこともあってか、上野一彦・岡田智編著『特別支援教育 [実践] ソーシャルスキル マニュアル』（明治図書2006年）という本が、半年で7刷を重ねるほどである。私も読んでみた。

養護学校で、ソーシャルスキルがとりわけて取り組まれている事情がわかるとともに、この本に掲載されているトレーニングマニュアルは、これまでもみかけてきたものが多い。そしてアメリカ発のものが多い。それにしても、90年代までよくみられたたんなる翻訳紹介ではなく、実際にやるなかで創造改良をしてきたもので、現場実践者には役立つものであろう。それだけにこれほど販売されるのだろう。

さて、ソーシャルスキルについて、アメリカ経由が入ってくるまで、日本で取り組まれてこなかったわけではない。1980年代以前には、生活指導実践のなかで蓄積された「自治のワザ」の指導実績もそうしたものであろう。そして、「民主的交わり」ということがいわれ、その「交わりのワザ」についても、1980年代追究されてきた。私自身も、『障害児の集団づくり』とか『幼児の集団づくり』を考えるなかで、そのことを追究してきた。それらは、具体的には『子どもの発達と生活指導の教育内容論』（明治図書1985年）に集約した。

そして、90年代中頃以降、カナダのグローバル教育研究者と交流するなかで、私自身は「いじめ対処」のワークショッププログラムを公開し、各地の小中学校で実際にやってきた。そして、1999年トロント大学で研究した折に、カナダ・アメリカにおける「ソーシャル・スキル」にかかわるワークショップ・学校現場実践・書物に直接触れてきた。当時は、とくにコンフリクト・レゾリューション（対立解決）に一つの焦点があてられ、すぐれたプログラムがいくつも提起されていた。それには、ピースミーディエイターとか、アンガーマネジメントとか、セルフ・エスティームとかいった多様なテーマのものが含まれている。

そうしたものと、私自身が日本で展開してきたものとをよりあわせながら、その後さらに展開してきた。そうした私の展開にもっとも着目したのが、少年院関係者で、「浅野教授式ワークショップ」という呼び方が各地で行われていることを知ったのは、カナダでの研究から帰ったあとであった。そんなことが縁で、今回の養護学校でのワークショップともなったのである。

そして、それらの成果は、それ以降の何冊かの本に集録されているが、ワークショップの進め方としては『ワークショップガイド』（2006年アクアコーラル企画）にまとめた。そして、その続編というか、個々のワークショッププログラムの展開について紹介する著作の発刊を現在検討中である。

そして、ワークショップの実践展開としては各地でやっているが、もっともまとまった形では、沖縄リハビリテーション福祉学院言語聴覚学科の授業『コミュニケーションと対人援助』という科目での展開がある。昨年のもについては、本欄にも掲載した。

さて、こうしたアメリカを中心とする流れと私自身の流れとは交流はあるもののアプローチの違いは存在する。そんなことをめぐって、今回の養護学校でのワークショップの際のレジメ（第一次案）には、こんな風にした。

---

対人関係 実践のワザとストーリー

- ソーシャルスキルは、つながり（関係性）のなかで育ちます。  
個々のスキルは、つながり（関係性）のなかで生き、生かされます。  
個々のスキルを積み重ねるだけで、ソーシャルスキルが向上するとは限りません。  
個々のスキルを習得する意味はありますが、それをつながり（関係性）のなかで生かし、発展させるようにすることが必要です。つながり（関係性）は実社会で育つが、学校とか、授業・ワークショップのなかでも、そこにつながり（関係性）を育つような物語（ストーリー）が豊かであれば、プラスになります。その方が、子どもに即したソーシャル・スキル成長を得られる可能性があります。とすると、学校でのソーシャルスキル指導も、そうした物語を意識することが大切になります。そして、多様なつながり（関係性）のなかで育てていく必要があります。
- ソーシャルスキルを育てる場合、既定（既成）の行動様式を叩き込めばいい、というものではありません。行為を文脈のなかで生みだしていくことが大切です。その手掛かり・助けとして、個々のスキルがあるのです。スキルにしても、枠・ルールにしても、既成のものをあてはめるといっても、いっしょになって作りだしていくものというイメージももちたいものです。
- それらを学ぶことを手掛かりにして、その場の雰囲気を読みつつ、雰囲気にあわせつつ、自分なりのものを出しことも大切にしつつ、自分で自分の行為を作り出していくことが大切です。その意味では、一つ一つのスキルは、本人が創造していくものともいえます。
- ソーシャルスキルはつながり（関係性）ですから、本人だけでなく、本人とつながり（つながり（関係性））をもつ人々のソーシャルスキル向上（創造）も視野に入れる必要があります。  
近年、大人の側のソーシャルスキル衰退も著しいようです。競争的孤立的「ソーシャルスキル」は達者になっているかもしれませんが、つながり（関係性）を深めていくソーシャルスキルは未熟なまま、という状況が広くみられます。そのことが、子どもたちの障がいを複雑にし、なかにはそのこと自身が「障がい」を生みだしているときさえあるかもしれない例にも出会います。  
ですから、ソーシャルスキルを育てるワークショップなどには、子ども本人だけでなく、親も含めて、多様な方々が参加することは、うまくコーディネートできれば望ましいことです。

#### 対人関係と文化 物語づくり

- 対人関係と色々な文化  
強い個人を軸にする文化 アメリカ型 ソーシャルスキルトレーニングはアメリカで発展しましたが、そこにはアメリカ的な対人関係文化が反映しています。そこからヒントをえて学びつつも、実際の子どものつきあいのなかで、創造していくことを大切にしましょう。  
歩調をあわせることを軸にする文化。一斉型。「個」の喪失  
異質協同を軸にする文化 異なったものが多様につながりながら、協同してものごとをすすめていく文化。多様なつながりを広げ深めつつ、自他を育てていく文化。
- ストーリー（物語）のなかで展開すること  
人生は物語 教室は物語創造の場
- 競争過剰の世界 幼児期から少年期にかけての物語創造が競争にとってかわるような状況 人生創造の大半は物語創造なのに、その流れがとどめられている

## 2) 授業 (大学・専門学校での)

2004年からの第二次沖縄生活のなかでは、沖縄国際大学、琉球大学、沖縄大学、沖縄県立看護大学、沖縄県立芸術大学、沖縄リハビリテーション福祉学院、そして集中講義で中京大学、愛知教育大学で授業を担当してきた。

そのなかの2007年以降について紹介しよう。すべてを紹介するのはページ数が過剰になるので、絞って紹介する。

### 大学をまたがっての記事

授業の紹介は一回ごとの紹介が多いが、大学をまたがって、週に一回ずつ紹介したこともある。そのなかの2014年前期と2013年前期に絞って紹介しよう。

大学による違いと共通性は興味深いものがある。

#### 2014年前期

##### 輪 笑 動 考 話 協 看護大学授業・沖リハ授業

2014年04月10日

火水と最初の授業をした。もう一つの琉球大学授業は、来週最初の授業で、本格的には6月からだ。

火曜日の看護大学の教育学は、毎週2コマで6月初めに終了。水曜日の沖リハ言語聴覚学科の「対人援助とコミュニケーション」は10回で、これまた6月初めに終了。このくらいが、私の体力のリミットだ。

看護大学は、3、4限なので、12時前に行き、食堂で昼食とってからだ。食堂では、3、4年生の昨年までの受講生の顔なじみにたくさん出会い、コンタクする。みんな元気そうだ。心身ともに健康な看護大学生たちだ。皆実習を終えて、顔付きが看護師風になっている。

今年の2年生の受講生は16名。選択科目で、1年の時に必要単位数を満たしたためか、例年より少ない。お互いの距離が近づいて、ワークショップ型授業としては、大変都合がいい。社会人学生がいず、また県内出身者ばかりというのも、今年初めてのことだ。年々看護大学生も変化していく。

沖リハも、2年生が受講生。32名でほぼ例年通り。多様な世代が混じるのも、沖リハの特徴だ。今年は例年より男性が多い印象。適度にまじめで、適度にエンジョイするという感じ。活動へのノリがよいので、例年している物語づくりを、

中高年クライアントとのつきあい、子どもクライアントとのつきあい、同僚関係といった事例で展開する。笑い一杯の楽しいなかにも、深まりが最初から出てきているので、より進化深化した活動を展開することになりそうな気配だ。

双方とも、最初の授業なので、私風の授業への入門という感じで、多様なアイスブレイキング活動をたくさんする。最後の振り返りにでてきた一文字を紹介しよう。

看護大学 探 感 楽 初 笑 考 話 協 向 振 積 驚 知 伝 達

沖リハ 和 輪 笑 動 体 ・ ・ ・ ・

沖リハのミニメモには、今日の活動を図化したすごいものが二つも登場。激しい活動しながらの知的把握にびっくり。

## 人生発見 看護大学授業 ワークショップづくり 沖リハ授業

2014年05月16日

双方ともに中盤あたりを進行中だ。

看護大学で、多様な人生発見の活動を二つ行った。課外でのインタビューを通して受講生が発見したことを並べてみよう。

親世代は私たちに比べて兄弟数が多い。(7~8人の例がいくつも登場)

そして私たちは、3人以上の子供がほしい

みんな睡眠が好き。仕事を始めると、睡眠が減る。

60代から起業願望あり

写真は、人生例を付箋紙に書いて床に並べたところ。受講生の夢を描いたものが多い。傑作が多いので、拡大して読んでみてください。



看護大学同様、沖リハでも、受講生によるワークショップを体験。初体験なので、少々照れながらも、とても明るい雰囲気で行進。自己紹介他者発見ビンゴで、クラスメイトの多様な面をたくさん発見したようだ。

次は、グループを作って、ワークショップづくりに挑む。今回は「なりきろう」が人気で、8グループのうち3グループが挑戦。狙いは環境教育ということではなく、STの仕事など、自分たちの将来に焦点を合わせていくようだ。

どんなプランが登場するか楽しみだ。

写真は、授業最後のまとめ。一人一人が書いたものを、三角形の多層構造にして、ワークショップづくりをうまくまとめた。



## 進路物語 看護大学授業 誘うロールプレイ 沖リハ授業

2014年05月22日

20日看護大学授業の一つは、「進路物語を創る」で、グループで、メンバーの進路物語を「推理・期待」で書いていくものだ。推理が結構当たっていて、びっくりする人が続出

受講生のコメントをいくつか紹介しよう。

- ・みんなが思う自分と、自分が思う自分が似てる！
- ・他の人が持つ自分のイメージが知れてよかった。イメージと一致して驚いた、
- ・人生はつくるものだ！ と思った。
- ・いいところを言われるとはずかしい。人のいいところや期待することはたくさんあった。

21日沖リハ授業は、「リハビリに誘う」「休みをとるように誘う」「旅行に誘う」など、「誘う」のロールプレイをした。たいへん行動的なクラス、笑いが絶えずに進行。さらにすすんで、「誘う」場面での位置の取り方、クライアントの話を引き出すこと、いきづまったやりとりを打開すること、「誘う言葉」の局面に分けて、実演と討論を進める。

対人恐怖の人に、壁を隔てて話しかける。

モノを媒介にしてつながりつつ誘い掛ける

いろいろな立ち位置でかわる

「お茶が飲みたいな」といって局面転換を図る

傑作の連続だ。

次回から、受講生が作成したワークショッププランの実施。オリジナルなものがいいくつか登場してきそうだ。

## クラス全体を仕切るリーダーはいないが、異質協同的に活躍する人ばかり

## このごろの学生

2014年05月29日

沖リハの授業で感じたこと。とびぬけたリーダー的存在の学生がいなくなって、もう何年もなる。かといって、みんな引っ込みがちというわけではなく、出番になると、たいいていの学生が自分なりに活躍する。そして出番になった学生の指示提案に他の学生が積極的に反応して動く。

こんな雰囲気、他の大学でも感じるようになったのは、ここ1年のことだ。一方通行的な授業でどうかは知らないけど、私がするワークショップ型授業では、自分の出番なのに、引いてしまって、うまくまわっていかない、といった例に出会うことが激減した。ひとり一人が楽しそうに動くということが普通になり、動けない学生、動かない学生は減多にない。

ここ20年近く、ストレター型学生が沖縄でも増えてきたと、私は語ってきたが、それが変わり始めている印象だ。単純な受身型の指示待ちタイプではなく、自分なりに考えて動く傾向を増してきた。ワークショップで、全体の前に立つと、以前は多かった固まるケースが激減している。

そして、28日の沖リハで、受講生が作るワークショップをしたが、私が書いたテキストをもとにしつつも、自分たちなりに創造的にアレンジするのが、とてもうまい。

- ・受講生から大切にしているものを10種出させ、そのなかから、10年後に不要になりそうなものを選び、同じも



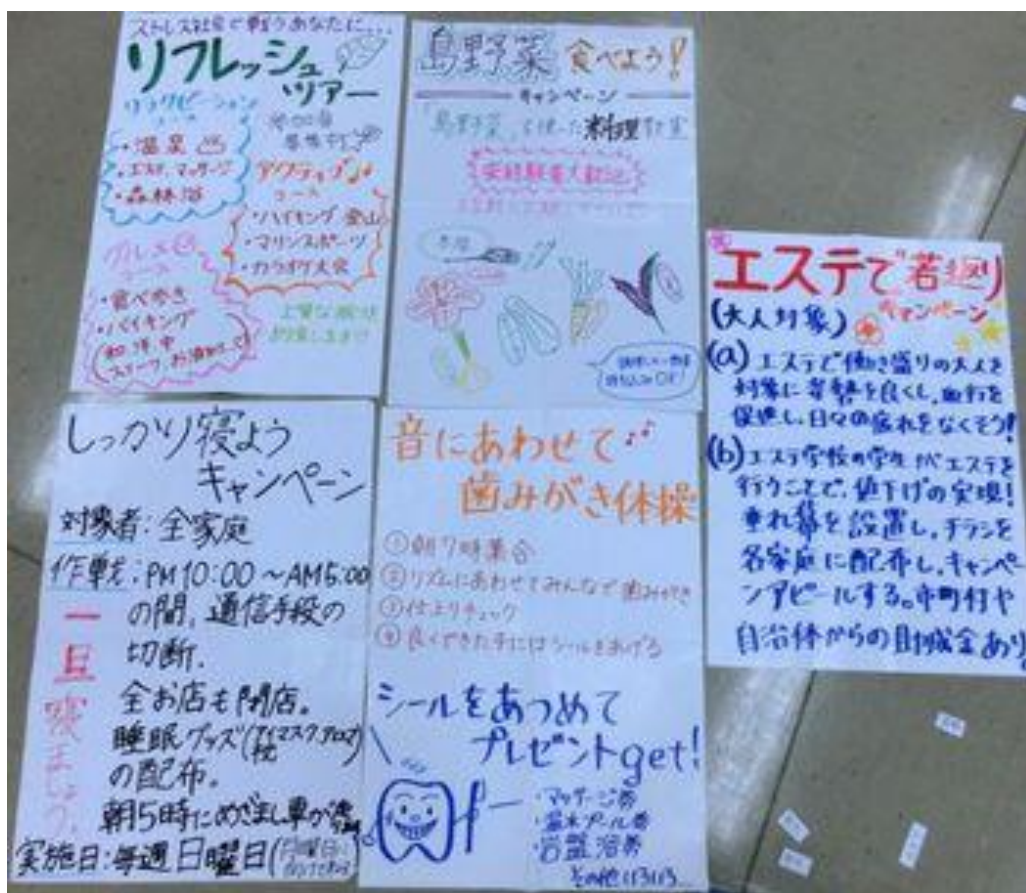
のを選んだものがグループを作って、不要になる理由を語らせる。

- ・クラスのなかに「将来計画として、こんなふうになりそうな人」13項目にあてはまる人を探す取り組み。
- ・自分たちが使っている道具になりきって、物語を創り、そのことを通して、道具の大切さを考える。
- ・「何も食べるものがない極限状態になり、うんこ味のカレーとカレー味のうんこ、の2種類しかない時、どちらを選んで食べますか」というディベート。

びっくりするようなアイデアが続出だが、明るく楽しく、充実したワークショップが続く。

新しい世代の登場かな、と感じる。年齢差が50歳近い私には、文化的に應對に困ることもしばしばだが、私なりに感じ考えていきたいと思う。そのなかで、新しい発見・協同を育んでいきたい。

今回は、詳しく書かないが、看護大学の受講生たちにも同じような傾向が見られる。写真は、その看護大学授業で、「健康キャンペーン」企画を作成したが、出来上がったポスターだ。毎年やっているが、毎年ユニークなものが続々と登場してくる。



## 国際援助企画を考える オリジナルなワークショップをする

### 看護大学・沖リハ授業

2014年06月06日

二つとも、大詰め授業だ。

看護大学では、看護師・保健師・医師・赤十字関係者・NGO団体職員・教員などになって、世界各地に出かけて展開する国際援助企画のプレゼンと検討討論をした。

中央アフリカでのHIV対処・識字、南相馬での病院再建、カブールでの麻薬対策、東南アジアでの麻薬対策・就学援

助などの企画が出てきた。課外時間にグループで調べてきたことをベースにするが、今は、スマホですぐに調べられるので、質問への対応で活用される点が、ここ2、3年の激変だ。

「病院再建よりも、訪問看護のほうが現実的ではないか」

「麻薬対処するとき、マフィアにはどうするのか」

「識字といっても、収入を得るという現実問題にどう対処するのか」

など、討論もえんえんと続く。この企画作成・プレゼン・討論は毎年しているが、今年は異常に盛り上がる。

沖リハでは、先週に続いて、各グループが作ったワークショップを実施。

「しりとりボディランゲッジ式なりきろう」「親を説得するロールプレイ」「新々バージョンなりきろう（説明を書くのが難しい）」「いいところ探し」と続く。

盛り上がりで時間超過なので、「各グループの企画はどういう場面で、どのようにアレンジして実施できるか」について書いたものをもとに、次週討論することにした。

今年の両クラスは、大変明るく行動的。何をしても、すぐに笑いの渦につつまれつつも、「やることはやる」という行動派受講生たちだ。しかも、粒よりの学生たちだ。「目立たないようにして、誰かについていけばいい」というタイプが激減してきたのは、今回の特例なのか、近年の傾向なのか。近年の医療系学生には、しっかりした学生が増えてきているという印象をもつ。

## 看護大学 沖リハ授業終わる

2014年06月12日

10日に看護大学2年生「教育学」、11日に沖リハ2年「実践教育学」の授業が終わる。いずれも、最後のレポートを楽しく読ませていただいた。

看護大学では、「人見知り」「みんなの前で発言経験が少ないので、緊張」状態が、この授業をとおして、「みんなの前で発言する」ことができたという文がいくつもあったのが目をひいた。「パス歓迎」という私の進め方で「ほっ」と書く学生もいた。私には、それほど緊張しているとは感じなかったが。

高校までも含めて、授業でこうした経験をほとんど持たないで大学2年生になったためだと思う。発言する環境が豊かであれば、内気な人でも発言することを、この授業が証明しているように思う。どんなに少ない人でも、10回以上は発言しているだろう。20~30回が多く、中には50回以上の人もいそうだ。

もう一つ、「看護師になりたいと思ったのは、実は小学生のころだった」など、進路選択について書いたものが多かったのが特徴だろう。看護大学の特性だろう。それにしても、自分なりに進路創造に向き合ってきたことの結果だろう。なかには、当初は医師志望だったが、看護師の方が、より人間に寄り添った仕事だと発見して、この道を選んだという学生もいた。何年前か前に、医師希望だったが、受験に失敗して看護師の道にしたという学生に出会ったこともある。その学生も、新たな選択を前向きに受け止めていた。

なかには、30代までは看護師、それ以降保健師、50歳ぐらいから養護教諭と、取得できる資格を目いっぱい生かした人生計画を立てる学生もいた。助産師の仕事をしたいと書く学生も、当然いる。

沖リハ言語聴覚学科のいいところは、毎年感じるのだが、40代、30代、20代、10代と世代をまたがって受講していることだ。しかも、世代間ギャップを気づかせないほど、多様な世代の協同的雰囲気を出している。

私がいうストレター秩序ではない生き方をしてくて、そのことがとてもいいことだと自負している受講生もいる。人生計画を豊かに創造しながら、学んでいる人がたくさんいるのが、大いなる特徴だ。

国家試験に向けて、大変厳しい学習を積み重ねなくてはならず、ともすると、深刻な雰囲気にも包まれやすいが、今年のクラスは、明るいトーンで協力的に、それを突破している点が注目される。

グループに分かれて、8つの新ワークショップを創り実施したが、ユニーク性にあふれているのが、今年の特徴でもあった。私の想像を超えた企画も登場した。全体として、コミカルささえ含んで明るく展開したが、「マジな」展開もできそうな雰囲気である。

最後のまとめのレポートに、言語聴覚士の現場で、患者との関わりの中で、この授業の経験を活かしたいというレポートが続出したのも今年の特徴だろう。

いずれの受講生たちも、立派な医療従事者、そして人生創造者になることが期待できそうだ。

## 2013 年前期

### 最初の出会いでクラスの個性は様々。90分授業を終えた後の個性も様々

2013年04月14日

授業スタート。火曜日は沖縄リハビリテーション福祉学院、木曜日は沖縄県立看護大学、金曜日は沖縄大学。琉球大学は、14日にオリエンテーション的授業をして、6月から土曜日に固めて授業。

今年は前期ばかりに固まってしまった。後期は1科目だけで楽なのだが。前期の1~2を後期に回す作戦は失敗。

それにしても、大学・学校による学生の個性の違いだけでなく、同じ学校でも、学年によって全く異なる個性を示す。と同時に、授業最初に出会った顔と、一回目の授業を終えた後では、全く異なる。この変化が興味深い。そのあたりを物語風に綴ろう。

沖縄リハビリテーション学科2年生『対人援助とコミュニケーション』

最初の印象は、穏やかな真面目クラス。若い印象。毎年、社会人学生が三分の一以上を占め、30代40代の学生が多いのだが、今年は少なそう。(終わってから、実は30代40代もそれなりにおられたことを知る。若々しく見えるのだろう)。ワークショップをすすめていくと、着実かつテキパキと進む。照れながらも、自分なりのものを出して行かれる。盛り上がってきて、「夢」を語るワークショップは時間切れで、半分は次回まわし。

この雰囲気のパースが積み上がると、深みのある盛り上がり期待できそう。

沖縄県立看護大学2年生『教育学』

授業前にクラスの雰囲気を尋ねると、「平和」という応えが返ってきた。なるほどそう。平和な雰囲気が漂う。平和に楽しく進行。ごたごたなく確実に進む。ありがちな白々さは微塵もなく、仲良い印象。ミニレポートをいくつか紹介しよう。

「自分と同じ意見の人がいると嬉しいし、違う意見を聞くのも楽しい」

「相手の人生だけでなく自分の人生についても考えることができた」

沖縄大学子ども学科1年「教職論」

ピカピカの1年生だが、今までに見たことがないほどとびきりの元気の良さ。体育会系のノリだが、とにもかくにも明るい。もうすでに人間関係が一杯できている。動きがとてもいいが、ずっこけもなかなかうまい。

「人それぞれの関心が違う所やみんなと近づくことができた。物語の展開も思ってもみなかったことになり、新たな楽しみがあった」

「みんなのいろんな顔が見れて、今までよりも皆のことが知れた」

琉球大学 多様な学部学年 「特別活動の研究」

クラス定員60名を超過する受講希望者が殺到。変わりじゃんけんで絞る。漏れた人は後期に願う。最初は静かに秘められた雰囲気でスタートしたが、途中からハプニング爆笑の連続でクラス雰囲気が激変。



じゃんけん列車で作った大きな一つの輪での、握った手を通してのコミュニケーション。その後、私が「いち、に、さん、し=よん、いち、に・・・」と番号をかけて下さいという。そして、「同じ番号の人で集まって下さい」と指示。ところが、4のグループだけがたくさん集まる。実は「し」の次に「よん」と番号をかけた人が何人もいたためだと判明。

このハプニングが爆笑を生み、クラス雰囲気を変える。私は、「し」を「よん」といいかえただけのつもりだったが、それを忠実に再現した人がいたのだ。

どのクラスでも新鮮なあいさつ、物語づくりをしたが、しばしば興奮状態に至る。隣の人からのあいさつがまだ来ないのに、先にあいさつを送ってしまう人も登場。自分が一生懸命考えたあいさつを早く送りたいのかもしれない。恋愛物語、失敗する専門家物語など、喜劇的ドラマのオンパレードだ。失敗話の泥沼にはまった所では、「もう少しうまくいく物語を作ろう」ということで再スタートしたこともあった。ともかく、バラエティ番組ムードで進んでいく。毎年、上手くいかないで「パス」がたくさん出てくるが、今年はいずれのクラスもパスなし。どうなっているのだろうか。いずれのクラスもスタート地点で、これだけの創造=想像性が出てくれば、今後がすごく楽しみだ。

かくして、とても楽しい授業が同時スタートした。これからどんな物語ができていくのか楽しさでわくわくするが、私の体力が問題。でも、若い元気をもらえば、なんとかついていけるだろう。

## 穏やかな看護大学「教育学」とエネルギー溢れ過ぎる沖縄大学「教職論」

2013年04月21日

2週目授業。第一回目で見せたクラス個性の芽が、全体のトーンとしてはっきりと形をなす。

「教育学」と「教職論」という科目の違いというよりも、数十人の受講生たちが作り出す対照的な違いだ。

看護大学「教育学」は、ほとんどが2年生で、ほんの少しの3年生。ともかくやさしく穏やかな人間関係。ほとんどが相互に顔なじみということもある。やさしい相互関係がゆったりとしてはいるが、何かをつくりだしつつある雰囲気醸し出す。

対照的な沖縄子ども学科の一年生たち。ほんの少しいる上学年が「今年的一年生はすごい勢いだ」と語るほど。一つの理由がわかった。この授業は4限なのだが、その前の3限は体育で、前回は30人単位の「大縄跳び」で、10回連続が成功するまでがんばったそうだ。その勢いが4限にも続く。だれかの発表後の拍手など、尋常ではない勢いだ。となりの教室の先生がびっくりして、顔を出されたほどだ。

エネルギーを静かに出す作戦をひねりださなくてはならない。それにしても、「子ども学科」入学生は、子どもが好きで、行動力に自信を持つ学生が例年以上に集まったようだ。

このような元気溢れるクラスは、以前にも出会ったことがあるが、最近では少なくなった。そして、以前では、そうしたクラスを引っ張って行くリーダー的な存在の何人かが重要な役割を果たした。と同時にそうした流れに乗り切れないタイプの何人かがいるので、特別な配慮が必要になることが多かった。

今回の場合、今後どうなるか予測しがたいが、以前に出会ったのとは少々異なり、リーダータイプが少数に限らないし、彼らの強力な引っ張りに、皆がついていく、というのでもない。ほとんどの受講生の勢いがハモって、エネルギー溢れる状態を作っているようだ。一番静かに見える学生と話しても、かれは、この雰囲気にハモっていた。



今回の授業では、4年たった卒業後、「どんな教師になっているか」という予想(願望)の姿をリレーお絵かきで描いてもらったが、その2例を紹介しておこう。

エネルギー溢れるとあって、繊細さに欠けるのではない。一例をあげよう。授業終了時点で提出する「ミニメモ」用紙を落とした学生がいて、それを拾った学生が、わざわざメールしてきて、次回授業で渡すと連絡してきた。

このように、メールを私に寄せてくる学生が、今期激増しているのが、新特徴でもある。沖縄大学のクラスだけに限らない。携帯メールやソーシャルサービスに慣れてきて、生活習慣になってきたことの反映かもしれない。

以前なら、受講生間で情報交換するという形が普通だったことでも、直接、私にメールで尋ねてくる例もある。学生間の情報交換が激減しているように感じる。と同時に、高校までの体験で、テグーにやることを恐れ、細かいことまでこだわらなくてはならない体質を身につけているようにも思われる。

学生の様子は毎年変わるし、大学・学校・クラスによって大きく異なる。だから、対応を変える工夫が必要だ。対応の仕方を確立し、それに慣れるまでに少々時間が必要だ、その点でも、新学期の私は疲れやすくなる。

## 受講生たちがワークショップをコーディネートする

沖リハ 看護大学 沖縄大学

2013年06月03日

3つの学校の前期の授業が後半になってきた。例年、受講生によるワークショップをすすめる。最初は、私が作成したテキストのプログラムを、受講生がコーディネーターになって進めることから始める。そして、受講生たち自身が作ったプログラムでのワークショップへと移って行く。

授業進度が早い沖リハ言語聴覚学科の授業では、受講生が作った5つのプログラムでのワークショップが始まっている。今年の出来栄ははじめて、現在使用している「浅野誠ワークショップシリーズ№6」が在庫切れになりそうな2015年に作成予定の№7に掲載しようか、と思うものが続出。

### ☆ いつだれゲーム

各グループが何枚も書いた「いつ」「だれが」「どこで」「なにを(だれを)」「どうした」カードから、各々1枚ずつ引き抜いたカードをもとに、さらに4つのテーマから一つを選んで、「物語」をつくる、というもの。

創造力想像力を豊かに発揮しようというのだ。

☆ 将来計画

一人一人が「小さいころの夢」→「これからどうなりたいのか」→「そのためには、どうしていったらよいか」の順に、書いて貼り出していく。それを元にプレゼン

☆ 容疑者Xの印象 [俺、あの時、お前のこと]

受講生人数文の紙に、一枚につき一人の名前を書いておく。ランダムに紙を配り、書かれた名前の人について、「第一印象」を書く。紙を回し、「現在の印象」を書く。さらに紙を回し「良い所」を書く。書き上げた紙を読も上げ、その人をあてる。

☆ お題当てゲーム (次回授業)

☆ パン屋オープン (次回授業)

看護大学では、テキストにしている「浅野誠ワークショップシリーズ№5人生創造」のなかの「№3 こんな人探そう 人生創造模索者」に基づいて、受講生向けにアレンジしてワークショップ。第一回目なので、私の方では、20分ぐらいを予定していたが、担当グループは、90分の密案を作成し、オリジナルのプリントも作成配布して、大奮闘。想定外というか、想定以上の立派なワークショップが進行。

沖縄大学子ども1年生の授業でも、第一回受講生ワークショップ。元気溢れ過ぎの60人近くの出席者を相手に大奮闘。テキスト№6の「№4 グチの聞き合い」を見事に進行。元気溢れ過ぎる受講生のコントロールにコーディネーターが奮起する場面も登場。

いずれも、「やる気」溢れるコーディネーター役が、創造性溢れる進行で、受講生たちは大満足だった。例年、緊張のあまり、立ちすくむことさえあるコーディネーター役が多いが、今年は、ぐんぐんやりぬいていく。

例年と何かが違うという感じだが、それが何なのか、現在解明中。コーディネーターグループのなかにいる社会人入学などで年長になっている学生が重要な役割を果たしていることは確かだが、それ以上に何かがありそうだ。また続報したい。



## 沖縄大学 全員が独自に創造的発言

### 琉球大学 グループ企画による多彩な特活

2013年07月17日

12日の沖縄大学「教職論」授業では、このところあちこちでしている、「沖縄教育は先進国型？ 発展途上国型？ 沖縄独自型」の討論をした。盛り上がってきたので、授業後半に予定していた別のワークショップをカットして、展開した。

当日の出席者57人全員が発言した。2回発言した学生もいた。間をおかずに次から次へと発言が出てくる。

こうした討論の場合に多い「前に発言した〇〇さんと同じです」というものは全くなしに、一人一人の発言内容が異なり、独創的なものが続いた。だから、私も聞いたことがないようなユニークな視点・話題を提起するものもあった。

緊張で発言を詰まらせるものが出るほど、しっかりとした内容だった。しかも、1年生の新生生がほとんどだと言う点にも驚かせられる。

この発言をきっかけにしてさらに内容を深め、視野を広げていくことを、おおいに期待したい。

終わった後、受講生の感想を聴くと、「こんな経験は初めてで、すごく緊張したけど、楽しかった」。「グループ討論は高校までにもあったが、大勢での全体討論というのは初体験だ。こんな授業がもっとあってほしい」などと出てきた。

このクラスは元気がいいのだが、自分の考えの発言という知的方面でも、「やる気」を見せ始めていると感じた。

13日の琉球大学での「特別活動の研究」では、6グループが自分たちで作成した企画を提示し、受講生を生徒に見立てて、実演した。

企画を並べてみよう。

自分たちの職場体験で得た技術を他の生徒に体験させる（魚市場でのセリ体験）

高校生の悩みを募集し、その解決法を皆で考える

つながりをつくる（二人組のフルーツバスケットなど）

職業当てクイズ

30秒CMをつくる

育ててきた鶏を食べるか食べないか討論

実に多様で興味深い。



# 琉球大学「特別活動の研究」

2012年後期から前期後期とも担当しているが、ここでは、2014年の後期、前期、2012年後期を紹介しよう。

## 2014年後期

### 第一回目

2014年10月11日

10日第一回目の授業。受講生相互は初対面がほとんどだが、一時間もするとなごやかで楽しい雰囲気が生まれてきた。緊張しているようではあるが、打ち解けてきて暖かい雰囲気もでてきた。

頂点は、最後の「こんな特別活動したい」をテーマにしたリレーお絵かき。いくつか写真を紹介しよう。

右写真は、絵を描く活動のつもりだったが、リレーで描いていくうちに陸上競技になってしまったとのこと。



最後に提出されたミニメモからいくつかを紹介しよう

- 活動をしていくうちに、だんだんと話ができるようになってきたし、自己紹介をした人は覚えていることができたので、効果的だと思った。それに加えて、名前を覚えている、その名前と呼ぶってことは距離も縮まるし大切なことだと改めて感じた。





- ・ 先生がぶっとんでた。こーゆー授業、大好きです。
- ・ 人をほめると、ほめた人も、ほめられた人も、いい気分になるのでいいなと思った。特活の授業は、これといった授業形態がなく自由な発想でできるものだと思います。
- ・ 徐々に他学科の人と交流してとても緊張した。人見知りを克服したい。ほめるゲームは、ほめる方もほめられる方も恥ずかしいけれど、嫌な気持ちにならなかった。
- ・ 普段は人見知りだけど、授業だと思えば頑張れた。何気ない活動に、すごい力があるのかもしれないと思った。
- ・ 知らない人がたくさんいて、うまく話せるか不安だったけど、テンションで乗り切れた。質問！ 今日実際やったワークは先生オリジナルですか？ （浅野回答・・・80%オリジナルです）

- ・ 人をほめたり、初めての人に数分話しかけ続けることは、相手に興味をもたないとできないことだし、「他者に関心をもつ」ということを楽しく感じました。
- ・ 今日の授業で、意外と半分ぐらいの人と話せたので、この授業システムに感心しました。

## 開講当初の学生たち

2014年10月18日

2回目の授業終わる。一回2コマだから、四分の一終わったことになる。

ここまでの授業のねらいの中心は、次のようなものだ。

受講生がもっている従来の「特別活動」イメージを大きく変更拡大すること。

学生たちの自主的な創造／想像的営み・姿勢を促進・確立すること。

この後の授業展開に不可欠な学生相互の人間関係をうんと広げ深めること。

共同創造の楽しさ・深さを受講生が実感すること。

2回の授業がこれまで受けてきた授業、とくにレクチャ中心で教員の話聞いて記憶するというタイプのものとは全く異なるので、学生たちの反応には、

驚き 緊張 楽しい 身体も頭も使う

自分の考え・意思をしっかりとたなくてはならない

いろいろな人が一杯いるという発見

などが出てくる

ミニメモからいくつか紹介しよう。

- ・ 皆の前で自分の意見を発表したり、質問するのは緊張したけど、討論の場で様々な意見を聴けてよかった。
- ・ 皆が自分をどう思っているか知ることができた。

- ・その物になりきって、話を作るのはとても面白かった
- ・最後のワークでは、他の人が私に代わって好きなものとか好きな色とか書いてくれていたけど、内容がけっこうな確率で当たっていたから、当たりすぎて逆に怖かったです（笑い）。
- ・相手を否定しない言い方を意識せねばならんと思いました。
- ・「生徒が学校に合っていない」のではなく、「学校が生徒に合っていない」という考え方に驚いた。確かに「落ちこぼれた生徒」を学校側はもっとフォローできるんじゃないかと思った。

私も、授業の中で、休憩時間に、終了後に、学生とユンタクし、いろいろな出会いをして楽しんでいる。これまでの授業では実業高校出身者がかなり活躍してきた、と話したら、早速、複数の工業高校出身者が話しかけてきた。

受講生の親たちは、私の30年ほど前の受講生の世代にあたるが、そのころの受講生とつながる学生が結構多い。それが、ユンタクの話題になる。

「私のお父さん、お母さんは琉球大学の○○学科卒業で今▽▽しているの。」「じゃあ、□□さんのことわかるはずだから、聞いてみて」「□□さんのことは、お父さんとの話ででてくるからわかります」

「私も南城市に住んでいたんです。お父さんの職場が南城市にあったから」「それなら\*\*さんのことわかるでしょ。私の友達だから」

「どこ出身なの?」「北海道の名寄出身です」「名寄で講演したことがある」「先生、本当にいろんなところについているんですね」

といった具合に話が広がる。

この後、どんな物語が作られていこうか。楽しみだ。

## 特活のイメチェン

2014年10月26日

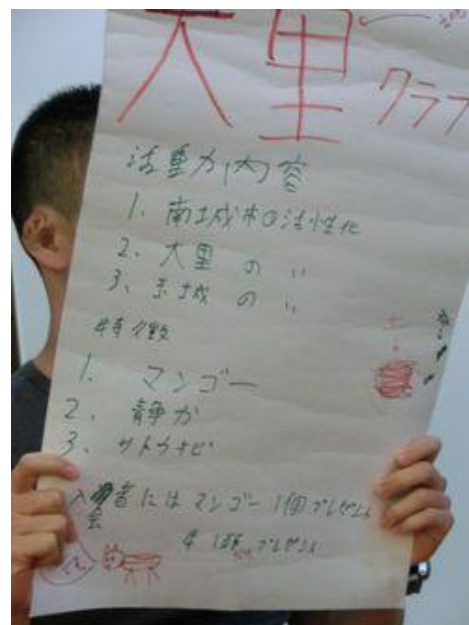
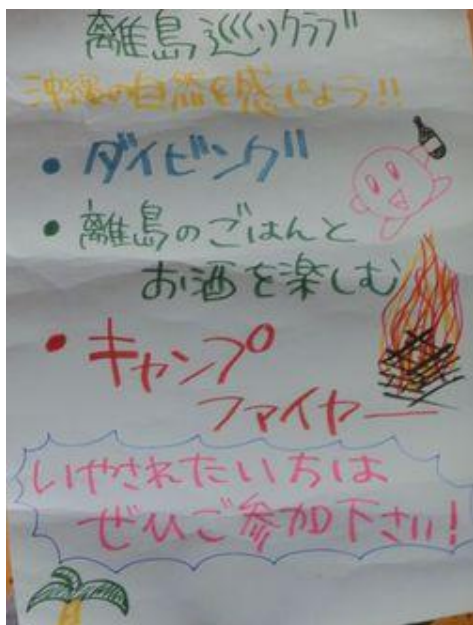
一回2コマずつの3回目となり、クラスの半数以上は、相互に親しくなっている。授業外で出会った同士で会話すること

も多くなったとのことだ。

今回も4つの活動をした。その一つは、「部サークルなどの組織を作ろう」だが、多様なものが生まれた。写真はそのうちの、「離島巡りクラブ」と「大里クラブ」だ。

「沖縄の教育は、先進国型か途上国型か沖縄独自型か」討論では、一番少ない人数だった「先進国型」がどんどん発言し驚かせた。

地域の物語づくりは、世界の10いくつかの中学校





の生徒になって発表。集団表現は、「青春」をタイトルにして、「部活」「恋」などを詩歌とパフォーマンスで表現

前期の受講生の一人が、「双子の弟」だといって、授業参加し大活躍。私も最初は、「双子の弟」と信じていた。このクラスには、昨年の受講生の弟が実際にいて、これまた活躍。

感激したのは、受講生の兄で教員をしている人から、このクラスでテキストにしているワークショップシリーズを取得したいとの依頼があったこと。うれしい話だ。学校現場でのワークショップの必要性が認められるようになってきたのだろう。

次回から、受講生自身が作る企画へと移行を始める。

提出されたレポートのいくつかの一部を紹介しよう。

・ 二回の特別活動に関する講義を終えて、私の中での「特別活動」というものがよくわからないものになってきた。私が今まで受けてきた「特別活動」はなんだったのだろうか、という疑問がわいてくる。先生が今日の講義の最後の方でもおっしゃっていたように、進学校といわれる高校や中学校だと受験勉強や、話し合いにあてられがちというのは、はっとさせられた。特別活動を「受ける」ということから、少し違っていたのかもしれない。今まで「主体的に活動する」といった特別活動をした記憶はほとんどない。この二回を振り返るとそこが大きく違っていた部分だと感じる。学生が主体的に動き、初めて会う仲間と何かを創り出す活動をする特別活動は私にとって初めての経験だ。

・ 特別活動は今まで、[とにかく遊ぶ]というイメージが強かった。実際、特別活動をあまり体験してこなかったため、勝手にそんなイメージが根付いていました。しかしこの授業を受け始めてから考え方が少し変化しました。確かに楽しくするのがメインではあるが、遊ぶのではなく、何かの目的をもってそれぞれの活動を行っていると感じることができた。例えば、相手を褒める活動の時は、現在の子どもたちは褒めることも褒められることも慣れていないのが現状であり、それによって不登校だとかいじめだとかに繋がることが多い。そのため、相手を褒める活動を行ったときは非常に困惑し難しかった。自分の代でこのようなことが起こっているということは、今の子どもたちの代は本当に褒められるということが少ないのではないかと思った。ほかにも、10年後の沖縄についての話し合い活動でも、自分の明確なビジョンを持つことが現段階で足りていないと実感した、子どもたちならなおさらビジョンを持たないはずであるから、もっと簡単な議題からビジョンを持たせることが大切なのではないかと思った。

以上のことから私は楽しむことは忘れず、でも何か目的をもって活動をする、そんなイメージを[特別活動]に持ちました。

・ 大学に入学して以来、失敗を恐れることが非常に多くなってしまっているような気がします。この授業では自分たちで動き始めなければ活動を行うことができないため、自主的な活動をする機会が増えます。今後自分から何か行動をしていくきっかけになりました。大学はほとんど同じ学部・学科の人としか触れ合う機会がないため、人間関係が狭くなっているように感じました。でも、この授業で話す人が増えたことにより琉大キャンパス内で見かけたら軽くあいさつを交わすような人もでき始めました。

この授業のおかげで、色々とか何かをしたり、何かを始めるきっかけになっているように思います。今後ともこの授業で何かを得ていきたいと思います。

・ 2つ目に、臨機応変に対応する力も大切であるのではないかと思った。これは1つ目ほどではないけれど、授業の随所で必要であると感じさせられる力である。私は第1回目の講義は介護等体験により欠席していたため受講できなかったが、ブログからその様子を知ってとても楽しそうだと感じるとともに難しいことだと思った。リレーお絵描きという活動をしていたようで、グループで順番に絵を描いていくという活動だった。そこでは前に描いた人の思いや考えを汲み取ろうという気持ちが大切であるし、それに沿って臨機応変に自分の描く絵を考え、、、と普段はつげがたい力を簡単な活動のなかに組み込んでいることに気がついた。それ以外にも討論の時間には自分が予想だにしない発言と戦うことが必要とされていたのである。



## 受講生企画創造へスタート

2014年11月08日

7日は、第4回目の授業。これまで私が中心に進めてきたが、今回からは受講生中心へと転換する。

受講生全員から出された企画アイデアをもとに、8グループを作った。（写真は、グループ討論風景）

31人32脚

日常生活に心理学を見つける

クラス全員の写真を組み合わせてデザインする

いろいろな難題に取り組みながらゴールに着く

.....

琉球大学でのこの授業は5回目になるが、受講生企画にはダブルものが少なく、ユニークな創造的企画のオンパレードだ。6回目授業からのプレゼンが楽しみだ。

全体運営を担当する6人の仕切り役も決まり、期待するところ大だ。

特別メニューレポートは、毎回のミニレポートで書ききれなかったことなど、受講生が自分でテーマを作って提出するものだが、毎回興味深いものが出てくる。いくつか紹介しよう。

「サークル・部・会・NPOなどの組織を新たに作る」の取組は私が一番やりたいものだったので嬉しかったです。昨年、友人がこの講義でこの取組をして「音楽に興味さがさらに湧いた。「同じ趣味をもった友人ができた。」とのことを聞き、私もこの取組をやりたいと思っていました。私は「女子力養成サークル」に入りました。みんなで活動内容を考えたり、話し合ったりしていくうちに本当にこのサークルができそうな感じがしました。特徴、ウリを考えるのは難しかったです。自分だったらどんなことがあったら入会したくなるか、などを考えました。普段はあまり良いアイデアが浮かばず黙っていることが多かったのですが、この日はいろいろ浮かびいつの間にか発言をしていました。この変化には自分でも驚きました。

「こころとからだをひらく文化表現」の取組は正直戸惑いました。私のグループでは「甲子園」を小テーマにしました。そこから詩を作るのが難しかったです。急いで作りすぎて内容が少し不自然なものになってしまいました。しかし、そこからリズムをつける時「ラップ」という意見がでて、詩を上手くラップに乗せてやってみました。そこで、動きも入れることになり「甲子園」にちなんで円陣を組み、サイレンの真似をし、そこからラップに入るという流れになりました。すると詩の内容の違和感も消え面白い作品になりました。他のグループも夕日の真似をしてみたり、また、隣のグループとコラボしたりと面白い工夫が沢山ありました。

「学校を変える 学級を変える」を読んで

この本を読んで、「学校の常識」をただ受け入れるだけではなく、「学校の常識」を疑うことも大事だと思いました。教師が生徒に指示を与えるということが「学校の常識」としてあると思います。しかし、教師が指示を与え続けるだけでは、生徒は指示待ち人間になってしまい、管理されているかようになってしまおうとわかりました。本の中で、管理主義が強まり、「好きなもの同士」という班編成の考え方すらない、という文が



ありました。

今まで自分が過ごしてきた学生生活の中で、自由に班を編成することができたことはあんまりなかったと思います。自分たちには決める権限がなく、先生が出した条件に沿って班を作っていました。班編成するにあたって、「好きなもの同士」という編成の仕方はもとより頭に存在していなかったということです。これは、教師が権力的性格を持つために起っていたことだとわかりました。

授業の際、浅野先生は「自分は指示を出さないから、自分たちでやりなさい。」とか、「挙手しないで、意見のある人はその場で起立して、意見を言いなさい。」とか、これまでの授業では経験したことのない、生徒が主体になるやり方をして、はじめはとても驚きました。これは学校の常識にとらわれた考えから見ると、これまで経験したことのないやり方であるために驚いてしまったのですが、教師の持っている権力的性格を少なくするやり方として、とても有効なのだと思います。

### 【教師になったらやりたい特活】

① 私が教師になったらやりたい特活は、「特別活動に関する研究」で行った“No5 やる気を出させる言葉がか大会（「ほめる」大会）”です。授業で実際に行き、誰かを「ほめる」、誰かに「ほめられる」ということはとても大切だな、と思いました。実際にレクレーションに参加していて照れる活動ではありましたが、それと同時に誰かを「ほめる」、誰かに「ほめられる」ということはとても素敵なことだと思います。誰かをほめるということは、その人の良い所を知っていないとできないことで、誰かにほめられるということは、自分自身が周囲に認められている、自分の居場所がここにあると思うことができるということだと思います。このレクレーションを行うことで周囲との良い関係をつくることができると思います。

② 私が教師になったらやりたい特活は「特別活動に関する研究」で行ったNo28“なりきろう”です。このレクレーションを行いたいと思った理由は、授業で実際に行き、とても楽しかったからです。実際に授業で行っている際に私になりきったものは「美しい昆虫」でした。このお題でストーリーを考える時、イメージが全くつかなくて苦労したのですが、その苦労よりも他の人が出題されたお題になりきって考えたストーリーを聞くことの面白さの方が勝りました。発想力ある人のストーリーは上手くできて面白かったですし、同じお題を出題された人でも、その人の個性によってストーリーの内容は全く異なっていて、それがまた面白かったです。このレクレーションは楽しいだけでなく、生徒たちの発想力を磨くことができると思います。

## 発見驚きから創造へ

2014年11月15日

8つのグループ企画の創造作業が本格化し、次週からはプレゼンが始まる。

その過程で出てきたミニメモや小レポートは、これまでの発見驚きバージョンから、深みと創造バージョンへと移ってきている。いくつか紹介しよう。

- ・いままで特活の授業を“受ける側”でしたが、今回“考える側”の立場になってみて、思ったよりも難しくて深くて、すごく考えさせられました。
- ・特活の授業は、生徒の成長を促したり、クラスの間人間関係をよくしたりするというねらいがあるもので、どのように生徒を参加させるか創意工夫が必要だなとわかった。
- ・グループワークなどで、前までは黙り込むことが多かったけど、割と積極的に話し合いに参加するようになりました。実際参加するようになったら、これはこれで楽しい！ いろんな意見を得たうえで、自分の考えを整理することができるの

で、自分の考えを言葉で表現するのは、大切なことなのだと痛感しました。

・教師は生徒に「こうさせたい」と思っている、直接それを言わずに、別の言葉を使ってそうさせているということが分かりました。

・相手の意見に対してすぐに批判的にならず、一度考えてから受け入れるべきところを探することができるようになりました。

・はっきりと自分の意見を伝えることができるようになってきていると感じます。他の意見から話を膨らませて視点を広げるなどのきっかけをつくれたらいいと思います。

・子どもたちの成長ということを念頭にそのことについて考えたり、方法論のアイデアを考えることが自分自身も楽しめるようになった。一緒に楽しんだり成長していきたい。

・私は、浅野誠先生の講義で自分ではこれまで想像していなかったような特別活動に出会った。私の中にあった特別活動は言い難いけれど、何か閉鎖的な活動であったのに対して、浅野誠先生の講義から得た特別活動のイメージ・アイデア・ワザはどれも開放的で広がりを持つようなものであった。

これまでのどの活動にも共通して言えることは1対集団の活動はほとんどなく、集団対集団の誰もが参加できるものであったことである。またもう一つの共通点は、学生同士が言葉を紡ぎ、それをつなぐことで授業を成立させていることである。これもまた、浅野先生のやり方なのだと思うと、計算高いと思うとともに是非参考にしたいやり方だとも感じた。自分がこれまで持っていた特別活動のイメージは、教師の指示のもと、生徒が従って動くというもので、しかも教師の思い通りにならなければ、教師の理想に近づげるための助言をする、というものであった。だけれども、そのような活動ではやはり課題解決力、臨機応変力、議論する力などがつかないのではないか。一点に収束して行くような特別活動を行うより、いろんな考え、多様性があるからこそそれらを活かした活動をせめて特別活動の時間では児童、生徒にさせたいものだ、この講義を受けて自分自身実感できた。今行っているグループ活動でもいろんな人のいろんな意見を聞いてお互いの考えを深めてよりよいものをつくる努力を全員でしていきたいと思う。

・私は現状として、大人たちは子どもを「褒める」より「叱る」ことが多いのではないかと思っていた。このテキストにも書いてあるように、ほめることは自尊心を高めさせることに直結すると考える。浅野誠先生の講義を受けていても、一部の学生がふざけて、常識から少し外れているような発言をしたとしても、叱ったところを見たことはなく、それを私にとっては新たな切り口から斬新な言葉でほめていくのであった。毎回の講義で、こういうことをする生徒にはこういう風にほめることができるのか・・・と圧倒されている。また、先生が一方向的に何かを押し付けるというよりも、「さあ、好きなようにやりなさい!」という大きな心が表れており、受け入れることも「褒める」ということの一部なのではないかと講義を受けていて感じる感じがしばしばである。

・自分の中で思い浮かんだアイデアをすぐ相手に伝えるだけでなく、“本当にこれでよいか?”“現実味があるか?”“他にいい方法はあるか?”などと考えた上で、自分だけでなく、みんなが理解しやすいように発言できるようになった! グループ内の話し合いで、意見をだしてくれた相手の相づちやほめること、雰囲気づくりに意識的に取り組むことができた!

・第3回授業で行われたN0.37 沖縄の教育は、先進国型?発展途上国型?独自型?の活動の際に、発表の仕方が、起立してどんどん発言しているが、同時に発言回数が少ない人、討論の焦点になっている人など優先すべき人が起立したら、その人を優先する発表の仕方(他者配慮型)を行っていました。私は今までの学校生活の中で、この他者配慮型発表を行ってきた事がなく、おもしろい発表の形だと思いました。授業内では、みんなが発表する事が時間上でできませんでしたが、この発表方法なら、みんなが発表する事ができ、また、議題に対して、幅広い意見や、また、生徒自身が自分の考えとは



違う新しい視野を手に入れる事ができると思いました。この発表の形だと、一緒にこの活動を行ったメンバーによって、授業展開にも違いや深みが出る事から、みんなで創造し生み出す事のできる方法だと思います。

写真はグループ討論風景



## 企画のプレゼンがスタート 2014年11月22日

21日の授業では3企画。

- 「逆授業参観」は、授業参観を通して、保護者と生徒とお互いをより深く知り合う企画
- 「心理学を知ろう」では、高校生が、実演をもとに、そこに現れた心理について考える
- 「給食の献立をつくる」では、残飯が多い中学生が、自分たちで栄養バランスを考えながら献立を考える。

いずれも、練りに練った企画だ。充実した内容で、実際の学校でやってみたい企画ばかりだ。

写真は、教師役による説明風景、実演風景、プレゼン後の検討討論風景だ。



検討討論にかかわって提出されたメモもなかなか鋭い。一例を紹介しよう。

- ・保護者と子どもに各々互いがどれだけお互いを知らないかを示すだけでなく、最後に話し合う機会を設けて互いのことを話すきっかけを作っていたところが素晴らしいと思いました。どうしても保護者が来れない場合、生徒同士で行わせて友情確認に換える。
- ・親子のキャラクター設定がしっかりとできている。3組の親子とも、それぞれの個性や特徴を持ったものになっているうえ、授業の内容やまとめも、どの親子にもあてはまるもので、今後の家庭生活に活かしていける。





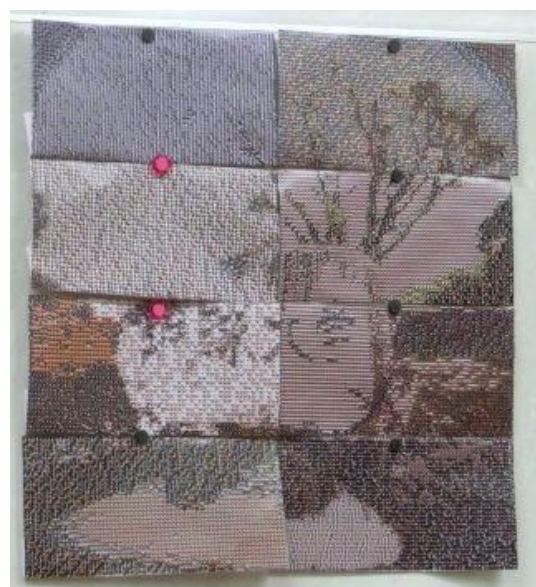
- ・こういうことが原因でこういう心理になるという例はたくさん出ていてよくわかったが、そうならないためにどうすればよいかという例が少なかったので、そこをフォローしたらもっと良いと思いました。
- ・進路について悩むことは誰にでもあるものだと思うが、それを親や先生、友人に言い出すのはなかなかできないこともある。この授業で「悩むことや自分が葛藤することは誰にでもあるんだ」と気づくことで、生徒は安心するはずだし、ポジティブになれると思う。
- ・生徒が嫌いなものにどれだけ栄養が入っているかを学ばせる。
- ・楽しくみんな積極的に取り組みたいと思うテーマ。グループに好きなように献立を考えさせておわりではなくて、それぞれの考えた献立のバランスがとれているものか、そうでなかったら、どのように改善したらよりバランスの取れたものになるのかを考えさせたいと思う。

## 生徒の成長をはかる指導へ 2014年11月30日

28日、今回の三つの発表。浴衣の着付け、一人一人の写真をモザイクにして大画面を作る(写真右)、ときウォーク(写真下)、といった多彩な取り組みプランが登場。かなり創造的でユニークなものだ。自分自身の中高校時代の特活が「貧弱」だったと語る受講生が多いだけに、大胆な挑戦を含んだ企画だ。

これらの企画が、生徒たちのなかにどのようなドラマを生み出し、生徒の成長をどのようにはかるのか、といった視点でもって掘り下げる方向へと、進み始める。

そして、自主レポートが大量に提出される。自分なりに掘り下げたものが圧倒的に多いのが特徴的。今回もいくつか紹介しよう。(なお、執筆者が特定できないようにするためを含め、文章表現を多少改編した)



\*\*\*\*\*

実業高校の教員になることを目指しているの、生徒の進路は主に就職や専門学校への進学になっていくかと思います。その中で、早い段階で自分の将来を考える機会を作ってあげたいため、「将来設計尋ね人」を取り入れたいと思います。きっかけづくりという段階での導入になるかと思いますが、「まず自分が将来のこと何も考えていないな」という自覚を持ってもらうことを目的として取り組んでみたいなと思います。加えて、工業や農業などの産業が地球環境に密接に関連した分野であることから、将来の環境にも目を向けて欲しいため、「20年後の地球・日本」を参考に、20年後、50年後の産業がどうなっているのか、自分たちの衣食住がどうなっているだろうか、と考えてもらうのもおもしろそう。



\*\*\*\*\*

私が教師になった時に行いたい特別活動は、「沖縄から視野を広げる」ということを行いたいです。具体的には、沖縄の現状を知り、沖縄が抱えている問題を軸に、世界で起きていることを考えて行き、その題材をもとに様々なことを知り、考えることにより、視野を広げるというものです。同時に、様々な人の価値観や考えを知り、それを受け入れる。というものです。

まず、初めに沖縄の現状を知るために、沖縄の抱えている問題の題材を決めます。では、沖縄が抱える基地問題とします。この基地問題を知るためには、まず、第二次世界大戦までさかのぼり、沖縄戦、米軍統治下時の知識をつけます。ここでは、様々なことを知り、考えを知ることが大切になってきます。そのため、当時の人からを、日本軍、米軍、沖縄住民などと分け、その中で各立場に立って、当時の事を考えてもらいます。基地問題を考える時も同様です。反対派、推進派、どちらでもない人々、と立場を変え様々な考え方などに触れることにより、様々な価値観に触れ、その中で自分の中の考え方や価値観を創って行くと同時に、その様々な価値観を受け入れるということを学んでもらいます。

その後、世界で起きていることに目を向け、世界での価値観を知り、世界に目を向けてもらいます。そのためにも題材を持ち入り、考えてもらいます。その際に、その地域での考え方に触れてもらい、世界と日本の違いなども感じてもらいます。

この活動を行う上で、大切になるものは、様々な価値観に触れ、それを受け入れるということです。それを知り、考えることで様々な場面で応用することができるようになります。

\*\*\*\*\*

私は、浅野先生のブログの11月15日の記事を読みました。そこでは、受講している学生のコメントが多々、紹介されていました。

その中で、私が気になったコメントは、「大人たちは子どもを「褒める」より「叱る」ことが多いのではないかというものです。（中略）浅野誠先生の講義を受けていても、一部の学生がふざけて、常識から少し外れているような発言をしたとしても、叱ったところを見たことはなく、それは私にとっては新たな切り口から斬新な言葉でほめていくのであった」というものです。確かに、私も浅野先生が学生を叱った所を見た事はありません。それ所か、微笑み、きちんと褒めていました。もし、私か教師の立場だとしたら、そのような、生徒には、「真面目にしろ！」と叱りそうなものだ。しかし先生は微笑み、褒めていた。私の中で「なぜ？」という気持ちがありました。だが、特活の授業が進んでいく中で、浅野先生がなぜ叱りもせず、褒めているのかがわかってきた気がする。それは、「生徒自身がのびのびと活動できる」ということなのではないでしょうか。叱らず、褒めることにより、生徒自身が自分のやりたいように表現でき、行動することが特活の大切さなのではないか。また、教師はそのために、叱らず、褒めて、助言をし、生徒が活動しやすいように、行動していくことが大切なのではないだろうか。しかしそう簡単に、叱ることを捨てることはできないだろう。この、特活の時間を通して、生徒をどう、叱らずに活かすかを、考えながら活動をしていきたいと思う。

\*\*\*\*\*

講義中の浅野先生の指導を見ていて、活動内容の説明やグループ間を回っての指導の際、必ず視線を合わせるために座ってくださっていたのが印象的でした。生徒としてもとても親しみやすく、話しやすかったので真似をしていきたいです。活動自体の内容は大まかな説明のみで分かりづらいこともありましたが、その分生徒が自ら考え、わからないことは質問する、という環境ができていました。生徒自らが授業に参加している、授業を作っている | という意識を持つことができるため、より活発に活動が進行するのではと感じました。

発表時、おおよそ真面目とは言えないユーモアを交えた発表内容でも決して注意したりせず、個性的だと笑って評価してくれているように見えるので、教師になったらこんな風に懐の大きい先生になりたいなと思います。どんな内容でもそ

これから話を掘り下げていく知識や経験の豊富さを活かした進行は、是非見習って自分のものにしていきたいです。

\*\*\*\*\*

最後の二つについて、少しコメントしておこう。30年ほど前には、こうしたことを意図的に追求していたが、今は「自然」にそうになってしまう。「叱れなく」になったのが、本音なのだ。

それにしても、受講生たちがこのように感じるほど、かれらが過ごしてきた学校では、生徒を枠の中にはめるために、叱り注意することが徹底しているのだな、と私は感じる。その枠の中で、かなり「模範的」に振舞ってきたらしいかれらが教師になったら、どのように振舞うのだろうか。

## 終了 浅野の授業への批評

2014年12月06日

5日、最後の授業だった。「自転車通学禁止校則を変える」「30人31脚」(写真)の取り組み企画実施で完了した。特活のイメチェンができ、生徒が主体になって共同創造するという基本が獲得できたようだ。今後、「教師が、生徒の共同創造をどのように指導したらよいか」という学習研究をさらに進めていくことを期待する。

最後に提出してもらった『担当教師浅野誠へのコメント』のなかから、いくつかを紹介しよう。

・不思議な雰囲気のおじいだなって思いました。なんかボケーっとしてそうで、すごいことになること言うし、自分の地元にまで知り合いがいるし、とてもすごい経験値を持っているなと思いました。なんだか他の先生とは違った視点をもっていると感じました。自分では気づかないようなところもおさえているし、その説明聞いたら納得しちゃうし、なかなかおどろかされました。

- ・実際の授業では、先生は常に自分から私たち生徒に話しかけ、緊張を解くようにしていたのが印象的でした。
- ・ユーモアのある雰囲気の中にもしっかりと考えられた計画があり、とても感銘を受けました。
- ・特活の授業を受ける生徒の、生徒同士の関係に成長をもたらすような工夫がいろいろなところに取り入れられていて、私が将来教師になったら真似したいと思えることが多くあった。
- ・テキスト第六部の内容には、とてもとても感銘を受けました。自分が大学に入ってきてからずっと考えていたことです。大学生活を通して、その考えに触れられることだけでも、大学にきた価値があると思うし、大学にくる価値を見いだせない人は、そこをしっかりと考えてみたほうがいいと思う。
- ・テキストには著作権ありますか？ あのなかのワークショップとか将来かなり使えるものだったので、著作権なければ実行したいです。———回答 著作権はありますが、ワークショップに使うことは大歓迎です。そのために、作成した本ですから。
- ・経験を積んでいるから、先生の言動の一つ一つに隠れたねらいが存在しているのだと思いました。





・いろいろな人と出会えて、いろいろな考え方に会えて、この授業を受けてよかったと思います。いままで特活がこんなに面白くて大事な授業と思っていませんでした。自分が教師になったらテキストを手本にして、クラスに必要な力をもたらすような特活ができるように頑張ります。

・浅野先生は話の引き出しが多いなと思いました。それは浅野先生の人脈からくると思います。私も、浅野先生に負けないくらい、これから様々な人に出会い、人脈を築いていきます。

・浅野先生の生徒に対する気配りもすごいと思います。授業中も休み時間も一人一人に話しかけてくれましたね。単に生徒と先生という立場で接するのではなく、それ以上に親身になって一人一人と関係を築いていくことの大切さを学びました。

・生徒目線ではなく、教師目線にならなければいけないという言葉聴いて、なるほどなと思いました。

・様々な活動、とっっても参考になりました。将来参考にして実践したいです。

・授業スタイルや学生への声掛けもぜひ見習いたいです。

・中高で自分が受けた特活のイメージのまま、教師にならなくて本当によかったと思います。

・浅野先生の、生徒の関わり方や、言葉の選び方、学ぶことがたくさんありました。まずは、“生徒をほめる”“認める姿勢”を体得したいです。そのためには、相手に興味を持ったり、相手と関わる機会を自ら作るように、自分から働きかけることが必要なのか、と感じます。この特別活動は、自分とは違った選択（人生選択）をしてきた人たちと出会い、また、人と深くかかわりあえるような活動を行うことができ、また、その活動のなかで、深い関係を築けるような先生の指導があったから、この最後の授業でのクラス（中学高校のようなクラスの感じ）ができ、最後の取り組みの、他者評価で相手を思いやった返事や気持ちを書くことができました！



## 2014年前期

### ためらいながら、楽しく知り合いがどんどん増えていく

2014年04月20日

18日午後、最初の授業。といっても次回は6月。

授業への構えをつくるのが中心。それは受講生相互の人間関係を作ること。特別活動もふくめて、教育には人間関係をつくるのが基盤となる。

ところが、「人間関係をつくるのが苦手」とミニメモで書く受講生が多いのにはびっくり。最近の傾向だろうか。おそらく、個人としての受験学習を中心とした生活を送ってきたため、人間関係を作る機会が、以前と比べてすごく少なくなったのだろう。2~3年生が中心でこれまでの教職科目などで出会っているはずだが、そうした機会も人間関係をつくることに必ずしもなっていなかったのだろう。

私の授業は、自然の流れで人間関係が多様に濃密にできていくように運んでいる。

じゃんけん列車で大きな輪を作る、信号をおくる、グループどうしでぐるりあうゲーム、あいさつ尽くし大会、ほめる、自己紹介ゲーム、自己発見他者発見ビンゴゲーム、特別活動キーワード大会、リレーお絵かき「こんな特別活動がしたい」……といったメニューを繰り出す。

当初計画はあるが、受講生の反応・動きに合わせてアレンジしていく。全体に、まじめで緊張ムードがありつつも、ゆったりした楽しい流れ・ムードができていく。例年、とびぬけて目立つ学生がなんにんか登場するのだが、今回はそうした学生は見当たらず、かといって、委縮してしまう学生もいない。まじめに着実に歩んでいる印象。さて、今後はどんな展開になるのだろうか。

最後のリレーお絵かきではこんな作品（写真）が登場した。

授業最後に受講生が「発見・感想・質問」で書いたミニメモをアトランダムにいくつか紹介しよう。

「教師がガミガミ説明せずとも、少しの指示で生徒を指示することができる。」

「初対面の人と上手にかかわるやり方が沢山あることを知れて、教師になって時に使おうと思った」

「自分にはない発想をみんなするので、勉強になります」

「グループに分けて少人数内で発言をうながしたりするこ



とからスタートしたので、人前で話すことが苦手な人もワイワイしやすいような内容になっていた。」  
「自己紹介や他人をほめることによる距離の縮まりがすごいなと感じ、他人を観察するようなレクは良いなと感じました。」  
「特活の絵を自由にかくと、いろんな発想があつて楽しかった。子どもに書かせたら、もっとおもしろいアイデアが出そう。特活は生徒と一緒に授業づくりするといい授業になりそう」  
「ゲームみたいにやることで、いつのまにか自然に周りに溶け込めた。びっくり。知らない人たちがばかりだったけど、とっても楽しかった」

## 企画アイデアが豊かに出はじめた

2014年06月08日

4月に1回目をした後、間を置いて、2回目の授業を6日にした。久しぶりなので、受講生も私もカンを取り戻すのに手間がかかったが、アイスブレイキングですっかり動きが良くなる。「将来計画尋ね人」「10年後の沖縄で一番起こりそうなこと」「なりきろう」「進路創造物語」と四つの活動を展開した。

「将来計画尋ね人」では、教職科目なのに、教職以外希望の人が多いのには驚いたと語る受講生が多かったが、教職就職難の時代、ありそうな話だ。

「10年後の沖縄で一番起こりそうなこと」では、「10人以上の死者が出る米軍事故」が一番多かったが、「夫婦・親子ではなく、気の合うものどうして住む人が、あちこちに見られる」も多かったのが、みんなを驚かせた。時代の変化か。

「なりきろう」では、「飛行機が見つからない」などという人もいたが、なんとか見つけ出して、コンクリートの下の土のなりきった人の物語など、興味深い物語がたくさん生まれた。こんなコメントがあった。

「(風になった人が、同じ班内に3人いたが)、3人の考えが同じになると思ったが、全員違う風になっていて面白かった」

「進路創造物語」では、まだ出会ってまもないお互いだが、他者について、結構当たっていることが書かれて驚く人が続出だった。

今回は、レポート提出がたくさんあった。この内容を生かして企画作りがおおいに進展しそうだ。

一つ興味深い例を紹介しておこう。

「『人生計画に予想外のことが起きると』

まず生徒たちに学校(中学や高校)を卒業した後のプランを時系列でワークシートに書いてもらおう。次のそのワークシートを好きなところで折り曲げるように指示し、「もし今折ったところで何かに失敗し、その先の人生計画が白紙になったらどうする?」と問いかける。(中略)この質問に対して自分の対処法は何かをグループで話し合ってもらい、特に面白かったと思うものを各グループ一人ずつ発表してもらおう(後略)」

なかなかおもしろそうだ。こんなアイデアがいくつも登場している。

この後の授業が楽しくなりそうだ。

## 盛り上がりの質変化と学生の質変化

2014年06月15日

13日の授業では、「こころとからだをひらく文化表現」「沖縄の教育は、先進国型？ 発展途上国型？ 沖縄独自型？」「地域と子どもたち自身の物語をつくる」「サークル・部活・会・NPO等の組織をつくる」の4つの活動をする。

量的にも質的にも、これまでとは異なる盛り上がりだ。「こころとからだをひらく文化表現」では、「スポーツ」をテーマに明るくりズミカルなミュージカルが出来上がる。

「沖縄の教育は、先進国型？ 発展途上国型？ 沖縄独自型？」では、時間の都合で、8割の学生の発言で打ち切らなくてはならほど、とどまることなく発言が続く。新しい討論形式を驚きつつ絶賛する学生が続出。

「地域と子どもたち自身の物語をつくる」では、沖縄各地、全国各地、世界各地の中学生になりきって、物語を共同制作(写真参照)。「枕草紙」風の渡嘉敷中の物語は驚愕の出来栄で、圧倒された。これで時間不足になり、「サークル」作りは短時間になったが、「思考部」「グーグルで世界旅行サークル」など、新機軸が沢山生まれる。

2年前に再スタートした琉球大学の授業では、5回目になるが、受講生の変化が大きい。2年前は、とびぬけて目立つ学生が何人かいたが、最近ではとびぬけるタイプはいない。みんな、それぞれなりに、授業に関わってきて盛り上がる。尋常の盛り上がりではない。1年前の沖縄大学の子ども学科1年生「教職論」を担当したときも、同じようなことを感じた。看護大学や沖りハでも感じていることだ。

これはどういうことだろうか、としばし考えた。

一つの仮説だが、学生というか、若者たちの変化がありはしないか。以前なら、クラスをまとめるような、何人かのリーダー的存在の学生がおり、その学生を頼りにしつつ、全体の学生を動かし成長させていくというアプローチがかなり有効であり、私の授業展開も、それに合わせていた。

近年そうした学生が減り、それぞれなりに個性を持ち動くというか、あるいは目立たぬように自分なりに動いていく、という感じになってきたようだ。それでも、全体としてみると、ノリがすごく良い。時には、コミカルなほどになる。

そうした動きに合わせて、私のアプローチも変化してきた。加えて、これは私自身の変化がある。以前の私は、「勢い」でもって学生と付き合ったので、勢いに「負けぬ」学生が表面にでてきて動き、他の学生も動き始めるという流れだった。最近の私は「枯れて」きて、「勢い」で押していたころに学生に与えていた「緊張」が減り、学生たちは「未経験の変変わった」授業と感じながらも、気楽に付き合い始めたようだ。

それにしても、いろいろな学生がいる。(1) 知的論理的な理解を先行させるタイプの学生。(2) 感性的というか、行動的というか、雰囲気的というか、そういうものを先行させるタイプの学生。あるいは、(3) ともかくも教師の指示に従って動くもの静かでまじめなタイプの学生。広く見られる講義中心の大学授業では、(1)(3)が対応しやすく、(2)のタイプは、「ひいて」しまうことが普通だろう。私の授業のなかで実践的な場面では、(2)が対応しやすく、(1)(3)が「ひいて」しまうことがある。





そんなことに配慮しつつ、実践的にやることと理論的にやることを組み合わせてきている。「特別活動の研究」の場合、多くの受講生が、受験学習に圧迫されて、縮減された「特別活動」しか経験していないので、豊かな「特別活動」のイメージとさわりの体験させることを先行させる。そのうえで、活動創造とその理論的背景の学習を加えるという流れをとっている。

## 多彩な企画テーマ「自分を表にださない自分」が作られたこれまで 2014年06月28日

27日の特活授業は、受講生たちが、やりたいテーマごとにグループをつくって企画作成にとりかかった。グループテーマは、なかなかのもの。これから変化発展していくだろうが、現在のところのテーマを紹介しよう。

無人島サバイバル  
冷蔵庫にある食材で料理をつくる  
校則と髪の毛  
山羊を飼う  
グループ鬼ごっこ  
男と女、どちらが得か（損か）  
自分とは異なる家族メンバーになってみよう  
教師と生徒の役割交代  
出身地の方言で話し合う（その後大きく変化中）

今回の授業の特徴の一つは、提出自由のレポート提出が多いことと、充実した内容が目立つことだ。自分自身の体験をもとにして、深い分析と提案をするものが続出だ。その一例のごく一部を紹介しよう。

「（中学時代の）生徒指導は厳しかった。ゆえに、表向きに正々堂々と喧嘩したり攻撃したりは出来ない。競争で負けたこの悔しい気持ちを、いったいどうやって解消すればいいのだろうか？ そこで、彼らの出した結論は「こっそり毒を盛る」という方法だった。（中略）教員の目には留まらず、本人も言いにくく、結局その生徒はつぶれていくしかない。いじめている側の生徒も、常に「本当はこうしてやりたいけど・・・」という思いを抱えているので、負の気持ちは解消されない。

（中略）こういう時こそ、いつもとは全く違った活動の場としての特活が有効ではないかと思う。要するに競争ではない活動、大げさに言えば芸術と創造である。

たとえば特活として、1年かけて物語を作って演劇をさせるとしよう。時間と趣旨だけを伝え、条件は「全員が何か一つ役割を持つこと」としよう。（中略）よい演劇を作ろうと思えば食い違いが生まれる。その時自分の思いを伝えるためにはどうしたらよいただろうかと考えずにはいられないだろう。しかも、そこに多数派少数派はあっても明確な優劣はない。教員が混ぜ返してもよい。普段とは全く違う、点数がつかない、順位もつかない、絶対的な良い悪いがない世界がそこにはある。」

ところで、いくつかのレポートで、内向的で、自分の意見を出し積極的提案をしつつ活動することが苦手な生徒は、特活を苦手にするという記述があった。にもかかわらず、その積極性をどう育てるかということでの提案を含むレポートも多い。



こうした内向性は、もともとの「性格」というよりも、これまでの学校を中心とする生活が作りだしたという面が強い点に注目する必要がある。というよりも、積極的創造的活動を保障促進する機会があまりにも少なすぎるということかもしれない。受験学習中心の学校生活が「指示待ち型」性格を作り出しているという記述が何人かのレポートに見られた。大学入学後も、レクチャー中心で、学生は聴いてだけの授業ばかりで、この特活授業のように、受講生自身が中心に活動するものは経験していない、というレポートも多い。

私の古い経験を思い起こすと、琉球大学の授業には結構、学生の自主的な活動に比重をかけた授業が多かったのだが、その点では、大学教育の「後退」があるのだろうか。

## 生徒の視点から教師の視点への転換

2014年07月05日

4日の授業では、自分たちで考えた企画の「指導案」を協同作成した。これまでは、自分自身が楽しみつつ成長するといった感じだったのが、生徒たちが楽しみつつ成長していくことを促進サポートする企画を考える教師の立場へと転換することが大きな課題となる。教育実習を終えている4年生1人以外は、3年と2年だから、教師の立場で指導を考える体験そのものが浅いため、少々苦勞している。だが、通り越さなくてはならない峠だ。

それにしても、受講生の成長ぶりはすごい。

授業を半ば以上終えたところで、「これまでの授業を通しての私の成長点」についての短文を書いてもらった。登場してきたいくつかを紹介しよう。

- ・人見知りだったけど、たくさんの人たちと交流することができた。知り合いも増えた。
- ・自己の主張と周りの意見を上手くまとめられるようになった。
- ・みんなの意見を聞いて、それに反応できるようになったと思う。
- ・他人の意見をくみ上げる能力が必要だと、新たな成長の方向も見えた。
- ・他人の意見をかみしめるだけの余裕が出てきた。私が少し混乱したり、空回りした時に周りの人がうまくフォローしてくれるような関係性ができてきた。
- ・たくさんの方から考えるようになった。
- ・みんなの意見に触発されて、アイデアが浮かぶようになった。
- ・自分の考えが薄いとき、人の話を聞いてまとめて自分の考えに肉づけして表現できた。
- ・固定された「こうではなくては」という固い考えが少しは柔らかくなったかなと思う。
- ・自分が思っていたより発言していて驚いた。いままで自分は内向的だと思っていた。

来週からは、グループで作成した企画の実施になる。どんなものが登場してくるか楽しみだ。今週からは、グループで『合宿?!』で、企画作成をするところが続出しそうだ。

## 「指示待ち」から、「自分たちから」へ

2014年07月12日

いよいよグループ企画の実施にはいった。11日は、「国当てクイズ」「グループ鬼ごっこ」「無人島サバイバル」の三つ。

写真は、「グループ鬼ごっこ」光景。芝生のうえで、じゃんけん列車から始まる活動のなかでつくったグループで鬼ごっこ。グループの最後尾をつかまえようつかまらないように、と動く。暑期中、「青春」しているというか、「子ども返り」というか、ともかくすごい盛り上がり。

いずれのグループも、独創的なものを、用意周到な準備で実施。高い評価を得た。

授業開始の時は、「いったい何をやるのか」という気分がみなぎっていたのが、いまや多様な活動の創造に大いに盛り上がる。

受講生のほとんどが、受験学習に占拠される世界で、「指示待ち人間」風にやってきて、大学に入ってもそれから抜け切らない部分をかなり残している。それでも、多様な出会いと活動の中で、そしてこの授業の中で、協同創造の世界に入り込んでいく。

指示待ち8割自主活動2割状態を逆転させ、8割自主活動指示待ち2割になってきた感じ。これまでの指示待ち生活を見つめなおし、転換していくには、それなりに人生経験が必要だ。そんなことをレポートに書く受講生が多い。実業高校で部活を作った体験、大学に入学するまでの体験、大学のなかで、自分とタイプの異なる学生との出会いが、重要な意味をもっているようだ。

20年の人生の中での出会いと自主活動経験の濃密さが大きく影響するようだ。受験ばかりだった人は、転換にかなり



苦労しているようだ。出会いと自主活動が多い人は、たとえば人生経験は30年分でありつつ、意欲とエネルギーは、20歳平均以上にあふれていると感じる。

まずは本人自身が自主的活動体験を豊富にもたないと、教師になって生徒に特別活動を指導するのは困難だ。この授業をきっかけに、自主活動体験を豊富にして、体験だけでなく、意欲とエネルギーをも溢れさせてほしいものだ。

## 自分たちの共同創造活動をベースにして教師の道へと進む

2014年07月19日

18日は、前回に続いて3グループの企画発表。

前回も今回も、メッセージ性の強い創造的な企画が並ぶ。しかも、グループメンバー一人ひとりの寄与が見える取り組みだ。

と同時に、それを受けた受講生のコメントと討論が白熱化してきた。その中身には、子どもたちを伸ばすための視点が続出してきた。

開始当時から終盤の今回までの変化成長の姿が、目に見えるようになってきた。

開始当初、教師の一方的講義で徹底的に訓練されてきた「指示待ち」スタイルが染みついていた受講生たちは、受講生自身が協同して創造的に取り組むという、この授業へのとまどいを強烈にみせていた。

そのうち、自分たちで作り出すことの楽しさをどんどん発見していく。随時出されるレポートも、自分たちのこれまでの指示待ち型生き方を振り返りつつ、そうでないありようへの模索を語り、授業内外で得た新発見を綴るものとなってきた。

そして、終盤に入ると、取り組みを通していかに成長していくのか、させていくのか、という視点を探り出し、それを発信するコメント・発言が出始めてきた。

「家族劇をするとき、トラウマを負った生徒への配慮はどうするの?」「いろいろ配慮をしつつ、背負ったものを安心感のなかで開示するようにしていく。それをとおして、多様な家族のありようを発見するとともに、そのなかで前向きに生きることを探らせる」といった感じのコメントや発言が出始めた。

「山羊を飼うことについて、現実に求められる多様な視点からの調査・計画立案を考えさせる。」といったことに加えて、「最後に、その山羊を殺して食べるかどうか」は発熱した議論が渦巻いた。

「教師と生徒の役割交代は度胆をぬいて面白い。」「そのためには、どんな教材を使うのか。」「教師役をとる生徒に指導案を書かせてはどうか」などなど。

授業の中では、卒業後の世界旅行計画を着実に立てている学生、多様な経路をたどって現在がある学生、中学高校時代にあった深刻な事態を越えてきた学生、高校時代までにすでにかなり創造的な経験をしてきた学生、実業高校出身学生、教育実習を含め子どもと現実に関わっている学生など、わたしがいう「ストレーター」ではないタイプの学生が、新鮮な素材を提供しリードする場面が目立った。「ストレーター」だった学生も、そこからの転換を正面課題にして、創造的作業にからみこんでいくうねりが生まれてきているという感じだ。

## 受講生の変化成長が著しい 授業終了

2014年7月31日

25日の最後の授業では、ジェンダー・校則・料理を素材にした3グループが見事な発表をしてくれた。職業のジェンダー先入観を打破する、校則に従うということ以上に、校則を生徒が変える創る、与えられた食材をもとに、アレルギーを考えて多彩な料理をつくる、といった具合に独創的な特別活動が登場した。

今回の授業は、半ばごろからすごく燃えた人と、ラストスパートで奮闘して「タッチセーフ」になった人といった具合に多様だったが、ほぼ本人希望に近い成績を獲得したようだ。

発表グループが当初予定より多く、25日は時間不足だったので、本人の自己評価と教師の授業への評価をメールで提出してもらった。

本人の自己評価をまず紹介しよう。

授業当初、「人見知り」で、かつ自分から積極的に活躍することに慣れていず、戸惑いがあったが、徐々にお互いに知り合い、積極的に授業創造に参加でき、自分自身が変わったと自己評価する学生が多かった、というか半数以上がそうした類のことを書いていたのは驚きだった。

二つのレポートを紹介しよう。授業に対する評価は、次回紹介しよう。

「この講義の最初の方は、すごく苦手意識を持っていた。発言回数も少なく、楽しんでいなかった。しかし、回が進むにつれて人前で意見が述べられるようになった。グループの意見をまとめたり、反対意見を出したりすることもできた。

自分自身が変わっていくのがわかった。

その原因としては、今まで人前で自分自身を出すことに抵抗を感じ、人に合わせておけばいいと思っていた。ところが、この講義ではそれを認められていなかった。慣れていないことに最初は必死にもがいていたが、自分でも気づかないうちに成長できていた。自分の意見を出すことで、もっとその場が楽しくなることを知った。相手が何を言いたいのか真剣に考え、それを踏まえて自分の気持ちを伝える。その場に真剣に向き合うほど、それは自分の経験として蓄積されていくような気がした。

この講義で私自身の一部がよい方向に変わったと思う。この講義での経験をこれからに繋げていきたい。」

「まず最初に自分を褒めたいです。それは自分がこの講義を通して成長したと自信を持って言えるからです。私の今年の目標は「自信を持てるようになる」です。その目標達成にも近づけたと思います。

私は人前で話すことや、自分の意見を話し合いで言うことがとても苦手だったし、したくないと思っていました。なんとなく普通でいい、目立つことはしなくていいと流れに身を任せていた自分がいたと思います。テキストの小論にもあったストレーターだったと思います。

しかし、様々なワークショップを通して、話すことに慣れてきたといいますか、前よりも抵抗がなくなっていくのを感じました。後半の模擬授業のなかでは特に自分の授業のイメージや意見を言う事が出来ました。自分の提案が採用されたこともありました。小さいけど1つ1つの積み重ねが自分の自信につながりました。

「この授業を通して自分がどうなりたいのか？」を考えるようになれました。この年の自分が言うのはおこがましいと思いますが人生は2択の連続だと思えます。朝起きたけどもう一度寝てしまうのか、起きるのか大学に行くのか、行かないかなど。その選択をするときに導いてくれるのはこの自分がどうなりたいのかという問いではないでしょうか。

この講義では教師になるためだけではなく、自分の人生をどうしていきたいのか考えるきっかけにもなりました。」

## 受講生が語る私の授業

2014年08月07、11日

7月31日記事でちょっと触れたが、最後の授業終了後、私の授業についての受講生コメントをメールで出してもらった。「よく見ているなあ」と思わせるものが数珠つなぎだ。そのいくつかを2回に分けて紹介しよう。

「この講義を受講して、特活のイメージが大きく変わりました。輪から列へ、列から幾つもの輪へと次々と変化してゆく中で、生徒を思うように動かすことができ、集団全体の雰囲気がポジティブなものになってゆく。初めて教育の技術的だなという側面を見た気がしました。よくアイスブレイクというが、ブレイクだけに留まらず、集団の雰囲気を高揚させておくことで、のちの活動に大きな影響があると思いました。また、教師がしゃべらないことが美德なのだと。」

「1. 前半は学生に様々な特活を体験してもらい、後半にその体験を基にして自分たちのオリジナル特活を作るという授業の流れは、特活の意味が見えやすく、受講していても楽しかったです。活動が中心の授業は、他のどんな授業とも違ってとても有意義な時間でした。また、活動をするのも進行するのも学生だったので、授業全体を通して教師としての力を育んでいたのかなと思いました。

2. 学生たちが活動を行っている横で、先生は静かに見守り、あいだに適切なアドバイスを投げてくれて、すごい学生のことを見ているんだなと感じました。教育現場では、その場の子どもたちの状況をしっかり把握して、浅野先生のように適切にアドバイスができる力が必要不可欠だと思い、先生は本当にベテランなんだなとあらためて感じました。

3. 私がすごいと思ったのは、浅野先生は子どもだけでなく、大学生や実際に教育現場に立つ教員たちにも指導を行っ



ているということです。こんなに幅広い層にたいして教授活動をする先生は今まで出会ったことがありません。それだけに、先生が示すアドバイスやコメントはどれも「なるほど」と思うことばかりでした。とても有意義な授業でした。」

「浅野先生の指導方法は、生徒の意見を重視し生徒の発言の機会を多く与えていた、生徒主体の授業を行っていました。この授業は、毎回いろんな人と交流でき、意見交換ができ毎回とても神経を使いましたが、その分とても楽しく、授業最初の方では、誰かが意見を言うのを待っていた自分が、自分からすすんで最初に発言をするようになっていたので、それもこの授業のお陰で自分自身が成長できたのだと感じています。また、浅野先生は、休み時間も生徒に話しかけに行き、生徒といろいろな話をしていたので生徒との距離が近く、とても喋りやすい先生だと感じました。私自身、この授業を同じ学科の人が居ない中一人で受けていたので、その時に、浅野先生が話しかけにきてくれたときはとても嬉しく、この先生の授業をとって良かったな、と感じることがありました。昨年、先生の授業を受けた友達に勧められ、この授業をとりましたが、想像以上に、浅野先生はとてもパワーがあり、面白く、また、自身の教育現場での多くの経験からの話など、とても勉強になり、授業に出るととても元気をもらえ、ためになる授業で、毎時間多くのことを教えてもらいました。」

「授業全体を通して、生徒の意思を尊重し、いろんな活動を自由にさせてくれた授業だった。こんな授業は初めて受けた。最初の方こそ先生が仕切って授業を展開していくが、最後の授業では先生はいるのかいないのか分からない程に影を潜めていた。そのお蔭で、自分たちでタイムテーブルや仕切り、運営を行なっていかななくてはならなくなった。とても楽しく授業をさせてもらった。もう少し、出てきてくれてもいいと感じることもあったが、まとめ方も先生らしく緩い感じで好きだった。

授業で初めて出会った人がほとんどだったが、正直この授業がなければ一生関わらなかつたらと思うような人も多かった。しかし、授業を通して話をしてみると意外と考えてると思う人やユーモア満載の人もいた。改めて、関わってみないと人は分からないなと思った授業でした。」

- 「1.グループワークを活発にさせるための発問やコメント一つ一つがすごい的確でためになりました。
2. 後半の仕切りを生徒にやらせるというのを初めて見て、それをあまり自分が出ないように陰からしっかり支えることをやっていて、真似したいなと思いました。
3. 授業ごとにブログを書いてくださっており、自分が出ていないかなとか、こんなことを考えてやっているんだとか楽しんで見させてもらいました。これからも続けてほしいです。」

読んでいると、私がますます「仙人」風になってきたように感じる。「仙人」は、7、8年前、沖縄国際大学で授業をしていた時、彼らが私につけたニックネームだ。当時は、あごひげを伸ばしていたので、そのイメージがあったろうが、今では、動きやふるまいがゆったりしていることがそんな印象を与えているのだろう。

「最初の授業の席を片付けていすを円に並べ、じゃんけん列車をして簡単なゲームをやり一人一人から感想をえることをしたときは大変だと感じました。最初のころは、この授業は遊んで終わる授業なのかと思いましたがグループ活動に入り自分たちで授業を行うときになって今まで先生が言ってきたことが、ああここでいさせるのか、と思えることが多く授業づくりのときに今までの経験が役に立ちました。今思えば、教員免許を取得するための授業ではなく教師になったときに生徒に特活をするときに必要な生徒のことを考えどう対処していくかを学んできたように思えます。実践を通して自分の考えていたようにいかず、また自分たちの発表を受けたほかの生徒から意見をもらうことでイメージしたとおりに行かないことやうまくいったことの喜びも知ることができました。この授業をうけ、生徒と仲のいい教師になりたいと思えるようになりました。」

「先生の授業は、全体を通して特活らしい特活だと思いました。生徒が自主的に発言をし、それによって授業が動いていき、生徒自ら狙いに近づいていく、というような印象を受けました。

「特活はこうあるべきだ」というものが頭では分かっているにもかかわらず実現することは難しいため、少ない発言の中で生徒たちを（この言い方は適切ではないかもしれないが）コントロールできていて、教育的視点から見るととても面白く、学ぶものが多くありました。

さらに授業の後半になると、一つの授業に対して教師側がこれほどの時間をかけて構想を練り、ねらいや目標を立てていたことを知ると、私たちの受けた特活の授業はまさにプロ中のプロが行っているものだな、と当たり前だが先生の偉大さを感じました。」

「1. ニヵ月程の短い期間だったにも関わらず、先生との会話が一番多い講義だった。他の講義では最後まで一度も教師と会話しないことがほとんどである。その上、先生は授業の進行に口出ししないため、かなり特殊な形式の授業だと感じた。

2. 教科に関する授業とは在り方が全く異なっているため、25分の授業実践でも非常に手こずった。教師になる前にこのような経験がなければ、実際に学校で実践するのは無理だろうと思った。ここで授業創りを体験できて良かった。

3. この講義を通して、教育とは何か、ということについて改めて考えさせられた。日本に留まらず、海外の教育事情を視野に入れた上で、教育の在り方を再考する必要があるだろう。」

「きさくで面白いおじさんと最初は感じたが、授業中の補足としての先生のコメントは大変勉強になった。先生という立場がどれだけ難しい立場なのか認識させてくれて、また、生徒同士の仲を深めるためにそういった環境、雰囲気を作る指導も学習できた。」

「初めて授業に参加したときに先生が強烈だなと感じました。その先生のパワーにひきつけられて楽しく特活に参加できました。私もこれくらいのパワーを持って教員になりたいと思います。ときどき聞こえる先生のほやきがとても参考になるものが多かったし、とても面白かったです。」

「最初の講義の時、正直に話すと浅野先生の講義をとったことを不安に思いました。なぜならあまり説明もなくどんどん特活を進めていくからです。私はついていくのがやっとでしたが、授業回数を重ねると先生がやる特別活動には、例えばアイスブレイキングなどのちゃんとした裏付けがあることに気づき、先生が本当に伝えたいことは何なのかを意識して授業を受けていました。やはりキャリアも人生経験も豊富な先生はいつも私達学生の考えを上回る答えを様々な角度から分析していくので先生が何を喋るのか毎回気になって耳を傾けていました。

全授業を終えて、グループ企画は大変でしたが浅野先生の特活を履修して良かったです。」

「毎週この授業が楽しみで仕方無かったです。毎回色々なアクティビティを経験出来、「こんな発想もあるのか!」と驚かされると同時に心から楽しむ事が出来ました。ありがとうございました。私がおも教員になれた時、是非このアクティビティ達を利用させてください。今回の授業で楽しかったのは、ほとんどお互いを知らない友達と仲良く話すことが出来たからだと思います。周りと仲良くなれるか不安な子供も沢山居ると思います。でも、こんな風に教師が斬新な遊びを少し授業に取り入れることで、こんなにも心を友達に開けることが分かりました。授業というものの概念が私の中で変わったと感じています。私も先生のように楽しい授業を生徒たちに提案していき、生徒達の発想力を楽しみながら授業を展開していきたいと思っています。」

## 2012 年度後期

### 10年近くぶりの琉球大学授業 「特別活動の研究」

2012年10月6日

5日午後、琉球大学の「特別活動の研究」の授業。2004年1月の集中講義以来ぶりだ。通常授業で言うと、1990年3月の退職以来となる。

打ち合わせ・準備のために11時ごろ行く。10何年か、20何年かぶりの人たちに出会う。昔の同僚たちだが、「貫録十分」だ。もう味がでておられるある方に「立派な大人になったね」と思わず言ってしまい、当人だけでなく近くにいた職員を驚かせてしまった。

建物・風景・すれ違う学生たちも何か懐かしさを感じさせる。

システムが大きく変わったので、いろいろと不明な点があったが、担当の教職員の方々の説明と文書で、ようやく流れ・概要がつかめて、安心する。

授業前15分に教室に行き、準備。かつての言葉で言うと、教育学科の学生たちがすでに教室にいたので、教室設営など、いろいろと手伝ってもらう。親しみやすく、よくやってくれる。ありがたい。

受講生は、登録調整期間なので多少の出入りがあるが、72名。多いが、この数ならなんとかやっていけそう。法文学部、教育学部、工学部、理学部の混成だ。

私の導入の説明の後、

ジャンケン列車→握った手とおしてのメッセージ伝え→輪を二つにして、ペアを作る→ペアで「グチ」を聞きあう→8名グループに分割→グループで「特別活動キーワード」を出し合う→「特別活動」物語づくり→グループで「ほめ言葉づくし」→ペアをつくって、相手をほめあう→異なったペアで、頼みごとごっこ・・・

あいだに、マジック・マイクロフォンで発見感想を述べ合う

最後に、日常レポートを記入しあう。

レポートのいくつかを紹介しよう。

- 個性的な人が多くて、みんな何かをもっていそうで、どんな人たちが楽しみです。
- 「ほめる」ことの意外な難しさと「ほめられる」ことの嬉しさを感じられました。
- 毎回動くので体力を使いそうです。
- 先生が授業内で使っているたくさんの工夫を発見していきたいと思います。
- 多少恥ずかしかったり無茶ぶりのゲームの方が終わった後の距離も近くなるし、緊張も溶けやすい
- 先生のシャッフルの仕方がよくできてるなあ～と思いました。いろんな人からめます！ 人見知り直す。
- 教師が生徒を誉めることが大切だということ。講義のスタイルによって眠くなる時間帯も居眠りせずに済むと言うこと。

一回目の授業だが、超ノリなので、当初予定にない活動も展開する。今後を楽しみにしよう。

## 躍動的な流れが生まれ、物語が始まる

10月13日

12日の授業では、自己紹介・他者発見ビンゴゲーム、〇〇大会アイデアづくり、リレーお絵かきをしました。リズムが生まれ、どんなものへと発展するのか、期待させる物語が始まりました。提出されたミニメモからいくつか紹介しましょう。

### 「今日の発見・感想・質問」欄

- ・ビンゴに思っていた以上に、夢中になってしまいました。初めて会った人と共通することを見つけるのも楽しかったが、知り合いとやっても新しい発見があった。
- ・絵は全員で協力して完成するので、楽しかったです。コミュニケーションとりやすい。
- ・自分の好きな食べ物が相手と偶然にも同じだったりして、うれしかった。
- ・ふせんはり楽しかったです。ゲーム作りは奥が深いと思いました。
- ・今日もまたいろんな人と知り合うことができました。
- ・協力し合って作品をつくることで共同作業ができる。
- ・アイデアや発想のつながりができるのはおもしろかった。

### 「本日の授業での当人の活躍ぶりなどへの、クラスメイトのコメント」

- ・ト音記号とか、いい仕事をしてました。積極的に取り組んでいました。
- ・絵をかく時のアイデアがすごくてバンバンかいていたのですごかったです。
- ・ピアノが得意という共通点を見つけ、声もかわいいので、とてもピアノが上手そうです。
- ・何事も進んで行動していて、リーダーでした。
- ・イラストリレーの時、コントラバス上手でした。合唱やってみたいなので、今後話したいです。
- ・班活動やまとめ作業ご苦労様でした。積極的に活動していましたね。
- ・笑顔で接してくれたり、フォローをしてくれて、とても心強かったです。

## あっと驚く取り組みアイデアが続々登場

10月20日

19日は、特別活動の諸領域ごとにグループをつくり、みんなから寄せられたアイデアをもとに、「推奨企画」を作成し提案。

なるほど！ ええーっ！ これは一体なんなんだ？ やりたい！ といった声が思わず、あちこちから漏れ出てくる。その一つに、「教師と生徒の役割交替」「先生係」というのが登場。そこで早速、私の隣にいるN君に「やってみる？」と尋ねる。二つ返事？でOK。突然のことだったが、N先生は見事に先生係をしていく。

かなり練った提案もあり、「やってみたい」と思うものが続出。

これらをベースにして、次週から取り組み企画作成を徐々に進めていく。取り組みグループづくりも始まっていく。

これらのアイデアは、今回の課題提出がもとになったものが多い。いくつか紹介しよう。

- ・おそうじ大会 教室を左右二つに分けて、チームを二つ作る。早さ、きれいさを競う。終わったら、相手チームの掃除した所をチェックして採点する。



- ・みんなで即興劇!! セリフは決められているものを読むだけです。
- ・なりきり作文 人間以外のもの・動物の立場になってみて作文を書き、みんなに発表する。
- ・逃走中 学校全体で、全校生で「逃走中」します。
- ・高速積木大会 より早く積木を組み立てた人の勝ち。いくつかのグループに分かれて、グループごとに勝負してみるのもよい。
- ・絵しりとり。しりとりと同じ要領で、前の人絵に続けて描いていく。
- ・暮らしたい街 自分の理想の街を考え発表する。

今日の授業の前後に、ハプニング二つ。

授業前。私が琉球大学在職中にお世話になった先生と再会。20数年ぶり。副知事という激職も務められたが、とってもお元気。びっくりだ。

授業後。ある初対面の学生に、卒論で教えてほしい、と話しかけられる。戦後の「石川学園」のことについて、私のブログにいきあたって、ここで授業をしていることを知って、インタビューされる。いくつか鍵になることを紹介する。10数年~40年前に、しばしば沖縄教育史についての卒論指導援助をしたことを、なつかしく思い出す。

## 人生発見・進路創造 多彩なつながりづくり

10月27日

4回目の授業。いよいよ、特別活動の企画づくりへのグループを作り始める。企画がどんな風に具体化されるか注目しよう。

この授業は、70数名の受講生と多いが、いつもの私の授業と同様、大きな輪をつくって座り、中央広場を使っの活動スタイルで進行。

今回は、「将来設計尋ね人」「進路物語を創ろう」の活動をする。受講生の書いたミニメモからその様子を紹介しよう。

### 「将来設計尋ね人」

- ・質問されたりすることで、改めて自分がどう思っているのかを実感できた。
- ・びっくりしたのは、勉強を卒業してもしたいと思っている人がいたことです。
- ・自分があてはまる将来設計があまりなかったのが少しショックでした。
- ・いろんな人の将来についての話が聞けて、自分の視野も広がった気がした。
- ・家業を継ぐつもりの人が意外に少なかった。

### 「進路物語を創ろう」

- ・みんなからのイメージと似ている所、違う所があって、新しい自分を見ているよう!!
- ・第一印象であてはめていくのがおもしろかった。
- ・親しい友人のこともあまりわかっていなかったからびっくり。
- ・グループ内で自分のイメージをかいてもらったが、理系イメージが強すぎて笑ってしまった。

授業最後にミニメモを提出するのだが、各自が書いた発見・感想・質問などに加えて、「本日の授業での当人の活躍ぶ

りなどへの、「クラスメイトのコメント」を毎回新しい人二人に記入してもらおう。このことを通して、毎回、新しい出会い、つながりができることを期待する。こんなことが書かれていた。

- ・今日もしゃべった事ない人と話せてよかった。
- ・初めて話したとは思えないくらい仲良くワークができました。
- ・だんだん皆の顔と名前がわかってきました。
- ・皆の意見がはっきりしていて、自分も頑張らないと、と思いました。

10余りの特別活動企画作成グループも、希望をもとにして編成するが、新しい出会い・つながりで編成されてきているようだ。

## ミミズに雲になりきって、地球環境を考える

11月3日

2日の授業。グループ単位で取り組む「企画概要」作成が着々と進んでいるようだ。来週、どんなものが提出されるか楽しみだ。

今回は、世界発見の二つの活動をした。

一つは、10年後の沖縄について予測するものだ。その討論のなかで関心が集中したのは、「日本で育児休業をとる父親は珍しくなくなる」かどうかだった。この討論にかかわっての受講生のミニメモをいくつか紹介しよう。

- ・育児休業への男の人的目線から話してくれて良かったです。
- ・父親が「みんなそうなる」と思ったけど、反対意見もあってびっくりした。
- ・離島の人口が増えるか増えないかについて、グループでもまじめに考えている人が多くてすごいと思いました。
- ・社会的事項を考えていて、思った以上に浅はかな意見が出てしまって、もっと考えないといけないなと思った。
- ・10年は長いのか短いのか、その間にどれだけのことが変わるのか、いろいろとグループで話げできました。
- ・仕事を続けたい気持ちが一緒に嬉しかった。
- ・自分の10年後について何度も考えるけれど、沖縄の10年後については考えたことがなかった。

もう一つは、教室を出て、あるものになりきって、そのものの気持ち・願いを物語で表現しようという活動だ。これが異常にといえるほど盛り上がった。最後に、「土のなかの生き物」としてミミズ、「空の雲」になりきった二人の物語が、感動と笑いの中で、絶賛を浴びた。ビデオが写真に撮っておけばよかったと悔やまれる。これもまた受講生のミニメモを紹介しよう。

- ・まさか川のなかにある石の気持ちになるとは思いませんでした。お母さん石みつかるといいね。
- ・デイゴの木は暖かい。
- ・環境問題を通して、自分の感受性を確かめるいい機会となった。
- ・別のものになりきると、景色が違って見える。また、そのものや生き物を大切にしようという気持ちになる。
- ・ここまでミミズになりきれた人に出会えたのは初めて。迫真の演技でした。
- ・今までに聞いたこともなくてユニークでとても楽しかったです。
- ・なりきりでは、感動物語を作っている人がいて、びっくり。人工物でもこんな感動物語が作れるだろうか。
- ・アスファルトの下にいる土の気持ちが、よく共感できるなと思いました。やはり人に踏まれるのは重いんですね。

・クワデーサーの木になるために。まず何の木なのか、わからなくて、人に聞いたりして探しました。見つかってよかったです。

こんなワークショップにヒントを得て、各グループが豊かな「企画概要」を作成提出することを期待する。

## 数学理科はなくしたい科目？ 多彩な企画案

11月10日

9日の授業も、充実していた。

1) 企画作成→実施に至る今後の進行の説明

2) 「こんな科目をなくして、こんな科目をつくろう」の活動では、なくしたい科目に数学・理科が多いことに議論が集まる。「苦手でやりたくない科目」と「なくしたい科目」とは違うという発言に説得力があったようだ。「作りたい科目」では睡眠タイムに関心が集まる。睡眠タイムをもうけるのか、「睡眠科」という科目を設定して睡眠研究・実践について学ぶのか、というテーマが浮上。

多彩な問題に発言が連続した。

※ 討論時間にこのところ多用している方法 マジックペンをマジックマイクロフォンと称して、2本を受講生たちが回していき、交互に発言していく。こうすると、ほぼ絶え間なく発言が続き、10分で20人近く発言する。

3) 今後の企画実施にむけての進行などを担当する役員4名を選出。全員投票で選出。選挙管理委員の方々御苦労さま。役員の方々は、すでに受講生の信頼をかちえている人たち。活躍が期待される。

4) 企画概要提出。提出された9本はすべてゴーサインのレベルに達している。実施計画細案の「文書セット」作成へと進む。

レクリエーション大会～～アイスブレイク！ 皆で仲良くなるろう会～～

大晦日 Countdown & Happy New Year 宿泊研修

ジェンダーについて考える

帰宅部の帰宅妨害大作戦

福祉体験～～共に生きる社会を目指そう～～

校則ってなんなの？ ～～考えてみよう！ 作ってみよう！～～

男女対立を解決へと導こう 仲良くなって合唱コンクールを成功させよう！

孤立からつながり 人間知恵の“和”

寸劇大会

15, 6才のハローワーク -どんな仕事があるか調べよう-

## 80分で70人のすごいミュージカル「旅」できる

11月17日

今回は、文化表現がテーマ

長年私がしてきた、下のような流れのワークショップスタイルで、創作

- 1) テーマ——出し合った10テーマ候補から、「旅」を採択
  - 2) 20近くの小テーマ候補から選ばれた10余りの小テーマでグループを作る  
宇宙旅行 自転車で全国一周 電車旅行 ありがとう グルメ旅行 世界遺産 カブで日本一周 京都へ行こう……
  - 3) グループ単位で、三行詩作成 発表
  - 4) メロディーをつける 発表
  - 5) チーム全員による身体表現をつける 発表
- ※ 各グループの順序編成とつながりを、役員がつくっていく。
- 6) リハーサル
  - 7) 発表
- 以上、80分足らずで完了  
感動の渦に包まれる。受講生のミニメモで綴ろう。

- ・思い切りが大事
- ・短い時間でも案外できるもんだと思った
- ・メロディーを考えるなんて、ヒトは追い込まれると何でもできると感心した。
- ・色々なアイデアを見ることができてよかった。
- ・北京ダックもドンドウルマもめっちゃ楽しかった
- ・チューチュートレイン、大変でしたが、頑張ってやりましたね。
- ・「ありがとう」一緒に歌って楽しかった。ありがとう！！
- ・「旅」というテーマからこんなにもアイデアや発想が広がって楽し過ぎた！！
- ・大学に入って初めてこんなに楽しい授業を受けた！創造性が膨らんだ。
- ・あつい！！ 恥ずかしかった！！
- ・協力的ですごく助かった！ ありがとう♡
- ・リズムとりありがとう 引き受けてくれて助かった
- ・みんなの前で発表するのは勇気がいったけど、恥を捨てて楽しめた
- ・みんなうまい！ 個性的！
- ・ハモリをがんばって本当に楽しかった。

ビデオ撮影をしておけばよかった、と悔やまれる。

## こんな部活・サークル・会をつくろう

12月1日

30日の授業は、「こんな部活・サークル・会を作ったらどうか」という取り組みをした。注目点を並べよう。

1) 中学高校時代に、部活を作った経験者がゼロだった。驚きだ。部活とは、生徒が自発的に結成解散加入退会するものだが、そんな姿は、もう見当たらないのだろうか。

青年期にあるものが、興味関心を共有するものとともに、何かを追求するという自発的な形はどこかに消えて、出来合いの部に入るだけになっているようだ。そうだなければ、帰宅部になるか、学外のサークルなどに入るか、という形に陥っているようだ。



2) そんなこともあってか、受講生たちは、12グループに分かれて、作りたい部活・サークル・会についての、実に多様な12のアイデアを作り出した。

いくつかを紹介しよう。

おじいロックバンド

逃走中!?

音楽とケーキを組み合わせるカフェづくり

一筆書きサークル

遊びまくる会

3) 受講生たちがもっている、「やったことがないが、やってみたい」という気持ちが反映したのだろう。

遊び不足?かな。

中高部活の中心を占める運動部のアイデアが全くなかったのはなぜだろうか。

4) 各グループのアイデアのプレゼンテーションのトップを切ったグループの、口楽器によるバックコーラスを使っ  
てのアイデア発表は圧巻だった。

いよいよ、グループ単位の企画作成は最終局面を迎えた。1グループは提出。他の多くのグループも次週には提出になりそう  
だ。次次週からは、企画実施に入る。こうしたことは初体験にもかかわらず、なかなかのでき具合になりそう  
だ。

もぐり見学は大歓迎だ。

## グループ企画の深化 「沖縄の教育」討論

12月8日

先頭を切って企画詳細を提出したグループのものについて、深化させたい点について私がコメントをした。多くのグル  
ープが一層の深化をはかるために、案の提出を次週にしたので、企画実施は一週間ずれ込んだ。

今回は、「沖縄の教育は、先進国型? 途上国型? 沖縄独自型?」をテーマにして、私流の方式で討論をした。実に  
多彩な意見が途切れなく続いた。時間の都合上、途中でストップせざるを得なかった。

受講生が提出したミニメモのいくつかで振り返ろう。

- ・いままでやったことのなかった討論の仕方面白かった。
- ・今日の授業のワークショップの方法は、自分の中でも色々考えることができて良かったです。
- ・坐っているだけで、自分の意見表示になってるな、と思った。
- ・ディベートとも異なり、人の意見を素直に聞いた。
- ・初めてこのようなスタイルで議論し、「共同の知」を共有できたので、よい経験になりました。
- ・私は人類学専攻なのですが、「共同の知」というのを聞いて、文化というのも「共同の知」から発展していったものな  
のかなと、学科の授業を思い出した。
- ・どっちつかずの考えでいたけど、色々な意見を聞いて考えが変わった。
- ・初めて沖縄の教育について考えたので、興味深かったです。

- ・日本は先進国なのだから日本でやっている教育って先進国の教育ではないのかなと思った。
- ・沖縄の教育の状況が発展途上国よりの所だとおもっていたけど、皆の意見を聞いて変わった。
- ・自分の考えていた独自の教育が本当に独自のものだと言えるのか疑問を持ちました。
- ・沖縄は独自の教育（戦争についての平和学習）があるなと、改めて考えることができた。
- ・平和学習は沖縄独自だと思っていたのですが、広島・長崎の話が出て、意見が変わりました。
- ・私は、今日のワークショップで発展途上国としてましたが、独自型とすごく迷い、分からなくなりました。
- ・〇〇中学校では小学生までのはずの「がんばりノート」が、中学生になってもあるので、そのような点を見ると発展途上国よりかなと思った。

## 背中あわせレク 動物になりきって環境を考える

12月22日

21日の授業では、いよいよ各グループ企画の実演が始まった。

最初のレクグループは、背中あわせ起立レクを、ペア→3~4人→グループ全員の順です。次に人間知恵の輪の工夫したバージョン、という流れで進行。私も知らないレクが、グループ相談の中で創作アレンジされたようだ。教室は、楽しい雰囲気に満たされた。

二番目の環境学習は、山と海の動物になりきって、「恐怖を感じる」ことをポストイットを使って発表し合う。次に、「恐怖への対策」について考え合う。生徒に進行させ、教師は各グループをまわって促進する。ポストイットとポスターをうまく活用。

両グループとも、終了後「テンパっていて、大変だった」というが、そうは見えなかった。段取り良く、かつ「生徒」の雰囲気を盛り上げる工夫がよくなされていた。

最初に実施するグループはいつでもなかなか大変で、アクシデントが起こることが多いが、今回はすごくスムーズに進行。持ち時間1分前には終了という、うまい時間管理。

両グループともなかなかの出来で、ゲットポイントがうなぎ上り。もう評価Aを確実にした人が登場した。

二つのグループの実演の批評会も最初から、的確な指摘の目白押しだった。

その批評のもとになった個人メモのいくつかを紹介しよう。

- ・いずれのグループも、コミュニケーションを十分にとれる活動であり、社交性や協調性を高めるものであった。
- ・2つの企画とも、メンバー（グループ内）で、意見や思いを共有させたら良かったと思う。

・レクをやる場合、グループに必ず「県外出身者をいれる」「血液型を4つ入れる」などの指示があって、コミュニケーションを促すようになっていた。

- ・はじめから、腕を組んだり、手を握ったりと互いのパーソナルベースを外したのがよかった。
- ・男女を混ぜてやっていたので、男女の仲も深めることができるのでよかった。
- ・簡単にできるものから話し合わなきゃ成功しないものになっていった。

・「相手（動物）側の気持ちになって考える」という点がとても良かった。そうすることで、普段は意識していないところまで考えることができました。

- ・ポストイットを使っていたので、子どもから考えが出しやすくなっていった。
- ・発表の際に、その生き物を演じながら発表するのはどうか。
- ・人間側と動物側に分かれるなど、意見をぶつけあわせるような討論の機会もあつたら、より深まるのではないか。
- ・生徒から司会を出すというアイデアが新しいと思った。



## 28日まで授業！ しっかりした企画実施準備

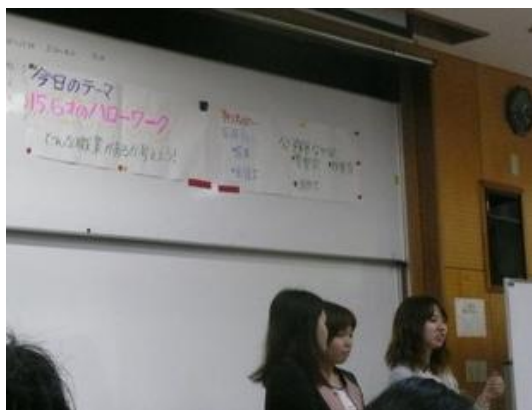
12月29日

28日の御用納めも、授業日というのは初体験だ。たまたま会った教員（40近く前の私の授業の受講生でもあるが）に尋ねると、2、3年前から授業日数確保のため、この日まで授業をすることになったという。

そんなこともあってか、流行する風邪のためか、出席率は7~8割。

このところ、各グループの企画を実施しているが、用意周到の準備がなされていて、順調に進む。終了後の批評会で出される指摘も、だんだん「アマチュア」レベルから「プロ」レベルへと進みつつある。

今回は、福祉ボランティア体験をテーマに、ブラインド・ワークをする。ペアをつかって、一人が眼隠しをしたもう一人を誘導する。声だけで、手をとるだけで、声と手をとるという三種をやってみることで、発見をしようというものだ。



もう一つは、「15、6歳のハローワーク」というタイトルで、グループ単位での職業調べをするものだ。カテゴリーにあてはまる職業を書きだしていく。それを別のグループがさらに書きだしていく、という流れだ。

なかなか立派な取り組みが続き、日常ミニレポートと企画作成実施だけで、ほとんどの受講生は、単位取得ラインを超えそうだが、なかにはより高い成績を取ろうと、「特別メニュー」に挑戦する人もいる。今回、第一回目の提出日だが、こんな記述ができた。

「中高を通して、特別活動に十分な時間を割いている印象があまりない。よく特別活動の時間には、定期テストに向けてのテスト勉強の時間に当てられたりしたことを覚えている。」

中高校時代に、活発な特別活動・生徒参加による企画推進の経験が少ない受講生が大半を占めているようだ。沖縄の現場では特別活動がテゲーにされている学校が多いのかもしれない。それだけに、私の授業に受講生はびっくりらしく、戸惑いながらもどんどんイキイキしてくる印象だ。

## 中学高校の特別活動の時間は自習時間だった！

2013年1月13日

今回は、3つのグループからの発表（実践とプレゼン）があった。

「知恵の輪」ゲームで人間関係の発展、マイナーな仕事の40秒PR寸劇を通してのグループづくり、大掃除大会というものだった。いずれも、私の想定以上の出来だ。

想定以上というのは、次に紹介するように、受講生たちは、中学高校時代に特別活動の時間がなおざりにされてきた経験をもっているからでもある。

特別レポートが提出されはじめた。前回の報告でも少し紹介したが、今回も次のようなものがあった。

「日常の特別活動は、テスト対策・自習の時間にあてられており、教師不在のこともあった」という。こうしたレポートが連続して出てくるということは、沖縄全体の傾向を反映しているようだ。

教育委員会や学校は、時間数確保にとっても神経をとがらせ、「学力向上」に必死だ。しかし、それとは対照的に、人間関係を豊かに発展させ、生徒の将来創造に極めて重要な役割を果たす特別活動が、事実上、縮小・不実施にある事態は、黙認、もしくは奨励されているのだろうか。

それだけに、受講生たちがこの授業で出会う特別活動にかかわる体験は新鮮で驚きなのかもしれない。

そんななか、ある受講生は、「教師になったらやりたい特活」として、次の例を挙げた。興味深い。

高校1年対象に、世界の国々について各自で調べる。「この国のココが凄いい！」「あまり知られていないけど、こんなものがある！」など、その国について学ぶことで、国際理解につなげるきっかけにしたい。

中学3年や高校1,2年対象に、自分の悩みなどをポストイットなどの小さめの紙に書き、それを紙飛行機にして飛ばす。自分以外の他の人の紙飛行機を拾って、そこに書かれている悩みについてアドバイスなどを書いて、また紙飛行機にして他の人へ飛ばす。それを一定時間やった後、どういう悩みがあって、それに対してどのようなアドバイスがあったかを、全体で発表して共有し、意見交換・議論も行う。

こんな提案が続出してくることを期待している。

## 対立解決 帰宅部生を部活に誘う 授業のワザ

1月26日

今回は、二つの活動のプレゼンがあった。

一つは、商業高校3年クラスで次のような設定で討論させるというものだ。

「〇〇商社に同時期に入社したAさんとBさん。Aさんは結婚していますが子どもはいません一方でBさんには今年産れた子どもがいます。その為、Bさんは子どもの為(育児)に定時に帰らせて下さいと上司に申し出た為、それまでBさんが負担していた仕事がAさんにまわってきました。その為、Aさんは以前と比べ明らかに仕事の量が増え残業する事も多くなりました。その事が原因でAさんとBさんとの間で対立が起ってしまった。

- ① 班のなかでAさん、Bさんそれぞれの立場に分かれ、意見を言い合ってみましょう！
- ② この問題をどう解決するか話し合ってみましょう！

補足説明 ※ Aさん、Bさん、ともに男性

※ 残業代金は支払われない



全体傾向として、会社が問題だという流れがでてきた。いずれにせよ、こうした問題を特別活動の中で取り上げ、生徒に考えさせるというのは、現実には重要な問題になっているので、貴重な提起だ。

もう一つのグループは、帰宅部になっている生徒を部活に誘う企画の提起だ。写真部を例にして、ロールプレイで提起した。綿密な指導プラン作成、用意周到な準備で皆を驚かせた。そこに「だるまさんがころんだ」が出てきたのも楽しさをぐんと膨らませた。

いよいよ、次週で最後の三つのプレゼン。多様な取り組み提起も大詰めだ。特別メニューも要望が高く、次週まで締め切りが延期となった。

ところで、なぜか、今回の目立った活躍者は、圧倒的に男子学生だった。偶然なのだろうか。

私が授業でしていることで、私が思ってもみなかった指摘が次のように出てきた。「なるほど」と思う。なかなか優れた観察だ。私自身半ば無自覚にやっているもので、自覚する必要があるようだ。

#### この授業で得た特活のアイデア、ワザ

私がこの授業でまず、最初の回で学んだワザがある。それは授業を行う先生自身が率先して行動することで、教室中の生徒からの、「みんなの前で何かをする時の恥ずかしさ」のハードルを下げるというワザである。この授業内で先生はおかしなアイデアを出したりする（たとえば何の変哲もないマーカーを生徒に渡してこれは魔法のマイクであるので今からあなたは授業の感想・意見を言う、という無茶な設定と突然の指名）。そうすることによって、特にまだそういった先生の行動に慣れていない最初のころは、クラス中の生徒の注意は、感想・意見を言うに指示された生徒よりも、先生自身と、せんせいの行った行動のほうに向けられているように感じた。それによって指示された生徒が自分の意見・感想を述べやすい雰囲気がつくられる。指示された生徒自身がみんなの注目を浴びているという恥ずかしさをあまり感じないで済む。そういったおふざけのような行動を先生自身がとることで教室全体の恥ずかしさのハードルを下げるのと同時に、さらに先生は時たま真剣な話をする（例えばある授業の回では、沖縄の教育に関するニュースを基に、生徒たちにそれに対する意見交換をさせた）。少なくとも私の経験からして、自分の意見を言う機会を設けてもらいたいことがあるにもかかわらず、生徒たちは恥ずかしがって意見を言おうとしない。しかし普段のふざけた雰囲気とのギャップからかこの授業のその回では多くの生徒が自分の意見を進んで述べていたし他人の意見に対して自分の考えをぶつけたりもしていた。授業内の活動の緩急のつけ方というものがあるのだと分かった。生徒たちをついてこさせるために先生自身が率先して行動する、またやるべきことはちゃんとやるよう授業内容に変化を持たせる遊びと真剣のバランスのとり方、先生はこの二つについては授業内で明確にワザとして説明はしていなかったが、教師としてどう授業を運営するかについてのこの二つのワザを私はこの授業で学ぶことができた。」

## 福笑い 校則討論 ジェンダー

2月3日

グループ企画は最終発表。たてこんで、三つ実施。

一つは、大晦日合宿企画。そのうち、福笑いをグループ単位で実施。準備がばっちり、各グループで笑いの渦ができる。福笑い初体験者も多かったようだ。

スカート丈校則の賛否に分かれた討論企画。

「男らしさ・女らしさ」をめぐる討論企画。

最後にふさわしく、いずれのグループも充実しつつぐんぐん進行。終了後の検討討論も、受講生のなかからの立候補者が進行。交代制なのだが、初めてでも「手慣れた」雰囲気で行。

今回の授業では12グループもあって、私は全グループがうまくいくかどうか少々心配したが、実際は全グループがしっかりしたものを作り上げた。

この授業の以前の記事で紹介したが、中学高校で特別活動が自習時間になったりするなど、寒々しい状況を経験してきた受講生たちには、教師になったら、この授業で体験・イメージした多様で豊かな活動を展開したい、とレポート書きするものが目立った。

## 楽 笑 一文字で表す私の授業 今期最後の授業

2月10日

8日、琉球大学「特別活動の研究」の授業終了。

最後に、今期の各授業末でやっている、「私の授業を一文字で表すとどうなる」（四字熟語も可）をしてみた。

分類してみると、次のようになる。

### 第一群（18名）

楽 12名 ラクではなくて、楽しいという意味のようだ。「特活を企画したり、いろんな人と仲良くなれて楽しかったです」とコメントした人もいた。

笑 5名 遊 1名「遊びながら楽しんで学習できました」という説明付き

### 第二群（12名）

一期一会 2名 友人獲得 協 一致団結 団結と表現 和気藹藹 会 2名 百花斉放

十人十色 2名 「かぶることのない人、授業内容、個性に触れ合えた半年でした」というコメントもあった。

### 第三群（8名）

創 4名 考 試行錯誤 発

見 「発見の多い授業だったということが大きく、また、多くの人を見て交流を深められたということ、見て学ぶことも多かったということから、この字です」というコメント付き

### 第四群（4名）

動 2名 強 活動 「活動いっぱい、いろんな場面で活かしたいし」というコメント付き

### 第五群（4名）

新 2名 珍 変

### 第六群（3名）

天真爛漫 和顔愛語 先生御疲

第七群（5名）

尊敬 心 子 我 辛

第八群（6名）

橋 雲 点 有 酒池肉林

水 「いろいろな個性が混ざり合う場所、渦まくように教室で身体を動かす」「人にとって欠かせないもの」「うねる時、おだやかな時で、ふんいきが変わる」というコメント付き。

実にさまざまだ。第八群には、「水」のようにうならせるものもあれば、『謎解き』のようなものもある。これで今期の授業はすべて終了した。久々に4コマの授業を、フーフーいいながらやり終えることができた。四月からは、新しい受講生との充実した出会いが、各大学であることだろう。

# 沖縄リハビリテーション福祉学院言語聴覚学科

## 「実践的教育学 対人援助とコミュニケーション」

この科目は、10年近く担当したが、そのうち2009年（一部）、2010年（一部）、2011年、2012年、2013年、2014年について掲載しよう。なお、2013年と2014年については、前掲の「大学をまたがっての記事」にも登場してくるので、参照してほしい。

### 2014年

#### 専門職の対人関係力量育成 マニュアルと物語性

2014年04月19日

カリキュラム改訂に伴い、現在のスタイルでの「実践的教育学 対人援助とコミュニケーション」授業は今年度の2年生が最終となることになった。同時に、新カリキュラムに伴うものが、今年の一年生からスタートする。

そんな区切りの中で、改めて、私流の授業にかかわって、少し書こう。

対人関係を業務とする専門職というと、教職、心理職、福祉職、医療職などがイメージされるが、広げて捉えると、営業職販売職など、さらには交渉にかかわる職、「部下」を率いる管理職などもかかわる。だから、商業高校、ビジネス系専門学校、また企業研修などでも、盛んに対人業務の授業・研修が行われている。

こうした職には、専門的知識技能と対人関係力量の双方が必要だ。以前の養成機関では、前者の教育がほとんどで、後者は大変少なかった。高校などでも、授業というと前者を扱い、後者は、「特別活動」などで扱うということになっていた。受験校などでは、後者は縮小傾向が続いていた。受験校出身の大学生には、テストで好成績を取れるが、人前で発表し討論するのは苦手というタイプが結構多い。高卒大卒で就活をするとき、面接に恐怖を感じるタイプも結構多い。そこで、就職活動が近づくと、高校大学で、面接対策などを付け焼刃で行うことが多い。

こうしたことを本格的に展開するにはどうしたらいいのだろうか。

私自身は、もともとの専門分野が生活指導なので、子ども・生徒の対人関係に関わるありようの指導に取り組んできたわけだが、1970年代末に「民主的交わり」ということがいわれたところから、対人関係指導にかなり意図的に取り組み、ここ20年間はその指導のありように本格的に取り組んできた。そうしたこともあって、近年、そうしたテーマでのワークショップをしばしば行い、書籍も作成してきた。

そんな中で強調してきたことは、マニュアル的対人関係を越えて、物語性溢れる対人関係を築けるような力量を育てることだ。



例外はあるとしても、こうした取り組みに日が浅いのが普通だ。何故だろうか。

教員養成関係を例にとると、筆記テスト力量が高ければ、教師は務まるということで、教員採用試験も筆記テスト中心時代が長く続いてきた。それは、それまでの対人関係経験の蓄積を前提にしており、対人関係などは指導の課題にしなくてもよい、とみなしてきた背景がある。仮に弱いとしても、教育実習や教師になってから経験をとおして身につくものと考えられてきた。同じことは、他の分野でもいえよう。

ところが、ここ20~30年ほどで、事態が大きく変化してきた。対人関係の苦手がさが表面化してきたのだ。そこで対人関係についての特別の指導を行うことが増えてきた。

その際に、その指導の仕方が試行錯誤であるために、マニュアルを使用することが広がった。「挨拶」「電話対応」「敬語」などの「接客マナー」が典型的なものだ。

ファーストフード店やスーパーなどの接客マナーなどでは、だれがやっても同じ言葉・姿勢などが行われる。まるでロボットのように対人関係ではないようにさえ感じることがある。

そうした職種はそれでいいかもしれないが、多少なりとも専門性が要求されるとき、マニュアルだけではうまくいかない。というのは、相手の個性・要求必要などに対応してバリエーションがあるし、専門職自身の個性もある。さらに、同じ相手でも、時の流れの中で変化するので、対応も変化させていかなくてはならない。

そうした対応を「物語性溢れた」ものと、私は表現している。

そして、私の対人援助指導は、そうした要素を多分に重視している。最初は、マニュアル的なものを使うとしても、いずれ物語的に展開していくようにしていく。そのためには、さらに、私が長年言ってきた「相手の事実→分析→方針→実践→相手の事実→分析→方針→実践・・・」という繰り返しの中で物語をつくっていくということを重視してきた。

大学や専門学校、あるいは対人関係ワークショップで、私がおこなう対人援助にかかわるものは、以上のような考えが含まれている。

16日の沖リハの授業の「聴く・受けとめる」活動では、相手を変えながら、また「ねぎらう」「寄り添う」「向き合う」「安心させる」などといった多様な「聴く」場面について、実践を体験的に考えてもらったわけだ。

## 発信する

2014年04月26日

授業の雰囲気は、受講生たちのからみあい全体が生み出すもので、授業ごとに大きく変化する。特にワークショップスタイルの授業ではそうだ。今回は、とても明るく、笑いが絶えないクラスだ。数年前とは、大きく変化している。若々しい女性たちの笑顔と、それに呼応するかのような、(ちょっぴり年上が多い)まじめな男性たちのコメディアン的対応が絡み合う。

ボディランゲージでのテレが笑いで吹っ飛ぶ。吹っ飛びすぎか？

休息・生命・ケア・着実などの2文字単語を、ボディランゲージで表現し、同じ単語を表現している仲間を見つける活動。最初は小さな動作が、だんだん大きくなり、さらに呼応しあう中で、物語風になる。「生命」グループの出産=生命誕生の演技は至高。

そのあと、手どうしで、メッセージを伝える活動。さらに、課題を抱えながらもリハビリに乗り気でないクライアントを説得する言語聴覚士の演技と続く。

すでに、実際経験があるような絶妙なものも登場する。

まさに「物語」を作り出すようなものだ。

授業最後は、諸活動をまとめるキーワードを貼り出しての討論。写真は、貼り出されたキーワードをマップ化したものだ。

「伝」「発」などが多いなか「キャバ拡大」は、自分のキャバを拡大しようということらしい。このクラスは、沖りハらしく多様な世代の、多様な文化・キャラがからみあう面白く創造的なものとして発展していきそうだ。



## 身体全体で発し、感じ受ける

2014年05月09日

今回の授業では、人間関係を築くことについて学ぶことの意味を知るとともに、読み書き言葉を通してだけでなく、聴く話すこと、さらに身体全体で発し受けるということを体験的実感的に学ぶことをした。

授業最後に受講生が出したキーワードでは、眼・耳・口・手・伝・熱・気・流・・・などが登場した。

私が興味を感じたことをいくつか並べよう。

- 好きなペットの大きさ順で輪を作ったとき。カメが多いのにびっくり。いつもは猫・犬が多いのだが。
- ペットをかわいがる動作、疲れた自分自身をいたわり、元気を出す動作。このクラス特有の楽しい笑いのなかで展開
- 自分の身体から発しているものが強いところ探し。それらをお互いに感じ合う活動。頭、手のひらなど。これをきっかけに自分の身体の特性を発見していけるかな。
- 後ろ向きの人たちに、声をかけて、だれに声がかけられたかを発見する活動。声だけでなく、体、というか気持ちがその人に向かっていくことが、ポイントか。

照れて、ちょっと固まる人、照れをはしゃぐことで突破しようとする人、シンプルに伝え伝わる人など、さまざまだ。

職業としてクライアントに接するときに、こうした人間交流の基礎的な豊かさが、大切になるときがくるだろう。今後、発信受け止めが豊かになることを期待しよう。

次回からは、いよいよ、受講生自身がワークショップを展開する。楽しみだ。

## コメディ的に楽しくロールプレイ 患者との付き合い方

2014年05月02日

30日の授業は、すごかった。

リハビリに乗り気でないクライアントの自宅を訪問する複数の病院スタッフが、リハビリを説得するロールプレイ。家族の中でも、リハビリへの意見が割れているという前提で。

実に多様なものが登場したが、このクラスは、明るく楽しくコメディ風に展開するという「前代未聞」のドラマを演じてくれた。私も、久々におなかが痛くなるほど笑い、椅子から落ちかけてしまった。

いくつかのドラマを紹介しよう。

訪問すると、アスペルガー症候群の子どもが、スタッフにかまってくれるよう行動。そこで、スタッフは、二手に分かれて、クライアントも子どもも丁寧に対応。

リハビリすると、とてもいいんだということを、コメディ風演技で示して、家族も巻き込み、本人もその気になる。雰囲気勝負という感じ。

専門知識を、専門用語を使いつつもわかりやすく話して、その気にさせていく。

理屈よりも体を触れ合いながら、実践的に迫る。

諦めが強い患者に、夢と希望を膨らませながら、説得する。

こんなスタッフがいれば、クライアントは楽しくリハビリに取り組んでいくことだろう。

こういうロールプレイを毎年しているが、クラスの雰囲気で特徴がすごく変化する。今年は、まさにコメディアン風だった。病院でも患者宅でも明るく振舞って、暗くなりがちな患者の気持ちを変えて、治療効果を高めるだろう。

## 1年「対人関係」授業

2014年06月19日

今年からカリキュラムが変わり、1年生対象に4コマを担当することになった。2コマ連続を2回だ。

今年の1年生は、またまた新しいカラーだ。社会人が多いこの学科の歴史の中では、平均年齢がもっとも若いような印象だ。女性比率が高いのもこの学年の特徴だ。

それにしても、現2年生に負けず劣らずの元気者たちだ。行動力もすごい。当初予定の諸活動が半時間内にこなせるかどうか心配したが、杞憂に終わった。それどころか、次週予定の分までやってしまった。

入学したてなのに、言語聴覚士の仕事の世界に慣れ親しんでいるとまでいえそうだ。クライアントの子ども、あるいはクライアントの高齢者対象のロールプレイを創造的に展開する。今回はボディランゲージを含め、多様な行動的コミュニケーション活動を展開したが、びっくりし緊張しつつも、どんどん進めていく。雰囲気がいいというか、リズムがいいというか、難しいことも楽しんでやるのが好きというか、ともかくまじめ&ノリの世界だ。

小学2年生へのトレーニング場面では、実際に口型や音を示しつつ、とても楽しそうに、かつ褒め上手で進める。相手はつられて、うまく発声できるようになる、という感じだ。

頼もしさを感じた。

社会人の方は、いろいろな職業キャリアを積み重ねたうえでの今がある。高卒ばかりの方は、18歳でよくぞこの進路選択をなさったという立派さを感じる。進路選択を先延ばしする傾向が強い中、すごいことだ。

この両者の方がかもしかすハーモニーは、これまでの上級生にも感じてきたが、今年の1年生もまさにそうだ。

来週がどんな風になるか、楽しみだ。

最後に、授業で配布したプリントの冒頭箇所を紹介しておこう。

教育・医療・福祉などの専門家がクライアントにする働きかけの多様性と共通性

そのベースにある人間としての関係

専門家であると同時に、一人の人間として相手に接することのありよう

クライアントと専門家の成長は相互関係のなかで同時並行的にすすむ

同質と異質 異質協同 創造

「何を媒介にして」つながるか 直接の形だけでなく、いろいろなものを媒介にしてつながる

## 伝える気持ちが大切

2014年06月26日

25日、合計4コマ授業の後半を実施。「身体を感じ合う」「場面に応じて対応する」「誘う」といった活動を展開。このクラスの受講生たちは、驚くほど勢いがある。とはいっても、専門家としてクライアントに接する場面設定というのは、初体験なので、結構緊張している。伝えたい、説得したい、という気持ちが、「上滑り」になってしまうことがでてる。当然だろう。

そこで、いろいろな補助的活動を展開する。そのなかで興味深かったのは、「後ろから声を掛け」て、だれに声をかけたかを発見する活動だ。35年以上前の竹内敏治レッスンを、私流に展開してきたものだが、かれこれ1000~3000人ぐらいにしているだろうか。多すぎて、はっきりとはしない。

なんだかくりかえし、サンプル例をみてもらうなかで、ほぼ全員が声をかけた相手に届くようになった。ここまで到達することは多くない。受講生のやる気が反映しているのだろう。

振り返りの話し合いのなかで、どなたかが「伝える気持ちが大切」と発言したのが印象的だった。言葉だけで、身体がその人に向いていない、気持ちがその人が向かっていないと、伝わらないことを実感したようだ。

若い人のコミュニケーションは、「勢い」に頼ってしまい、静—動、拡散—集中、高ぶり—落ち着き、速い—ゆっくり、といったメリハリをつけるという点で、これからの修業が必要なようだ。「静かな」タイプの人で、ジワッと伝わる人もいる。30人を超すと、実にいろいろなタイプが登場する。それらを見る中で、自分なりに生かせる（パくれる）ものを発見し、自分なりのものにしていくことを期待したい。

短期であったが、実に充実した授業になった。若い人が圧倒的だが、同世代の若者と比べて、目指す職業が鮮明だということ自体が集中度を高めるようだ。そして、多様なキャリアをもつ社会人が多いことが、活動に深みを創りだしていると思う。

次年度以降の計画は未定なのだが、またの出会いを楽しみにしたい。





## 2013年

### 2人で[話す・聞く]際の位置・姿勢など

#### 正面向き合いだけでない

2013年04月18日

沖リハの2回目の授業。

討論当番の3人グループが、前回の授業のまとめを、写真のようなポスターでして下さった。前回の討論で登場した「異質共動」が注目ポイントだった。それについて、私はこんなコメントをした。

言葉というのは、受け継いで使用するだけでなく「創る」ものもある。昨年の授業では、「つながる」について「繋がる」という従来の漢字ではなく、「継がる」という漢字を使うという、新しい創造があった。

今回は、従来使われていた「共同」「協同」「協働」のいずれでもなく、「共動」という新しい漢字が創造された。興味深いことだ。

ところで、どの授業でも討論場面で、私の知らない言葉が続出する。若者文化で広く使われているらしい。今回の授業では「チラミ」というのが登場した。私だけが理解していないようだったが、聞いて見ると、「ちらっと見る」ということだそうだ。面白い。

さて、今回の授業では、ペアになって、「愚痴話」か「自慢話」を相互に話し聞くシーンをした。将来、専門家として、クライアントとペアで話をすることが多いことを想定してのことだ。多くの場合、向き合って、専門家がクライアントの話を聞きつつ、診断をし指示を出すという関係で話が進みやすいが、リハビリの場合には、クライアントの自発性を引き出すようなありようを追求する必要がある。

そんなことを想定しつつ、ペアの位置や姿勢を自由につくってもらった。

そうすると、2組だけが正面に向き合う形を作ったが、他は多様になった。横並びが結構多かった。向き合い型の2組も、きちんとした姿勢でというよりも、膝を折り曲げてなどして、「緩衝」的な空間ができるような工夫をしていた。

これまでだと、正面向き合いが標準とされてきたが、相手との関係に合わせて、「協同」？「共動」？がしやすい形を創造する方向で、受講生が動いていたことが印象的だった。

### 学生と教員たちの物語が連なると、教育が着実に前進する

2013年05月02日

30日の沖リハでの授業は、「患者・家族と話す」場면을素材にしたロールプレイを通して、患者との関わり合いを考えた。即興劇なのだが、実に上手い。役者経験があるのではないかと、思うほどの受講生がたくさんいた。そこまでではなくとも、『ひかないで』積極的に役割を演じる人ばかりだった。これまでなら、たじろいで「ひいてしまう」受講生たちを何とか乗せていくことに、私は力を注いでいたが、今年は、高度な演技へのコメントに精力を注いだ。

「どうしてか」と不思議に思い、受講生に尋ねた。これまでは、こうした授業をするのは、私と同じく沖リハで授業をしている浅野恵美子だけだったのが、他の授業などでも、こうした経験をもつようになったことが、理由にあげられた。

そんな成果だろうか、受講生間の人間関係が、穏やかではあるが、濃密になっているようだ。どこの学校・大学でも、20~30人以上になると、いくつかのグループに分かれて、グループを中心にした人間関係が強くなりがちだが、このクラスでは、グループもあるが、グループ間の壁は薄そうだ。

そこには、学生相互が、苦勞をこえてつながり合う姿、学生間の関係をサポートし、授業のありようを工夫している教師の姿が、投影しているようだ。

定員30人の言語聴覚学科は、そうした人間関係を作りやすい条件にある。学科のなかには、同一学年だけでなく、上下級生を含んで、人間関係を育む条件が強力に存在する。加えて、社会人学生が多く、多様な方々の世代間協同を生みやすいのも好条件だろう。

そうしたつながりやすさを生かした物語を豊かに育むことは、教育にとって大変重要なことだ。

というのは、学年定数が、数十人どころか、数百人になるような学校では、授業で出会う人も未知の人が多いことがしばしばだ。そういうクラスを私が担当する場合、授業開始当初の数回は、受講生相互の人間関係を育てることにかかなりのエネルギーと時間を使わざるをえない。

とくに、学生の「個人化」の進行が著しい最近では、このことが重大事項になっている。授業開始当初、「私の授業についての噂でもいいから、事前情報を持っている人は手を挙げて下さい。」と尋ねると、かつてはクラスの半数以上が挙手したが、いまでは数人、ときにはゼロということもある。

教育というのは、学生側にしても教員側にしても、その学校における物語を引き継ぎ、創造し、伝えていくことを背景にして展開される。その物語が豊かなところでの教育効果は絶大だが、希薄なところでは、授業がテレビ番組型とか講演会型になり、教育効果が浅くならざるをえない、という重大な問題が生じる。

しかし、学校関係者がこうした問題に着目することがとても少ない。残念なことだ。

## 「自分と向き合う」「相手と向き合う」「意外性」「楽しい」「否定しない」

2013年06月12日

沖縄リハビリテーション福祉学院言語聴覚学科2年生対象の10回のワークショップ型授業「実践教育学~対人援助とコミュニケーション~」が終了した。最後の授業の最後の5分間で、受講生に私の授業についてのコメントをかいてもらった。

私の授業を、受講生がどう受け止めているか分かりやすいので、それらの一部を紹介しよう。

- ・先生は否定をすることはあまりなく、それをどうとらえればマイナスにしなくてもいいかと、見習う所でした。
- ・この講義で自分と向き合う事ができたと思います。
- ・人の面白さを知ることが学んだ授業でした。
- ・先生は、授業中に絶対に否定的な発言はしていなかったことが、とても印象に残っています。どの講義よりも失敗を恐れず、自分の考えを行動化できる講義でした。先生の発言の仕方は、人と上手に関わって行く手本になると思うので、参考にして良いSTになりたいです。

- ・グループワークを行った後に、キーワードを付箋紙に書いて、グループにまとめさせるというのが、次の課題になったりとかしたので、付箋紙システム好きです。
- ・コミュニケーション創造にチャレンジし続けている姿が先生の笑顔にも表れているようです。
- ・普段の授業からは得られないような経験を得る事のできる貴重な時間でした。
- ・私自身を知ることができたので、いい「気づき」や「経験」になりました。
- ・いつも先生の意外性のある一言二言が、聴いていて楽しかったです。
- ・新しい自分を楽しみながら発見することができました。
- ・主観的な自分ではなく客観的な視点からの自分を知ることができました。
- ・私は自分の意見を言うのが得意ではなく、集まって何かをするという事も苦手でした。でも、この授業は楽しく皆と意見交換ができたので、前よりは克服できたかなと思います。
- ・先生は漢字をまちがっても“スゴイ”とほめてくれます。その自由な発想がとてもステキだなと思いました。
- ・相手と向き合う事、自分と向き合う事ができて90分の講義の間でたくさんのいろんな感情になれました。そしてその感じたことや学んだことを自分のなかで終わるんじゃなくて最後に皆の意見も聞いて、常に相手の事を考える事ができて、楽しかったし、新しい発見をすることができました。
- ・いつも私たちをおもしろい世界へ導いてくれてありがとうございました。
- ・自分が相手を見ているように、相手も自分を見てくれているのだと気づけました。
- ・浅野先生の発言は、常に根底に「医療従事者としての視点を持って患者さんに接しなさい」というポリシーが感じられます。
- ・この授業は身体を動かしたり、人の考えを聴いたり、何かを創ったりと、他の授業と比べたらとても楽しかったのですが、私はやっぱりこの授業の目的はなんかがわからなくて“なんだかな〜”って思っていました。そういう講義もありかな？ そういうグレーに慣れるっていうのも自分の成長には必要かなって思いました。
- ・ワークショップは自分を知ってみがく、人と関わる事を中心にしたものだったかなーと思いました。同じクラスでも分からなかったところや、同じクラスだからこそできたワークショップがあって、クラスっていいなって思いました。人間的な部分をクラスで養っていきたいと思う事が出来ました。

## 2012年

### 「継がる」 新語誕生

2012年4月14日

13日は、沖縄リハビリテーション学院言語聴覚学科の新年度第一回目授業だった。

今年の前期は、なぜか週に三回も授業することになった。だから、少々疲れ気味になりそうだ。だが、始まったばかりの今週は、多様な新鮮な出会いばかりで、私にとっては「充実し過ぎ」な感じ。

それにしても、4月と言うのは、受講生たちは皆、新鮮と言うか、新しい雰囲気満ちたパワーを出してくる。

第一回目の授業は、授業の導入と、「つながる（繋がる）」をテーマにいろいろな活動をする。受講生との出会いのなかでつくられる授業なので、授業の中味も進行も、新たなものになる。当初予定は例年通りだが、実際は、従来にないもののオンパレードになったしまった。私の授業が2回目になる受講生は、昨年とは7~8割異なったものになってしまったので、驚いたかもしれない。

今回は物語づくり中心の進行となった。「やばいST(言語聴覚士)」が「成長」し「幸せな」STになって行く物語が、グループごとに興味深くつくられていった。

最後のまとめで、全員が感想・発見などをポストイットに書いて黒板に貼りだし、それをもとに全体討論するのだが、そのなかで、「継がる」という新語が登場した。「繋がる」だと、ひもで結んで繋げるイメージだが、「継がる」は、前の人の話を次の人が「継げて」次の物語を創る、と言うようなイメージになる。なるほど、と思う。

第一回目の授業が、どのように、第二回目の授業に「継がって」いくのか、楽しみだ。

### 聴く 人間関係の豊かさ

4月21日

今回は、「受け止める 聴く」を中心に活動した。

この活動をすると、多くの人にとまどい照れて、少々時間がかかることが多い。しかし、今回は順調に進んで時間のゆとりが生まれるほどだった。そこで、「話す」「聴く」役以外に『三人目』役を設定して、3~4人で場面設定した活動を、新規バージョンで取りくんでみた。

順調にすすんだ理由の一つは、受講生相互の人間関係がかなり蓄積されていることにあるようだ。「聴く」タイプの人も、かなり会話に花が開いたとのこと。「自分は結構、話すタイプでもあるな」と気付く人もいた。

それに受講生の多様さが豊かさにつながっているようだ。人生の苦難をいくつも越えてきたことがプラスに働いているのだろうか。

これらが重なり合って、と言うか、響き合って、人間関係の豊かさの「オーラ」がでているような感じさえした。

この先、「オーラ」を自覚的な力・感性にしていくよう期待したい。

それにしても、活動中の、実に多様な笑顔がステキだな、と思った。



## 身体で発信し、読み取る

4月28日

今回の活動は、つなぎあった手や身体表現を通して、発信するものを中心にした。最初は緊張と戸惑いがあったが、やることを通して、豊かなものが溢れてきた。派手そうに見えない人が、恥ずかしそうに演ずるのが、好感を引き出しつつ、豊かなコミュニケーションを生み出していった。「本日のヒーロー」は、そんな方々だというのが、もっばらの意見だ。

ペアとかグループを毎回多様な組み合わせでつくって活動することが、同じクラスでありながら、これまで知らなかった世界を新たに発見創造しているようだ。それが、クラスの雰囲気にも暖かいものを生み出しつつもあるようだ。

90分足らずだが、時間とともに表現が大きくなり、分かりやすくなっていく不思議な世界でもあった。最初は、「探り合い」的なコミュニケーションだったものが、だんだん率直な表現になっていく。毎年だと、数回かけてわかりはじめるものが、今回はなぜか3回でほぼ分かり合った。

今回の活動を文章表現することは難しいし、写真やビデオで撮影しても難しいだろう。人間関係の展開とはそうした面を多分にもっている、といえよう。

もう一つ私の感想。前向きのトーン、そして協力のトーンがとても強力にできはじめた、という印象。

## リハビリを渋る患者をチームで説得するロールプレイ

5月12日

今回は、6人グループ内で役割を交替しつつ、「リハビリを渋る患者・家族をチームで説得するロールプレイ」を展開した。

言葉によるリクツだけに頼らず、いろいろなものを総動員して患者に役立つリハビリへと誘っていく。その際、患者と患者を取り巻く家族のありよう、また、説得する専門家自身の特性、さらに、専門家チームメンバーの特性などを勘案して、ステキな関係を作り出していくことが求められる。

その場面のポイントを各グループに提出してもらったが、適切なラポートという言葉が繰り返し出てきた。また、「押しの強さ」「スキンシップ」「優しさという雰囲気」なども話題になった。多様な「技」の引き出しをもってかかわっていけるようにしたいものだ。

ところで、この授業をしている沖リハ言語聴覚学科は、こうしたロールプレイなどを含む学びの展開にあって、大変有利な条件がある。それは受講生の多様性ということだ。性別年齢別社会経験が様々なのだ。すでに子育て経験を持つ方もおられる。医療機関で働いた経験をお持ちの方がおられたこともある。

そうした多様性は、多くの大学や専門学校と比べると、図抜けている印象だ。日本の学校システムでは、生涯学習的な要素をもつ、こうした実学を展開する学校が少なすぎる。対照的なのは、このブログでも繰り返し紹介しているフィンランドだ。40代50代になっても、新たな専門性を獲得するための生涯学習を展開できる社会的ありようが日本でも広がってほしいものだ。

こうした点で、言語聴覚学科は先駆的かもしれない。ただ、フィンランドがこうした学校での学習は、国・自治体予算によって無償だが、日本では本人負担になるので、希望をもって実現できる条件が狭い点は残念だ。

## 自分の考えを持ち、自分を押し出しつつ協同する

5月19日

今回は、身体を感じることを、発信することを中心にすすめた。

ここでは脱線して、ふと思ったことを書こう。

相互にコミュニケーションをとるという活動をする時、『照れる』という文化が染み付いている人が結構いる。いいかえると、自分を押し出すことをためらうという文化だ。できれば、押し出さずに、事の流れを誰かがやってくれるのを待つ、自分はできあがったその流れに乗る、というものだ。

自分から押し出すのは、たとえば職業上、押し出さずにはいられなくなった時に先延ばしする、とってよいかもわからない。

そうした姿勢が美德だと、しつけられた人さえいるかもしれない。

自分をどんどん押し出す人は、恥を知らない人、遠慮を知らない人だ、と見なす発想さえある。それをKYだとみる文化すらある。

だが、世界の色々なところに出かけて、それが通用なくて、困ってしまったという話はしばしば聞く。こんな話を30年前に、本で知った。父親の転勤でドイツ生活を始めた小学生が、テストなどでトップクラスの成績なのに、「成績簿」には最低の評価がかかれていたので、母親が教師に質問抗議にでかけた。

教師はいう。

「お宅のお子さんは、テストでは良い成績ですが、授業中は聞いているばかりで何も発言しません。クラスに何も貢献していないのです。ですから、厳しい成績をつけざるを得ません。」

世界的な動きが広がり、人々の交流も広がり、多様な人々と交流協同ができるかどうかが重要になっている今日、そうした姿勢力量経験をどれだけつけているかが問われる時代だ。ウチの世界だけ通じるコミュニケーション、「KY」などと言っておられる時代ではなくなっていきつつある。それが通じるのは、身内の世界だけかもしれない。もしかすると身内のはずの親子などの家族の間でも、それが通じない時代になっているかもしれない。

私の授業では、どこの大学・専門学校でもそうだが、自分の考えを持ち自分を押し出しながら協同していく姿勢・力を強めることを願って、授業構成している。

かなり余談でした。

## 「専門家の失敗」を防ぐためのワークショップづくり

5月26日

今回は、多様な専門家がする失敗を集め、失敗を次の成長への糧にし、また失敗を予防するためのワークショップづくりをした。

集まった失敗例をいくつか紹介しよう。

患者さんに点滴をした際に、だいたいの終わる時間を告げていたが、その患者さんはきっちりとした時間で終わらないと不満のある人で、クレームが来た

2時間の検査を4時間かけてしまった

注文されたものを誤って違うものを出した

飲み物を作る時に、分量を間違えた。

小学校低学年の子どもと会話中に、大人と会話するように話してしまった

おつりを間違えて渡した

上手に話ができないお客さんの話を、正しく受け取ることが出来なくて、怒らせた

これらをもとに7グループに分かれて、ワークショップづくりがスタートした。  
多様なワークショップを、実際に次次回以降実演する予定だ。

## 説得する

6月2日

8つのバージョンで、やりました。

今回の受講生の実演を見ながら、私の発見事項を並べましょう。

- ・ベースに暖かいものを持ちながらの進行でした。  
実際の場面では、そのベースをどう作り出すかがポイントになりますが。
- ・対象者が「目を合わせ」てくれたら、すでに半分は成功ということが、実際には多いと思います。暖かい雰囲気が流れると言うことは、その前提を作ってくれるものですね。
- ・言葉に頼り過ぎないことが重要です。必要な情報を絞って、それを印象的に提示すること、それが今回の成功例に共通していましたね。
- ・相手を動かすことがポイントになりますので、「押せ押せ」だけでなく、相手が反応をゆったりと出していける間（ま）を大切にしたいものです。
- ・説得と言うのは、相手が物語づくりを積極的な方向で始めるということです。その相手の物語づくりを引き出すためには、説得者自身の物語を作り出し、相互の物語に転化していくことが焦点になりますね。  
説得者側だけが正しいという態度では、「折伏」「お説教」になってしまいます。

今後の創造に期待しています。

次回からは、いよいよ受講生が展開する『専門家の失敗予防』のワークショップです。楽しみにしています。

## 受講生が作るワークショップ

6月9日

今回、3つしましたが、いずれも準備、そして配置・進行など、初体験とは思えないほど「洗練」されていました。

次にこうした機会がある時には、ワークショップの狙いとの関係をより鮮明にし、また、参加者がワークショップを通して発見創造したことを確認深化し合うプロセスを作ってみてください。

日ごろの行事（お出かけや食事会など）で活用する方法もあります。

さらに深化すると、進行過程で参加者の対応を見守りながら、進行を変化発展させていくような用意をしていきたいものです。

こうしたワークショップを、職員間の協同と、仕事の深化発展に使えるようにしてほしいものです。数年先の事になり

ますが。

今回は、楽しさが前面にできるものでしたが、超マジな、あるいは超ハードなワークショップもあります。いろいろと挑戦してみてください。私の他の分野でのワークショップに顔を出して下さるのも面白いかもしれません。

## 専門分野に生かせそう 受講生が創るワークショップ

6月16日

リズムカルに、かつ要を得たワークショップが、前回3つ、今回4つ展開された。

みな『専門家の失敗』への対処策として考案されている。注意力を高めるトレーニング、場面に応じて集中と拡散をつくる活動、「空気を読む」ことの大切さ、失敗しないためのロールプレイ。

皆、とても楽しく進行した。

各々がワークショップ展開のうえでの重要な課題を提示しているので、その意味発見確認を、次回のまとめの授業ですることになった。

今年の学年特性は、一人一人の存在感・個性が伸展してきていることにある。4月と比べて、大きな成長を感じる。そうした一人一人が豊かなチームワークを築き高めてきていることを実感する。

次回は最後のまとめの授業だ。

## 楽しく盛り上がり終了

6月23日

毎年、ドラマ的に終了しています。それがまた新たな物語を創ります。

今年は、4月最初、いささか心配な感じでしたが、最後はすごいものでした。特に受講生によるワークショップづくりはよかったですね。

最後に希望者に書いてもらったミニレポートのごく一部を紹介します。

出していない方でも、何かあればコメントで追加記入して下さいこと歓迎です。

授業全体を通して級友から得た有益なこと

- ・みんなの笑顔が良かった
- ・アイデアよい
- ・皆が主人公
- ・元気いっぱい
- ・進化
- ・人の数だけ色々な考え方がある
- ・何でも挑戦すること
- ・みんなはいつも授業後の休み時間は疲れて寝ていたりするのですが、浅野先生の授業後はみんなスッキリした顔でイキイキしています。やっぱりみんなと楽しいことを共有することはリフレッシュにもつながるのだと感じました。
- ・自分の考えを常に持つておくこと。
- ・相手を常に知ろうとする姿勢がコミュニケーションにとって必要。
- ・相手の立場になって考えるためには、色々な人生経験が必要だと思いました。



授業全体を通して浅野から得た有益なこと

- その場の雰囲気や臨機応変にワークショップを変えていく
- 自分の意見をいうことでワークショップは良くなる
- リハビリは相手を上手く乗せる事が大切
- 何事にも新しい考えをして楽しむことと、みんなで何かを共有する一体感やつながりの魅力
- 人前で話をする時のやわらかさ
- いろんな方向から物事について考え、とらえる。

夕、受講生5人が我が家を訪問。楽しい語り合いの場になった。

## 2011年

### ノリのいい沖リハ授業「コミュニケーションと対人援助」スタート 4月13日

年に10回、4~6月だけの授業。学校の雰囲気は、きびきび、そして明るい。

そして、何と言ってもいいのは、受講生が多様であること。年齢が多様であるだけでなく、性格・人生経験も多様。だから、ワークショップには絶好の構成だ。その多様さが、発見・気づきを多くするし、ノリをととても良くする。受講生のもっているものが豊かになるように、進行役の私もさらなる工夫が求められる。進行計画は前年までと大きな変化はないのだが、受講生に応じたアレンジが、たくさんになってしまう。

物語づくりが一つの柱だが、それは言語聴覚士の仕事の性格にもかかわる。言語聴覚士の助けを得ながら、クライアント自身が物語を作りつつ回復をはかるといふ過程にかかわるからだ。機械的に対処するというだけでは、うまくいかない。

その意味では、言語聴覚士は、ドラマ(物語)の演出兼役者的な性格をあわせもちたいものだ。

第1回目授業は大変な盛り上がりだった。これからが楽しみだ。

受講生の皆さん、よろしくお願ひします。

### テンポよくまっすぐに 今年の沖リハクラス 4月26日

当初予定が10時5分には終了。そこで特番。

それくらい、今年のクラスは、いろいろな取り組みが、てきぱき進む。

かなり照れがでそうなことも、軽いアイスブレイキングで突破し、本題の活動へ。

表現も豊かだ。

そして、ワザ面でも的を得た指摘がたくさん出てくる。

そこで、当初計画を、さらに積み上げる授業プランを作ることにした。

人生経験が多彩な人が多いと、発見が多い。この後の展開が楽しみだ。

### 患者のつながりに注目しながら取り組む専門家たち 5月10日

ロールプレイで、患者を取り巻く人間関係に注目しながら、スタッフがどう対応したらいいか、考えるのが今日のテーマだった。

発表を重ねるごとに、対応の深みが増していくものとなった。

今年の受講生は、動きが早い事に特徴がある。そろそろ欲張りな動きがでてくるかもしれないな、と予測している。

欲張りな動き、というのは、先への布石になるようなものだ。今年は、受講生が作るワークショップの時間を2回とり、可能なら全グループがワークショップを担当するようにしたい。そのワークショップへの布石・提案を大いに期待しているところだ。

## 「神業」的「身体で発信・受け取る」

5月17日

身体から発するものを、他の人が感じる活動。

他のクラスでは出なかった、「首の後ろ」とか、新しいものが登場。その人たちなりのものがでてくる。

背中から話しかけて、誰に伝えたかを発見する活動。

自然体のなかで、感受性豊かなコミュニケーションが展開。横向き・後ろ向きなのに伝えられた神業を、30年ぶりに、私は見た。

身体性、感受性豊かなメンバーたち。

次の課題である「専門家の失敗」集め、そしてその改善のためのワークショップづくりへと進んでいくが、楽しみが多い。

## 「専門家の失敗」対処のためのワークショップづくりへ

5月24日

今日の授業はまず、受講生が、専門家へのインタビューで得てきた「失敗例」をグルーピングした。

気の使い過ぎ系 間違い系 A (対人) やばい系

無意図の失敗系 コミュニケーション系 間違い系 A (商品)

今年の例は、多彩で、ひとひねりが多い。

その対処策として、ワークショップをするとしたら、どんなワークショップをするか、それが次の課題。

ロールプレイで失敗例を提示して、その改善策を考え、ロールプレイしていく、などの流れで進める案などが出てきている。

## 優しく気遣う型の誘う—断る

5月31日

断られても、人間関係がギクシャクしないように、「優しく気遣う」型の「誘う」スタイルが、目立った活動になりました。最近の、とくに若い女性に多い、人付き合いのワザのようです。

他には、優しくはあるが、ひかれてもめげずに、繰り返し軽いトーンで迫り続ける型も目につきました。

「誘い」型、リーダーシップの取り方も時代変化が著しいようです。

〔内輪〕文化の作法といった感じでしょうか。異質の人と出会った時には、どんな作法をするのでしょうか。「治療」的人間関係は、世代とか立場とかがすごく異なる人の場面が多くなります。いろいろと試み、創造していきましょう。

## 受講生がつくるワークショップ 楽しいドラマ

6月7日

三つのグループに、自分たちが作りコーディネーターになってすすめるワークショップをしてもらいました。

コーディネーター体験があるのかな、と思わせるほど、自然な流れで、コンパクトに進行しました。時間の制約があるため、ワークショップの活動から引き出せるたくさんの発見を、含みをもって終わる形になりました。しかし、二次ワークショップをすると、さらに深く広い発見ができそうな印象を受けました。

来週のワークショップがさらに楽しみです。

## 伝言で絵を送る ワorkshop作り 6月14日

私が出会ったことのないような新しいグループ分け方法（アットランダムに配布された動物の絵をジェスチャーで示して、同じもの同士が集まる）、記号めいたもので描かれた顔の絵を、口による説明で、「伝言ゲーム」をする、など、大変興味ふかいものが提出されました。

※ 後者の絵（元絵が3と4の間のもので、両側が伝言後の絵）を写真で紹介します。

いよいよ本格的なワークショップづくりですね。

それだけに、ワークショップをどうコーディネートしていくかが重要になります。そこで、活用したいアイデアや留意点を中心にふりかえりの討論をしました。

そこで、今回のプログレポは、最後の④として、今日、自分が書いて貼り出したポストイットのうちの一つについて、より進化(深化)したコメントも書き加えて下さい。



## 本格的ロールプレイで終了

6月21日

受講生が作るワークショップの最後は、本格的なものだった。20分ではなくて、2~3時間かけてやれば、深く広く患者・患者家族との応対、専門家チームの協同作業のあり方を、考えることができるものだった。機会あれば是非とも、本格的にやってほしいものだ。ロールプレイを通して、発見創造できるものをふりかえる場を上手にコーディネイとすれば、学ぶこと大だ。

今年のクラスは、とても行動的で創造的だった。それらを一層知的な財産にしていけば、相当なものになろう。毎年のクラスのユニークな個性に出会うのが、私にとっても楽しみだ。

また、どこかで再会できることを祈っています。我が家にも遊びに来て下さい。



## 2010年（一部掲載）

### 来年以降受講する後輩への受講生の一言集

6月25日

「対人関係とコミュニケーション」の授業、本年度は、無事終わりました。最後に、次年度以降受講する学生への言葉を、一言ずつ書いてもらいました。

- ・普段経験できないことを色々できます。楽しみながら頑張ってください。
- ・楽しみながら自分やクラスの人意外な一面が発見できる凄い授業です!
- ・みんなと関わる事が出来て毎回色んな発見があるのでとても楽しいです。
- ・自分自身やクラスメイトの見えなかった一面が垣間見えると思います。楽しんで下さい。
  
- ・ワークショップを通じて自分の事、クラスメイトの事がよくわかる授業だと思います。
- ・自分再発見ができて、たくさん笑える講義です!ぜひ楽しんで下さい!
- ・この授業は自分をはじめ、クラスメイトの知らなかった一面が発見できる最高の授業です♪
- ・新しい自分が発見できる楽しい授業です。何も構えず、気楽に参加してみてください。
  
- ・自分の殻を破ることができる授業なので、楽しんでください。
- ・普段見えないクラスメイトの一面が見えてより仲良くなります。
- ・自分でも知らなかった新しい自分を発見できるかもしれません。まずは気楽に授業を楽しんでみてください。
- ・新しい自分・新しいみんなを発見できる最高に楽しい授業です♪
  
- ・なりきると面白いと思います。
- ・「とにかく楽しむ」これに尽きると思いますッ!!
- ・どんどんいろんなこと発見しちゃってください。
- ・ワークショップを通して色々学んでください!
  
- ・楽しみながら内容を掴めるすごい授業です。自分にはない新たな発見に気づけます!
- ・コミュニケーション能力が上がる授業なので頑張って下さい。
- ・たぶんだけど、超楽しいよ!
- ・めちゃ楽しい授業ですよ!
  
- ・ワークショップの楽しさがわかる授業です。たくさんの発見があると思います。
- ・素の自分で楽しんで下さい!
- ・発見、想像、を繰り返しながら楽しく行おう!
- ・ワークショップが苦手な私でも楽しくできました。やると少しは意見が変わると思うので楽しんでください。
  
- ・この授業は本当に自分のためになります!その上楽しいです^^♪

- ・楽しく勉強になる! この授業は本当に自分のためになります!
- ・とにかく楽しんで、いろんな発見をして下さい!
- ・とても楽しい授業で、気楽に受ける姿勢が大切です。

## 2009年 (一部掲載)

### 学生による授業評価

7月29日

※ 文中 STとは、言語聴覚士のこと

#### 感想

\*感想ですが、1番はやっぱり『ロールプレイは良い』、ってことですね~。ロールプレイ苦手な人も結構いますが僕にとっては楽しかったです。自分を表現できるようになりたい、という思いがあったので、コ対援の授業はとても自分自身が成長できる場になったんじゃないか、と思います。

2番目はそれを通じてこのクラスが成長したのではないか、ということです。1回目と比べてとても表現力がついたらなってつくづく感じています。

- 1) 本当に、今まで経験できなかった感覚を味わえたり、多くのことを学ぶことが出来、本当に楽しかったです。
- 2) クラスの人の、普段聞けない話が聞ける、すごく素敵な時間でした。
- 3) 授業ではロールプレイングが中心で、毎回ドギマギして、不完全燃焼になってしまったのが、すこし残念です。

- ・毎回、授業が楽しみでした。
- ・授業が発見ばかりで、特に一人一人の個性が見れた様な気がします。
- ・ロールプレイや絵を描いてストーリー作りなど表現することが多い授業で、創造が広がる授業だったと思います

1) 今回の講義で新しい自分自身を発見したように感じました。それを認めない自分と認めようとする自分の葛藤がありました。

2) クラスのみんながとても情熱的なこと

3) 色々なロールプレイを通して対人関係のあり方、人との接し方をすこしでも学べたこと。特に実際にロールプレイで行った場面に遭遇したときのことを考えるとやっつけてよかったと思う。後は学んだことを自分にどのように還元していくか、ゆっくり少しずつ出来たら良いと思います。

- ・毎回、毎回、人前で表現する課題を与えられ、とても恥ずかしかったですが、いい経験になりました。
- ・自分を表現することは、慣れていない人にとって、すごく怖いものだと思います。  
見ている側でいた頃にはわからない、孤独や、不安があって、「自分は何かおかしいことをしていないか、変なことを言っていないか」など、

自分の頭の中で、反省会議が行われることも多々あるかと思います。また、人は不安になると、他人の評価が気

になるものです。

他人の評価を乗り越えられるくらいの、強い精神力を私も、みんなにも持って欲しいと思いました。

①この授業では、クラスみんなが、私自身では思いもつかないような考えを出したり、ロープレとして表したり、その演技力、行動力に驚かされる事ばかりでしたが、またそれも一人一人に違いがあり感心させられました。ただ、私自身、大勢の前で話したり演技する事が苦手な為、このワークショップという形態への抵抗感は拭い去ることは出来ませんでした。授業で出される問題・課題を、みんなで考え・解決に向け意見を出し合うことで、動き出す事が出来、協力する事についての大切さを感じる事ができました。積極性を発揮することは出来ませんでした。授業が受けられたことは大変良かったと思っています。

②みんなが行う発表、ロープレはドラマや演劇を見ているようでした。笑えたり、感動的であったり、驚かされたりで楽しかったです。

- ・コミュニケーションの楽しさとバリエーションの多さを学びました。
- ・自分では、はっきりと気づいていなかったことが分かって良かった。
- ・自分に自信が持てなくなっていたけど、この授業を通して再び自分に自信が持てるようになりました。

1. 授業開始前から教室に入り、みんな（生徒）の中に自然に溶け込みながらのスタートする形が、この授業に必要な工夫だったと思いました。

2. （1コマ前・通常の授業と）ガラッと雰囲気を変える「話力」を感じました。

例；語尾を伸ばしながら話すスタイル！

3. 強制せず、かつ、テーマ遂行のための軌道修正はすごい！の一言。コーディネーターの技の一つを実感しました。

①ワークショップは自分が仕切るのではなく、参加者の方たちを中心にして行なうものだということがわかった。

②『演技を行う』ということに少しずつ慣れた気がします。最後に行った『理想のST』になれるように頑張りたいと思いました。

③なにを行うにも『時間配分』が大切だということ。実際に計画を立てたものの、上手くいくか非常に心配でした…。

今回、15回の講義を通してとても多くのことを学ぶ事ができました。私自身、人前で発言するのは苦手だったのですが、その点が改善されました。あげくのはてには、みんなに感想で演技がうまいって言われるまで（笑）この授業で大切なものが得られたので、これからうまく活用できたらいいなって思っています！！本当にありがとうございました★

・今までにないほど楽しく、これからの自分にとってプラスになる授業でした。授業を受けて自分の内面を見つめることの多く、涙を流す人もいたりと自分を含めみんなの成長しているなど感じた授業でした。ありがとうございました。

1) その日その日レクレーション気分でいろいろなことを楽しみました。ただ単に遊んでいるように思えるのですが、よく考えると大切なことを行ってきたと思います。他の人の意見を聞いたり、協力する、提案する、良いところ探しなど様々なことを行ってきました。また一つ前進することができました。

2) 先生はいつも、時間内にやるべきことができ、みんなをまとめていて凄いと思いました。私も私なりのコーディネーターを作っていきたいと思います。

一番最初にこの授業が始まったとき「ああ～嫌だなあ…」と思ったのが本音でした。「ロールプレイ嫌だ…」と思いました。すいません。

でも、1回1回ずつ回を重ねていくと授業が始まるまでは億劫だけど始まってしまったら授業にどっぷりはまって楽しんで自分を発見できました。あまのじゃくな性格だなと自分でも思いながらほんとに楽しめた授業でした。無理やり授業やっている、させられているという感覚がなくて先生の話すこと、みんなで意見を言うことが自分の中にすんなり入ってきました。今まであまり経験したことのないようなクラスの雰囲気（高校、大学とあっさりし過ぎというか、自分の意見を言わないので…）なので楽しくできました。先生もブログに書いてあったと思いますが、ほんとにいろんな人間模様が見れるクラスです。

前期15回という短い期間でしたが、今まで受けたことのない授業形態で、また、自分の新しい一面を発見することができたよい授業でした。ありがとうございました。

浅野先生の、ゆるーくしつつもみんなを上手くのせるコーディネートぶりにはいつもスゴイと思いました。

また、講義でもそうですが、お宅にもおじゃまさせていただいたときのロールプレイングでは、今までのこととこれからのこと、いろいろ考えさせられることができました！！

- 1 この授業を受けて、ロールプレイの楽しさが分かりました。
- 2 クラスのみんなと普段話すことのないテーマで話すことが出来て楽しかったです。
- 3 毎時間いろんなことを感じ考えることが出来ました。

こんなに楽しいロールプレイの授業は初めてで新たな自分を発見できました。みんなと今まで以上に仲良くなれた気がします。

1. ロールプレイのなかで身につけたものを現場でも、出せればいいと思いました。
2. 相手の気持ちを深く考えるきっかけになったのかなあ～と思います。
3. 自分自信を見つめる事ができました。

- ・ロールプレイの楽しさを知って良かった！！
- ・クラスメイトの本音が聞けて、このクラスメイトがいつそう好きになりました(^o^)/
- ・1番の思い出は、浅野先生のお家に招いて頂いた事です☆☆とてもステキなお家でした♪♪頂いたパパイヤとシソ美味しかったです!!ありがとうございました☆☆

私は、この度浅野先生の講義を受けてとてもたくさんのものを得る事ができました。いろんなテーマで自分を表現していくうちに、「人に自分の気持ちを伝えるのには様々な表現方法があるんだな。」と思いました。それは自分自身の経験からも生まれたのですが、やはり、STS のみんなの伝えようとする「心」を感じる事が大きな成長を与えてくれました。

私の表現する姿というのは、皆に緊張を与える事が多かったと思いますが、「とにかく前に出てみる。声に出して伝える。」を目標に自分を表現していました。これは恵美子先生の時から頭に入れていた事だったのですが、ますますいい意味で成長できたのではないかと考えています。



そして私にとっての表現方法の一つとして、三味線は欠かす事のできない重要なものである事を再認識できたのも、とてもいい経験だったと思います。それは私のごちない演奏を、聴いてくれた皆が居たから感じる事ができました。

言葉は確かに重要なものですが、自分の思いを伝える事はそれだけでは物足りない気がします。自分を様々な形で表現しようとする「心」が大事で、それを見つけるのには浅野先生の講義を受ける事がきっかけになると思っています。また是非、沖リハの校内で浅野先生をお目にかかりたいと思います。ありがとうございました。

この授業はとってもしっかり楽しかったです。金曜日じゃなくて月曜日にあったら一週間他の授業も頑張れたなあと思いました。そして、みんなのいろんなところがわかったし、自分も少しは成長できたかなと思います。

こんなに楽しいロールプレイの授業は初めてで新たな自分を発見できました。みんなと今まで以上に仲良くなれた気がします。

1、ロールプレイの楽しさを得ました。 2、毎回クラスの温かさを感じてました。 3、自分に自身がついたかな～！

ロールプレイは苦手だったけど、自分とは違う人になりきって考えることって、医療の仕事をする上でとても大切なことだなあって今になって思います。

1、とって自分を見出せる講義でした。意外に演技できる自分がいた。  
2、皆との仲が深まった。皆が明るくなった。

- ・クラスみんなとゆっくりじっくり話げできたこと。
- ・みんなの意外な一面が見られたこと。
- ・自分の硬さに気づくことができたこと。

## 提案

\*提案は、①『もしも私が〇〇さんなら・・・』というやつです。くじ引きの中に同じクラスの名前が書いてあって(クラスの人数分)、それを引いたらその人になりきって30分ぐらいその人になって何かをする、みたいなものはどうでしょうか？

☆野外授業が楽しかったので、来年も取り入れてください！！

☆オリジナルストーリー、題を決めてロールプレイで発表する授業が増えてほしいです！

- 1) 提案っていえるか解りませんが、野外授業、すごく楽しかったので、これからも野外授業を行って下さい。
- 2) 生徒企画を野外でやったらもっと盛り上がるかも…

今回の屋外講義は良かったと思います。これをもう少し計画的に行えたらよいと思いました。例えば第1回目のときに話し合う時間を設けて計画を少しずつ練っていくと良いと思います。結構講義がつまって忙しいので。

・最近の私の考え事のテーマは、創造、破壊、模倣です。

STの仕事は、患者様に合わせて、訓練プログラムや、訓練道具を考えることなので、想像力がとても大事だと思います。

それと、何かを真似て、少し改良する力かな〜と。技を持つためには、うまい人の方法を真似て、できるようになったら、自分の考えを入れて、

改良する。そういった『真似る、改良する』力をつける授業があってもいいかな〜と思いました。具体的な方法は思い浮かびませんが・・・。

何かをコメントしなければならない、発表しなければならないなど、ポストイットで張り出す事へもストレスを感じ、授業への抵抗を感じる事がありました。「気楽な心構え」が出来ず、ネガティブに捉えがちなのかもかもしれませんが、そんな人も入れるような、気持ちの転換方法などを教えて頂けたら有難いと思います。

・浅野先生のお宅で占ってもらった「エンジェルカード」。カードの内容から良いアドバイスがもらえたと感じたので、みんなでやってみたらもっとおもしろいと思います。

1. テーマを少し減らしてみてもどうでしょうか。その分、もう少し一人一人が考え、広げる作業が出来ると思います。

2. 場を変えて行う授業を少し増やしてみてもどうでしょうか。外でなくても3階教室を使う・・・など。

①今年と同じように、外で講義をするとイイと思います!!いつも教室で座ってばかりの講義なので…。たまには公園など開放感のあるところでノビノビ行くと、また違った一面が見れるのではないかと…。

②相手になりきるのは難しい…。自分がこんな人にはなりたくない!!という人の役をあえてやってみる!!どのように演じられるか…。

・外での授業は大変よかったが、陰のあるところだったら良かった。そのあとお昼食たり、お茶をしたりともっと広がりを持てるかなと思いました。

1) 私たちは短い時間でしたが、外でロールプレイングをやることができました。またこのように外でやってみるのも良いと思います。そして、内容も生徒に考えさせて外でやってみるのも面白いかもしれません。

2) ワークショップは強制的なことは行わないと思います。私たちクラスは積極的に発言するクラスなのですが、毎回決まった人が発言を行っていました。なるべく、全員が積極的に行えたら素晴らしいと思います。ただ良いことや、大事なことを発言するのではなく、このような場面が苦手な人にも単純なことを言えるような場面を作れたら良いと思いました。「〇〇さんの今日の洋服可愛い」とかロールプレイングとは関係なしに、みんなの前で発表できることができたら良いと思いました。誰かがやるからいいじゃなく、私もチャレンジしてみようかなと思ってくれるだけでも大きな一歩だと思います。

来年のクラスへの提案は・・・

なんか、あまりよいのが浮かばないのですが、今回あったのと同じように?外で授業(青空教室!!)

すいません、もう一個は思いつきません…

屋外でやった講義はとても開放感で、気持ち良かったんですけど、もうちょっと体を動かせるようなものを取り入れるといいな—と思いました。

- 1 今度はビーチで授業
- 2 先生のご自宅で授業

外でのロールプレイでは海とか花とかもっと自然と関わるようなのが良いと思います。もっと大人数でのロールプレイも楽しいかと思いました。

1. もっと色々な場所で授業
2. シャベリ場！みんなで語り合う。

- ・1人1人に役柄を与えて、クラス全員でロールプレイ！！
- ・ゲームを通しての人間観察

外でやるロールプレイは一味ちがいました。来年も外でやるといいな—と思います。あと講義が月曜日にあるのもっといいな—と思います。

外でのロールプレイでは海とか花とかもっと自然と関わるようなのが良いと思います。もっと大人数でのロールプレイも楽しいかと思いました。

- ・ロールプレイをした後に、もう少し少人数で話をする時間がほしいです。全体に対してコメントを求められても、なかなか話ができない気がします。
- ・じっくりと話をする日をもう少し増やしてもらえるといいな—と思います。
- ・ハーブや絵葉書を使ったグループ分けは、特にわくわくしました。ああいうグループ分けだとワークショップに対して身構えている人も、とっつきやすい気がします。

屋外授業は気分転換にもなるし、教室では出しにくい部分も自然に出せたりするので、来年もやったらいい—と思います

1、いつも椅子に座りっぱなしなので野外での授業は気分転換にもイイ—と思いました。ぜひ次の学生にもとりいれては！ 2、私たちが最後に取り入れた、「みんなの話しをブログにかく」という提案は案外イイ—と思いました。

- 1、外での講義はよかったので、ぜひ来年もやってほしい。
- 2、ハーブ飲み会。

### ————— さようならの言葉 —————

毎回楽しい授業ありがとうございます！初めての授業では緊張していて、この先どうなるんだろうと不安でしたが、最後の方には、緊張よりは楽しく授業を受けることができ皆の前には出るのはまだ少し緊張しますが、最初の頃

よりも慣れたような気がします。授業を通して、皆で考えたり、作っていくことでその度にチームワークって凄くなって思いました！毎回毎回、印象に残る授業でした！なので、これからも、いろ～んな人にこのようなステキなワークショップを行なって下さい！ありがとうございました！！体に気をつけてこれからも頑張ってください！！

先生には授業以外でもお宅にお邪魔させてもらったりと、なにかとお世話になりました。ありがとうございました。先生とすごした時間は、私にとって癒しの時間でした。これからもお体には気をつけ頑張ってください。

もともとこのような講義の形式は苦手としていたので、最後までしっかりと出来たことがよかったかな？いろんな自分を発見できたことが一番の収穫でした。自分なりにがんばれたと思います。終わってみればとても心に残る講義でした。

ワークショップの中のコーディネーターについて、著書でも、また、実践でも分かり易く教えて頂いたことに感謝しております。控えめな人でも相手（参加者）の力（推進力）を引き出せる、大切な位置もある事が分かりました。そのような位置づけのSTになりたいと思いました。3ヶ月とちょっとの短い間でしたが、有り難うございました。

先生の授業は、人の事や自分の事を知る良い機会となりました。STになりたいという思いを再度思い出す事ができて良かったです。1コ1コの授業に物語ができるような授業を数々と送ることができて、本当に良かったです。またどこかで会えることを楽しみにしています。

浅野先生、私はもう少し、先生にテーマについて掘り下げたお話などをしていただきたかったです。「私の授業は軽い気持ちで・・・」とおっしゃって下さいましたが、なかなかテーマの意味を考えると決して軽いだけではないのでは、と感じ。事実、いつも物足りなさを感じていたように思います。

（限られた時間の中でのことだと理解しますが・・・）

年齢層の違う人々が一つの目標を目指して集まっていますが、その中でも様々な人間模様があつたりします。言葉やコミュニケーションの専門家として、先生のお話から多くを学べたのではないかと、視野を広げるチャンスがあつたのではと、私は思います。

・・・失礼お許してください。

長くなりましたが、「新しい風」と「自然あふれる生活スタイル」をありがとうございました！

どうぞくれぐれもお体をお大事にしてください。

浅野先生ご夫妻の一層のご活躍を心からお祈りいたします。

本当にありがとうございました。

今回受けた、浅野先生の授業は、笑いあり涙ありで、15回では物足りなく、またどこかで受けたいと思えるとても充実した講義でした。相手の気持ちを考えることの大切さ、『言葉』というものがどれだけ重要か…色々学びました。学生企画では、先生の協力のもと、みんなが『今回の講義よかった～!!』と思える内容を企画できて良かったです。この講義で学んだことを、今後の臨床で生かしていきたいと思います。短い間でしたが、楽しい講義ありがとうございました。

今日夕方6時50分頃のロハススタイルを見ました。今日は恵美子先生はあんまりTVに映っていない気がしました。



私たちは浅野先生の自宅にお邪魔したことがありました。またいつか自宅にお邪魔したいと思います。次ぎ会う時は、立派な言語聴覚士もしくは、立派な大人になってお会いしたいと思います。大人になっても明るさを忘れず、みんなを和ませることのできる人であり続けたいと思います。誠先生も恵美子先生もお体にお気をつけて下さい。次回は、バーベキューをしましょう。 それではまた!!

長い期間、講義をして頂きありがとうございました。講義の中では日頃経験しないロールプレイという疑似体験で普段おもてに出せない新しい自分の発見と、普段聞けない・見れない級友の姿を発見することができてとても有意義な経験でした。この講義で学んだ『臨機応変』(笑)を今後に活かしていきたいと思います。授業をとおしてご夫婦で様々な事を教えて頂き本当に有り難うございました。

ますます夏の暑さも厳しくなりますがお体にお気をつけて下さい。ハーブティーでのりきって下さい!では、またお会いできる日を楽しみにしています。

さよならの言葉はいりません!!今回授業で先生と出会えたのも縁だし、きっとこの先もどこかで会うと思うので... 出会いがあれば別れはあるといいますが、私の辞書にはありません!!  
今度また~!!

鬼の浅野と呼ばれていていた頃を全く感じさせないくらい温和な雰囲気、いつも癒される講義でした。ありがとうございました☆

いつまでもそのままの先生でいてください。ありがとうございました。

・癒しの時間をありがとうございます。

4ヶ月という短い期間でしたが、とても濃い授業だったと思います♪ロールプレイの楽しさをわかったことが1番の発見です(^0^)/ありがとうございました!!

短い間でしたが楽しかったですありがとうございました。家に行けなかったのは残念です。テレビで見るとすごい家に住んでいるんだなと思いました!何かの機会に行けるといいなと思います。また、ブログもちょうちよく見て先生を応援しています。これからがんばってください!ありがとうございました。

浅野先生とは関わりやすくて先生と話す事で自分の良い面やあんまり好きじゃない面も受け入れる事ができました。自分自身が自分に自信が持てなくなったりと、この差が激しい自分が嫌だったんですが、お家にお邪魔した時のエンジェルカードが今の自分の頼れるテーマになっています。ありがとうございました(^\_^) またみんなで行きたいです!!

とても楽しい授業でした。ありがとうございました。

浅野先生、短い期間でしたが、楽しい時間をどうもありがとうございました!さようならではなく、またいつか(^0^)

先生の講義を受けれたコトに感謝です。楽しい時間を過ごせました。ありがと~ございました。

先生、楽しい講義ありがとうございました。またいつか会えることを楽しみにしています。

### 私の授業に点数をつけるとしたら

- ・90点 屋外での講義をもう少し計画的に出来たらよかったと思います。
  - ・100点 (5点満点)
  - ・私の授業の評価は点数をつけるなら100点満点の・・・98点ですかね。少し表現不足だったのでマイナス1点、あとは授業数の物足りなさでマイナス1点。満足度みたいな評価になりましたね。でもこれぐらいが今の私の評価です。3ヶ月間本当にありがとうございました。
  - ・点数をつけるなら・・・777点 基準は777点です★☆☆ラッキーセブンです!
  - ・10点 (たった10点でなく、10点が満点です。)  
(吸収しなければならぬところが沢山あり、私自身がまだまだ吸収できず。評価をするなんておこがましい限りです。)
  - ・50点中、48点!!!!  
先生の話には、いつも納得させられて勉強になります。  
これからの、飛躍を期待して満点にはしませんでした。
  - ・先生に点数をつけるなら90/100です  
生徒にたくさん話させてくれるのは良かったけど、先生にももっとしゃべって欲しかったです。
  - ・7点。 点数基準は10点満点。  
理由; 初回のインパクトが強すぎたのでしょうか・・・先生の「不思議・なんで」感が最後まで続いていたように感じたので。(でも、最後の先生のブログコメントから他では活かされているようなので、いいと思います)
  - ・点数は100点満点中の100点です!!  
みんなの満足する企画を立てられたし、自分自身も楽しめたので、良かったです(^V^)
  - ・点数を付けるなら: 先生に点数を付けるんですね!?  
では、120点で!!  
点数の基準: 授業をする(していただけた)ということで60点。  
あきない授業だったということで50点。  
眠たくない、ウトウトもなかったということで10点です。
  - ・点数100点☆100点中
  - ・点数をつけるなら100点 基準の点数は100点です。
  - ・先生は癒しを持ち合わせているので|〇〇点満点です♪♪
  - ・100点!!
  - ・☆☆100点☆☆
  - ・点数→100点
- 基準は、楽しかったからです。
- ・点数は200点で楽しさ100でありながら100を差上げますm( )m

# 沖縄県立看護大学

2006年から「教育原論」を担当し、2012年からはカリキュラム改革などがあって、「教育学」を担当してきた。

## 「教育学」

2014年

(p 77の「大学をまたがったの記事」にも書いたので、参照されたい)

### 「こんな学校つくりたい」「授業での居眠り防止法」

4月18日

15日の看護大学「教育学」授業。今回は2コマ連続授業だから、正味3時間だ。楽しく次のような活動・討論をした。

1) なくしたい科目・作りたい科目を出し合う。

なぜか、「なくしたい科目」として美術がいくつも登場したのが、驚きだ。絵を描くのが苦手だと、異口同音にでてくる。この活動は何度もしてきたが、今回初めてのことだ。

「作りたい科目」は、いろいろなアイデアがたくさん登場。一人でいくつも書く人が続出。

傑作は、「猛獣との戦い方」。それを出した学生が、ライオンとサメとの戦い方を詳しく発表。この話も初耳。授業は、面白く楽しく展開していく。

これをもとに、2)の活動。

2) こんな学校を作りたい。学校案内ポスターを作る

「猛獣との戦い方」の余韻が強かったのか、こんな学校が登場。

「てるや動物学院」

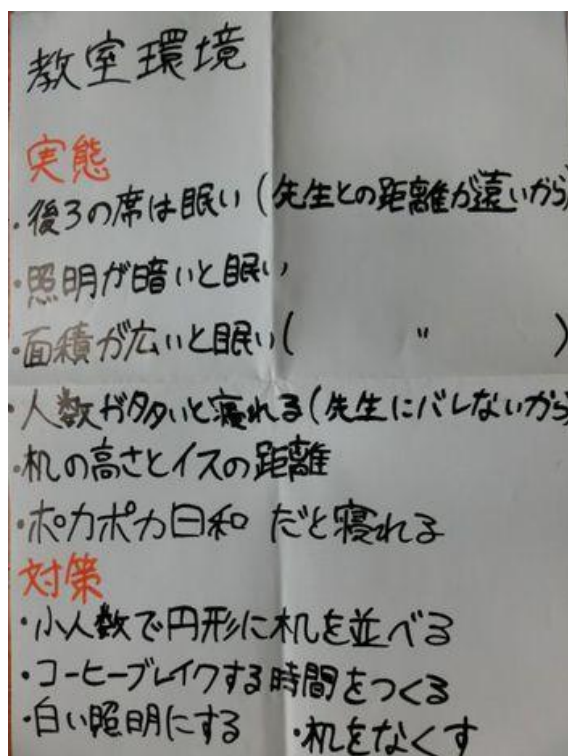
「日本無人島大学」

「サバイバル学校」

「メンタル大学」

例年だと、絵がいっぱいになるけど、「絵が苦手」と自称する受講生が多いためか、字が多いのが今年の特徴





授業最後のまとめのミニメモには、「学校は作るもの」という言葉が複数登場した。

3) 授業での居眠り防止法を考え、プレゼンする。このことを通して、授業を軸にして、教育について考えるきっかけにしようということだが、大変有益な提案がたくさん出てくる。

そのなかの改善策箇所を紹介しよう。

(先生に対して)

- 話し方に抑揚をつけてほしい
- わかりやすく楽しい授業
- 全身で伝えてほしい
- 動き回ってほしい

(授業形態として)

学生に協力させる 起立させて歌わせる・ディベートなど

- 授業内での課題 (ノルマ) をつくる
- グループでの学習

実習 (作業)、体験学習

少人数での授業

(人体生理学の角度から)

腹8分

立ち上がる

明るい部屋

換気する

15分の休憩

緊張感

(教室環境として)

少人数で円形に机を並べる

コーヒープレイクする時間を作る

白い照明にする

机をなくす

いろいろと面白いアイデアがあるが、いずれも、眠気を誘う原因の分析に基づいたものだ。

## 教室設定 人生で大切なもの

4月24日

今回は、授業テーマにふさわしい教室設計配置を考えることを通して、教育・学校・授業について考えた。

理科 豚の心臓の授業



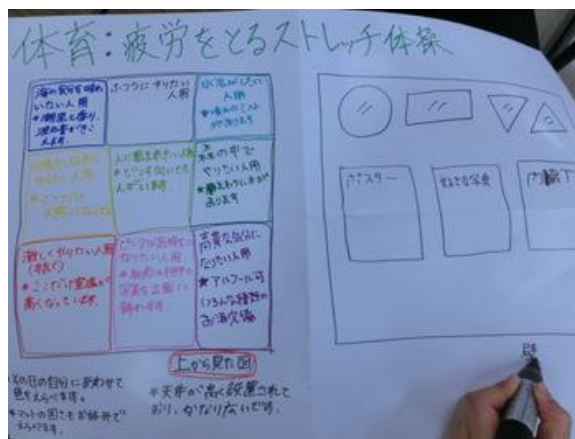


音楽 「教育学受講生歌」を作曲する授業

美術 受講生相互の顔をデッサンする授業

家庭 サプリメント過剰依存を防ぐ授業

体育 疲労を採るストレッチ体操の授業



工夫を凝らした斬新な教室が出現。なんと、丸型・三角型など四角くない教室が登場。楽しくなるばかり。

後半は、人生で大切にしたいものを順に並べる討論

私が感じた特徴

トップには、「たとえ人生が50年で終わろうとも、濃縮した人生を送るのがいい」「生活の安定の見通しが無いのに、愛が深いからといって結婚すべきではない」などが並ぶ。

かつてだったら、「いっしょに生活する体験なしに、結婚するのは冒険かもしれない」などは、大切にしない方になっていたのが、今では上位にくる。

いずれにしても、ずいぶんしっかりとした考えをもって、人生を考えている選択が目立つ。近年の学生の特質なのか、看護系学生の特質なのか、今回の受講生の特質なのか。

親思い、祖父母思いが多いのも一つの特徴のようだ。

最後に、「現在の人生」「10年後の人生」についての「物語」を一人一人がつくり発表した。

受講生メモのいくつかを紹介しよう。

- ・他人の意見を聴くと、視野が広がる。
- ・イメージするだけでなく具体的に絵を描いたので楽しかったし、イメージがより膨らんだ。
- ・現実的に考える人が多い。
- ・楽しい授業が受けられそうな教室がたくさん見つかった。
- ・人生は長い方がいいのか、短い方がいいのかわからない。
- ・一つの話題に対して異なった視点から考えている！
- ・看護大学は他の大学に比べて、思考が大人びている。
- ・いろいろな人の意見が聞けて、自分の考え方に変化が出てきた。
- ・濃縮した人生もいいが、自分の親のことを考えると、50歳で人生が終わるのは悲しいなと思いました。
- ・将来について想像して、みんな現実的なことを知った。

## 2013年

(p83の「大学をまたがった記事」にも書いたので、参照されたい)

### 世界の各地域が抱える困難に取り組む企画を作る

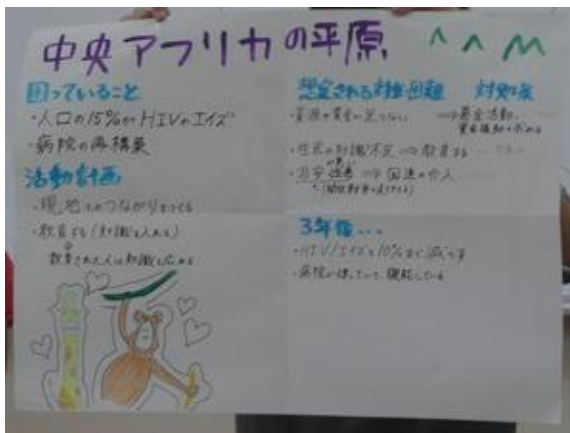
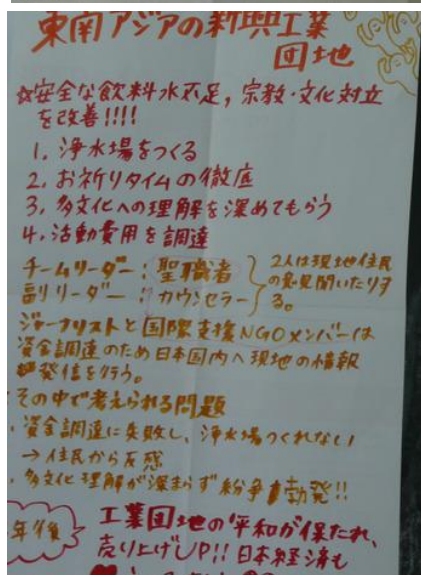
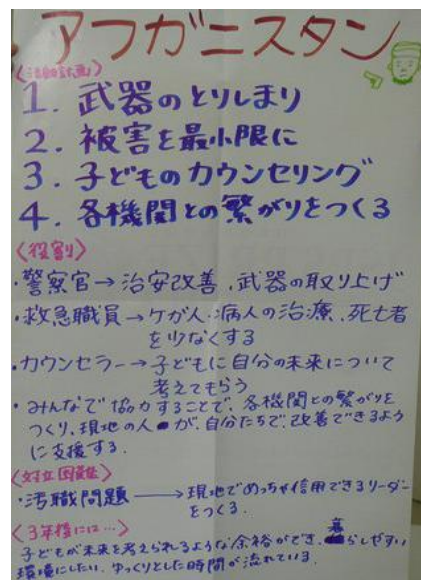
7月13日

このワークショップを初めて3回目だ。年々優れた企画が生まれてくる。

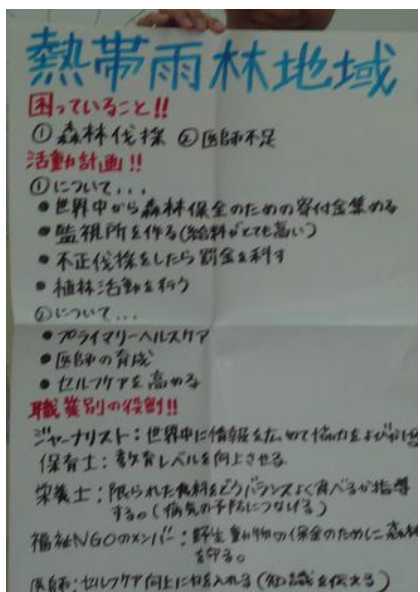
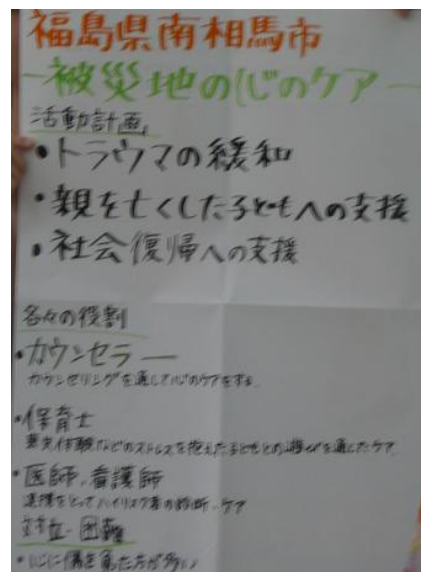
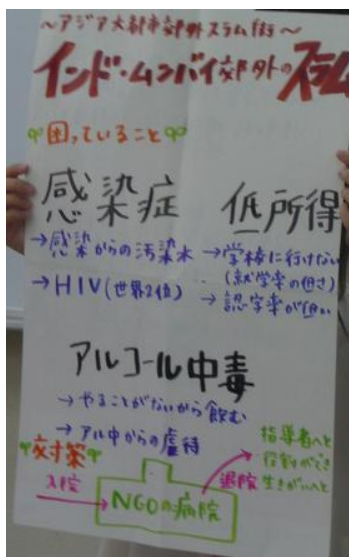
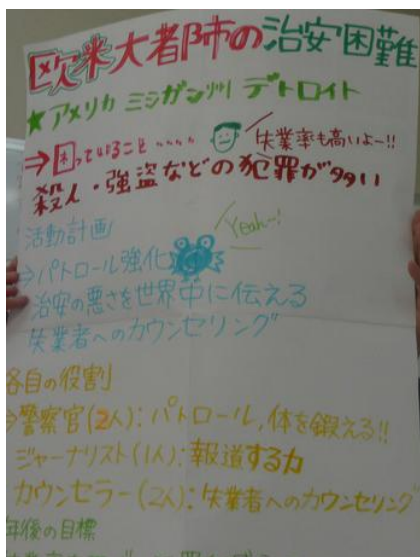
「どの地域か」「どんな職業か」は、偶然に引き当てたカードで決める。同じ地域ごとにグループを作り、2週間がかりで、いろいろと調べて、企画を作成する。

今回は、インターネットなどでとてもよく調べ、取り組み課題を焦点化して、かなり練られたものになった。世界各地に出かけた経験がほとんどないので大変だが、調べながら企画をたて、また他グループの発表を聴く

中で、視野がどんどん広がり、各地に出かけ実地に触れてみたい、という声いろいろ出てきた。中には、今年の夏休みにでかけたい、という受講生もいた。







## 「私の現在までの人生について発見したこと、考えたこと」

7月22, 26日

看護大学での授業『教育学』の最後のレポートで、この授業を通して「私の現在までの人生について発見したこと、考えたこと」を個条書き風にも書いてもらった。

なかなか興味深いので、代表的なものをいくつか紹介してみよう。

※ なお、読みやすくするために、文意は生かして、分に多少の修正

を加えたものがある。

※ このレポートでは、次に、「私のこれからの人生で追求したいこと」を書いてもらったが、それは後半紹介しよう。

- ・自分にとって当たり前のことが、周囲の人とは全然違う場合もよくある。
  - ・人と意見が違っても、すぐにその考えを否定するのではなく、一度、「そういう意見もあるのか」と受け入れ、自らの意見と比較しながらより良いものにしていく。
  - ・グループ討議での他人の意見は、私の今までの価値観とは異なっていてとても新鮮に思えた。
  - ・討論の場でも討論に参加せずに勝手に自分の中で意見を考え、それを発表するする気はないことが多かった。
- この授業を通して、自分の意見の重要性や大事な一意見であることに気づいたので、これからは積極的に発言していきたい。
- ・これまで私は目立ちたくない性格で、自分の思っていることを表現してと言われても言葉にできないでいた。

この授業で意見をもとめられるようになって、周囲が喋りづらそうにしていると、なぜか自分の意見はすっと出てきた。

・強く思ったのはいかに今まで小さな世界にいたかということである。私は自分の身近なところしか見ていなかった。

・自分の価値観に固執してきた。

・さまざまな経験をしてきて、今の自分があるんだということを発見できたし、そのことについて考えさせられた。良くも悪くも結局は楽しい人生を歩んでいるんだな、と感じた。

・私は他の人と比較して、何かを特別に大切にしたり、モットーにしたりすることがなかったこと。

・ストレターコースといわれる人生から外れてはいるが悪くないと思った。

・ワークショップを通して、他の人からの自分に対するイメージを聞くことで具体化する自分の特徴（性格・雰囲気・癖など）

・あまり物ごとを深く考えすぎてネガティブになってしまう傾向が私にはあるから、ある程度は気楽にポジティブに考えたほうが良いということを発見した。

・自分という存在が個人や地域、沖縄のためにどのような役割を担って、どのようなことができるのかを考える機会になった。

・自分の意見を発表することで素敵なアドバイスをもらい、その倍以上に素晴らしい意見となること

・自分がやりたいと思うだけでまだまだ行動力が不足しているところがある

・沖縄から出て、もっと色々な土地で、多くの人と出会う。

・私たちは本当に良い環境に暮らしていることを発見した。国際会議の授業で様々な国の問題について学ぶことができた。治安の悪い地域であったり、発展途上の地域であったり、世界ではそういった環境の中で暮らしている人たちがいることを知った。

・外国＝先進国として考えていて、発展途上国に目が向いていなかった。

・自分から積極的に行動するということが少なく、誰かがやるから大丈夫という精神でいたが、それだと何も見えてくるものがない。

・ボランティア活動など、外での活動にほとんど参加してこなかった。

では、この授業を通して考えた、「私のこれからの人生で追求したいこと」を紹介しよう。

・この人が大切だと思っていることに対し、否定しない。でも、自分が間違っていると思うことに対しては、相手に自分の気持ちを伝える。

・看護師を目指しているが、他の職種と連携する必要がある。自分の意見を述べ、他の人の意見を聞き、何がその人にとって最適なのかを話し合わなければならない。そのために、今のうちから意識し、自分と少しでも違う意見があればそれについて深く考え、少しでも柔軟な考え方ができるようにしていきたい。

・外国人と交流をもつようにしたい。

・人に任せっきりにするのではなく、自ら考え行動していけるようになる。

・自分が何を大切に生きていくかを追求したい。

・自分とは何かを追求したい。これまで自分の考えがあまりなく、人に合わせるが多かった気がするからである。自分とは何かを追求し、自分の考えをしっかりと持てる人間になりたい。

・私は物を悲観的に考えてしまうので、どうすれば前向きに、楽観的に考えていくことができるのか、ということについて追求していきたい。



- ・どうすれば授業が楽しくなるか、教室の配置や自分が学校を建てるならこういう学校を建てるのか考えたので、これからの人生でも楽しさを追求していきたい。
- ・積極的に外での活動に参加したい。
- ・自分がやってみたくて感じたなら、その目標に向かって、自分の最善を尽くす。
- ・周囲の看護に対する熱意を感じていたが、私自身看護をしたいという気持ちは入学当初からもってはず、どこか反抗的だった。しかし、いい意味で周囲に流されてみたいと思う。否定ばかりでなく肯定していきたい。看護の良さを見出していきたい。

- ・セルフケア能力を高めたい。
- ・語学に興味を持って勉強する（特に、方言、英語）
- ・将来設計が本当に計画通りに進んでいくのか
- ・健康の大切さやあり方をどのように広め、理解してもらえるかを追求したい。

看護の仕事へと進もうとしている若者らしく、誠実で前向きな姿勢を強く感じさせられる。彼/彼女らの今後に期待したい。何と言っても、注目すべき若者たちだ。

## 2012年

### 「工夫することで、学ぶことは楽しくなる」

4月13日

12日、初授業。

いつも思うこと。同じ大学であっても、学年個性というのがあるのが不思議。今年は、半開きの大きな一輪の蕾。開きかかっているが、どんな花になるか、楽しみ。お互いにつながりがあるが、どんな風につながっているか、学生同士が気付いている点はまだ少ない。

この4ヶ月で、どんな風に開花するだろうか。期待と楽しみ半々。

もう一つ、これは毎年思うこと。看護大学の学生は健康だ、ということ。

第一回目の授業レポートから、いくつか抜き書きしよう。

人見知りだけで、意外と積極的にいけた。

同じ考えの人、異なる人さまざまでビックリした。

しゃべること（目を見て、心を開いて、相手と向き合うこと）は楽しいことだと知ることが出来た。

同じ価値観の人も違う価値観の人もいる。

工夫することで、学ぶことは楽しくなる。

（一一なるほどと、私も思い、本記事のタイトルに使用した）

共通点がなさそう・・・と書いていても、話の話題はたくさんあって、すぐに盛り上がる事ができた

授業はみんなで作るものである。

想像力が必要だった。

授業を聞くだけでなく、参加型で楽しい授業

工夫次第で授業がとて楽しくなるということ。

自分で何かを言って、相手を笑わせたり喜びあったりする。

話すことは恥ずかしい事ではないこと。

みんなで仲良くなって、一人一人が個性を自由に発見して授業を作っていけるのは楽しいってことを発見した。

浅野先生が、とて不思議で面白い人だということを発見した。

教育とは創造力を高めることである。

教育とはコミュニケーション能力を身につけることである。

## 学んだこと学びたいこと

4月20日

今回は、「学校で学んだことで有効なこと」をテーマに考えた。

全体討論で出てきたが、実に多様な考えがあることが分かってきた。

受講生の皆さんは、考えを書くことに慣れてはいるが、それを意見として発表し討論するとなると、恥ずかしがって、超スローペースになる。次回以降、ハイペースになるように期待したい。

ここでは、終了後提出のレポートのなかのいくつかを紹介しよう。

「これまでの人生で一番学んだこと」

- ・社会の厳しさを学びました
- ・大人の汚さ
- ・人付き合い
- ・因数分解
- ・やらないよりはやること
- ・人間関係の難しさ
- ・どんな時にも前向きに物事を考える方法
- ・プラス思考に
- ・ネガティブよりポジティブに
- ・人生の価値は持ってる友達で決まる(らしい?)
- ・正義は視点によって異なるということ

「これからの人生で学びたいこと」

- ・プラス思考で考えられるには
- ・人生を楽しんで充実させる事を学びたいです
- ・宇宙について
- ・富と名声の作り方
- ・社会でうまくやっていくには

- ・いろいろな人のいろいろな価値観
- ・恋愛
- ・看護って何
- ・これからの人生をいきていく方法。人との付き合い方。
- ・海外進出して、色々な国々の文化を学びたい

人間関係や生き方に関わることが多いのが特徴だ。

## 提案「こんな科目があったら」

4月27日

今回は、学校などで学びたい科目を新規に作るとしたら、ということで、アイデアを出し合い、人気が集まった科目10について、その構想を考え討論した。

あがってきた科目100近くの中のいくつかを紹介しよう。

花嫁修業学 作法講義 健康療法学 人生設計 なぞなぞ学 女子力(男子力)向上学  
 娯楽学 暇学 大人のための接遇学 話学 人づきあい学 恋愛学 色彩学 仕事学 就職学 人生学  
 癒し学 勇気学 速読術 生活の知恵 おもしろいとは何ぞや学 お金の使い方 健康学 旅行学 くつ作り学  
 ボディメカニクスヨガ学 追求学(好きなものについて) 興味学(自分が興味のあることについて学ぶ)

人気が集まり実際に構想を作った科目

Disney学  
 女子力学  
 サバイバル学  
 ジブリ学(楽)  
 スマートフォン学 歴史と未来  
 怪奇現象学  
 キャラ弁を作ろう  
 お料理教室——小3まで——

多彩なアイデアが集まった。ポスターに書かれた構想は、20行以上にわたるアイデア溢れるものが多かった。ワイワイガヤガヤと、大いに盛り上がり、時間不足を感じた。発言もだんだんペースにのって増えてきた。

授業後提出レポートからいくつか紹介しよう。

- ・その科目を選んで職に役立つのかという授業があった。
- ・新設科目を作る時に、皆でやりたい事、こうしたら楽しいのを考えて、皆で盛り上がったので、授業内容は内容によると思った。
- ・皆で円を書いて坐って、何がいい? どうしたらいい? と話し合いながらつくりあげていく授業は積極的に取り組めた
- ・いつもの机に向かう授業でなくアクティブ的なのが多かった。どのようにしたら生徒がこの授業をとってくれるのか引

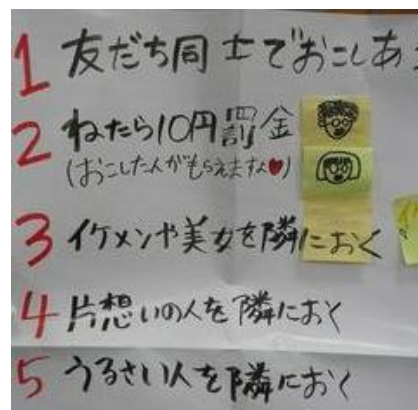
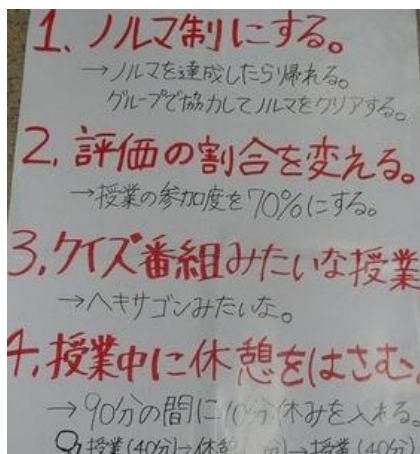
きつかるかって必要だ。

- 自分の考えをひねり出すのは難しい。
- 色々な科目のエキスパートの人に教えてもらえて楽しそう。
- 自分を磨く科目が多かった。
- 自分でカリキュラムを考えるのは難しそうと思ったけど、興味のあることだと、たくさん考えが出てきたので、授業を作るということが楽しいことだと分かった。
- 学生の立場では、作られたカリキュラムをこなす受身の立場になるけど、今回、自分たちでカリキュラムを作ってどうしたら楽しい授業になるかを考えたりして先生たちの立場になって考えた。

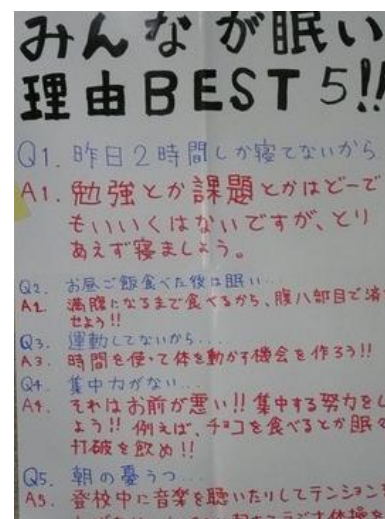
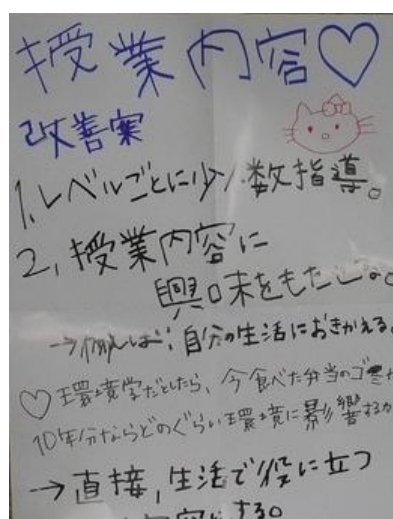
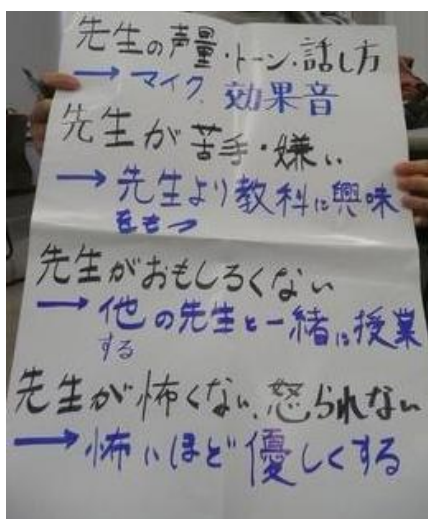
### 授業での居眠り防止法を考える

5月11日

今回は、「授業での居眠り防止法」を考えるを通して、授業・教育・教育学とは何か、を考えることがテーマだ。6つのグループで、皆から集めた意見をもとに防止法を考え、ポスター記入してプレゼンする。



それに基づいて全体討論し、私がコメントするという流れだ。





各ポスターを紹介していこう。

人体生理学グループ  
教室環境論グループ  
教師の性格・動きグループ  
学生間の人間関係グループ

授業形態グループ  
授業内容グループ

いろいろなアイデアが飛び出てきて、私の授業では希少価値だが、「勇猛果敢」に居眠りしていた一人の学生が飛び起きるといふ副次効果?があった!

学生自身が授業創造への参加を強めて、授業改革を進める時代だ。

## 教室・机・いすを考える

5月18日

今回の授業は、「どんな教室・机・いすがいいか。配置はどうするか」をテーマにグループ作業をした。

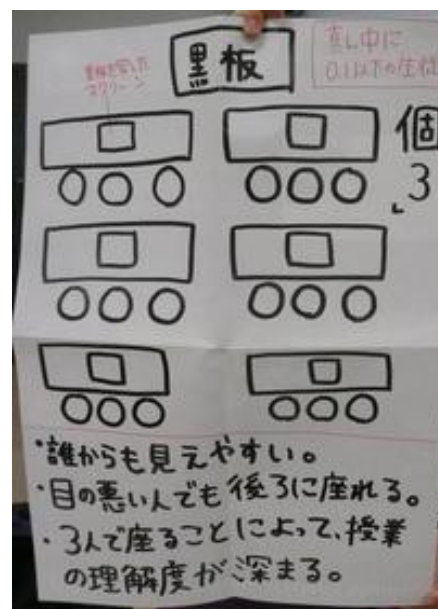
教科・課題別にグループで作成したが、図示した案をプレゼンした。  
いくつか紹介しよう。

「体育——疲労を取るストレッチ体操の授業」のグループは、海岸で朝日を浴びながら授業するアイデア。 バランスボールを使って、机なしで行う。

「視力0.1以下の生徒数名に配慮する授業」のグループは、3人掛け机の中央に黒板を写したスクリーンがあり、『誰からも見えやすい』『目の悪い人でも後ろに座れる』『3人で座ることによって、授業の理解度が深まる』ことを特徴にしている。

『音楽——「教育学受講生歌」を作曲する授業』のグループは、鉢型の教室で、各自が楽器をもって、作曲をすすめていく、というアイデア。

すべてのグループが、創造性あふれるものを提出した。



残念なことに、屋外授業は別にして、アイデアの大半が施設設備に数千万円といった巨額が必要で、実現がかなり難しい。

こんな風に教室・机・いすを考えることで、教育にアプローチする機会は稀だ。同じように、病院などで、患者・医療関係者自身が、建物や施設配置などを考える機会は少なそうだ。

教育にしても医療にしても、それらが行われる場の条件は大変大きいにもかかわらず、考える機会が余りに少ないことが残念だ。

## 進路選択の際、何を大切にするか 肩たたき討論

6月1日

今回は、「進路選択の際、次のうち、どれを一番大切にするか」について、肩たたき討論をした。

※詳細は、「浅野誠ワークショップシリーズ5 人生創造」参照

生活派----- よい暮らしぶりができるかどうか

夢派----- 夢が実現するかどうか

忠告尊重派---- 親・教師の忠告を尊重する

社会予測派---- 今後の社会で重要になるかどうか

能力判断派---- 自分もっている能力にふさわしいかどうか

自然派----- 自然と共生し、自然の流れにあわせて生きることを大切に

看護大学だけあって、ほぼ全員が看護師になることを前提に考え発言する。焦点が鮮明になるが、多様さはやや少ない印象。

上の6つのなかでは、生活派と夢派が多いが、6つすべてに何人かいた。それだけに多様な角度から意見がでて興味深かった。いろいろあることで発見をたくさんしたわけだが、「いろいろあることでよい」というところで、とどまっていけないのか、やや心配。今後、どう進展していくだろうか。

今回は、30人が発言。初発言で緊張していた受講生も何人かいた。

授業も半ばになり、徐々にせり上がって行く。

写真は、肩たたき討論開始前に並べられた椅子。ここに坐って討論。



## いろいろな「○○さんの人生」から発見する

6月8日

今回は、受講生が年長者にインタビューして作成した「○○さんの人生」をグループ内で見せあい、発見しあうことを中心にすすめた。

主に、親・祖父母にインタビューしたものが多く、日ごろ、こうしたことを考えることはほとんどないというか、ほぼ初体験だろう。ということもあってか、親の年齢・生年がよくわからない例もでてきた。

そんななか、つぎのような発見などが出された。

- ・結婚・出産を機に仕事を退職しているが、育児で睡眠時間が大幅に減っている。
- ・子育てに時間とお金がかかる。
- ・寝てる時間が長かった。
- ・祖父母、父母、自分の世代で人生経験や生活スタイルが違っていた。
- ・収入に偏りがある。仕事をしている人とそうでない人や仕事の種類でかわってくる。
- ・仕事の時間が山形（40～60歳の間がピークだった）。
- ・30代や40代で子どもを産むおかあさんがいる。
- ・子どもの養育費と家のローン等意外と出費が多いなど思った。
- ・退職した後でも大学に行って勉強しようと思ったらできる!!

次回は、自分自身の進路創造について考えることになる。

## 進路物語を創ろう

6月15日

14日の授業は、まず、二人ペアになって、看護大学らしく「視診」で、相手の良い所を発見指摘し、将来についてアドバイスする活動をした。途中に、「自動車と運転手」というゲームをはさんで、楽しく相互信頼を育むムードづくりをした。

その活動にかかわっては、こんな指摘がだされた。

「他者と1対1で見つめ合って、意見や自分の意思を行うことの難しさ（緊張するし、すぐに言葉が出ない）と必要性（これから看護をする上でもそれ以外の生活でも、自分の意見を伝えること）を感じた。」

「ほめることもほめられることも慣れていない」

「普段、仲良しの友達でも、全くかかわったことがない友達でも、一人のひとをこんなに見つめて考えたのは初めてで、いろんな発見があって面白かった」

その後、テキスト（浅野誠ワークショップシリーズ5 人生創造）のNo.23「進路物語を創ろう」をした。

導入の活動で楽しいムードが広がったためか、リラックスしつつも、かなり練られた記入が続いた。この活動は、一昨年以来、各地で展開しているが、これまでになく、楽しく印象的なものになった。

以下、その活動を通しての発見事項についてのワークシート記入を紹介していこう。

「あまり話したことがない人でも、みんなで書きあったシートを見たら、その人の大体の扱われ方がわかった」

「この授業は、自分や他人を見つめ直して、いろいろな面で成長していく授業だと思った」

「人を見てその人が思っている自分と、私が見えている自分と話すことによって、さらに視野が広がる」

「頼れる人に、お母さん、お父さんが、多くいた」  
「自分が客観的に見られていることを知って、色々な可能性を秘めているかもしれないんだを分かった」  
「自分が他人についてあまり関心を持っていないということがわかった・・・他者に対して興味を持っていきたい。」  
「周りの自分に対するイメージと本来の自分が若干違っていたけど、どちらの自分も大切にすけど、自分らしさを失わないようにしていきたい」  
「将来の夢で“国境なき医師団”という欄が数名見られた。世界に羽ばたく人がいるのは、それを目指すのは、ちょっとだけキラキラして見れる。」

## 「10年後の沖縄」で、80%受講生が積極的発言

6月22日

10回目にもなると、発言討論の雰囲気馴染んできたのか、相互にからみあう討論で、中身の広がり深まりがすごくなってきた。

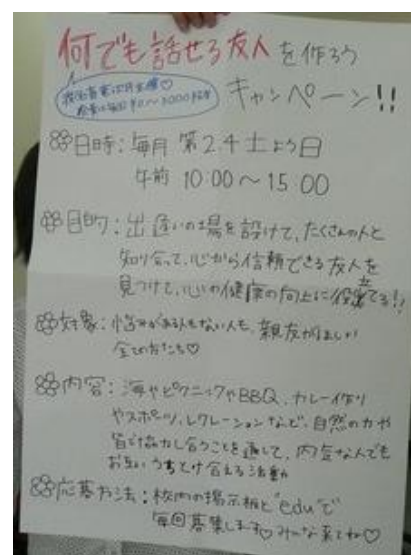
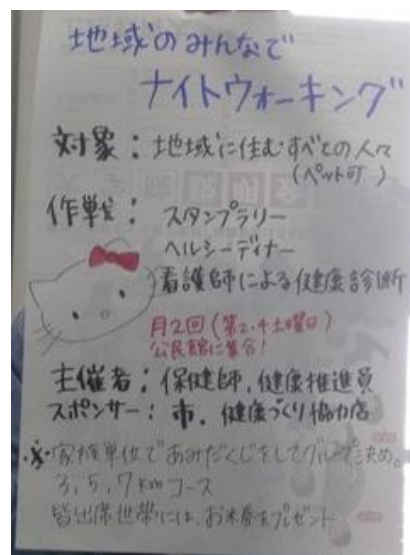
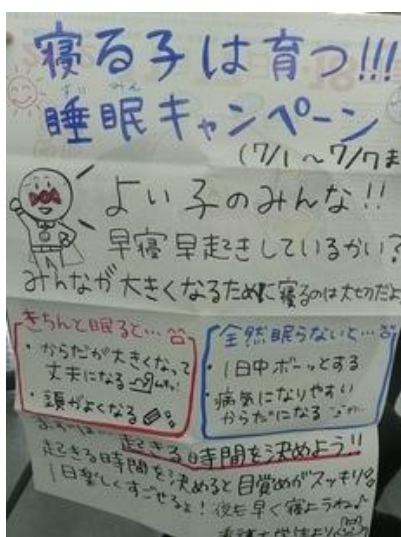
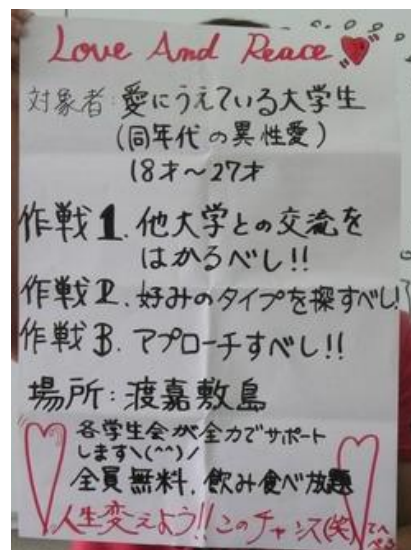
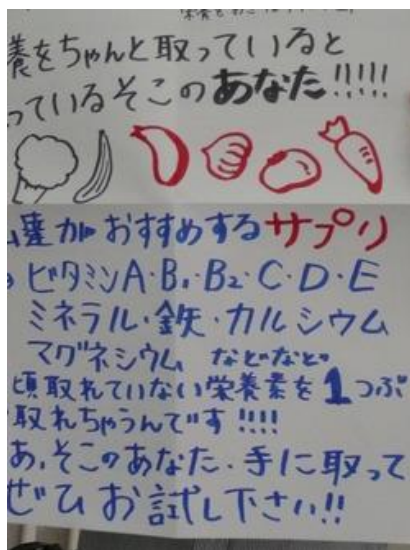
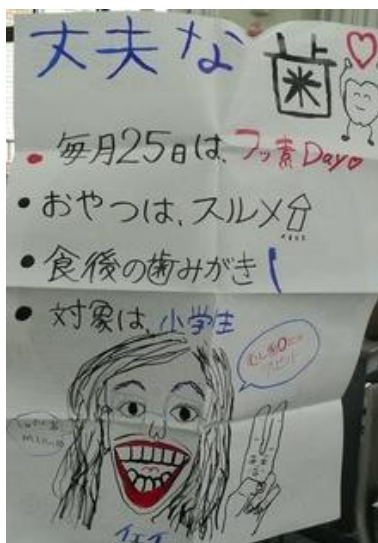
アイスブレイキングで、ステレオゲームをしたこともよかったかもしれない。1980年ごろの沖縄の小中学校では、ごくありふれたゲームだったが、経験者ゼロというのに驚いた。たまたまそうなのか、それともクラスで集団遊びをすること自体がまれにしかないのだろうか。少々気になる。経験がないだけに、えらく盛り上がり、その勢いで、「10年後の沖縄」討論盛り上がりの布石になったかもしれない。

でも、一人一人の学生が、沖縄についてかなり考えていることは確かだろう。

いくつか紹介しよう。

- ・沖縄を県外者の視点から見た時、県内者から見た視点が異なる（サンゴの重要さ）
- ・みんな沖縄が好きで、10年後を考えながらも、今の問題が多すぎて、それでも一生懸命考えていた。
- ・（交通・地域産業・観光など）様々な項目は独立しているのではなく、つながっている。
- ・さとうきびの繊維で、服、（コンクリートに混ぜて）お家、えんぴつ、紙などをつくってエコ。
- ・今日はみんな積極的に発言して意見を交わすことができたので、考えが深まったし、なるほどと思う点が出てきたので、やっぱり発言することは大切！ 受身授業はだめだ！
- ・世界ウチナーンチュ大会を他の国でも開催するという案はいいと思った。
- ・基地の問題には時間がかかるので、アメリカ側も沖縄にこだわるならば、ヘリの数を少なくするなど、お互いの歩み寄りが大切だと思う。
- ・米軍基地をなくすことは難しいことだけど、跡地利用として公共施設を増築したり、住民のためになるもので利用したので、テーマパークは反対。
- ・結局は、沖縄の人が住みたい沖縄、過ごしたい沖縄をつくるのが人々を呼び込むためのポイントなのだという発見！！
- ・沖縄が世界平和の象徴的な存在になりたいという主張をした。
- ・普段、あまり沖縄の話をしなないけど、こんな風に話したら、皆けっこう将来を考えていて、これから私たちがもっと考えて良い沖縄にすべきだと思った。





### 多様な健康キャンペーン

6月29日

写真は、28日の授業で作成した健康キャンペーンのポスターだ。

これは、毎年の授業でしているが、今年は、「人間関係」にかかわるタイトルを選ぶグループが多いのが特徴だ。

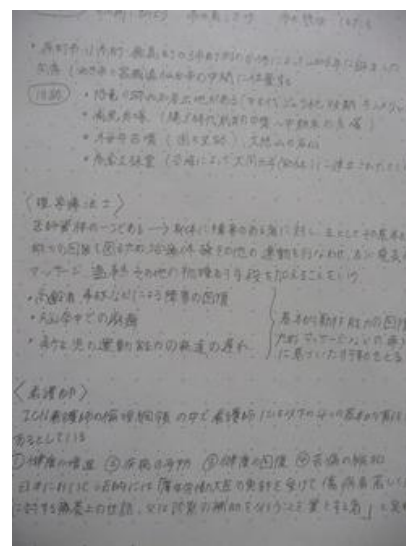
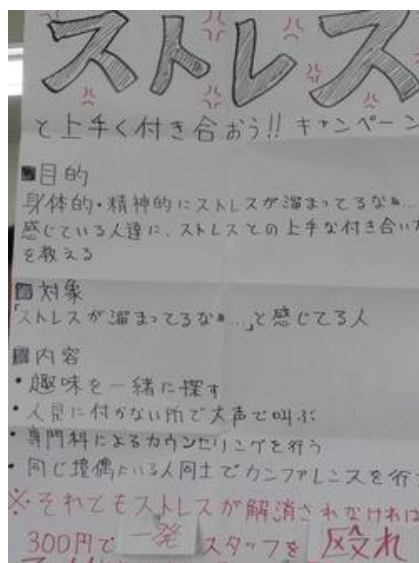
このなかで、人気を博した一つは、ナイトウォーキングだ。

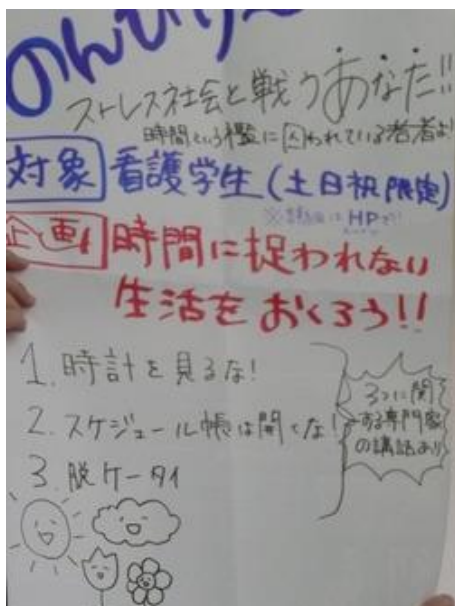
サプリメント

同年代の異性愛

ストレス

睡眠





何でも話せる友人  
のんびり  
丈夫な歯

### 「国際会議」の準備

7月06日

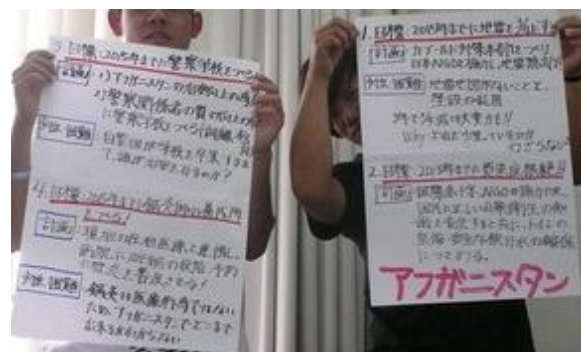
このところの授業の定番になりつつある、「困難な課題を抱えている地域に滞して何かの取り組みを継続するとしたら、どんなことをするか」という企画をたてる活動。次週は、それをもとに「国際会議」をする。

「対象地域」は、以下のなかから引いたカードで決め、同じ地域カードを引いた人でチームを作る。中央アフリカの平原 ヒマラヤ山岳地帯

ミクロネシアの島 東南アジアの工場地域 福島県南相馬市 欧米大都市のスラム街 アフガニスタンのカブール  
アンデス山麓の農業地帯

何かの専門職をもって滞在するのだが、それは、以下のなかから二つのカードを引いて、チーム内でかぶらないようにして決める。

ジャーナリスト ○○市元教育長 鍼灸師 栄養士  
救急職員 保育士 カウンセラー 数10億持つ資産家  
聖職者 元国際機関職員 NGOメンバー 警察官  
看護師 医師 国際赤十字OB 小中学校教師 ケースワーカー 地域医療専門家



相談して作り上げる企画には、次のようなものを含ませる。

a どんなことをしますか。「困っていること」のなかから、2~3選びます。この他のことでもよい。

飢餓 風土病 自殺者多数 就学率の低さ 安全な飲料水不足  
児童虐待・人身売買 低所得 医療系教育機関がない HIVの蔓延  
アルコール依存症多数 宗教・文化対立 戦争・テロ 汚職

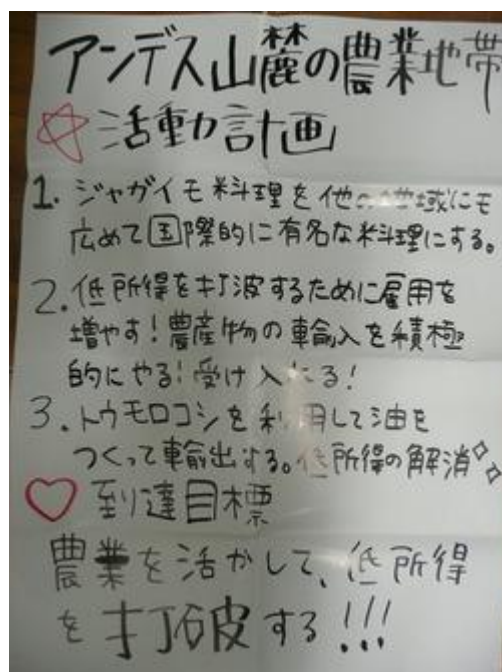
b 活動計画を立てます。 3~4ヶ条

c [専門職] カードに基づいて、各々の役割を決めます。

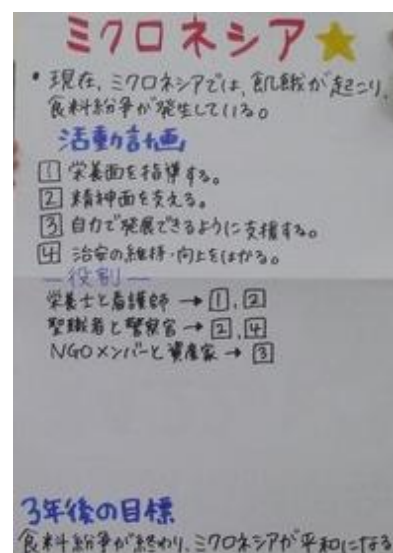
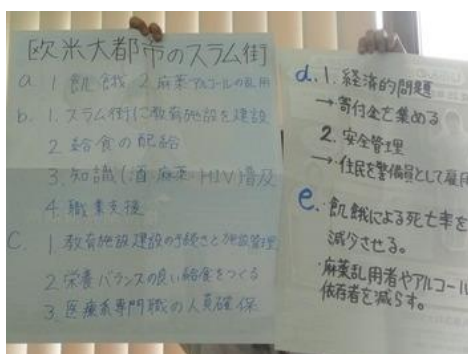
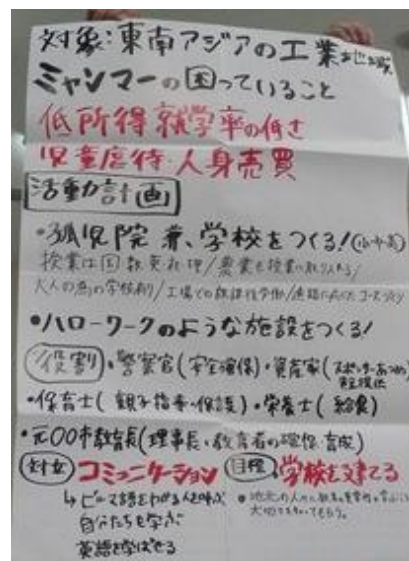
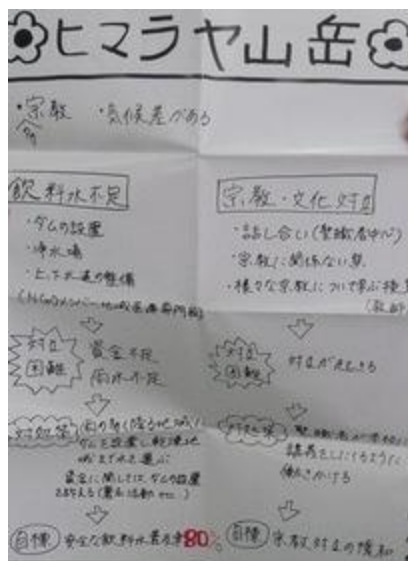
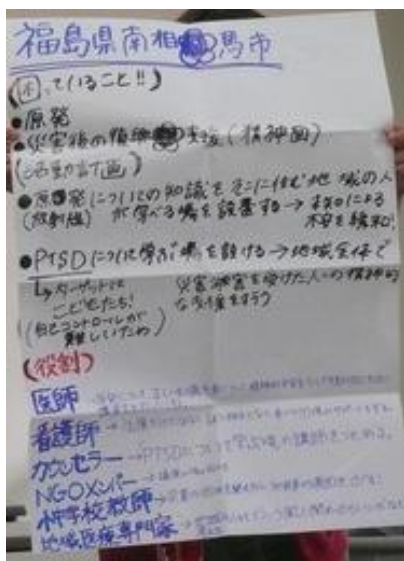
d 想定される対立・困難を1~2あげ、それへの対処策を出します。

e 3年後にどんなにするか、目標を提出します。

こうした活動は、おそらく初体験なので、大変なのだが、グループ内でわいわいがやがや、途中、インターネットで調べる人もでてくる。事前予習でたくさん調べてくる人もいる。(写真参照)







## 世界の地域課題に挑む「国際会議」 プラン続々

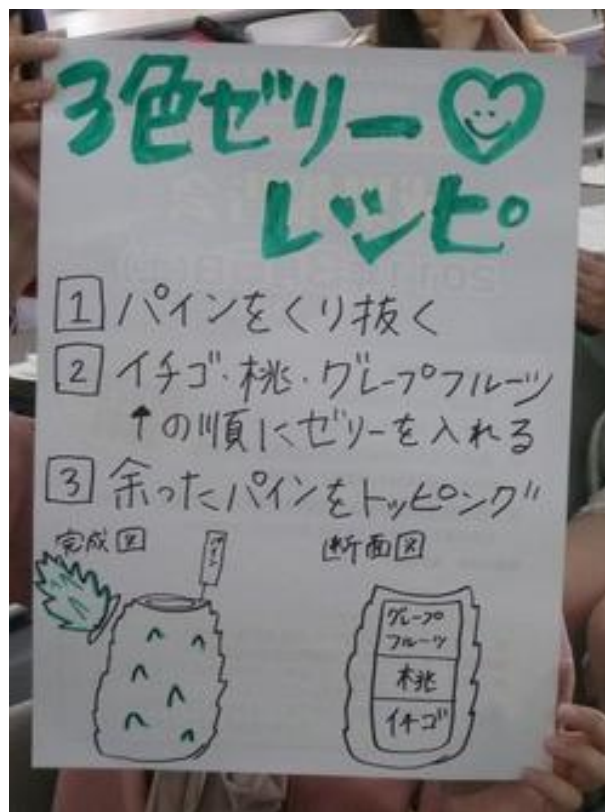
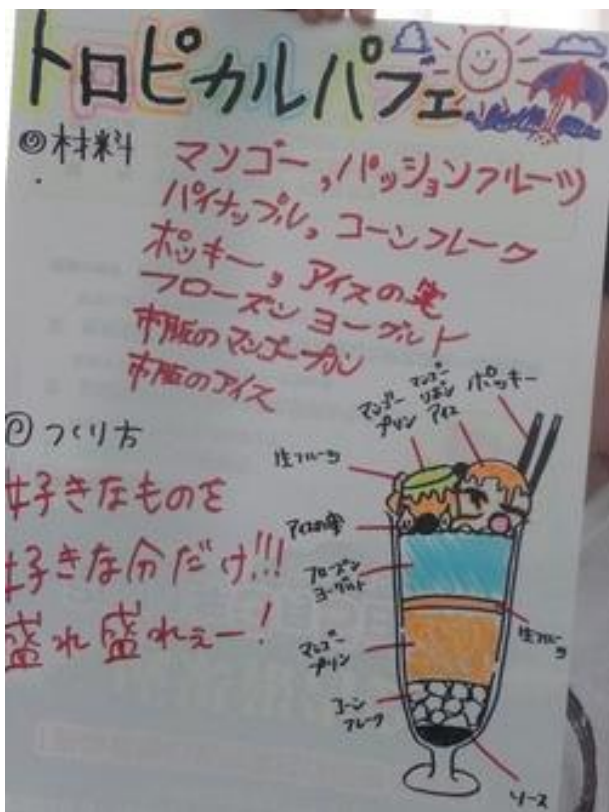
7月13日

12日の授業は、前回グループ単位で制作したプランをプレゼンして、検討討論した。

国連機関が、それらのプランを審査するという設定で進行した。審査は、前回、実習準備などで欠席したメンバーが務めた。

インターネットサイトなどで調べた情報をもとに、よく練り上げられたプランが続々と登場し、本格的な検討の足掛かりになりそうなものも登場した。

写真は、プレゼンされたポスターだ。



受講生ワークショップ スウィーツ ジェスチャ

7月20日

今回の授業では、受講生が作ったワークショップを実際に二つしてもらった。

スウィーツレシピは、ももとは、実際に制作してもらおうプランだったが、教室と時間の都合で、レシピづくりとなった。すごく準備されたものだし、他の受講生のノリもすごく、なかなか感心したものだった。

偶然で当たった二つの果物を使って、各グループがレシピを考えるものだ。ゼリー、パフェ、クレープなど多彩なレシピが出てきたのには驚いた。男子学生グループも「負けじ」と立派なものを提案した。写真は、そのレシピ・ポスターだ。余りにもよいので、ポスターを保存しておいて、いつか実際にやってみることを勧めた。

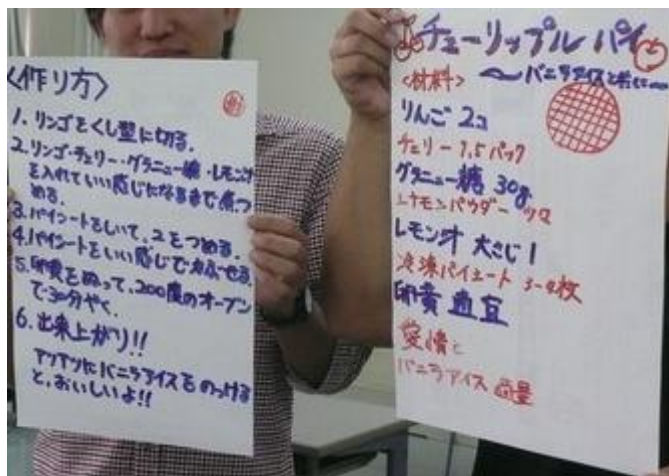
もう一つは、あるジェスチャーが、国によって、日本での意味とは全く異なることを、クイズ形式で始めた。よく準備され、また楽しい雰囲気をもつものだった。時間の余裕があったので、ジェスチャーによる挨拶を各グループが創作する活動も加わった。

二つとも、準備がよくなされ、楽しく進行したので、かなり高得点をゲットした。

終了後のコメントを二つ三つ紹介しよう。

「同じ世代の人がどんなことをしたら授業が楽しくなるかを考えていて、それを実際にやると、同じ世代なのに考え方が違うので授業内容もたくさんあって楽しめた。」

「授業を実際にやってみて、初めて、人に授業をきいてもらう大変さ、相手に聴いてもらいやすい授業をす





るのは大変であり、授業をつくっていくのも、相当アイデアやイメージが必要なんだなと知った。」  
「予定と変更になったけど、逆にワークショップがそういう協同発見であることを知れてよかった。」

## 学生がつくるワークショップは、若者向きで新鮮だ

7月27日

26日は、授業としては最後で、受講生が作るワークショップを2グループに担当してもらった。

1グループは、私がいつも「古今東西」という名付けでしているものを、「あるある・・・」というタイトルです。「お題」は、「子ども」「昭和」「テスト」「夏休み」「女子高校生」・・・といったものだった。ワークショップ本番への導入、アイスブレイキングにふさわしいものだった。

もう1グループは、恋愛観について、二者択一で分かれ、討論するものだった。「生まれ変わるとしたら、男?女?」、

「好きな人ができたら、自分から言うか、相手にいわせるように仕掛けるか」というものだった。討論では、興味津々の意見が続出。教室はえらく盛り上がった。最後は記念写真撮影!!

今回、学生がなじみやすいワークショップスタイルは、テレビ番組の出演者参加型視聴者参加型のものであることに気付いた。このごろのテレビ番組には、そうしたスタイルが結構ある。「あるある・・・」がそうだし、二者択一で、プラカードめいたものを挙げて、意見発表するのもそうだ。

写真は、二番目にしたグループが作成したABのプラカードだ。表裏にABが書いてあり、該当する方を表に出して示すという手法がとられた。

最後に、看護職についたら、ワークショップをする場面に出会うこともあるだろうが、どんなワークショップをするか、アイデアを出してもらった。そのなかのいくつかを紹介しよう。

・高齢者に対するグループワークで、高齢者の昔「あるある」探しをする

る

- ・〇〇好きな人集まれ~ワークショップ・・・自分の好きなものを同じくらい好きな人に集まってもらって、情報交換したり、どれくらい好きかを伝えたりする。
- ・小児科でのワークショップ 絵本の読み聞かせで途中から物語を考えさせる。
- ・上のプランの代案で、絵を描いてもらう。
- ・メタボリックシンドロームで悩む人へ やせたら何がしたいのか、や、目標、夢を語ってもらって、共感や意見を言い合えるグループワーク
- ・老年対象 自分の人生について一文字の漢字で表わしてもらい、語り合ってもらおう。

# 「教育原論」

## 2011年

### 授業スタート

11月26日

看護実習などのため変則スケジュールで、11月25日から授業スタート。カリキュラム改革のため、この科目は今回が最後。

受講生のほとんどが昨年開講の「教育学」を受講した。1年余り



たち、実習が終わると、見違えるように変わる、というか大成を遂げる。ぐんと大人になった感じ。そして、明るいコミカルささえ身につけている。

ということで、この授業にピッタリな感じ。

いろいろなことをしたが、最後の活動は、みんなが出した教育と看護にかかわるキーワード「動詞編」で登場してきた単語のなかから、関心が高いのを選んで作ったグループで、その単語(1~2)をタイトルにしたリレーお絵かきだ。

出来上がった作品を掲載していこう。

1枚目は、「生きる」グループ

アンパンマンを素材に表現



2枚目は、「遊ぶ、記録する」グループ

体育祭のいろいろな競技風景を描く

3枚目は、「はしゃぐ、ほめる」グループ

「ほめる」ことで大変貌大成長をとげた子どもの事例を出しながら、発表

※ ポスターだけを撮影するつもりだったが、ブログにのりたいと叫んで、顔を出してくるグループもあった。





4枚目は、「示す、走る」グループ

『ウサギとカメ』物語を加えて、絵を作り、物語を作る

5枚目は、「寝る、食べる」グループ



メタボリック・シンドロームになって、「天に召される」という警告の絵を描く

6枚目は、「教える、闘う」グループ

病気と闘うことを、看護師が患者に教える絵

実に多様な絵が登場し、絵につけた物語も、なかなか興味深い。

これらのプレゼンに出されたコメントもなかなかのものだ。



## 難しい問題を抱えた生徒への対し方を考える

12月10日

9日の授業は、子どもの自信（セルフ・エスティーム）を高める声かけを実演的に考えることから始めた。バリエーションに富み創造的な声かけが登場した。

そして、次のような「難しい問題を抱えた生徒への対し方」を、まずは個人で考え、それをもとにグループを作り、ロールプレイで対し方を表現した。

- ① 喫煙常習の疑いのある生徒
- ② 担任教師に対して「反抗的」な生徒
- ③ 教室にいけなくて、保健室登校している生徒
- ④ 性的「早熟」な生徒
- ⑤ 虫歯が多いのに、歯科医にいかない子ども



7グループできたが、実に多様な場面設定で、創造的な対処策が登場してきた。練習なしにぶっつけでやったのに、ドラマがドンドン発展し、ついに時間切れ状態になってしまった。

対処策の例をいくつか紹介しよう。

歯科医をうんと活用し、友達・親いっしょに歯医者に行く、という設定。

喫煙の背景には友達欲しさがあるとみて、友達関係を発展させる中で、喫煙を卒業して言う対処。

「反抗的」な生徒に個別対処するのではなく、友達関係のなかで対処し、緊張感をほぐしながら解決していく。

性的早熟な子どもへの対処をめぐる教職員間の討論場面を演じながら、対処策を提示していく。

などなど。

名演技を撮影しなかったのが残念だった。

このクラスの特徴は、こうした物語創造・演技におおいに示されているようだ。これからが楽しみだ。

## ストレス論争と健康キャンペーン 12月17日

この授業での討論・作業は、想定外におもしろい。

16日では、まずストレス論争。

床面を使って、一大『健康マップ』を作った。そのなかで、意見が大きく割れた「ストレス」「ときめき」「でんき」「恋」で討論。「ときめき」「恋」がでてくるところあたりは、「青春謳歌」真っ最中のこのクラスらしい。

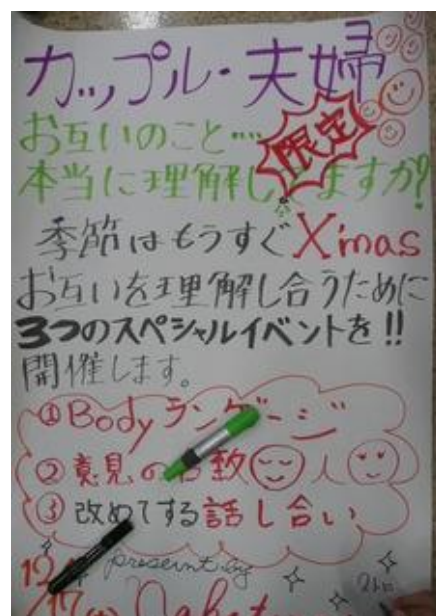
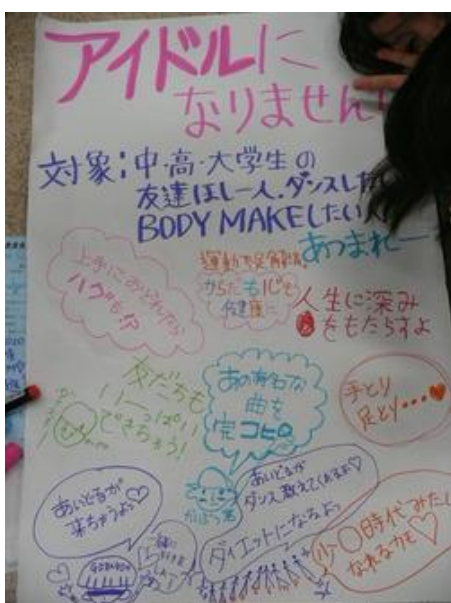
「ストレス」は、ごくごくマジな討論。

「ストレスは、人を苦しめるので、役立たないから大切にしたいくない」

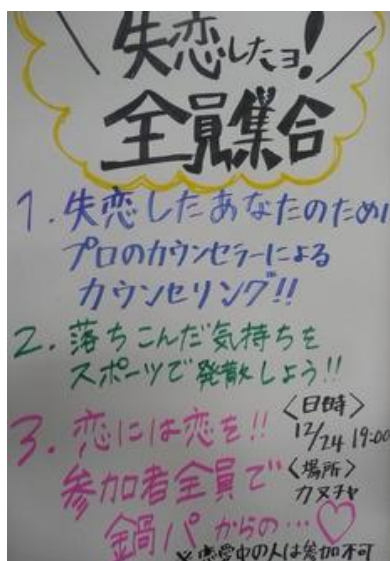
「適度なストレスは、役立つので大切にしたい」

「ストレスをもとに奮闘すれば役立つし、奮闘してストレスが消えれば、もう役立つというものではない」  
などと討論。

その後、健康マップででて来たキーワードをもとに「健康キャンペーン」をしたら、誰を対象にして、どういう企画をどういう作戦で展開するか、ポスターで表現。

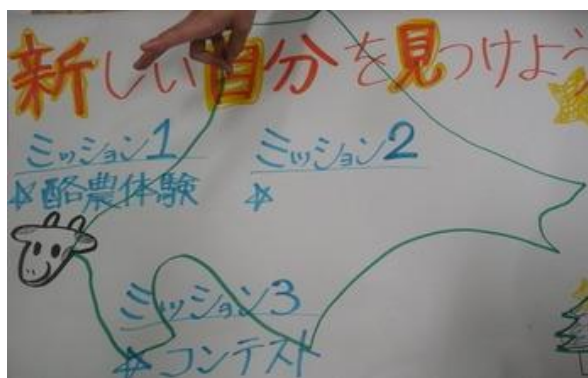






「タレント」をキーワードにしたグループは「タレントとダンス」で健康、ということでウケた。

北海道旅行、退職者への趣味キャンペーン、寝る子は育つ、・・・実に多彩なものが登場。地域保健の仕事につながっていくかもね。



### 保健室物語をロールプレイで創る 1月21日

20日は、年末年始・センターテストを挟んだため、一か月以上ぶりの授業。

「保健室で、体調不良の子ども、「保健室登校」の子ども、突然入ってくるクラスメートの子どもたちをめぐる動きのなかで、養護教諭がどう対応したかを」、即興のロールプレイを通して考える。

いろいろな物語が創りだされた。

子ども相互の不信を組み替える。

未熟な担任教師に管理的姿勢を改めるきっかけを与える。

管理職の協力的対応を生み出す。

クラスメートとの人間関係が芽生え始め、教室に行こうかなという気持ちになる子ども。

母親との協力関係を探る・・・

これまで養護教諭が視野になかった受講生で、レポートのなかに今後考えていきたいと書いた人があらわれた。

授業のテーマは、事態変化、子ども変化に対応して指導を創造工夫する、というものだ。

受講生は、即興にもかかわらず、興味深い演技を創造していた。

即興によるロールプレイには、一人ひとりのキャラがあらわれて面白い。普段は静かだが強力なパワーを出す人、いつも通りにこやかな人。

今回は、受講生が集めてきた多様な看護の物語をもとにできた6つのグループによる看護物語の発表だ。

授業も後半に入り、熟し始めている。

## 身近に出会いそうな「看護の物語」ロール プレイ

1月28日

27日は、受講生たちが探してきた現実の看護師の物語例から、特に関心を抱いたものを選んで作ったチームで作成した物語のプレゼンをした。

受講生たちが作った物語は、毎年しているが、今年はすべてがロールプレイによる発表になった。このところ続けているロールプレイにはまったのかな。



1枚目の写真は、患者への関わり方について先輩看護師から示唆を受けている場面。

2枚目は、別場所でしたロールプレイを、スライドを使用して発表したグループ。

3, 4枚目も、ロールプレイ・シーン

最後の各自のミニレポートには、こんな声が綴られていた。

- すべての事例がハッピーエンドだけど、実際には熱い気持ちだけでは上手くいかない時もあると思うのでクールになって事実を見ることも大切だと思う。

- 「笑顔」 すべての物語のいい場面の最後は笑顔があった。看護は笑顔が生み出せる!!

- 「楽しんだもん勝ち」 なんでもプラスに考える。後のことも考える。それがよりよい看護ケアになるかもしれないと感じた。

- 受容って難しい。その人にとってどう言えばこの人が少し



でも楽になるか考えようと思う。それが自分の意思と反対な意見でも

- ・専門的な事（看護ケア）とかだけでなく人間関係など他の事についても考えなければならないと感じた。
- ・何かしらのつながりが必要。ささいなこと、ちっぽけなことだけど重要。その橋わたしを看護師がやろう。

## 学生がつくりコーディネイトしたワークショップ

2月04日

授業も最終盤。3日の授業は、学生たちがつくりコーディネイトしたワークショップ4つ。

- リレー式に物語をつくる
- 共通点、違いを見つける
- 苦手な人との付き合い方
- 同じことでも、異なったトーンでしてみると

いずれも、よく考えられたプログラムで、準備もしっかりしていたので、盛り上がったワークショップとなった。最後のまとめ文から、いくつか紹介しよう。

- ・苦手な人との付き合い方では、相手を変えるのも一つの方法だし、自分が避けたりすることももう一つの手段だと分かった。
- ・場面や場所、対象に合わせて声のトーンなどを変えることで相手にいい印象を与えられるように感じた。
- ・コーディネイターとして仕切るのは、みんなを混乱させないようにとか分かってもらえるように準備するから、ワークショップをつくることは参加する人のことも考えた広い視野が必要。
- ・同じ言葉でも、楽しげに、ぶっきらぼうに、では全く異なった印象を受けたので気をつける必要があると思った。
- ・ワークショップを実際にする側に立つと、みんなの考えている表情や何か発見した時の顔がステキに見えた。
- ・ワークショップはまず楽しむというベースがあって、その上で深く考えていくことが大切。

## 「教育原論」終わる

2月11日

10日、最後の授業。

前回に続いて、学生が作ったワークショップの二つを実施。

初体験らしく、ういういしいコーディネイターぶりだが、いろいろな工夫が織りこまれている。

ボディランゲッジ・ワークショップの場合を紹介しよう。キリン・ゾウ・ヘビといったものを全員が表現し、仲間どうしを探し合う。そこで、動物、職業、楽器、乗り物といったグループをつくる。次に、全員の前でグループがいっしょになって表現し、そのグループ名を当て合う。という具合である。

もう一つのグループの、物語をつくるワークショップは、与えられた小文でスタートして、グループ内で物語をつないでいき、最後の人が、物語を『解決』させるという具合だ。

終了後も盛り上がって、受講生たちが企画をして、3月2日（金曜日）夕方に我が家を訪問して夕食会をもつことになった。

看護大学のカリキュラム改革の過渡期で、この学年だけは教育原論と教育学の2科目を担当し、二つとも受講した学生が多く、付き合いが深まった。



これで、2006年から6年間続いた、旧カリキュラムの「教育原論」は終了し、次年度からは、新カリキュラムの教育学のみの担当となる。

この授業を通して、受講生皆がそれぞれの人生物語をもとに、クラスメイトとの共同活動を通して、大きく成長した。「特別メニュー」ということで、4つの課題で出したい希望者が出すレポートを課したが、その一つは「4）この授業のなかで、自分が前進成長できたこと、自分の「ウリ」として再確認・発見できたこと、さらに前進成長するために、どんなことをめざしてどんなことをしたらよいか。」というものにした。

感動レポートの連続なので、紹介したいものばかりだが、紙数の都合で一つだけ紹介しよう。比嘉速望さんのものだ。

- ・人前に出て演技（ロールプレイ）をするのが一番の苦手であったが、演技の上手な学生や自己表現のうまい学生を見て、私も変わりたいという気持ちの変化があった。
- ・そして、ロールプレイをして、自分に対して満足できなくても他の学生の良い所を見つけ、次にかかそうと意欲的になっている自分がいた。
- ・これまでのロールプレイや看護の物語の作成によって自分の固い殻が少し向けた気がする。
- ・自分は常に緊張している性格であるが、この性格もロールプレイの中で「緊張している役」としていかすことができた。
  
- ・今までは自分は見た目も中身も暗い人間だと思っていたが、看護の物語を写真形式で発表した際に、常に笑顔に写る自分自身がいることに気がつき、思っていたよりも、自分は普段笑顔が多いのかなと感じた。もしかすると、私のウリは意外にも「笑顔」なのではないかと発見した。
  
- ・今までは、自分の意見が間違っているのではないかという思いから、発言を控えることが多かった。だが、みんなの発言を聞きながら、難しく考えすぎている自分に気づき、素直な気持ちを大切にしようと感じ、その気持ちを少しずつ発言できるようになった。
- ・今までは看護の難しさを一人で考え込んで嫌になることが多かった。だが、授業で看護の難しい場面をみんなで痛感し、色々な解決策を共に考えていく中で、看護をもっと知りたいと感じられるようになった。
- ・さらに前進成長するためには、私自身、多様な発想がもっともてるようになることが必要である。
  
- ・多様な発想がもてるようになるためにも、他大学の様々な学部、専門学校の学生と交流する。
- ・例えば、沖縄女子短期大学の保育科や沖縄大学の教員課程の学生との交流。
- ・教育や看護とは全く関係のない専門学生との交流。例えば、芸術・音楽を勉強する学生との交流。芸術・音楽を学ぶ学生は魅力的な人が多く、自分にはない要素なので良いきっかけになると思う。
- ・また、他国の人との交流や異文化に触れ、色々な刺激を受ける。
- ・色々な年齢の人が集まるボランティア活動などに参加する。
  
- ・感じたことや思ったことをかっこわるくてもどんどん発言していく。
- ・ちっぽけなアイデアでもどんどん出していく。
- ・アバウトすぎるが、「楽しんだ者勝ち」「どうせやるなら楽しもう」という気持ちが、自分自身を一番成長させるための鍵かもしれない。



## 看護大学受講生の我が家訪問 3月3日

2日午後、10数名の受講生が訪問。今年の2年生は、昨年の教育学、今年教育原論と、2つの授業を担当した。それだけにドラマが多かった。看護大学受講生の我が家訪問は、数年ぶりだ。

学生たちが持参したピザなどと我が家のハーブティー、奥武島のでんぶらなどに舌づつみを打ちながら、歓談の花が開いた。20才から50代までと、受講生間の世代の開きは大きい、それがより豊かなものを作り出していそうだ。

前日、テスト期間が終わったばかりで、疲れがどっと出ている様子だが、進級するにつれ、より一層鍛えられていく印象だ。今後の成長が楽しみだ。



2010年と2009年は、カットした。

## 2008年 (一部掲載)

### 授業スタート

4月10日

9日、最初の授業。看護大学では、3回目となる。昨年までは集中講義だったが、今年は、隔週の授業。

最初の年は、3年生対象。昨年は2年と3年との合同。今年は2年対象。ということで、とっても若々しい受講生たち。ちょっと前まで高校生だった、という雰囲気も感じる。このところ、比較的年齢が高い学生相手の授業が多かったのも、この「若さ」に、私はややおされてしまった感じがする。

看護大学は、実習を経るごとに、学生が成長していくようだが、まだ実習体験のない学生たち相手に、この授業で、どのようなドラマを生みだしていけるのだろうか。無論、ドラマの主人公は学生たちだ。学生たちがどんなドラマ、物語をつくっていくのか、楽しみである。

私のような授業形式に出会うのは、はじめてのようで、かなりびっくりさせてしまったかもしれない。受身ではなく、学生たちがどんどんつくっていく授業に向けて、学生たちがどんな創造的なかわりをしていくのか、楽しみにしている。



## 多様な表現で相互対話へ

4月23日

今日は、専門家とクライアントの関係ということで、ことば・ボディランゲージなど多様な表現を使った、対話・コミュニケーションについてのワークショップを行った。

2回目の授業なので、学生たちは多少慣れてきたようで、恥ずかしさや照れを残しながら、多様な表現に挑んだ。

「誘うー断る」のロールプレイでは、7つのケースについて、多様な「誘う」ありようが実演された。受講生たちの年齢幅が小さいなかで、社会人入学生や飛び入り参加の卒業生の見事な演技が傑出はしていたが、大半を占める10代受講生も結構創造的な演技をしていた。「誘う」中味、「誘う」ときの言葉、「誘う」ときの位置など、かなり興味深いポイントに学生たちは気づきはじめた。

無論、本格的な看護実習などはまだなので、リアルな緊張感ということでしょう、これからのことになるが、それでも自分たちのこれまでの経験をもとに、多様な「誘い」に挑んだ。

この若いエネルギーをもとにして、次の授業での新たな課題にどのように取り組むのか、楽しみにしている。

## 養護教諭が出会う難題に挑戦

5月07日

3回目なので、受講生はワークショップ型授業の流れにずいぶん慣れてきた。緊張・びっくりから楽しむ雰囲気になってきた。

しかし、今日の素材は、養護教諭が出会うことが多い、喫煙生徒への対応、担任とのトラブルをもつ生徒への対応、歯医者治療を拒否する生徒への対応、性的成熟が早すぎる生徒への対応、保健室登校生徒への対応という難題である。これらを、ロールプレイを中心に追求した。生徒・学生の立場から、教育や看護の専門家の立場へと、自分自身を転換させて考えるという、新たな「ハードル」を越える取り組みなので、難渋している気配も感じる。また、まだ「年頃」なので、ロールプレイをする恥ずかしさもあるようだ。

それでも、一人ひとりがいろいろな挑戦を披露した。

こんな物語づくりをさらに発展させるために、次回にむけての課題として、「看護の物語」探しがあるが、どんな物語が集まってくるか楽しみである。

## マップ討論と健康キャンペーン

5月21日

健康についてのいろいろなキーワードを、役立つかどうか、大切にすることがかを基準にしてマップ状に並べたものをめぐって討論

5月21日は、健康ということ素材にして、教育内容について考えることをテーマにした。



若い学生ならではのいろいろなキーワードが登場してきた。「ドリエル」というのは睡眠薬だそう。これをめぐって、役立つかどうか、大切にされるかどうかは、かなり長い論議になった。そのせいもあってか、一つのグループが「健康キャンペーン」のテーマにもとり

あげた。



高校時代まで含めて、これまで受身的な授業に慣れてきた学生たちが、この授業のなかで、自分の意見をつくり、積極的に発言をしていくことが「強いられてきた」のだが、四回目の今日の授業あたりになると、かなり積極さがでてきた。次回からのこの授業の後半のなかで、さらには2年後期から始まる本格的な看護実習のなかで、自分なりの意見を自分なりに発表する姿勢が強められていくと思う。今年は2年生の学生が中心だが、昨年まで受講していた3年生の学生たちを見ていて、そう確信する。

選んだテーマでキャンペーンをする  
高齢者対象に「恋」のキャンペーン

## 看護の物語

6月18日

今日の授業は、学生たちが探したきた看護の実話（成功失敗談）をもとに、学生たちがグループ単位にさまざまな場面について、「やばい場面」と「よい場面」とを対照的に演じたり、紙芝居やポスター使って発表したりした。

迫真迫る演技もたくさんあり、そのなかから、看護の過程で、どのように患者とかかわるのか、についてのたくさんの発見をしていった。

今後、看護実習をくりかえし、また人生体験を深めるなかで、今回の多様な事例を深めていってほしいと思う。





自由課題として、受講生が作成する「ワークショップ」を募集したが、たくさんの学生が応募した。実際にやれるし、かつ意義深いものがたくさんあったが、そのなかから領域・テーマなどを考慮して、三つのワークショップを次回の授業でもらうことになった。昨年も学生によるかなり充実したワークショップがあったが、今年もかなりの期待がもてそうである。楽しみにしている。

右写真 新生児の夜泣きに悩む母親への看護師のかかりわりかたの2パターンを示す。



左写真 洗髪 シャワー器具を持参して実演

## 『教育原論』への学生による授業評価

9月16日

授業の最終日におこなう、アンケート結果が郵送されてきた。昨年も同じ設問項目だったが、まったく同様の結果だった。(5点満点)

学生自身の授業態度については、「出席」「遅刻なし」については、4点代後半で高いが、「教員に求められたこと以外に自分で積極的に調べた」「この科目の勉強はやさしかった」「この科目で良い成績をとるのは容易だ」などは、3点代後半である。

「教員の熱意が感じられた」「丁寧で、わかりやすい授業であった」「学習の目標をはっきり示してくれた」「教員の話し方は明瞭で、聞き取りやすかった」「課題(宿題・レポートなど)の量は適当であった」「授業に活気があって単調ではなかった」「授業内容のレベルは適切であった」などの授業の進め方については、4点代後半で高かった。

また、「この科目の受講後、この科目に対する興味は増加した」「この分野の見方、考え方を学ぶことができた」「この科目の受講を他の学生にも薦めたい」などの項目も、4点代後半で高かった。

おおよそ予想される結果であった。

アンケート設問は、学生にとって親しみやすく答えやすいもので、工夫の跡がよくみられるものといえよう。その意味で、看護大学の担当者の努力に敬意を表したい。

一点だけ、注目をしたい。これは、どこの大学にも共通することだが。

全体的にみて、教員が情報を提供し、それを学生が受けとるスタイルの授業に対応するものであり、私の授業のように、学生たちの共同作業・討論を軸にすすめる双方向型・多方向型の授業に対応するものがとても少ない。

そのため、私の授業に対する改善点を、このアンケートから読み取ることはやや難しい。

看護大学全体の授業の一層の前進発展を期待したい。



# 2007年

この年は授業過程の記事を作成していないので、授業終了後のまとめと学生評価の紹介になる。

## 看護教育の今後

8月10日

9日、5日間の集中講義が終了した。今年は最後に、学生自身がつくったワークショップを三つ実施した。そしてその最後のものは、受講生がその場で、グループごとにワークショップをつくるワークショップということになった。担当の2年男子学生たちは、事前に自分たちのつくったワークショップを友人の協力も得て3時間にわたって試行したが、うまくいかないということで、思い切って転換して、受講生たちにワークショップをつくらせることにしたという。

この学生たちも含めて、当日の三つのワークショップは見事なコーディネートぶりで、初体験とは思えないものであった。この三つの他にもたくさんのワークショッププランが提出されたが、すべてすぐれたもので、実際にやってほしかったが、時間の都合でできなかった。

テキストに『ワークショップガイド』を使ったこともあるが、ワークショップ型授業に新鮮さを覚えたためだろうか、任意提出のワークショッププランをかなりの学生が積極的に提出したのである。

最後に「看護の物語づくり」を実施した昨年のもとの日程を変えて、今年の授業は、最後にこのワークショップづくりをしたので、ここに学生の印象の焦点が集中したようである。

※ 余談だが、授業開始時間に眠そうにしている学生が多いことに気づいた。7月末までの授業・試験期間に引き続いての集中講義で、昨年のように休暇期間が終わって新学期を迎える時期とは異なっているためのものであった。と同時に、ブログを使用しているレポート提出であったが、提出時刻をみると、深夜提出がかなり多いことに気づいた。私がびっくりするほど、夜型がかなり多そうである。だから、最終日3時ころまで眠り過ぎて登校してしまったまじめな「豪傑」もいた。私は冗談に「夜勤実習しているんだよね」といってしまった。

昨年の授業では、全体の2~3%が私の説明だったが、今年はやや増えて5%くらいになったのだろうか。私の医療・健康・身体・精神にかかわる考えを紹介することが多くなった。それは、もう少し話してほしい、という昨年の学生の提案にもよるが、「聴きたがっている「雰囲気」を感じてのことでもある。そして、学生たちの世界をもう少し広げなくてはと、私を感じたこともある。

授業の進行とともに気づいたことの一つは、2年生と3年生の大きな違いである。討論の場面で、それがとくにあらわれた。どうやら、実習体験の大きな違いのようである。かなり厳しい実習を通過した3年生には、看護をめぐる、さらに自己の成長をめぐるの一つの大きなヤマを越えたことが反映しているようだ。昨年の3年生だけ対象と、今年の2年3年半々の構成が大きな違いをつくりだしたようである。

その意味で、看護大学では実習が決定的に大きな場になっているようである。2年生までは、伝統的なスタイルで説明中心の一方的な講義形式が圧倒的なのようである。それが厳しい本格的実習を経ると、獲得した知識が生きてくるという感じであるし、実習体験をふまえて、自分自身から発する学習要求・学習課題が鮮明になってくるようである。

といっても、2年生のなかの、多様な社会体験を経てきている学生には、3年生に勝るとも劣らない発言が聞かれた。

そんな意味では、社会人入学の学生の比率がもっと高いほうがよいのではないかと思う。日本の大学は、高校からストレートに大学に入る、せいぜい一浪くらいで入るのが、圧倒的に多い。そうした事例は、世界的にみてむしろ少ないほうだと思う。そのため、何をどのように学ぶのか、なぜ学ぶのかというイメージがとても希薄であり、結果的に「流れ」に

のって受動的に学んできた高校時代の学習スタイルを大学に入っても継続させる学生がかなり多いどころか、一般的ですらある。だから、私の授業のように自ら主体的に学び、討論・協同作業を中心にする授業への対応にとまどう学生が圧倒的に多くなる。その意味では、私の授業の評価では、そうしたことができる構えをつくる、そうしたことに慣れることの段階にいたればよしとせざるをえないことになる。とはいっても、旧来の受動的な学習スタイルだった学生にとっては、びっくりするような転換であるのだが。

そうした意味では、「流れ」にのりだけの学習をどこかで転換させなくてはならない。本当なら中学高校時代にそうである必要がある。しかしながら、現実の中学高校、とくに受験型高校では、ともかく授業量を増やして、つめこむことに力点がかかり、それだけ学生の受動性、そして「世間知らず」「体験不足」を構造的に作り出している。

そうした大学生の姿勢を転換させることに腐心しているのが、多くの教育熱心な大学の特質ともなっている。だが、看護系を含めて、実技を中心とする大学では、高校と同様に、「つめこむ」ことが求めるという実態がある。それは国家試験があるという理由もあるが、伝統的な教育スタイルで、それしかなかったというからである。他のスタイルを知らないだけのことである。

そうした大学にあっては、学生教育にとって、看護系でいうと、実習体験がすさまじく大きな位置を占め、大きな意義をもつことになるのである。しかし、それだけに、大学での講義においても、その転換を果たせるような工夫をお願いしたいものである。私の各地の大学でのFDの焦点的テーマはそこにある。

これは大学生に限らないことであるが、近年の若者たちは、自分の「気が合う」と感じる数人以内のグループで固まって、人間関係を構築し、それ以外は「他人」という関係のままにすることがかなり多い。今回の授業でもそれを感じ、終了後の学生の感想を見ると、そうした枠を越えて、多様な人と語り合い、協同作業したことが印象に残ると書かれている。学生総数が500人に満たない少人数の大学でありながら、学年を越えると、サークル所属者以外にほとんどつきあいがなくなるとか、同じ学年でも、男女が分かちがたとか、自分が所属するグループとは、実務的つきあい以外にはない、という事例がとんでも多い。そして、人間関係をめぐる豊かなドラマのなかで成長するのが、この世代にとってとくに重要なのだが、そのドラマの範囲が小さいし、「気遣い」型ドラマにとどまってしまう。実習体験がそこを突破する機会を与えるのだが、講義を含めて、日常の大学生活がそういう機会を多く提供できるかどうかは重要な教育課題といえよう。

そうした意味で、看護を含めて医療福祉関係の教育機関にあっては、従来の伝統的教育のありようをどう転換していくかが問われている。そうした問いは、日本では、90年代にはいつてからいわれるようになってきた。アメリカあたりでは、それよりもっと以前になり、それに日本の医学教育はかなり刺激を受けている。

にもかかわらず、現実には伝統的スタイルがなお圧倒的な形態となっている。そうした状況を、大学教育全体のカリキュラム構成レベルと、個々の授業レベルにおいて、どう転換していくのか、そのことが大きな課題となっている。

## 学生による授業評価

10月28日

県立看護大学から、授業評価の集計結果が送られてきたので、掲載しよう。各項目ごとの5段階評価の得点である。

5段階評価で38項目にわたって評価されている。そのうち、5.0が2項目、4.9が16項目、4.8が5項目、他に4.7が4項目、4.6~4.0が8項目、3点台が3項目であった。

低得点項目は、集中講義であったことをはじめ、この授業のもともとの特性によるものが多い。全体としては高得点であった。

|    |                             |     |
|----|-----------------------------|-----|
| 01 | この授業によく出席した                 | 5.0 |
| 02 | この授業に遅刻をしたことがない。            | 4.8 |
| 03 | 授業中、私語をかわしたこともなく、授業態度はよかった。 | 4.7 |
| 04 | この科目の予習、復習をした               | 4.4 |
| 05 | 教員に求められたこと以外に自分で積極的に調べた     | 3.8 |
| 06 | この科目の勉強のために図書館をよく利用した。      | 3.2 |
| 07 | 教員に積極的に質問した。                | 3.9 |
| 08 | この科目はもともと興味があった科目である。       | 4.5 |
| 09 | この科目の勉強はやさしかった              | 4.1 |
| 10 | この科目で良い成績をとるのは容易だ。          | 4.0 |
| 11 | 教員の休講は少なかった。                | 5.0 |
| 12 | 授業時間や場所の変更など学生への連絡が適切であった。  | 4.7 |
| 13 | 計画された授業が予定通りにおこなわれた。        | 4.9 |
| 14 | 教員の熱意が感じられた。                | 4.9 |
| 15 | 丁寧で、わかりやすい授業であった。           | 4.9 |
| 16 | 私たちの理解度に配慮した授業の進め方であった。     | 4.8 |
| 17 | 質問に明快な回答を与えてくれた             | 4.9 |
| 18 | 私語に対して適切に対応してくれた            | 4.7 |
| 19 | 学習の目標をはっきり示してくれた            | 4.6 |
| 20 | 教員の話し方は明瞭で、聞き取りやすかった。       | 4.9 |
| 21 | 教員の話し速度は適当であった。             | 4.9 |
| 22 | 板書は適切で効果的であった。              | 4.4 |
| 23 | 教科書・配布資料の使い方は効果的であった。       | 4.6 |
| 24 | 視聴覚機材の使い方は効果的であった。          | 4.5 |
| 25 | 課題（宿題・レポートなど）の量は適当であった。     | 4.8 |
| 26 | この授業は全体としてよくまとまっていた。        | 4.8 |
| 27 | ポイントをおさえてくれた。               | 4.7 |
| 28 | 授業に活気があって単調ではなかった。          | 4.8 |
| 29 | 授業内容の量は適切であった。              | 4.9 |
| 30 | 授業内容のレベルは適切であった。            | 4.9 |
| 31 | この科目を受講後、この科目に対する興味は増加した。   | 4.9 |
| 32 | 自分自身と他の学生との共通点・相違点がわかった     | 4.9 |
| 33 | この科目を受講して今後の勉強に役立つと思う。      | 4.9 |
| 34 | この分野の見方、考え方を学ぶことができた。       | 4.9 |
| 35 | この科目を受講して今後の勉強に役立つと思う。      | 4.9 |
| 36 | この科目を受講して、触発されることが多かった。     | 4.9 |
| 37 | この科目を受講を他の学生にも薦めたい          | 4.9 |
| 38 | 教室の広さは講義に適当であった。            | 4.9 |

この大学の授業評価アンケートは、かなり独自性が強いものだ。そして、具体的であるので、わかりやすい。無論、そ

れだけに個々の授業によっては適切性が低くなるものがある。それにしても、改善点をみつけやすい項目が多いといえよう。

この評価のなかで、4点以下は5、6、7の3項目であるが、5、6などは集中講義のため、やむをえない面がある。また、教育系大学ではないので、教育関係図書を図書館で調べるのが難しいのかもしれない。また7は、授業全体がワークショップスタイルであって、受講生が積極的発言を求められるので、教員への質問という形の発言がすくなくなったのであろう。



# 沖縄大学

## 子ども学科2014年度「生徒指導論」

(p77の「大学をまたがったの記事」にも書いたので、参照されたい)

### 授業スタート

10月1日

30日5限目。

昨年度前期「教職論」を受講した学生たちが2年になって、再び私の授業を取るようになった。再会した学生たちは、成長して大人っぽく見える。沖縄のなかで図抜けた元気さは相変わらずだが、それに知性というか、落ち着きというか、そんなものが加わってきたというのが第一印象。

この科目は、子どもたちが抱えがちな難問を、人間関係を築きつつ解決していくことを助ける指導を見つけ創造することが課題となる。テーマごとにグループを作って、難問の原因・背景・実践例などを調べ、具体的な指導計画にまとめて、クラス全体に提示していく。

かなり高度な課題だが、エネルギッシュな彼らは、きっとやり抜いていこう。

受講生に、私が持っている関連図書を貸し出したが、一人一冊が多かったが、二冊借り出した学生も何人かいる。それらを読んだことをもとに、次回グループ作りをして、テーマに挑むことをスタートさせる。

今回は、オリエンテーションなので、難問例のいくつかについて、私が話した。レクチャーするのは、滅多にないが。といっても途中で、即興のロールプレイをはさんだりした。

毎回、ミニメモを1~2行書いてもらうことは、最近の私の授業の定番だが、次のようなものが飛び出してきた。

「親の年収を考えながら、進路を決めたのは大学進学の時だったので、もう少し早めに考え始めるべきだったのかなと感じました」

「万引きは小3に多くて、こっそり処理するのは、その子のためにならない。事件を機に子どもがどう変わるか対応することが大切」

「貧困の子ども達の学力が統計的に低く、親の経済力と比例していることはおかしいと感じました」

「スポーツチーム中の競争で荒れる子ども」

「発達障害の情報や虐待の種類。しっかり授業中に飛び交う知識を見逃さないようにしたいです」

「万引きをしてしまった子どもの気持ちをもっと理解したいと思った」

「その場しのぎの教育では意味がない。事件をきっかけにして成長させる」

「ADHDでは、当の本人へのケアも、もちろん必要だが、いかに周りの人たちに対応するかも重要になってくるということを知った」

「初めて浅野先生の講義を受けたので、他の先生にはない明るさがあり驚いた。また、他の先生とは異なった授業方針だなと感じた」（編入学生）

## グループ学習発表 保健室登校 虐待 ADHD グループ活動になれていない 子ども

10月15日



3回目授業。受講生は、テーマごとに12のグループに分かれて、グループ相談。来週から、いよいよプレゼン。どんなプレゼンと討論が生まれるか楽しみだ。

私が担当した「教職論」を受講していた1年前期より、ずっと成長した印象。私が貸与した参考資料に加えて、自分で購入したり借り出したりしてきた書籍、ウェブサイトで見つけた情報などで自主学習してきたことをもとに、グループ討論がすすむ。

授業終了時に提出するミニメモがその雰囲気伝える。一部を紹介しよう。

プレゼンの流れとテーマに対する実例・課題について話し合った。実例について話し合う際に、今実際にボランティアに行っているの、その時の出来事を含めて話し合い。

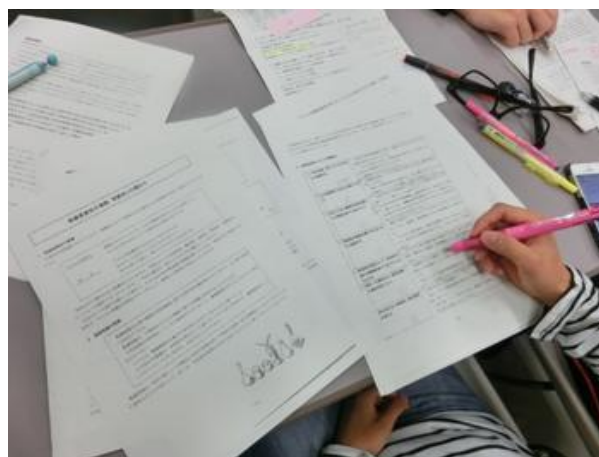
自分は、保健室登校をする子の原因や背景と対応の仕方・割合を調べただけだったが、友達が「保健室の過ごし方」について調べていて、初めて保健室での過ごし方を知ることができて、また保健室での過ごし方も大切ということに気づかされた。

虐待について深くテーマを絞り、そのテーマに担当をつけ発表までの準備の見通しをたてた！！虐待は教師にならなくてもなっても一応かかわっていく身近な問題だと思うので、しっかり調べていきたい。

ADHDについて調べたことを話し合った。ADHDには3つのタイプがあり、ワーキングメモリが苦手だということがわかった。

グループ活動に慣れていない子どもにはいろいろな原因や解決方法があることを話し合った。またグループ発表の内容確認。実習中の子達に類似した子どもはいるか話し合った。

教師になった時、何が必要なのか、どういった対処が求められるのかを重点にしたい。他グループの人に何かしらの影響が与えられるように。





グループ学習発表 保健室登校・対人  
関係困難・不登校 10月22日

4回目の授業。今回からグループ学習の成果のプレゼンと討論。

2年後期ともなり、学習と発表の力の前進が著しい。各グループとも、事前に何回も集まり、資料作成や演技練習なども加えて、発表に至った。プレゼンも多少の緊張をはらみつつも堂々と、教壇に立っている雰囲気も加

わって、すすめられた。

資料配布したグループ、図解したグループ(写真参照)、演技でイメージを示したグループ(写真参照)。不登校グループは、いくつかのタイプの不登校について、グループディスカッションをさせる。



これらをもとに、自分たちを教師の立場に立たせて、指導をどう展開するかが、第二次発表の課題だ。

どんな発表になるか、楽しみである。第一次発表は、あと3回の授



業で行われる。

いじめ・貧困・非行

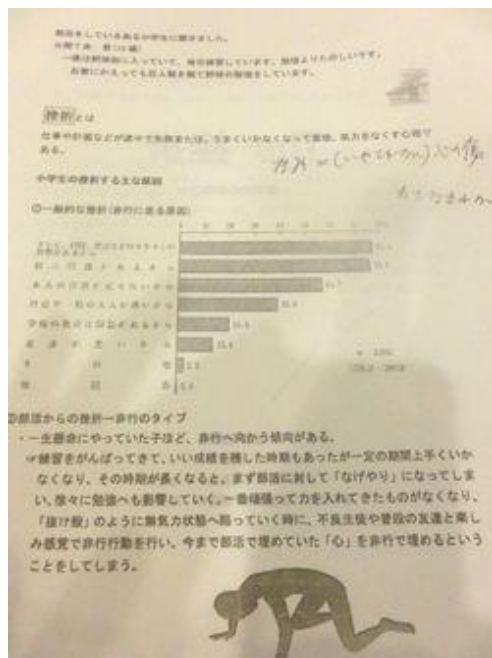
10月29日

28日は、グループ発表2回目。「いじめについて考える」「貧困に翻弄される子ども」「THE 挫折 部活からの非行」の3つ。いずれも、資料をいくつも読み、課外に何回も集まって相談した成果がにじんでいた。

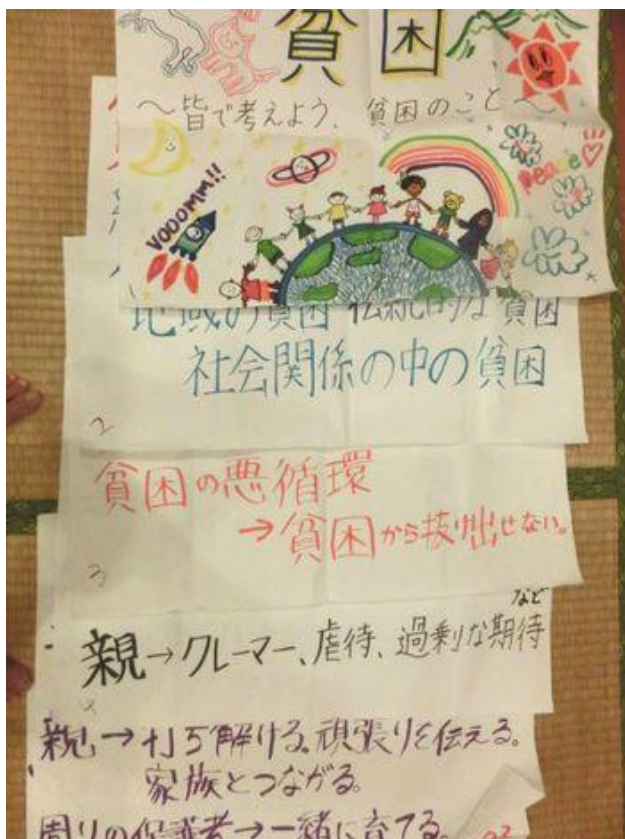
いじめの最近の変化に注目し、教師はどのように対応したらよいかを問う。

子どもの貧困のデータを集め、その特徴を明らかにしつつ、教師の対応策を探る。

部活で挫折して非行に陥りかかった子どもへの対処を実例を交えつつ、問題提起。







はどの子においてもとても大切だと思う。」

「今日の発表で、初めて知り得た情報が多々あったので良かったです。また教師の立場を取る際に、多角的に視野を広げる必要があるなど知りました。非行やいじめなどさらには貧困と分野は様々、別々でもなにかこの3つが密接に関係していると感じました。スパイラル状になっている。」

いずれも、状況報告にとどまらず、教師の対応を問うものであり、それを全体の場に投げかけていた。それへの他グループからの反応をもとに、第二次発表では教師としての指導を提起するものになるだろう。

一つのグループは、写真のように模造紙何枚も使って、わかりやすく提案。

もう一つは、写真のようなデータに加えて、グループメンバーが、実際に現在取り組んでいる事例を出したので、迫力があつた。

グループによる自主学習研究をもとに授業を構成しているのだが、開講以前はうまくいか多少は心配したが、各グループとも事前準備がよく、私の想定以上だ。やる気溢れる流れができてきた。今後の発表討論は大いに期待できそう。

ミニメモもあふれるばかりに記入する受講生が出てきた。2例紹介しよう。

「貧困にも様々な種類があること。挫折とはいやされない心の傷であること。ちょっとしたきっかけで非行やいじめにつながるということがわかった。いじめ、貧困、非行どれも対応はむずかしいが、やはり話をする聴くっていうの

## 第一次発表が佳境

11月12日

11日授業は、第3回目のグループ発表3つ。発表は残





すところ3つのみ。

各グループとも、私の当初予想を上回って、「虐待」「ADHD」などについてよく調べた上での立派な発表。今回は、パワーポイント使用、模造紙使用などと合わせて、プリント配布しての発表だ。いずれも、文献をいくつか読破し、その内容を自分たちなりに理解整理して作られている。

と同時に、発表過程では、聞き手がクイズの穴埋めをするとか、発表者が出した討議題についてグループ討論をして、それを全体の場にて提起するなど工夫が凝らしてある。一つのグループは、現場教師の実践事例をもとに、その事例ならどうすればよいのかを問いかけるものだった。

これらをもとに、第二次発表は、実践上の方策を提示する発表が期待されている。

次回と次々回の授業では、実践事例をロールプレイ形式で探求してもらおうと準備している。

発表側にしろ聞き手側にしろ、これらの過程で、いろいろと発見思考したことを、特別レポートとして提出されることも期待されている。このまま順調に進めば、立派な成績に到達する受講生が多くなりそうな気配だ。

## 子どもを説得する実演

11月19日

今回は、次のような題で、子どもを説得する場面を、グループごとに実演してもらった。

1. クラスの何人かで、○○ちゃんと遊ぶ会をつくろうと、何人かに誘う。○○ちゃんは、病気をもっているし、強度の人見知りで長い間登校できずにいたが、久しぶりに学校に来るという連絡が親からあった。
2. クラスのなかでおとなしめの3人は、休み時間も、ほとんど自席に座っているだけだ。その3人に○○クラブをつくって楽しもうと働きかける。
3. 家庭環境が厳しすぎるとか、少年野球でストレスがたまりすぎとか、が背景にあり、元気が良すぎて、授業中うるさいとか、女子に汚い言葉を投げつけるなど、困ってしまうことが多い4人。何かの作戦を考えて、かれらに頼む。
4. 隣の子どもにちょっかいを出し過ぎ、苦情がでてきて家庭訪問するが、親子密着しすぎて、子どもをかばうだけでなく、教師の責任だと言ってくる親に対応する。
5. 元気がとてもある子に、孤立気味な子どもといっしょに遊ぶことを勧める
6. やんちゃな子どもに、ボールを一人占めしないで順番にやるよう頼む
7. 人前に出ることが好きでない子どもに、自慢大会にエントリーさせる

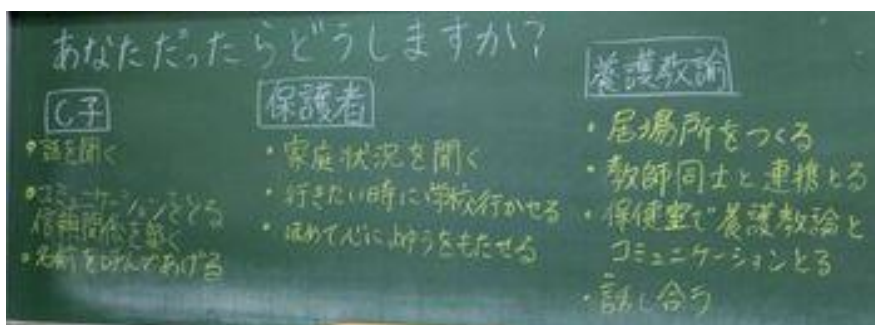
かなり苦戦をしていたが、それを明るさでやり通すのが、このクラスの特徴だ。緊張しつつも立派にやり遂げているものが多かった。

このクラスは、1年前期の「教職論」でも担当したのだが、すごい成長ぶりだ。そのころは、高校生の気分をかなり残しつつはしゃいでいたのだが、いまではしっかりと教職学生として取り組んでいる。

今回は、「モンスターペアレント」問題の取り組んだグループのプレゼンもあったのだが、保護者たちとともに学校を創る方向で、積極的な取り組みを提起していた。

自分なりにテーマをたてて書く特別レポートも提出され始めた。その一部を紹介しよう。グループ発表をもとに、自分なりの思考を掘り下げたものだ。地道な思考だけに、今後がおおいに期待できそう。

沖縄の『貧困』について



(中略)

教師になった時、そういった『貧困』の家庭にいる子どもに対して、どんな接し方をしたらいいのか、とても考えさせられました。ご飯を作ってあげる、という特別扱いは、その子をいじめの被害者にしてしまうと思うし、その子の親としっかり話して、

保護を受けてもらうなども、何もわからない教師が言っているのか、そう考えると、なかなかその家庭との関わり方に苦戦するだろうなと思いました。子どもの為を思って起こした行動が、その家族を傷つけてしまうのかと考えると、教師の立場は本当に難しいと思います。「もし家庭環境があまりよくない生徒がクラスにいたら?」という問いは、解決できそうにないです。

『貧困』という問題は、身近にないものだと思っていましたが、こんなにも近くにあることを知りました。もっと今の沖縄の現状を知ることから始めようと思いました。

#### 保健室登校について

(中略)

実体験でもあるので、昔の私が先生方にしてほしかったことは、見守ってくれることでした。保健室から教室に帰ってきては、「またさぼりか?」と言われたり、「○○部なのに」という言葉を聞き、受け入れるのは、あの時の私には到底できませんでした。「先生は弱みを平気で言うてくる」という思いしか考えられなかったし、そういう体験を通して考えたことや感じたことを、教員として受け持った生徒に味わってほしくないなと思いました。また、保健室

登校になりがちな生徒に対して、どういった声掛けをすべき

かしっかり考えようと思ったし、生徒が自分の感情を吐き出しやすいような信頼関係を築きたいと思いました。



## 満足させる第一次発表完了 興味深いレポート続出

11月26日

25日授業で、全グループの第一次発表が完了した。熱が入ったか、2回発表したグループもあった。内容はおおむね私の当初期待を上回るものだった。

来週から始まる第二次プレゼンは、子どもをいかに成長させるかの指導に焦点化した実践的なものを期待している。

レポートは、授業で、予習復習で、グループ作業討論のなかで、このブログ記事を読んで考えたことなど、「なんどもあり」だが、14回目授業時までなら、いつでもどれだけでも提出OKだ。すでに5本も出した人がいる。

レポートの中で特に興味深いのは、自分の高校までの体験をもとに、授業テーマともかかわって深い考察をするレポート提出が多いことだ。

今回は二つほど、レポートの一部を紹介しよう。

\*\*\*\*\*

人それぞれいじめられた経験や友達関係でのトラブルはあると思います。中学生の頃、無視をされたり、仲間外れを受けたことがあります。暴行を受けることはありませんでしたが、人間不信になりました。しかし、私にもプライドがありこのころは意地っ張りなところがあり、この程度の仲間ならいらぬなどと自分の中で解釈していました。今だから簡単に述べるのが出来ますが、当時は孤独感を感じ、非常に辛い日々でした。今もなお、トラウマになっている部分は多少あります。そして、高校にあがると、私の場合は教師との間でトラブルもありました。私か所属していた〇〇部内でのことですが、偏見や体罰がありました。日々の練習では緊張感と多少の恐怖心を抱いていました。私か退部しなかった理由は〇〇が好きということでした。自分の高校三年間の部活動を奪われたと私は感じています。このような教師からの嫌がらせは異例なことでしょう。私は、このような教師を許しません。しかし、メンタル面(精神的な面)では非常に鍛えられた気がします。私自身は中学の頃の経験と高校の頃の経験から、身体的、精神的な痛みを覚えました。それだからこそ、人への思いやりや気遣いなどは人一倍強いところがあると思います。痛みの分かる人間は他人の苦しみへも共感し、理解してあげられると思います。私はそういった経験を踏まえ、今、教師を目指しています。私のような体験をする児童生徒を今後増やしてはいけません。

\*\*\*\*\*

「いじめ」の原因は人それぞれ、多種多様です。ストレス発散のためのいじめ、相手を支配したり、仲間から除外するいじめ、発達障害を持っている子へのいじめなど数えきれないくらいあります。私自身も、小学生の時にいつも一緒にいた友達から、急に仲間外れにされたことがあります。仲よく遊んでいた次の日に、いきなりだったので原因もわからないままずっと無視され続けました。このように、「いじめ」というのは、仲が良かった友達同士でさえ起こりうる問題です。「いじめ」が原因で幼い尊い命が先われることも多々あります。「いじめ」はすべての学校、教職員が他人事と考えずに、自らの問題として切実に受け止め、「いじめ」という問題に真剣に、徹底して取り組んでいかないといけない重要な問題です。

次にどのようにしたらいじめをなくすことができるかです。いじめをなくすためには、日ごろから子どもたちとたくさんコミュニケーションを取っていく必要があると思います。そうすることによって子どもからしたら、「この先生はいつも自分のことを気にかけてくれる、だから何かあったら相談してみよう」と子どもが相談しやすい空気を作ることにつながります。私の場合は、担任の先生が私といじめていた当事者と呼び、何があったのか話し合いをする機会を作ってくれました。その話し合いがあったからこそ、原因も知ることができたし、仲直りをすることもできました。また、親や地域とのコミュニケーション(関わり)を密にすることで、いじめの早期発見にもつながるし地域や親全体で見守っていると生徒子どもたちに思わせることにもつながってくる。また、すでにいじめられている子どもがいたら、心理カウンセラーの先生や親と連携をとりながら、子ども一人一人の問題を解決するための指導や、支援をしていくことが子どもたちの心のケアにもつながるのではないかと思います。

\*\*\*\*\*

自分の体験をもとに(バネに)、教職の道を歩むというのはよく見かけることだが、私もそうだ。そこでの体験と感じた願い・決意を大切にしていきたいものだ。

また、いじめや体罰など「悪い」ことは、加害者が被害者に秘密にするように命令することをとめないがちだ。社会でも犯罪、さらには戦争などでも、秘密を伴うことがしばしばである。それに対して、被害者がいわれたまま秘密にしていると加害者を増長させてしまう。勇気をもって秘密を明らかにして、多くの人の声で、「悪い」ことをなくしていくことが重要なポイントだろう。

他のレポートにも貴重な指摘・発見が目白押しだ。





## 子ども相互関係を発展させる指導

12月03日

多様な問題についての学習研究を中心にした第一次発表から、問題をめぐって、子ども達にどのような指導をして、子どもたちをいかに成長させるかに焦点を当てた第二次発表に移る。

それは、問題を解消するというよりも、問題という形で表現された、子ども・子どもたちの発達課題に、子ども自身が取り組んでいくよう指導するということだ。

大学入学後2年間の学習のなかで、学生たちは教師としての視点を身に着けつつあるが、教師対子どもたち一人一人ということに絞られがちだった。ないしは、子どもたち全体に一齐に展開するものに焦点化されがちだった。

子どもたち相互が働きかけ合うことで、仲間関係友達関係を築き上げつつ、課題に取り組むということを促進する指導ということでは、これからうんと学習することが必要だろう。

それは、友達関係を築くことを軸にした社会性の発達が大きな人生課題である小学生時期に必須なことだ。とくに、近年友達関係を築くうえで難題に取り囲まれているというか、親や教師をはじめとする大人たちに過剰に取り込まれている子ども達の状況を変えていくことでもある。

こんな課題に、各グループは取り組み始めた。今回の発表も、共同活動課題に非積極的な子どもへ他の子どもがどうかかわるかという事例が登場してきた。

今後の発表に期待したい。

自主レポートにも、次のように子どもたち相互関係の事例が登場してきている。

\*\*\*\*\*

私のいた小学校にもいじめには発展しなかったのですが、ちょっかいやいたずらの多い生徒が数名いました。彼らは常に行動を共にしていました。彼らのやっていた、いたずらや、ちょっかいというのは、人の容姿についていちゃもんをつ



けたり、人のもの（消しゴムなどの文房具や鉛筆キャップなどの小物）を勝手にとったり、使ったりするという行為をよく行っていたということを感じています。

しかし彼らはそのようないたずらやちょっかいなどよりも、喫煙や万引きなどの行為を頻繁に行っていました。どちらかというと学校内ではおとなしかったほうでした。

たまに私は彼らと一緒に放課後などに遊んだり、一緒に帰ったりして、彼らの家に入ったり、家の前を通ったりしたことがあるのですが、家はよく散らかっていたということが多かったです。また、彼らは団地に住んでいたのですが、彼らの住む団地の周りには、（世間一般でよく言われているような）不良と呼ばれるような問題児が多くうろついている場所でした。このような家庭的な問題と地域的な問題が重なったため、彼らは様々な問題行動を起こしていたんだと少しだけ理解できたような気がします。

このような問題行動を起こしてきた彼らですが、根はやさしく、友達をととても大事に思っているという一面もありました。

彼らは、本当はみんなと仲良くなりたく、かまって欲しいが為に色々ちょっかいを出していたのだと思われます。このことは担任もクラスのみならずも理解していたため、いじめというような問題にまでは発展しなかったのだと思われます。

このような問題が起こるのも、親や家庭による指導や、愛情が不足している、ということがすべての原因とかがっているとは私は考えます。これらの問題が起こらないようにするためにも、各家庭での子どもたちへの指導というものは親が責任を持って行ってほしいです

\*\*\*\*\*

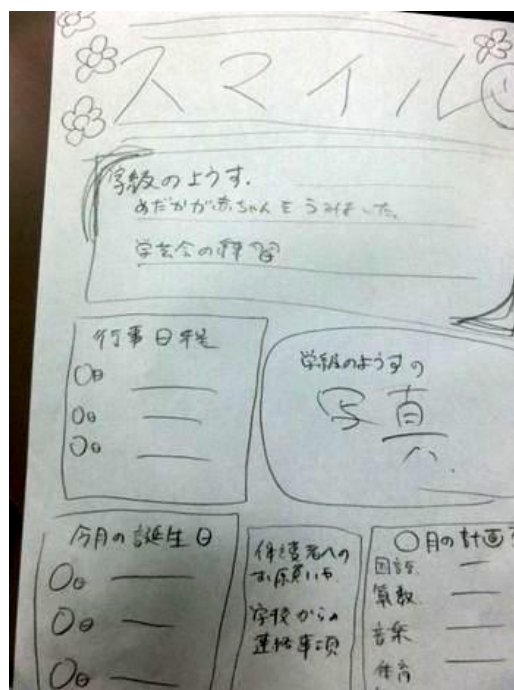
このレポートの最後の段落の記述を、友達関係を育てる視点、そして親をサポートする視点からの教師の指導について、さらに突っ込んだものにしていくことが期待されます。こうしたことに取り組んだ指導事例は、参照文献には目白押しにあります。それらに学びつつ書いた自主レポートが出されるのを待っています。

## 学級通信作成

### ロールプレイ

12月10日

第二次発表は、具体的な指導についての提案だ。今回は、親とのトラブルへの対処にかかわって、日常的に学校のことを親に知らせる方法としての学級通信作成が提案され、グループごとに作成した。写真はその例だ。



もう一つのグループは、保健室登校のいくつかのケースをあげて、その事態への担任の対応についてロールプレイで考えるものだ。

両者とも、大変実践的だ。それだけに、現場実践のリアルな問題に切り込むことになる。学級通信にはどんなことを書いたらよいか、繁忙の仕事のなか、短時間で通信を作成する技、担任の対処のなかで、事前に準備しておくこと、周りの教職員との連携、親との連携、子どもたちのグループ関係への配慮など……。

それだけに、私の側からの解説・問題提起が多くなる。それを機に、さらに踏み込んだ自主レポートを期待したい。



右写真は、前回のプレゼンで出てきた、クラスメイト全員で完成させるパズル作成とできあがったもの。



## 子どもの貧困・虐待問題への対応

12月17日

16日授業は、二つの問題への対応についてのプレゼンをもとに展開。

まず子どもの貧困に対処する沖縄内の取り組みについて調べた報告。給食費補助、ファミリーサポートなど。そして車上生活をしていて風呂には入っていない子どもへのいじめが起ころうな時の対応について、受講生で考える。一緒に銭湯へ行くというのが、支持を受けた。

虐待問題は、10年前放映の金八先生のDVDを見ながら考える。親の倒産・薬物乱用でやくざに追われる子ども、さらに暴力的虐待もうけ、そのなかで、薬物乱用に陥っていく子どもという、深刻な問題。受講生たちは、とても難しい問題で、対応に考え込んでしまう。

教育実践に長年かかわると、このように深刻なことに会い、解決方法の見当さえつかないほどのことがある。その時でも、人間信頼を失わず、つながりをつないでいくことの大切さを学ぶ。

教職願望の受講生にとって、強い衝撃を与えたようだ。そのなかで、教育実践をどのように作り上げ、教職を続けていくか。2年生後半の受講生たちは、教育の明るく感動的な面だけでなく、暗い面にも出会い始める。そのなかで、多様な人々とながらながら、着実に課題にとりくむことをも学び始める。

## 授業中の私の発言

1月07日

各グループの第二次発表2つが今回のメインだった。

各グループとも、問題提起をした後、受講生の作業討論をワークショップ風に展開するのがほとんどだ。正面で提起している人の堂々とし落ち着いてわかりやすい話し方、作業提起が良い雰囲気を作りだしている。作業課題も分かりやすく提起されるが、実は奥の深い提起で、受講生たちは考え込む。その過程で、ビデオ放映を挟むのが効果的なことが多い。

この素敵な進行の中で、私は何をしているか。そのことを書こう。

### 1) 授業冒頭の連絡事項の話 2分

参考文献返却 15回目の時間の持ち方(希望グループがあれば、第二次発表2回目、なければ受講生企画)  
現段階の受講生のポイント獲得状況 など

### 2) グループ発表の時は、受講生の間に座って聴き、作業提起の時は受講生と一緒に考え、グループ内で発言。

毎回、数グループをまわる。だから、2回の授業で全グループを一回以上回ることになる。

3) グループ発表終了時点でのコメントの話。提起がなかなか良かった点と、今回は登場しなかった視点を提示。ADHDの子どもへの指導がテーマの一つ目のグループでいうと、保護者への担任教師の関わりについて、補足コメント。保護者は大変苦労し悩んでいることが多いので、それをねぎらうとともに、同じようなことで悩んでいる保護者相互の連携を勧めることなど。また、当の子どもがパニックを起こした時の対処について、どんな時にパニックを起こすのかの原因やきっかけをつかむことと、その子どもとの付き合いが長い子どもの知恵と協力を得るように工夫することなど。

### 4) 授業の最後に、発表グループへの「ねぎらいとお褒め」のコメントと、連絡事項の再確認

### 5) 授業前、授業中、授業後の受講生たちとの雑談。

今回は、10名余りとしたかな。これが結構楽しいし有意義だ。超まじめな話から、超世間話まで。ほとんどが会話スタイル。私が話をするだけではつまらない。受講生から話を聞くのが結構楽しいのだ。

## 大きな転機を迎えつつある受講生たち

1月14日

13日授業は、孤立気味な子ども、グループ活動に馴染みにくい子どもへの指導についての、二つのグループの問題提起で、具体例を挙げて指導のありかたを、受講生に考えさせるものだった。

具体例が大変現実的なものだったので、討論も具体的になってくる。

このことにかかわって、関係の深いこんなレポートが出されたので、まずそれを紹介しよう。

\*\*\*\*\*

今から私は『教師』という立場に立とうとしている。今までは『児童・生徒・クラスメイト・友達』という立場だった。今後もしかすると『教師』という立場に立ちながら『保護者』という立場にも立てるかもしれないという状況である。一つの行動を起こした後というのは、相手の性格やその時の状況、その人の人間関係によっても様々なパターンに分けられ



る。また同じ行動をするにしても、言葉の投げかけ方の違いは大きく左右する一つの要因である。このように考えると、ますますどのようにすればいいのわからなくなってきたのである。

しかしそれは学校で起こっている事の一つ一つが、子どもたちが成長していく過程で重要な出来事になりかねないということに改めて実感することができた。教師という立場は、子どもたちにとって大きな影響を与えるということをしっぴりわきまえておかなければならないと思った。

『保健室登校』についてのプレゼンで同じように私の心に響いた言葉は、浅野先生の「保健室登校するというのが、その児童にとっての意思表示とも考えることができる」だった。私には今までそのように考えたことはなかった。しかし、よく考えると私もそうだった。嫌なことがあっても休むことはできなかった。行きたくないと思っても、学校に行きたくないとは言えなかった。学校は行くべきものだと思っていたからでもあるが、休む勇気もなかった。そんな中、一回だけ休んだことがある。それもほぼ一か月自分の心の中と戦ってからだ。このように、学校を休むのにも子どもたちは自分の中で自分と戦っているかもしれない。大切なところを見落として学習していたなど、浅野先生からの言葉で感じる事ができた。

私は、『保健室登校』になる前に子どもたちの心のケアができればいいと思う。『保健室登校』になっても子どもたちの心のケアは欠かさずやっていきたい。私か学校生活で欲しかったように。私か教師になりたかった理由を改めて実感させてくれたプレゼンだった。

\*\*\*\*\*

2年生の最後の時期にある受講生たちが、大きな転機を迎えていることを示したレポートとっていいかもしれない。「教師」という立場で考え始めたこと、あるいは、成人式を迎えた受講生が多い中で「保護者」という立場も視野に入り始めたという転機だ。

教師という立場で指導をどうするかを考え始めた時、対象とするクラス全体をどう動かし指導するか、あるいは、個々の子どもにどうかわり指導するか、というテーマがまず浮かび上がってくる。そして、今回のプレゼンとそれにもとづく討論のように、子どもたちの相互関係がどうなっており、それを発展させるために、教師はどうかかわるのか、ということもテーマに浮かび上がってくる。

例えば、子どもAが、子どもBのある言葉でひどく傷つき、周りの子どもとの関係をもちにくくなってしまったとすると、教師は、AとBとに対する個別指導だけでなく、クラス全体に対する指導、さらに、Aにつながる子どもCへの指導、あるいは、ABCたちがつくるグループへの指導などを視野に入れる必要がある。しかもそうしたものを関連づけながら展開する必要がある。さらにそれは、彼らがかかわる文化・活動の中身とその特性なども視野に入れる必要がある。

それらは、一般論で対処できるものではない。具体例に基づきつつ、子ども達の相互関係で育まれる人間関係ドラマに、教師としてどう絡んでいくのかが、問われていく。

こうなると、プロフェッショナルな世界に入口にたつことになる。実を言うと、教職学習の2年生段階では、なかなか難しいところがある。教育実習、さらに教職についてから何年かかけてようやくかかわれる世界だ。それでも、入口学習で、イメージはつかめるかもしれない。

そんなことを考えて、13日授業で、私はかなりのツッコミ発言をした。提出された受講生のミニメモを読むと、そのあたりに踏み込んだことへの衝撃を書いたものが多い。

今後の成長が期待される。

受講生一人一人が、自分自身の成長ドラマと結んで学習を展開

1月22日



任意レポートの提出が今回最後だということで、たくさんのレポートが提出された。最優秀評価のSを希望する人が多いためだろうか。もうすでに、そのレベルに達しているのに、レポートを出す人も多い。自分なりに学習したことを再確認する意味があるのだろう。

共通するのは、各グループの発表を自分の体験と思考をくぐってかみ砕き、再創造して書いていることだ。とくに、自分の生育歴上の体験とからめて、「こんな教師にはなりたくない」「こんな教師になりたい」という気持ちを込めて書いているレポートが、読んでいて私にも強いインパクトを与えてくれる。

たとえば、「子どもの貧困」のテーマについて、クラスメイト、そして自分自身も、「給食費を払えない」ことをめぐっての体験を紹介している。なかには、「給食費を払っていないから、お代わりしてはダメ」という教師に出会って、強いショックを受けた経験を持つ人がいる。

また、「いじめ」られ、つらいことを語っているのに、軽くかわしてしまう教師と出会った経験。自分自身がいじめられていた体験と、いかに耐え交わしてきたかを書きながら、これからどのような教師になるかを書いたもの。

ADHDという言葉が、子どもたちにも広がり、その言葉を使っていじめが起きるのに出会った体験。

そんなつらい体験を踏まえて、自分自身がどんな教師になりたいのか、についての深い思考を積むレポートが多い。いずれも、すごい。

その一つで、心打たれるあるレポートの一部を紹介しよう。

「人前に出た時の症状としては、声が震え、手足も震えてしまう。指名制の発言の場では、心拍数が急激に上がり、その時のことはほとんど覚えていない。小学生のころは過呼吸さえ、起こしていた。今では、大学生にもなり自分自身と真剣に向き合う機会が増えてきたため、改善しようと試みている。しかし、なかなか上手くいかない。親しみの深い特定の少数グループを作りたいがっている面もあれば、時には独りでいいと開き直すことさえある。(中略)このような状態では、教師など目指せないと思った。ここでの教師とは、あくまでも私の描いている教師像である。

しかし、私はこのような性格から人間をよく見るようになった。つまり、人間観察だ。今では、人間性を見抜くことに多少の自信さえ持っている。(中略)対人と関わることを苦手としている人の気持ちを理解し、その人に興味を持ち、関心がもてる。自分のことのように考えることができるため、本心に触れることができると思った。自分の経験も踏まえた上で、相談にのることもできる。決して否定的な対応をとるのではなく、肯定的に受け入れていくことが重要である。

私が考えるに、対人との関わり苦手とする人は、人間不信にもなりやすい。私にも人間不信に思う時があった。過去のトラウマから、裏切りに対して人一倍敏感である。しかし、今では開き直っているため、自分は裏切らないという信念を持っている。人は、一度孤独を味わい、自分自身と向き合うことができたとき、精神的に強くなり成長する。しかし、人間形成を行う過程で、人は独りではいけない。そして、独りでないことを知らなければいけない。

私が教師を目指す上で、このような児童たちへの気配りを大切にしたいと思う。学校側では、ペア学習やグループ活動を活かし、クラスメイトと関わることでできる場を設けている。しかし、そこでも話に入れない児童や不安を感じている児童がいることにも気づけなければいけない。教師は、児童の心の変化、異変にいち早く気づける視野を持っていないといけない。そして、自分の考えを押し付ける前に、児童を受け入れるスタンスを取らなければいけないし、私なら、そうしたい。」

## 最後の授業 サプライズ

1月28日

27日、最後の授業。今期の授業だけでなく、非常勤の定年にもない、沖縄大学での授業そのものが最後となる。1972年の1年間。そして、2010年頃からの数年間、授業を担当した。

客員教授を務めていることもあり、今後年に2~3回は訪問する機会があるだろう。

27日は、受講生の自己評価他者評価の記入。そして、数人の受講生が企画したゲーム大会。最後は、サプライズで、写真のような「賞状」をいただいた。工夫された寄せ書きという感じで、泣かせる。



いくつか紹介しよう。

- ・先生の授業は生徒中心で、とても楽しかったです。
- ・いつもおもしろい例え話を授業に持ち込んだり、とても楽しい授業を送ることができました。
- ・一人一人しっかり見てる先生みたいになりたいです。
- ・めっちゃ笑いました。
- ・あさの先生=おもしろい! おもしろいって素晴らしいことだと思います。
- ・前に出ることが苦手だったけど、先生のおかげで、前でも劇ができるようになりました。
- ・「2年生になって、変わったね。お姉さんになった!」って言われてうれしかったです。
- ・1年生ではさまざまなレクの仕方を学ぶことができ、2年生ではいろいろな視点から具体的な事例について考える事ができました。

## 2013年子ども学科「教職論」

(p77の「大学をまたがっての記事」にも書いたので、参照されたい)

やる気・つながり・行動力が溢れる沖縄大学子ども学科1年生

6月30日

学生が大きく変化している。今回は、私が担当する「教職論」受講生の沖縄大学子ども学科1年生に焦点をあてよう。私のこれまでの授業では、相互の人間関係が浅く、受身性が強い学生たちの状況を変えながら、共同創造体験に比重をかけて進めると言うのが、一つの重点だった。

今回いつも通り、そうしたことに重点をかけるスタイルで始めたのだが、学生たちは最初からノリまくった。毎回の授業の直前は、小学校教師向けの体育実技で、マット運動などに大量の汗をかきながら、エネルギーを取り組んだあと、時間を置かないで体育館から駆け足で教室にやってくるので、その「勢い」そのまま、私の授業に入るためかもしれない。新生入生とはいえ、子ども学科だけのクラスで、新生入生向けのオリエンテーション合宿で人間関係がすでに育まれつつあったためかもしれない。

また、近年の多くの学生に見られる傾向として見られる、受験勉強疲れ、偏差値世界につかり過ぎて、点数で他者や自己を評価し過ぎておかしくなっている状況には距離がある、ということがあるかもしれない。そんなタイプが皆無というわけではないが、格段に少ないのだ。

恐らく、高校時代、クラスや部活などでリーダーシップを発揮した経験がある学生が多いためかもしれない。子ども学科という名称の学科を選んで入学したのだから、子ども好きで、対人関係にとっても健康な学生が多いためかもしれない。

ともかく、こんな学生たちを見るのは、初めてに近いかもしれないが、久しぶりのことだ。あえて思いだすとすれば、1970年代の琉球大学生には、そうしたタイプが多かったように思うが。

授業では、いつも明るく（明るすぎる？）行動的だ。だれかが素敵な発言発表パフォーマンスをすると、素直に元気良い拍手を生まれる。授業進行中でのいろいろな役割に進んで立候補する学生も多い。

28日の授業では、5人の学生が企画したワークショップをした。学校のある場面をロールプレイ的に演ずるのだ。血液型で3つのグループをつくり（人数の少ないB型AB型は合併）、15分ぐらいの作成会議を経て、いじめ「職員間の協力」「子どものけんかとおとやましめ」などのテーマで、20人近くによる即興的ロールプレイを、3グループとも見事に演じた。しかも、「おとなしめ」に見られる学生も、それなりの個性を前面に出して演じるのだ。「恥ずかしい」などとはいつておれない雰囲気が充満している。

今、提出されたレポートを読んでいるが、『ひたすら前向きな』姿勢を示すのが多いのも特徴的だ。今、教師を志望しながら、現実に教師になる道は、異常に厳しい。その『ひたすら前向きな』姿勢で、学習を積み重ねて、「狭き門」を突破してほしいと思う。と同時に教師以外の道も含めて多様な道を模索創造していくことになろうが、それらがどんなものになるか、期待をもってみつめていきたい。



## コミュニケーション能力の重視 沖縄大学「教職論」レポート

7月27日

沖縄大学「教職論」授業も終わった。そのレポートとして写真のように、「教師になるうえで」「獲得しなくてはならないもの」「くぐりぬけなくてはならない困難」「教職以外に、教育・子どもにかかわりながら生きる多様な道」を書いた。書いた後、それを読んだクラスメイトの添削コメントをもらい、さらに現職教員あるいは子ども学科の先輩の添削コメントをもらい、そのうえで第二次執筆をす

るという段取りで提出してもらった。

用紙に書ききれない個所は、ポストイット記入で貼り付けるとか工夫をしてもらった。なかなかの傑作揃いだ。受講生の「やる気」がガンガン伝わってくる。

そのなかで、「教師になるうえで」「獲得しなくてはならないもの」として、コミュニケーション能力をあげたレポートが多かったのが、印象的だった。ほとんどのレポートが触れていたが、レポート冒頭に書いたものも多かった。

いくつか紹介しよう。

「どんな仕事でも、人と人のコミュニケーションは大切です。しかし、より必要としないといけないのは教師だと思います。子どもたちは、誰かに自分が見てもらえている、認めてもらっていると実感することで成長していくと思っています。生徒とうまくコミュニケーションをとり、そして見つめてあげる事によっていい関係を築けると思います。」

「コミュニケーション能力・聴く能力

自分の考えなどをしっかり持つ。

人に流されない、自分の思い（想い）を貫く

正しいことは正しい、間違っていることは間違っていると、はっきりさせる

人を信頼する強い心を持つ

変われる強さ、変わらぬ想い」

「まずは教員免許だと思います。免許がなかったら、教員になりたくてもなれないから。次は、話す力と思う。教員が話すことを子どもたちは聞いて興味を持ったり、学んだりすると思うから。それに加えて、説明する力も必要だと思う。」

どうして、こんなに多くのレポートがコミュニケーション力をあげたのだろうか。推理してみよう。

授業開始当初、つまりは大学入学当初なのだが、発言討論を中心にしたワークショップスタイルの私の授業では、受講生たちは緊張することが多く、自分から発言する学生も限られていた。しかし、終わりに近づいてくると、全員が全体の場で、自分なりの意見を発言できるようになった。そうした経験が反映していそうだ。その変化、自己成長を書くレポートもあった。

彼らは、受験勉強に追われた高校時代までは、授業も含めて大勢の前で発言する機会はとても限られていた。それ以前に、自分なりの意見を持つことさえ少なかったといえるかもしれない。その原因には、与えられた知識をそのまま暗記習熟することを中心に、受験に対応してきたことがあげられよう。

しかし、教師になるためには、それとは異なって、自らが学んだこと考えたことを、子どもたちとともに再創造するとともに、子どもたちのそうした力を育むことが求められる。そんなこともあって、私の授業では、毎回、自分なりに考えを出し合い、それを深めることに力点を置いてきた。その過程で、受講生たちは大きく成長してきた。そのことが、このレポートに反映したのかな、と思う。



## 2012 年度後期

教員の急な転勤のため、私は2012年9月から2013年3月まで特任教授になり、いつもより多くの科目を担当することになった。

# 専門演習 問題発見演習 教育方法論

## 動きと物語があって、明るく楽しく 授業スタート

10月05日

- 1) 2日(火曜日)は、問題発見演習Ⅱ  
3日(水曜日)は、教育方法論と専門演習

いずれも、楽しく、動きと物語のある展開だった。想定外のノリの良さに驚いた。緊張気味の学生も、皆しっかりと発言した。第一回目だからか、出席率も高い。全員出席のクラスもあった。

私流の「変わり自己紹介」に「のりまくり」だった。「自分は人体の部分にたとえると何？」は、とくにウケた。「左膝の〇〇靭帯」とか、不思議な部分が出てくる。「私は、見た目よりずっと傷つきやすいので、皮膚です」というのは、なかなか優れた自己紹介だ。

瀬戸内海と同じ島出身同士であることを発見する受講生たちもいた。

- 2) 問題発見演習Ⅱでは、私の授業の定番の「人生で、何を大切にするか」をした。

親がトップで、配偶者・恋人、子ども、友人といった人間関係を上位にする学生がほとんどだ。これは、ここ2、3年の共通特徴だ。他の大学でやっても、同じだ。対照的に、地球、日本、沖縄、衣、食、住、仕事、学習、趣味といったものを上位にする受講生はほとんどいない。

- 3) 教育方法論では、輪になっていろいろなことをしたが、最後に「こんな授業をしたい」といったことにかかわって物語づくりをまわしていったら、コンピュータ分解から始まって、その部品からロボットづくりへと展開するなど、えんえんと長大な物語が出現。

- 4) 専門演習の受講生たちは、2年前の私の授業の受講生たちで、なつかしい再会となった。

どんなことをしようか、いくつかの案のなかから、学童保育現場、離島小学校現場、保育現場へ出かけて何かをする、というのが圧倒的人気。担当者を決めて、案を作っていくことになった。

毎年、第一回目は、結構苦労して、帰宅後疲れがどっと出るが、今年は、3科目連続にかかわらず、楽しくできたので、疲れは少ない。あとあとドット疲れが出るかもしれないが。

二日ともバス通勤「実験」を試してみた。以前と比べると、バスサービスがぐんとよくなっている。時刻表がかなり正確になっているのに驚いた。そんな改善のためか、乗客数が増えている印象をもった。

## 元気にノリまくる受講生たちの活発な作業・討論

10月11日

### 問題発見演習

「20年後の予測」のダイヤモンドランキングと討論

ガソリン価格予測、工場生産食糧、日本の経済的位置、日本の人口など、多角的なことが話題になる。

「進路選択の際に大切にすること」

「夢を自分なりに追求したい」に力点をかけるものと、将来予測をしつつ、自分の能力にあうものを重視するという二つの考え方が浮き彫りになった。夢には、実際に追求したいものと、実際の追求が難しいから夢になるものと言う、二つのアプローチがあるという「名言」が登場した。

今回は、最初からなかなか味のある発言が登場して、討論が活発で、時間不足気味。討論の深みを保障できるように、授業進行計画を微調整しなくては、と思う。

今回の受講生は、多彩さをもつとともに、自分なりの考えをもっている人が多そう。問題発見の広がりだけでなく、深みも興味深い展開になりそう。

### 教育方法論

受講生が当初予測をかなり越えたので、用意したプリントをコピーして配布。やる気溢れる学生たちだ。加えて、自分なりの考えをもち、創造性豊かだ。今回は、「こんな授業を」ということでのリレーお絵かきと、授業アイデア大会で、受講生の考え・表現力・行動力が大いに発揮されるものだった。

リレーお絵かきでは、全員がユニークに描いた。スポーツ系がめだったが、それもありきたりではなく、「屋上からボールに飛び込む?!」「沖縄らしくマリンスポーツをする」などなど。「前面黒板だけでなく背面黒板を使う授業」・・・などなど、発想が豊かにひらくものだが、リレーで描いていく中で、それが変化発展していく。それがドラマと笑いと交流を生み出していく。

授業アイデアは、一人がポストイット10枚以上に書き、それをカテゴリーに分類し、カテゴリー担当グループが、分類整理と特徴指摘を行う。盛り上がるものだから、やや時間不足気味。

こんな流れのなかで、後半に行う授業づくりにどんなものが登場するか、期待がどんどんふくらむ。

### 専門演習

超元気の女性陣と、冷静な男性陣という、不思議な組み合わせ。討論は、あっちゃこっちゃしながら、絶え間なく進む。私もあっちゃこっちゃに少々加担しているかも？ 進行係はほとんど無視されて、かわいそう。

いろんな流れを経て、学童クラブに関わることと、合宿旅行を軸に進行することに落ち着いた感じ。

次回には、学童クラブ実践担当者が、学童クラブと連絡をとりあって、どんなことができそうかを提案すること、学童保育について、全員が調べてきたレポート一枚を提出すること。合宿旅行の相談をはじめを前提にして、さらに活発な「激論」が予想される。

なぜか、今期は元気のいい受講生たちが、ノリまくっている。大いに楽しいが、終了後の私は、若さに圧倒されて、疲れがどっと出る。でも、プラスの疲れだから、上等だ。

沖縄大学のマルチメディアセンター職員から、eラーニングのムードゥルというシステムがあることを教えられる。セ

ンターの先生から、関連書をお借りして、現在読書中。活用できるようであれば、と検討中だ。

## 発見の本格化

10月18日

私の授業では、15コマのうちの始めの数回は、いろいろな人、物、世界、課題と出会うことを通して、発見することが中心となる。それを踏まえて、その後の数回は、課題を設定し、掘り下げ深めていく創造へと移っていく、という流れが通常だ。

いずれの科目とも3回を終え、発見が本格化し、次の創造過程への準備が始まる段階にある。

### 『問題発見演習』

「こんな人を探そう 将来設計」では、いろんなペアをつくって、相手から聞きだす活動を展開した。すごく盛り上がり、この活動でのいつもの時間の3倍にもなる活動となった。受講生が人生創造に深い関心を寄せていることの表れだろう。

「10年後の私」というタイトルで、リレーお絵かきをする。子どもをたくさん作って、明るい関係を作り出すことに、一番の関心が寄せられた。そうである体験をもとにしてか、なかなかそうはなれなかったから、そうありたいというものかは、よくはわからない。絵がすごくうまい人がいて、みんな圧倒されたのも、話題の一つ。

3回目が終わったが、受講生間の関係も育ち始め、面白くなりそう。「鍋やろう」と提案する受講生も出現。

### 『教育方法論』

授業アイデアを出し合い、それをカテゴリー別にまとめて特徴を発表することを前回に引き続きする。なかなかユニークなのがたくさんでくる。それらをもとに教室設計図を描く。

生徒が給食を作る 丸い教室を作る 先生と生徒が役割交替する ボタンを押すと必要な教材が出てくる教室  
教室でスポーツをする など全部で、100余り登場

今回は授業テーマを出し合う（特別活動テーマもOK）。

さて、どんなテーマが飛び出してくるか、楽しみだ。

これまで、快調なペースできたこの授業。快快調になるかな。

### 『専門演習』

学童保育実践にターゲットをあてることに決まり、早速学童保育クラブと連絡をとりあって訪問計画をつめている。来週この時間までに、全員が一度は訪問することになる。

合宿計画は、12月よりも1月になりそうな気配。

毎回の『ゆんたく』風進行がいい。暖かくゆったりしたトーンから、とびつきりなものが飛び出しそうな予感がする。みんな健康な働き者の雰囲気。

受講生の自己紹介第二弾 どうして子ども文化学科に入学したかの話など

## 特別メニュー・授業づくり・学童実践 の本格化へ

10月25日

### 問題発見演習

毎回出席者が増える不思議な？現象が続く。今回も、いろいろな験を持っていそうな「新人2名」が参加  
今回は、地球・世界発見ということで、「古今東西」形式で、植物名・国名など多様なジャンルの単語を挙げていった。そこで思いついた発想をもとに、自分が描く地球イメージを絵にして、語り合った。



右写真は、温暖化で、地球のあちこちから湯気が出て困っている地球の絵

いよいよ、各人が特別メニュー取り組み開始。



余談 私は、体型から見て、その人が何のスポーツをしてきたかをあてる「趣味」があるが、今回の受講生では、3名を当てた。現在あたった確率100%だ。

### 教育方法論

この授業では、授業や特別活動の計画をつくり実施することを中心に展開しているが、今回は、計画のタイトルを出し合い、そのなかからベストテンを選ぶ作業を中心に展開した。

左写真は、それらの計画のアイデアを並べていったところだ。

野球のストレートの球の回転数をめぐる構想

ギネスにのるような取り組み

など多様なものが飛び出した。それらをもとに、次回担当チームを編成する

### 専門演習

介護等体験で、欠席者が多かったが、二つの学童クラブに出かけて実践する計画、合宿計画を練った。  
受講生は、学童現場に出かけて忙しくなるだろう。

余談 エネルギッシュな女性受講生たちの展開の早い動きに、私は揺さぶられるが、結構楽しい。だが、終了後どっと疲れが出る。それは孫との付き合いとそっくりだ。受講生たちは、我が子の年齢より、我が孫の年齢に近づいているのだな、と実感。



## 学生たちの自主的な取り組みの比重が高まる

11月02日

いずれのクラスも、5回目が終了し、もっぱら私が提起することで活動が展開する段階から、受講生自身が企画し進行する比重が3～5割へと高まってきた。私の役割は、受講生が展開する活動の質を高める役割へと少しずつシフトしていく。

問題発見演習では、企画書を作成し実施を視野に入れることが始まった。定番の親睦会=飲み会も企画が検討された。また、最近の定番「沖縄おこしアイデア」の出し合いもした。いくつか紹介しよう。

ディズニーランド in 沖縄をつくる

米軍基地を観光スポットとして入れるようにする

観光客を民家に宿泊させる

サブカルチャーが活躍できる場を増やす

沖縄産業を楽しく見学できる場所をつくる（小学生～高校生向き）

教育方法論では、前回までに浮かび上がった11の授業テーマをもとに、授業案作成グループが編成された。まだ、多少は流動的だが、各グループでの授業構想作成作業がスタートした。授業実施調整やクラス企画等を担当する役員5名も選出された（あみだくじだが）。

「教科書につっこみを入れる」授業プランなどは興味津々だ。「生徒が給食をつくる」グループでは、給食のおばさんにインタビューにいかうか、などと話がすすむ。「ストレートは変化球だ」グループは、かなり「おたく」っぽい研究討論がすすむ。「おたく文化研究」は、現在1名。メンバー募集中だ。

こんなテーマが、どんな授業として練り上げられていくか注目していこう。各グループをまわって、グループ討論に分け入る私も楽しい。時々私が出すがアイデアが「盗まれる」こともあるが、ともかくたのしい雰囲気の中、難しいテーマの授業化作業が進む。



専門演習では、久米島合宿旅行が決まる。

わんぱく家に加えて、城北学童クラブでの取り組み計画も進行し、双方にまずは観察・体験が進行し始めた。指導員の先生との打ち合わせ会話は真剣そのものだ。

それと並行して、11日の学童保育の全沖縄研究大会での、子どもたちの保育のボランティアを、受講生全員がやることになった。みんな張り切っている。

右写真は、わんぱく家での観察体験の時

## 魅力的な授業企画 「教育方法論」

11月08日

6日火曜日は、公休日続きで授業時間確保が難しい月曜日授業の振替になったので、私の担当授業はなし。  
今回は、水曜日の「教育方法論」授業の報告をしよう。

10ほどの案から、本人希望をもとに、5つのテーマに絞られた。一つは希望者が多く、ABの二つに分割。各グループの特徴を紹介しよう。

☆給食A 学校給食についての授業づくりだ。なぜか、宮古高校出身者が固まり、小中時代の給食の思い出に花開く。月曜日はまずく金曜日はおいしかったとか。生活が厳しい家庭の子どもと給食の問題にも関心が集まる。実際に給食を作るような授業がうまれるかもしれない。

☆給食B 全国の「うまいもの話」にも関心が向けられ、給食の栄養とか、どんなことに焦点があてられるか、楽しみだ。地産地消だけで給食ができるか、というテーマもおもしろそう。

☆野球のストレートの回転数をめぐる授業 超詳しいメンバーたちが、大変真面目に着実にグループ討論。中味がなかなか面白い。イチローの今後とかにも話題は飛ぶ。かなり専門的な授業になりそうな気配

☆好きな子の連絡先を聴く 若者の興味関心を呼びそうなタイトルだが、実は真面目に若者のコミュニケーション・ツール研究の授業になりそうな気配だ。

☆沖縄大学生に聴く 沖縄大学生についての調査研究を展開する取り組みだが、サークル・部活などの調査のほかに、沖縄大学としておきの「隠れ場」の研究など、若者の居場所研究として、なかなか専門的なものへと発展しそうな気配

☆教科書につっこみを入れる 実際に小学校6年の教科書を持参して、素材研究を展開。

各グループとも楽しく真剣にグループ作業が進展する。今回は、単元指導計画を作成する。次回は、一回の授業に絞って、授業案を作成する。その後、模擬授業へとすすむ。だんだんドラマ的になり始めている。

## イケイケどんどん 学童実践・諸企画・授業プラン

11月15日

6~8回目ともなると、中だるみ現象が出てくるのが通例だ。しかし、今学期は、3クラスとも、なぜかない。それどころかイケイケドンドン状態の感じ。

専門演習は、11日学童保育研究会の保育ボランティアで全員が活躍。わんぱく屋・城北学童での実践も軌道に乗り始める。各自の指導プランの作成開始だ。小学校現場へは、他の科目などで出かけることは多いが、タイプが異なる学童は初体験。それだけに新鮮。と同時に子どもたちの元気良さについていくのが大変という声も聞こえる。受講生たちは、大学の学科同学年のなかで元気の良さではトップクラスという「うわさ」を聴いているが、学童の子どもはもっと元気がいいそうだ。

どんな指導プランが登場するか楽しみだ。

問題発見演習では、これまでに比べてダントツに早い、特別メニュー提出開始だ。花づくり、本読み会、鍋会、山登り会という4企画が提案される。すべて実施可能で、やる気をそそる。やってみよう、ということで、受講生の「人気投票」で、花づくりと本読み会の取り組み開始、そして担当者が決まる。鍋会の関心も高いが、もう一人の提案者がお休みだったので、次回の検討にまわした。

教育方法論は、単元指導計画作成。授業開始前に集合して検討作業をするグループがいて、びっくりだ。やる気まんま

んだ。5~6時間分の単元授業を、かなりドラマティックに作成。大枠をがっちり作ることから始めるグループ、丁寧に毎時間プランを積み上げるグループなど、タイプはいろいろだが、授業イメージが具体化されてきた。次週は単元のなかの1時間に絞った授業プランづくり。その次の週からは模擬授業開始。

宣伝して、臨時受講生を募集しようかな、という気分にもなってきた。

## 花・飲み会・人生 6つの授業づくり大詰め

11月22日

専門演習受講生は学童クラブで奮闘中。今回は他の二つについて書こう。

問題発見演習。いつもになく出席者が多い。多様な個性と人生経験をもつ受講生たちの集いといった感じ。

「花を育てよう」取り組みは、「沖大ビレジ」のチーフ渡嘉敷さんの援助指導を得て、11月27日昼休みに作業することになる。受講生が好きな苗を何本か持参して植える。楽しみだ。

もう一つの企画の飲み会も日程が決まる。学生との飲み会は、私にとって久しぶりで、これまた楽しみ。どんな企画がとびだすか、これも注目。

授業後半は、最近の私の授業の定番。「○○さんの人生」を、これまでの20年の人生をふまえて、自分の将来予想を書くことで進めた。いろいろととびだしたので、来週は、予定を少々変更して、その交流をしようかな、と思っている。

一生、学習をする、生涯学習を豊かにする計画。

趣味にかける計画

70歳、80歳まで職業生活中心に充実させる計画

人生後半期は、家事時間にかなりをかける計画

教育方法論は、単元授業計画のなかの1時間に絞った指導案作成をした。いよいよ来週から受講生グループによる授業開始。来週は、野球を素材にした授業。野球に詳しい4人のメンバーが「受講生」を驚かせるプラン。

他のプランも、受講生が協同作業や討論などを通して、主体的に取り組む豊かな計画だ。まだ、大まか過ぎるグループもあるが、今後さらにつめていこう。

これで、授業は半分終了し、後半戦に突入。

広がりとともに、深みを追求するモードへ

## 花を植える 野球の授業

11月29日

学童での実践を続ける専門演習は、各自の指導案作成。子どもの様子をつかむのは上手いが、指導計画を立てるとなると、初体験なので試行錯誤。それでも、一人ひとりが徐々に焦点化していく。来週からは、[本番]取り組みとなる。私も各学童に出かけて実践を見る。楽しみだ。







問題演習は、27日昼休み時間に、「沖縄大学で花を育てる」を実施。大学に入って坂を上った右側にガジマルがあるが、その下に植える。これまで雑草に覆われていたところに穴を掘って、花育て用の土を入れて苗を植える。ジュリアン、ペチュニア、ペンタス、クミスクチン。4人で作業。1～2月には一杯花が咲くのを楽しみにしている。

授業時間には、「花を育てる」などに続いて、「町を歩き発見する」という新しい企画提案が出される。なかなか魅力的な提案なので、これも実施することに決まる。11日の授業時間に実施するが、細かいことは次週追加提案がされる予定。今年の演習は、アクティブだ。

28日の教育方法論は、各グループが作成した授業案を実際にやってみる企画がスタート。最初は、「初心者に野球を教える」というテーマ。野球ルール、野球の魅力などを、たくさん準備されたフリップや写真を使って、授業。多彩大量の情報提供に受講生たちは驚き・感心する。最初の授業だし、皆初体験なので、すごい緊張。でも、予定の30分を充実して終了。終わってからの批評会も初体験なのに、相当に充実。その進行も受講生たちが行う。20分余りの批評会だが、出されるべき指摘がすべて出た、という感じだ。

## 昔・今の各県の世界の給食の授業 職業生活予想

12月06日

専門演習は、学童クラブでの実践の真最中。次回、詳しく報告できるだろう。

問題発見演習は、次週の街歩きが「大学周辺の秋から冬への季節替わり発見」に焦点化されて具体化。

一生の間にいくつの職業につきそうかの予想で討論。3～6個ぐらいが多かったが、多様な予想に、「なるほど、なるほど」と耳を傾ける。比較的短期のいくつかの職業経験を踏まえて、長期の職業に落ち着くという予測が複数出てきた。働く場所は、世界で県外で沖縄で、というように多様化。

受講生の学年が2～4年と多様なのも、多様な予測と関わるのだろう。

特別メニューは、次にどんなのが登場するだろうか。懇親会（飲み会）が13日の予定だが、詳しい情報がまだなので、少々心配。

教育方法論は、今回学校給食をめぐる、二つの授業がなされた。いずれもクイズ形式を入れ込んで、生徒を巻きこんで楽しく展開。アフリカ、ブラジル、イギリス、アメリカの給食。秋田、宮城、愛知、徳島、高知、愛媛の給食。親世代と現在の各々の人気メニュー、不人気メニューといったことをクイズで考えさせる。

その中で、貧困による欠食児童のための給食の話（明治期日本・アフリカ）、栄養バランスを崩した例（アメリカなど）、給食予算の問題など、給食をめぐる問題性を掘り下げる素材も出てくる。

前回、討論のなかで指摘提案されたことが、すぐに反映している。たとえば、生徒参加を積極的にという提案が、今回は入りこんでいる。

今回もいろいろな提案が出てきたが、次回はどんな授業になるだろうか。

次ページ写真は、左が授業風景

右が授業後の検討討論会風景 黒板に貼られたコメントをめぐる討論





## 「沖縄大学近辺に季節変わりを探す」 多様な展開

12月13日

今回の問題発見演習は、沖縄大学周辺をカメラをもってまわり、季節変わりを探す企画だ。受講生みんなが思い思いの所を回る。私は、上間小学校を通過して、識名トンネル入り口まで、そして寄宮中学校近くから沖縄大学に戻るコースをえんえんと歩く。撮影した写真をプリントアウトして、13日夜のゼミ懇親会に持ち寄るという運びだ。懇親会もいろいろな企画がありそうだ。南風原の食彩館にてだ。写真は、コース途中の上間の丘から沖縄大学を見る。

学童実践をしている専門演習は、ブログの他の記事でも紹介している城北学童とわんぱく家で展開中。詳細報告は次の機会だ。11日のゼミでは、学童での実践を記録にする書き方レッスンをした。一つのエピソードを実践記録にする形だが、40分ぐらいで、全員がポストイット15枚以上のものを書き上げた。

その中で、一人が「大学に入って、こんなに勉強した授業は初めて」と語る。「どうして」と聞くと、「他の授業は、先生の話を聞くだけだから」という。話はおおげさだろうが、全国の大学の多くに共通するものかもしれない。

写真は、わんぱく家の子どもグループの話に聞き入る学生



受講生グループがつくった授業をしている教育方法論の今回の授業は、「高校新生に学校にかかわる何かを調べさせる」という企画だ。グループ討論発表を入れ込むなど、流れを工夫し、時間配分を詳しく考えての展開で、評判が良かった。ただ、新生向けではなく在校生むけではないか、という問題提起がなされ、いろいろ深まってきている。回を追うごとにレベルの高い授業になり、これから担当するグループ



にプレッシャーがかかるという発言もあった。写真は、授業風景

## 教科書にツッコミをいれる授業 12月21日

今週の授業で最大の衝撃は、「教育方法論」で女性3人グループがした「教科書にツッコミをいれる授業」だ。

前代未聞の授業で、生徒役他の受講生もびっくりしつつ、授業に集中。興味溢れるツッコミを次々と出した。

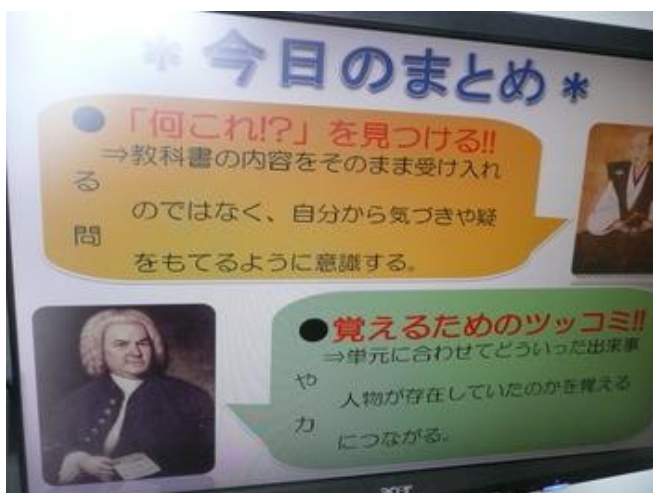
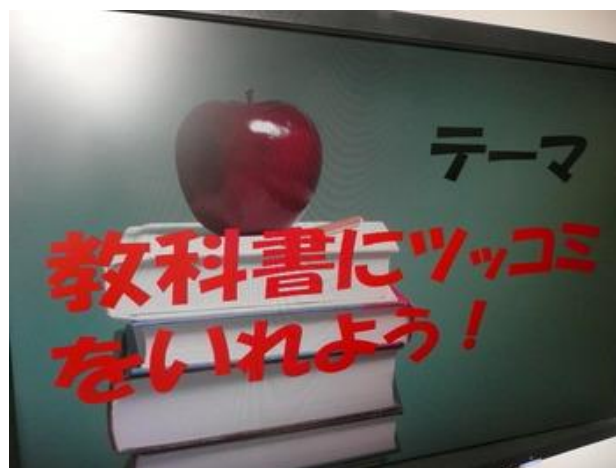
実際の戦国時代の長篠の戦いを描いた歴史素材の教科書のコピーを配布して、グループ単位でツッコミを考えるという展開だ。「信長、秀吉、家康は、三人とも右手の扇子をもっている」……

わけても面白かったのは、「戦いを描いた屏風絵は、空から撮影したように描かれているのはなぜ？」だ。「ヘリコプターから描いた!？」と、またツッコミが入った。

課題提示→グループ作業→プレゼン→全体討論という授業の段取り、集中のさせ方、小道具に準備・提示、パワーポイントを使用した提示説明まとめなどなど、よく準備されている。授業体験初めてとは信じがたい展開だ。

単元全体で6回の授業のうちの4回目の授業という設定だ。これを受けて、次の5回目がどんな授業になるか、楽しみだ。見てみたいものだ。屏風絵の描写場の問題など、深めてみたいことが膨らんできた。

専門演習は、今週も学童クラブでの実践が続く。月曜日には、女性3人がわんぱく家で、ゲーム大会の実践。「ダンボールに何人乗れるか」という「クリスマスツリー」、ひもを腰にぶら下げて、それを取り合う「しっぽとり」をした。おおいに盛り上がる。子どもたちに学生が負けなかと心配したが、さすがに元気良く子ども時代を通過してきた我が学生の皆さん、実によくやった。



問題発見演習は、「進路物語を創ろう」。将来進路などを、一人で書くではなく、順番に回して言って、クラスメートの予測をしながら皆で書いていくもの。最近の私の授業の定番。

いつものことながら、「かなりあたっている。どうして」という声がたくさんでる。なかには、今日の昼ごはん「シチュー」と書いて「正解!」となったものがあった。将来の職業「接客業」と書かれて、「実に私のことをよく見てるね」という発言。

終わった後の振り返りの討論に花開いた。



## 今年の一字漢字 コミュニケーションをとる

1月10日

問題発見演習は、「今年の抱負を一字漢字で表わすと」という受講生企画から始まった。

「会」「努」「闘」など、若者にふさわしいものが並ぶ中で、卒業間近の受講生で帰郷予定者が「帰」、そして私が「老」とバラエティに富んでいた。説明も多様で興味深いものだった。

その後、「男の仕事 女の仕事？」というワークショップをした。仕事にまつわるジェンダー意識を考える活動だ。家庭科教師、産婦人科医、菊作り、美容師などの職業の男女比は、事実としてはどうなっているのか、適性と考えられるのはどちらか、といったことを、出し合って討論する。進行した受講生が最後に、「ジェンダー固定観念が薄れてきている」とまとめたが、このワークショップを始めた10年目とはかなり変化している。実際、美容師などは、性別固定観念がとて薄くなっているようだ。

今回は、ゲスト（≒もぐり）学生もいてにぎわった。

教育方法論は、いよいよ最後の模擬授業だ。異性とコミュニケーションをとることをめぐるアンケート調査に基づく、アプローチの取り方をテーマとしていた。2限目授業なのに、朝8時15分に来て準備作業をしたとのこと。グループ配置、パワーポイント、掲示物、数枚の配布資料などの準備が、ぬかりなく豊富に行われていた。進行プランも綿密で、生徒参加の工夫も幾重にもなされていた。写真は、授業開始前の「記念写真」。

終了後の批評会では、かなりプロ的なコメントがたくさん出てきた。授業の高まりが反映していると言うべきだろうか。

専門演習は、10月末~12月までの学童保育実践の記録作成作業だ。順調でないが、書きだせば、皆速い。15分で80~400字というスピードで書く。次回までに6000字という目標でにまで達することを期待したい。

## 実践記録書き いろいろな沖縄 有益なワザ

1月17日

いよいよ最終盤になってきた。

専門演習は、学童保育クラブでの各自の実践を6000字の原稿にする作業。少々心配ではあったが、その心配は吹き飛んだ。現場指導員や学校教師にしても、初体験でこれほど書けるかと思うほどに立派な記録が続々。

ちょっとした加筆をした後、印刷し、皆のものを合冊する作業へ。受講生にとって、大いなる記念碑になるだろう。その内容は、またの機会に紹介したいと思う。

問題発見演習は、「いろいろな沖縄」というタイトルで、「中学生の時対立していても、卒業後は仲良くなる」「女性は強い」「世界のウチナーンチュといわれるほど、外国にどんどん出ていく」「仕事がないから、本土就職・出稼ぎが多い」などのように、沖縄についてよく言われていることが、ホントかウソか、好きか嫌いかを基準にして、X軸Y軸のマトリックスに貼りつけ、同じカードでも人によって位置が大きく異なっていることをきっかけにして、討論した。討論は盛り上がり、予定時間を超過してしまった。身近な問題に、皆の議論は発熱するとともに、新しい発見・気づきが多い。私も、「へえー、へえー」の連続だった。

特別メニュー提出も最終盤に、どんなものが飛び出てくるか楽しみである。

教育方法論は、すごく順調に進行してきたので、今回、私の授業恒例の自己評価他者評価をする。皆楽しそうに他者評

価を書きこんでいく。他者評価というと、対照的に、身構えて秘密風を書く愛知の学生たちを思い出してしまった。

次回、最後の授業は、受講生の希望調査で一番人気だった昼食会をすることになった。どんな会になるか楽しみだ。

このクラスでも、希望者は特別メニューを提出できるのだが、今回次のようなレポートが提出された。よく学習発見し、よくまとめられていると感心したので、転載しよう。

『この授業を通して発見した教育方法に有益なワザをあげる』

全員の顔が見られて、緊張感のない授業

生徒が中心な参加型の授業

当たり前の授業は面白くない

思ったこと、伝えたいことのポストイット記入

いろんな角度から見る・考えてみる

先生が与える課題は少なく、あとは生徒に任せる

自分たちで討論して考えて行動する

自由な授業プラン

それをもとに実際にやる授業

笑顔が絶えない授業（空間づくり）

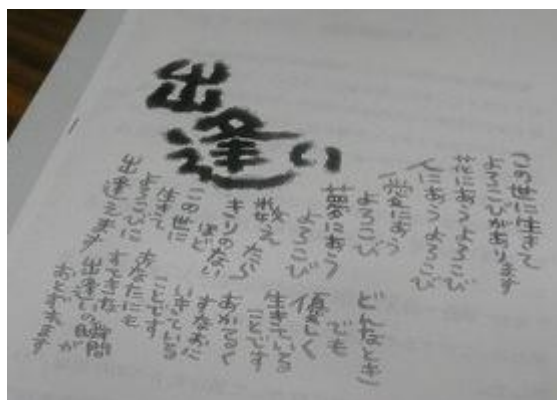
楽しく学んだほうが得

やらなきや損

発想を豊かにする育成方法

個性が生かされていた

目標が見やすい授業展開



## すごい実践記録完成 「昼食会」で打ち上げ

1月25日

最終盤の授業。

問題発見演習は、受講生の「特別メニュー」発表会が続く。前回の「沖縄のいいところ」討論のまとめレポート、新バージョン「沖縄のいいところ探し」活動、・・・

次週が最後の授業となるが、全員がなんらかの発表ということになりそう。すでにすごいレポートを準備している受講生がいる。楽しみだ。懇親会第二弾として我が家でたこ焼き大会をする企画も進化発展だ。

専門演習は、全員の学童保育実践記録集録が印刷完成した。A4で60数ページ。通し読みしてみたが、読みごたえがある。今後の一人ひとりの自慢にできるものになりそうだ。学童クラブでの子どもの姿、それに対応する受講生たちの動きや心が鮮やかに分かる。

これを合宿で検討する予定。

教育方法論は、最終授業で、各自の獲得ポイントを確認。全員が単位取得ラインを越えた。Sがとっても多いのが特徴。授業中盤では、いささか心配だったが、受講生による授業が始まると、私の想定を超える出来具合。どこかのグループがやり直しになるかもしれないという心配は吹き飛んでしまった。





よく学習するクラスだ。S評価ラインをこえているのに、さらにレポートを出す人が何人もいる。それも、授業過程で発見思考したことを踏まえた読み応えがあるものばかりだ。

授業最後は、大学近くのラーメン屋で打ち上げ昼食会。そこでの語り合いも楽しい。青春物語からさらに、まさに『若者の人生創造物語』だ。社会人学生を含めると、成人の人生物語もある。私にとっても、学ぶことが多い。

## 充実の久米島ゼミ旅行

1月31日～2月4日

26～27日、一泊二日で「専門演習」ゼミ生7名と久米島に出かける。1名が体調の都合で参加できなかったのは残念。

朝7時集合に全員が出そろった。前夜興奮で眠れなかったメンバーがいたが、なんだ



か中学高校の修学旅行のようだ。久しぶりに飛行機に乗るメンバー

も。全員が久米島初訪問。満席の小さな飛行機は、20分ほどで久米島到着。短時間なのに爆睡するメンバーもいた。

到着後、ホテルチェックインまでは、久米島巡り。2台のレンタカーに分乗。シーズンオフのためか、レンタカー・ホテル・飛行機全部合わせて1万5000円という格安のパック代。



まず、久米島の旧家、上江洲家訪問。

続いて、近くのだるま山で花見。26日は久米島の桜祭り。

次は、受講生たちが以前から行きたかったという「おばけ坂」。上り坂に見えるのに、実は下り坂。道端に置かれているホイールを置くと、逆走しているように見える。

次は比屋定バンタで絶景を見る（次ページ写真）

どこでも、みんな元気良く明るくエンジョイ。静かな久米島に学生たちの大きな音楽が流れる雰囲気だ。

私の授業を一文字であらわすなら？ ゼミ生コメント





「一文字であらわす」がちょっとしたブーム。そこで、久米島旅行中のゼミ生に、「私の授業を一文字であらわすなら？」と尋ねてみた。

|   |                |
|---|----------------|
| 動 |                |
| 破 | 旧来のイメージを破る 破天荒 |
| 伸 |                |
| 革 | 革新・革命のイメージ     |
| 想 |                |
| 楽 |                |
| 験 | 体験・経験のイメージ     |

※ 一文字の後の説明文は、当人の解説

一文字というのは、それをきっかけに、いろいろなイメージが膨らんでくるので、面白い。

私自身が予想できるものもあれば、「エーツ」と意外に思うもの、驚かせるもの、いろいろだ。「想」などは、どんなイメージなのだろうか、それ自体を「想像」したくなる。

いずれもが、「動詞」イメージなのが特徴かもしれない。今回のゼミ生自体が「動」的なことを反映しているのかもしれない。でも、今の私は、受講生の「動」についていくのに「息切れ」することがしばしばだ。

それでも、振り返って見ると、過去のゼミも「動」的だったな、と思う。

比屋定バンタで絶景を見た後、宇江城城址にのぼり、うみがめ館でうみがめとともに記念撮影

昼食を取った後、ホテルにチェックイン。

その後、部屋でゼミ時間

まず、学童保育実践記録の相互批評会。前にもブログ記事で紹介したように一人ひとりの優れた記録を、一人一人と私がコメント。時間不足を感じるほど充実しつめこんだ内容。

その後、本島と久米島とで長い間教師をしてこられた大田妙子さんの話をきく。教師の仕事にかかわるたくさんの質問にたっぷりと答えていただく。皆、用意していただいたレジメへの書き込みをたくさんする。

そして、最大のおキナワウバメガシとイタジイのドングリのプレゼント。

皆、初めて見て驚く。

その後、大田さんを囲んでの夕食会。

たっぷりの中味で、長時間の学習。







飽和気味か。  
お陰で、夜の懇親会は短時間で終了したようだ。私は、皆より先に就寝したので、よくは分からないが。



翌朝、日の出が見られるかと期待したが、曇り空。

午前中、大田先生から紹介された大岳小学校の学習発表

会を見学。全校生徒が100人もいない中、地域からたくさんの方々が見学。写真は、6年生の劇。20年後、そして昔の、自分たちと地域の姿を描く。

最後は全員合唱

次は、久米島博物館

そして、久米島ホテル館へ。30年以上前に私の授業を受講した佐藤文保さんが館長を務める。色々な方々が参観・体験学習をしている。ちょうど福島からの子どもたちが来ていた。

熱心な説明は、大変具体的。

最後は五枝の松

超充実の2日間だった。皆満腹のようだ。



## 問題発見演習での「私の授業を一文字であらわすなら？」

2月05日

「問題発見演習」も最後の授業を迎えた。さらに、専門演習（期日未定）、問題発見演習（2月18日）は、いずれも我が家で最後の集まりがある。

問題発見演習は、大阪出身受講生の骨折りで、大阪式たこやきパーティの計画だ。12月にも懇親会をしたので、二回目になる。この科目は、2年間で5クラスを担当した。それらのクラスからもたこやきパーティに合流する話がある。

問題発見演習の学校での最後の授業日に、1日記事で紹介した「私の授業を一文字であらわすなら？」（専門演習クラス）を、受講生の皆さんにお願いしたら、次のような言葉が飛び出した。一文字でも四字熟語でもOKということにした。

人 人生おこしをする場、人とつながり、人と付き合う場、人を知る場

受！ ゼミ生でないのに、受け入れてくれてありがとうございました。（受講生の友達でモグリ学生）

新

教学相長ず ※ こんな言葉を知っているなんてオドロキ

生 いろんな生き方を知れた

優 やさしい

唯我独尊 ※ 不思議な言葉で、題目との関係がわからないので、今度尋ねてみよう。

驚

火 「モリー先生との火曜日」の映画のような先生でした。 ※ 私は見たことがない映画

問題発見演習では、私自身も今回も含めて実に多様な学生と出会い、発見が溢れる2年間のクラスだった。続けたいのだが、他の授業コマ数が増えて、私の体力を越えるので、今回で終えることにした。受講生の皆さん、大変ありがとう。

## 問題発見演習打ち上げ 我が家でたこ焼きパーティー

2月20日

18日、ゼミ生が我が家に集合。

関西出身のたこ焼きプロの受講生が、特別のたこ焼き作りたてを持参。加えて、我が家で焼そばを作る。私は、我が家の取りたて野菜約10種とハーブティーを提供。

実に多様なコンタクトを4時間にわたって、えんえんとする。いろいろな受講生たち。学部学科さまざま 学年様々 出身地さまざま 男女さまざま 性格・特技さまざま。これだけさまざまだと、新鮮な話ばかり

私の特性「ゆるゆる」が、とてもいいそうだ。必要ポイント数をゲットしないと、単位取得できないので「楽勝」授業ではないが、雰囲気「ゆるゆる」ということのようなのだ。

3年間つきあった学生から、私の耳の聞こえが悪くなったといわれたことが少々ショック。でも老人性難聴だから仕方がない。

今回のゼミは、いろいろやった。

沖縄大学入り口に花植え。沖縄大学周辺巡り・写真撮影。懇親会。・・・企画はやりだった。3年間で、この科目を5クラス担当したが、毎回新鮮な出会いだった。受講生によって雰囲気とタイプが変化したのが面白かった。

若者たちの多様な人生を発見したのも、私にとって楽しいことだった。この後、どんな人生を作って行くのか、次の出会いを楽しみにしたい。



# 2010 年度前期 「教職論」

2010 年度後期にも担当しているが、割愛する。

## 37年ぶりに沖縄大学で授業 『教職論』

4月15日

12日の授業。

1972年4月～1973年3月沖縄大学に在職した時以来の、沖縄大学での授業だ。私の大学教師修行一年目で苦勞した時代で、まったく授業になっていなかった時の話だ。2,3年は失敗の連続で、試行錯誤を重ねたあと、ようやく何とか形になってきたのだ。



それにしても、どこの大学でも最初の授業は、相手の学生のことを体感的には知らないなので、試行錯誤する。

今回は、事前に教えられていた、中学高校免許取得希望の2年生約20名対象が、直前になって、小学校免許希望の1年生58名への変更を知らされたので、びっくり。心の準備のないまま飛び込んだ。

第一印象。

元気。明るい。人なつっこい。多様なタイプ。

大学生として受ける授業第一日目だ。新鮮だけど、4限なので、やや疲れ気味か。

受講生が、プリント集を「教師」風に、皆に読むことからはじめたが、緊張はするが、結構ノリがいい。読んだ後で「いいところ探し」をするが、けっこう発言してくれた。中身は第一日目にふさわしいものだったが、今後深まっていこう。

授業のまとめ作成係を募るが、これまでの経験では、やろうというグループが出てきにくいので、「さくら」をつくったが、自発的に4グループも

できたので、びっくり。

今回は、人間関係づくりを中心にした。相互に知り合っていない者同士ということをお案してのことで、私の授業の定番だ。だが、すごくいい関係ができている。聞けば、すでに、オリエンテーション合宿で、関係ができているとのことだ。こうなれば、話は早い。来週から、どんどん中身の質を高めていこう。活躍を期待する。

## 2回目の授業

4月19日

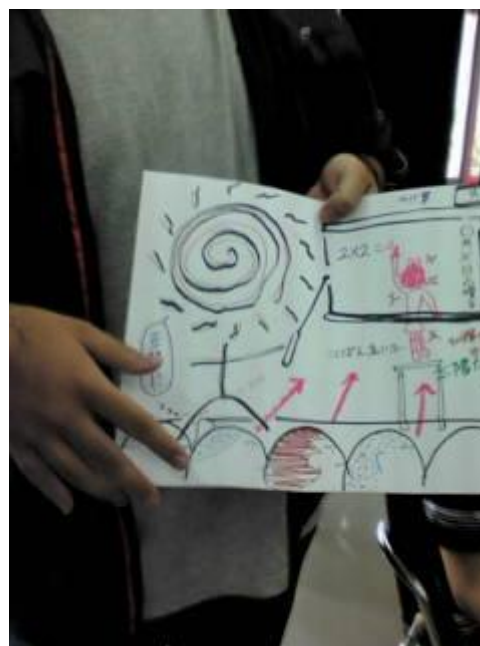
学生たちは、入学したてほやほやで、超元気。  
私も沖縄大学の授業は37年ぶりで、ほやほや同然。

今日は様々な教育発見。水平志向中心。これを、いかにして掘り下げる  
垂直思考へと進めるか。授業最後では、やや戸惑う場面もあったが、  
今後に期待。

## リレーお絵描き

4月26日

明るく健康的な絵が続出  
発見発言も20人以上出て盛り上がる



## 受講生企画、新入生の域を超えている

5月11日

あさりさん、ウサビッチさん、ご苦労様でした。

120%の準備（アイデア+小道具）、役割分担、落ち着き、段取りなどなど、恐るべき？新入生ですね。

通常、最初はポイント1が普通なのに、私の過去の経験を飛び越えたレベルで、高いポイントをゲットしました。

模擬授業を受けた人も、もっとやりたかったという気分でしたね。第8回の次が期待されます。もう、次回について尋ねるグループが出てきました。

何か相談ごとがあるときは、メールか、月曜日の授業前に2-407に顔を出して下さい。

毎回のまとめ「新聞」も楽しく充実したものになってきましたね。

5月末締め切りの、「随意レポート」のテーマです

「テキストP25と第1~4回の授業の内容・進捗との関係」

2~5点、箇条書き風に指摘し、指摘点についての理由を明瞭に書く。

## ポスター発表風景

5月17日

いろいろな子どもへの対し方を考える

いい発表の連続だったから、感想・発見・意見の発言がもっと出れば、なおよかった。



来週からに期待

この授業のチャンスは、「待っているだけでは来ないよ」

## 学校案内作成に燃える

5月24日

今回は、学校からなくしたいもの、あってほしいものを考え、学校案内ポスターを作り、それをめぐっての討論をしました。

成績評価をめぐっての興味深い討論が起きました。時間切れで残念でした。次回からは、もっとどんどん討論が起きるだろうと予測しています。

これらの中で、多様な学校観が見えてきました。自然型学校、規則緩和型学校、楽しみ型学校・・・、どんな学校を作るか、などという経験を持つ人は、若いうちは少ないかもしれません。しかし、学校づくりに、生徒が参加することは重要です。生徒代表が学校運営協議会の正式メンバーである例は、世界各地に見られます。

今日の作業の中では、生徒の視点から考えることがほとんどでした。しかし、教職科目では、教師側の立場で、どんな学校を作るのか、考える必要があります。この授業でも、だんだん教師側から物事を考えることが求められてきます。

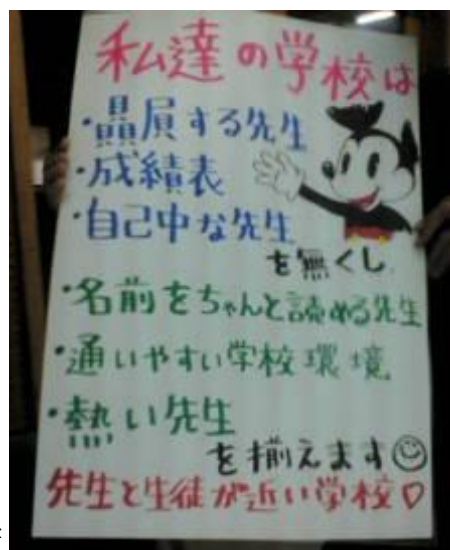
5月末締め切りの随意レポートを、今日までに10人近くが提出されました。皆さんのやる気が目に見える形になってきました。

今日、授業の流れの中で出した「臨時随意レポート」について、あらためて書きます。

すでに設定してある随意レポートとは全く別の臨時のもので、両方出してもかまいません。希望する方は挑戦して下さい。

「このブログで、23日にスタートした【いろいろな学校観】シリーズ（いつまで続くかは未定）の何本かを読んで、コメントして下さい。」

コメントとは、発見・感想・意見を、理由を添えて書くものです。1000字以内でお願いします。締め切りは、授業時には、5月末と言いましたが、時間が迫りすぎているので、6月7日とします。



## 地球の訴え

5月31日

今日の授業は、世界・地球・環境などを対象にしました。

「地球の訴え」というタイトルで、一枚の画用紙を使って制作表現をしてもらいました。

実に多様な地球ができました。

写真は、世界地図の陸地部分を切り取って、その環境が悪化していることを訴えた後、その切り取ったところに、緑に塗った手のひらを、みんなで差し出し、緑にしようという訴えを表



現しました。

他には、画用紙をクチャクチャにして、地球がこわれかかっている、と表現するグループ。

折りヅル型に折って、願いを表現するグループ。

・・・本当に様々な「訴え」が登場しました。

## 受講生の主体的活躍での追い込みに期待

6月07日

今日で半分を終わりました。

受講生も私も、様子をつかむだけでなく、自分らしい活躍の場を見つけ作りつつあります。

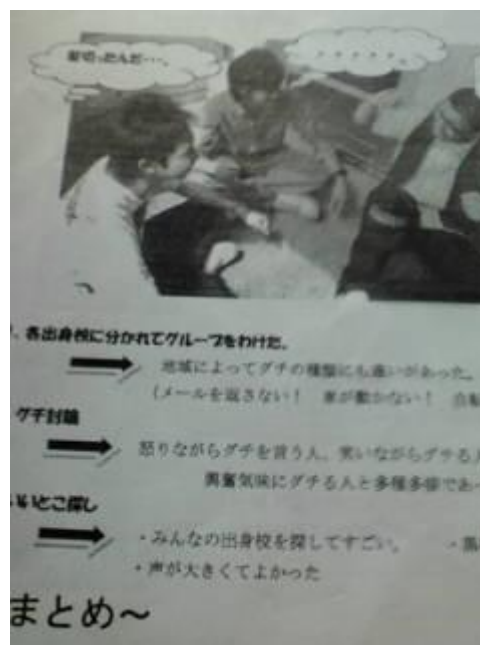
授業まとめニュースは、写真入りまで登場。

受講生授業は、度胸満点・準備万端 テンポよく進むようになりました。

レポートの書き方もだんだん慣れてきて、深み・味のあるものが出始めています。

いよいよ受講生の皆さん自身の共同企画が中心になって進んでいきます。

いろいろな人とグループをくんでの取り組みが楽しみです。これまで似た者同士でグループを組むことが多かったようです。そろそろ多様な人と組んではいかがでしょうか。たとえば、男女混合とか、たくさんの出身校でくむとか。



## 教師の仕事、リーダーシップタイプについて考える

6月14日

毎回の授業のまとめを、グループ単位で作成し配布してもらっていますが、写真のように、だんだん立派になってきました。これを見るだけで授業を振り返ることができるようになりました。大切に保存してほしいものです。

今日の授業では、教師の仕事、リーダーシップについて考えました。

教師の仕事はやりがいがあるとともに大変難しいものでもあります。それらを視野に入れて、教職について学んでいきたいものです。

6月末締め切り随意レポートのタイトルです。

1. 自分自身のリーダー経験のエピソードを書いて下さい。
2. 1をもとに、自分が得手とするリーダータイプを示し、さらにそれを伸ばすための方法について書いて下さい。
3. 1をもとに、今は苦手なのだが、これから獲得しなければならないと考えるリーダータイプを示し、それを獲得するための方法について書いて下さい。

以上を、1000字以内を書いて、メール（添付ファイルではなく、メール本文貼り付けで）、またはレポート用紙の手渡



して、6月30日までに提出して下さい。

## 活発な討論 全員発言へ

6月21日

「沖縄の未来10年会議」、面白かったですね。いろいろな発言が飛びだしてきました。これまで考えたことが少ないことがたくさん出てきて、新鮮だったでしょうが、これをきっかけに、いろいろと学習してくださることを期待しています。

授業中身も濃密な後半になりました。

来週は2グループによる授業です。楽しみです。

今回のプログレポも少し複雑ですが、記入をよろしくお願いします。



## 学生による授業「百年後を絵にする」

6月28日

学生による授業はだんだんうまくなってきましたね。

最後の機会の「教科外論」には、ぜひとも、全員が挑戦して下さいを期待しています。

NGOをつかってプロジェクトに取り組む課題ですが、自分がかかわる地域や課題について調べて、次回の本番にのぞむことを期待しています。

## リズムの授業…学生が作る授業

7月05日

大変リズムカルな、リズムの授業で、受講生の皆さんもリズムカルに乗りましたね。

「国際会議」も多様なテーマで論議が進み、時間が足りないほどでした。



今回のプログレポです。

- 1) リズム授業の「いいところ探し」。これを使って、次の時間、どんな授業をしたらよいか、そのアイデア
- 2) 「国際会議」で発見したこと

以下は、書いても書かなくてもよい。

- 3) 国際会議の最終全体討論で、発言したこととその補足（該当者は1名）  
または、

こうした絶好のチャンスを生かした受講生が1名になった原因。それを増やすにはどうしたらよいか。

4) 今日の国際会議に向けて、前回以降の課外時間に準備したこと

または、

大学の授業では1時間の授業に対して、その倍の時間の自主学習をするタメエになっているのに、そうっていない状況が広く見られる原因とその改善策。

興味深いレポートを期待しています。

## いよいよ最終盤 「はずかしさ」からの卒業を

7月12日

この授業では、発言や企画など受講生自身の積極的なかわりが基本になっていますが、「皆の前で発言するのは、恥ずかしいという気持ちが強い。それを超えることが大切だ。」というレポートがありました。このことには、意欲と経験が必要でしょう。と同時に、「誰かが何かを指示してくれる。その指示をこなせばなんとかなる」という姿勢で、長い間やってきた人は、どこかで、「ふんざり」をつける必要があります。

その「ふんざり」を期待しています。

今日の討論で「ふんざり」をつけて発言した人、さらに踏み出して下さい。そのかたは、「7月12日授業での私の発言報告」を、このブログ記事のコメントに記入して下さい。

中身は、討論での発言内容(30~100文字)と後からの補足(100文字以内)です。

締め切り 7月14日までです。

授業で予告した、7月末締め切りの随意レポートのテーマです。

1. 現在の日本の小中高大学の授業のなかでの、この教職論の授業の特徴・位置・役割
2. テキスト「人間関係を育てる」のP12~22から発見し、考えること
3. プリントP12~17, 19~24の「沖縄おこし、人生おこし」をもとに、「10年後の私」が取り組む事。
4. プリントP7~9, 25~28の小川実践を読んで、小川先生と私が描く教師像との異同。
5. 7月12日授業の「15年後の年収」の討論を素材に、「15年後の沖縄おこし、人生おこし」についての私の構想

書き方

1. いくつ書いてもよい。ゼロでもよい。5つすべて書いてもよい。
2. 字数は、1000字以内
3. 提出方法は、これまでと同じ。
4. 冒頭に、テーマ番号を記入すること。
5. 締め切りは、7月31日

※追記 この随意レポートを、この記事のコメントで出した人がいます。随意レポートは、紙で郵送または手渡しか、メールで提出ですので、間違えないでください。

では、皆さんの活躍を期待しています。

## 座席位置が示す学生の特徴の変化

7月16日

私は、20~30年前から、授業の際に学生が坐る位置に注目してきた。学生参加型の私の授業では、授業に進行につれ、その位置が大きく変化していく。

しかし、中大規模のレクチャー中心の授業では、開講当初に見られた傾向はおおよそ引き継がれていく。この傾向は、全国各地の大学でかなり共通してみられることを、各地の大学教員との会話や授業見学などを通して確かめてきた。

最近、その学生の位置に変化が出てきているようだ。ただし、近年付き合いが多いのは、沖縄の大学なので、沖縄の近年の大学の特性かもしれない。

私が気付いた変化を引き起こした原因の一つは、出席率の上昇である。かつて出席を取らない授業で、人気が普通という科目では、数回目であれば50%前後であった。今では、そうした科目でも80%を超すし、90%を超すことさえ珍しくない。

もう一つの原因は、私語の減少、または私語の「小規模化」である。かつての私語は、明らかな授業妨害効果をもっており、それを抑えないと授業が進行しない類が多かったが、今の私語は「ひそひそ話」的で、あからさまな妨害にならない規模になってきた。その私語をするのは、隣の学生との二人である。かつては、数人が関わるものが見られた。

また、近年では、数年前、ある人が名付けた「IT私語」、つまり携帯メール使用も一つの特徴である。大胆に言えば、「私語にも元気がない」のだ。あえて言えば、「私語をするほどの人間関係を持ち、私語をするほどの元気がある学生」の方が、授業展開のなかで活躍してくれる可能性が高いことさえあるが、今はそういう学生は少ない。

ある授業を拝見した時、担当教師がかなりきちんと私語を抑え込んだ。その後、私語はなくなったが、受講生の5~7割が居眠りをするという事態が生まれた。これなどは、近年の特性をよく示している。欠席はしないで、居眠りで授業に参加する学生だ。

こうした事態の変化のなかで、学生が坐る位置も変化してきた。

20~30年前の学生の特性は、私が作成した図を写真にした図でいうと、点線の○で囲んだもので、教師の言うことの多くにうなずく「うなずき症候群」、出口近くにて出席を取ると出ていくような「脱出願望」、教師のいうことが正しいのかなどと考える知的な「斜め派」である。

近年では、全体的に言うところ、こうした区分の通用性が低くなっている。三つともいえないことはないが、明瞭にそうだといえるタイプは少なくなっているのである。

たとえば、「脱出願望」があったとしても、「トイレ休憩」のような形で時々教室から出ていき、また戻ってくる学生が多い。彼らは、出口近くに席を取るわけではなく、教室の中央近くに坐ることさえある。教師には「目障り」だが、注意するというわけにもいかず、対応に苦慮しがちだ。

全体として、図の斜線のように坐るが、濃淡で授業への関与度を示した。濃い方が関与度が高い。

かつてのように、仲間どうしがグループで固まって坐り、島を作るといったことは少ない。せいぜい2~3人が近くに坐る程度だ。学生の相互関係が希薄になってきたのだ。



## 学生たちの「15年後の年収」イメージ

7月19日

先日の沖縄大学教職論の授業で、かつての私の授業での定番だった、「15年後の私の年収」をめぐる「肩たたき討論」をした。予想年収額に応じて自分の位置を決め討論するものだ。

この討論を通して、社会と自己の将来設計についての多くに認識を得るとともに、これをきっかけに自分自身と社会の将来像を考えていくことが目的だ。

また、この活動は、参加している学生の特徴をよくあらわすので、コーディネートしている私にとっても興味深い。

10年以上前には、自分の親と同世代である「25年後」で討論したが、これだけの将来のことを考えることが、空想的になりすぎる傾向が年々増大してきたので、今回の「15年後」のように、より見通しやすいものになっている。

また、収入額は、12年前の愛知県在の中京大学で行ったころの半分ぐらいにしてある。愛知と沖縄の違い、また時代の違いを反映して学生がイメージする額が小さくなっているからである。

では、今回の討論で出てきた特徴を抜き出してみよう。

1) 400万円以上は、会社社長になるという学生は別にして、とても少なく、それ以下、特に200万円以下が多い。

2) 子ども学科学生で、将来教職に就きたいという学生たちが多くのに、15年後の30代半ばに正規採用の教員になっているイメージで語る学生は皆無に近かった。非正規教職員が多い現実をよく知っているというべきか。他に、子育て支援センターとか、児童館的な施設で働いているという学生がいた。

3) 教員以外にしても正規雇用で働いているイメージの学生はそれほどはいなかった。身近な社会的現実から考えると、こうなるのだろうか。

4) 子どもを持っているどころか、結婚しているというイメージで語る学生は、大変少なかった。

5) 年収200万円というのは、とても「いい仕事」だというイメージがある。現在のアルバイト給与のイメージから考えるからだろう。

6) 会社社長、子育て支援など、起業にかかわるものが多いのは沖縄の特徴でもある。開業率閉業率一位らしい。

7) 私が「影の声」という形で、正規採用教員の給与など、いろいろな事例を紹介すると、「知らなかった」ということが大半を占めていた。15年後ではなく現在の事例についても、知っている社会的現実がとても少ない。

たとえば授業料など4年間で大学に支払う額は、私立大学だと400万円を超えるのが普通で、沖縄大学は破格の低額であることを知っている学生は少ない。生活費などを含めると4年間で1千万円かかるのが普通になっている事実を話すと、ため息が出される。

## 受講生による授業 「友達になりたい人への第一声」

### の劇シーン

7月26日

沖縄大学教職論も最後の授業になりました。受講生企画の取り組みも熟





してきました。

前ページ写真は、その最後の「道徳～コミュニケーション能力の向上」一シーンです。

スペシャルがあるとはいえ、授業の「いいところ探し・提案」の大繁盛にはびっくりしました。

楽しく元気あふれる子ども学科らしい雰囲気が醸し出されてきました。

「これからが本番」という感じではありますが、この授業は来週が最後です。この勢いを別の授業でも持続させ、ますますの検討を祈るばかりです。

来週は、「自己評価・他者評価」です。準備をしてきて下さい。

皆さんが良い成績になるよう祈っています。追い込みが必要な方、体に気をつけて、よろしくお願いします。

ブログレポートもよろしく。

## いろいろなドラマの連続・・・沖縄大学教職論終わる

8月02日

38年ぶりの沖縄大学での授業。

最初は、受講生の皆さんだけでなく、実は私もドキドキととまどいがありました。

でも、受講生の皆さんの元気良さ・明るさが毎回色々なドラマを生み出していきました。

沖縄の健康的な若者大集合といった感じになりました。

受講生の皆さんも新しい出会いと発見に、ドキドキの連続のようでしたね。

今後の成長が期待される皆さんです。

また、どこかで会いましょう。もしよろしければ、後期の教職論（教師論）の授業に来て下さい。正式受講でも「もぐり」でもかまいませんよ。

# 「問題発見演習」

## 2012 年前期

### 新年度スタート

4月10日

9日からスタート。大学教員41年目の授業だ。いつものことながら、どんな学生との出会いがあるか、期待と不安が入り混じる。

今日は、静かなタイプの二人が相手。登録期間中であるので、最終的に何人になるかは不確定だが、今日の二人とは、とってもよい関係が出来たと思う。少人数だが、ワークショップ型で「沖縄起こし・人生おこし」のキーワード発見が続く。新聞記事と物語づくりをベースにしたのキーワード発見だった。なぜか、医療と政治のカテゴリーに集まった。二人とも、たんねんに作業を進めるとともに、恥ずかしがらないで、どんどん発言する。

私を含めて3人の授業だが、音がでるためか、のぞきこむ方が結構多い。すぐ前が会議室であるためか。人数が少ないので、最初からお互いを知り合う関係だ。今後の授業で、どんなドラマが生まれるだろうか。楽しみにしている。

授業後の帰り道、2月までの受講生二人とばったりと出会う。とても陽気（すぎる）面々で、二人以外の初対面の数人とも、旧知の仲のように、語り合う。皆、健康だ。

新学期は、多様な出会いがある。

### 「10年後の沖縄」物語

4月17日

授業開始から数回は、まさに問題発見の準備として、「沖縄・人生」にかかわるキーワードを発見し、大判の紙に書きためていく作業を中心に進行している。

そのために、前回は、新聞からの発見を中心にしたが、今回は、沖縄で自慢できること、物、人を出し合い、加えて「10年後の沖縄」物語を創り合う取り組みをした。

海 橋 トライアスロン カジノ マフィア 空手 世界 ウチナーンチュ大会 聞得大君 チンスコウ グルケン 仲間由紀恵 新垣ゆい 本当にあっちこちしながら、物語は際限なく展開していく。

タレント名になると、私が知らない人が続出。

こんなことをしているうちに、お互いを知り合い、仲良くなっていく。受講生相互の物語も展開していく。

今後の展開が楽しみだ。

## 人間関係重視 沖縄での起業アイデア

4月24日

今回は、まず「人生、何に価値をおくか」で、十数枚のカードをダイヤモンドランキングしたものをもとに、討論した。今回の特徴として、討論のなかで発見したことをいくつか書こう。

- ・親・友人・子どもという人間関係に価値をおくのが、とても多い。  
親をトップにする人が多いのは、最近の傾向。  
今回は、「子ども」が登場。これまではなかった。
- ・沖縄をどっしりと、まんやかに据える人が多い。
- ・地球は、最重視する人とそうでない人に割れた。
- ・食・仕事はわれた。
- ・学校でのとは別の、仕事や人生にかかわる学習が必要だ、ということ。

この活動は、結果がどうであるか、よりは、その結果をもとに討論し、新たな発見を各自がすることが主眼だ。結構、発見があった。

二番目に、「沖縄で起業する」としたらということで、アイデアの出し合い。出てきたものを並べよう。

- ・沖縄にハリウッドみたいな映画の街を作る。
- ・なんらかのしょうがいを持った人の仕事紹介と会社への紹介
- ・学生生活コンサルタント バイト・奨学金 授業の取り方・つきあいかた 仕事の見つけ方 エンジョイ企画
- ・観光業
- ・海外から観光客を呼ぶ 海外に沖縄をPRする 沖縄活性化
- ・レンタカー向けガイドグループ あなたの8時間観光計画をサポート
- ・職を失った人の手伝い（手助け） 雇って単純労働から
- ・外国人向け学校
- ・台湾と沖縄の間に海底トンネルをつなげる
- ・ゴミのエネルギー化 バイオエタノール 沖縄支部
- ・エネルギーを安く!! メタンハイグレードをとる
- ・沖縄料理店 ゴーヤチャンプルー チンスコー

なかなか面白いアイデアがでてくる。

現在は、「水平思考」で多様な世界を発見することを中心に進行。

## 税に関心 5年後、10年後の年収

5月08日

私の授業で定番化してきた「〇〇年後の年収」討論をした。何年後を話そうかと尋ねたら、「5年後」と言う声で、5年後について討論。

100~200万円のイメージがでてくる。20歳前後では、正社員の給与額がつかみにくいので、アルバイトの時給計算に少し上積みをするのが、手っとり早い計算方法か。

沖縄の最低賃金の時給630円余りに少し上積みして700円だと、年収150万円近くで、時給1000円だと19

0万円ほどになる。全国水準からみれば随分低いが、沖縄の現実にはこれに近い年収がよく見られる。

では支出はどうか。ここで税金が意外に高率を占める。保険も含めるとかなりだ。学生でも、自動車税など結構支払い機会が多いので、関心が多いようだ。それとも、消費税などが話題になる「ご時世」のためか。年収討論で、税は初登場の話だった。

5年後ではなく、10年後ではどうか、という話にも発展した。すると、結婚が一つの焦点となる。30才ぐらいで結婚しているというのは多くない。これまた現実が反映している。この討論は、10年ほど前には、若者の「夢」をめぐる討論だったが、いまや厳しい？寂しい？「現実」の討論になってきている。

## 「いろいろな人生」のグラフづくり

5月15日

最近の私の授業では、しばしばしている「人生」のグラフづくりだ。職業・家事育児・学習・趣味休養・睡眠生理的必需時間の配分の年齢変化、収入支出の年齢変化をグラフにし、就職・出産・卒業・住宅などの購入などの人生の主要な出来事を書いていくものだ。

授業では、まず受講生自身のものを作成してもらおう。興味をもてたら、「特別メニュー」で、いろいろな世代のいろいろな世代の人へのインタビューをもとに、いくつか作成して、いろいろな発見をすることを期待している。

20歳前後の学生がする場合には、20歳以降は将来計画（予想）として記入してもらおう。話題になることを並べよう。

- ・祖父母の世代とはかなり異なるが、親の世代とは似てくる。
- ・男性は、家事・育児の比率がかなり小さい。たいていは結婚して配偶者にしてもらおう前提で考えがち。配偶者を「あて」にする女性もいる。
- ・支出のなかで、教育費の予想がはっきりしないことが多い。
- ・長生き予定の人と、短命イメージの人とがいる。
- ・会社勤めから起業に移る人もいる。
- ・60歳で仕事から『引退』する人とそうでない人がある。
- ・比較的穏やかな人生を描き、荒波は予想していない人も多い。
- ・住宅の建設購入を考える人とそうでない人とに分かれる。

将来計画は、どうしても『理想的』ないしは「空想的」になりがちだ。この活動と討論をもとに、それらについて考えを深めるきっかけが得られれば、と願って行う活動だ。

## 多様なテーマへの取り組みスタート

5月23日



今回は、今学期では一番盛り上がった。

受講生個人が取り組むテーマを出し合い、相互にアイデア・アドバイスを提供し合った。

出された取り組みテーマを紹介しよう。

壺（陶器）

地域別の遊びの違い

沖縄おこしアンケート

年代別アンケート 洋服代に月いくらかけるか

シーサー

基地をなくして、なくした後のスペースで何をするか

スマートフォンの比率 どこが気に入っているか

どんな調査発表が登場するか、楽しみだ。

## 起業プラン作成

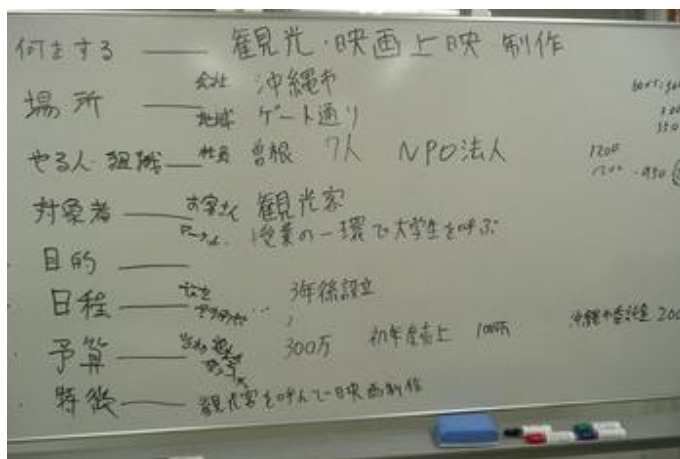
6月05日

一人の受講生が選んだ、映画に関して起業する企画を考えた。

沖縄市のゲート通りを現場にして、観光客（映画を専攻する学生など）が、映画鑑賞・撮影・試写などをするのをサポートする会社・NPOを起業する企画だ。沖縄市と提携し、映画監督をメンバーに採用し、進めていくというものだ。

楽しい企画になりそうだ。次の機会には、さらに詳しい企画が登場しそうだ。

こんなプランが続出するのを期待する。企画プランだけでなく、いろいろな調査やインタビューなども期待できそうだ。写真は、板書したプランだ。



## 進路選択

6月12日

今回は、1日の記事で紹介した看護大学での「進路選択の際、何を大切にするか 肩たたき討論」と同じものを展開した。

看護大学授業は50人余りの受講生なので、肩たたき討論ができるが、沖縄大学の問題発見演習は受講生が少なく無理である。

その代わりに、個人が6つの比率を円グラフにして板書したものをもとに進めた。

看護大学では、看護師などの特定職業を念頭に置いて入学してくるが、文系の沖縄大学では様子が全く異なる。

討論のなかで、高校時代と現在との違い、さらに10年後の予想とでは大きく変化することが注目される。たとえば、高

校時代では「忠告派」（特に親の忠告）の比率が高いが、大学入学後は減少する。また、大学の1, 2年生では、卒業後の職業イメージが明確ではなく、多様な可能性を探すという感じなので、6つのいずれもが登場してくる。

今回は、私が20歳だったころもグラフにしてみたが、高度成長経済時代だったので、厳しい就職事情下の現在とは大いに異なる。

こんな討論の中で、受講生一人一人の認識、考えが深化していくことを期待している。

授業も後半に入って、個人の取り組みと問題提起となる特別メニューで、どんなものが出てくるのが楽しみになってくる。

## 特別メニューへの取り組みがスタート

7月03日

ゼミも終盤にさしかかり、個人またはグループで取り組む特別メニューの提案と討論がスタートした。

まず、「泡瀬埋め立て問題」についてのレポートがあった。今回はまずはインターネット等で調べたことの報告だった。今後の取り組みの『入れ知恵』がいくつも出されたが、当人はインタビューに取り組みたい、ということで、質問項目を始め、インタビューにかかわる知恵が出された。

インタビュー後の次の報告が楽しみだ。

ミニ・ワークショップでは、「こんな科目をなくして、こんな科目をつくりたい」を考えた。小中高校時代の体験をもとに、現実との関わりがつかみにくい数学・古文・歴史などが話題になり、それを変えてどんな科目にしたらよいかの討論になった。

ゼミも残すところ数回もない。ラストスパートする人が出てくる時期だ。欠席続きしていた人も、そろそろ顔を出すだろう。特別メニュー作成の作戦会議的様相になるのが、この時期の特徴だ。どんな提案が出てくるのか、楽しみだ。毎回、私の「想定外」が出てきて、「えーっ」と言いつつ、楽しむ私だ。

## 少人数でもワークショップ型ですすめる

7月10日

元々登録人数が少ないクラスで、欠席者が多いと家庭教師状態になるが、それでもワークショップスタイルですすめている。

ホワイトボードを目いっぱい使って、いろいろな発見、計画、予想などを、図・表・キーワードなどで書きこんでいく。そのプロセスで、質疑討論をはさみこむ。結構楽しく充実したやりとりになる。人数が少ないだけに、丁寧なやりとりができ、深まりが増していく。

一人ワークショップという言葉はないが、私が研究を展開する時、ワークショップスタイルを使って、広い平面の上にポストイットを貼ったり、図を描いたりして、一人で考えを発展深化させていくことが多いが、そんな感じだ。

それにしても、そろそろ学期末だ。お休みしていた人が顔を出してくれることを期待している。といっても次週は「海の日」で休み。次々週になる。

さて、今回は、「10年後の仕事・労働時間」のテーマで、ワークショップをした。出てきた印象的な論点を並べておこう。

- ・家事・育児を計算の中に入れるのか。
- ・土日を参入するか。週休二日で土日休みとは限らないかもしれない。
- ・正規雇用で勤めながら、起業準備する。
- ・起業準備資金の稼ぎ方

時間のゆとりがあったので、「20年後」もしてみた。

- ・起業したが、さらに多角経営を考えて働いている。
- ・500人起業の社長の年収はどれくらいか。
- ・大都市のコンビニと、沖縄のコンビニでは収入額が大きく異なる。

仕事・労働時間よりは収入金額の話へと広がったのは、本格的な就業体験がまだの学生のためだろうか。話題が広がり、興味が増す議論だった。

## 2011年度後期「問題発見演習Ⅱ」

### 第一回目

10月04日

後期が始まった。沖縄大学で私が担当するのは、問題発見演習Ⅱだ。他には、2~3月に問題発見演習Ⅰの集中講義を行う。11月下旬からは、看護大学での教育原論も始まる。カリキュラムが変わる前の科目なので、最後の担当となる。

受講生の皆さんがどんな「問題発見」をし、追求を始めるのかを楽しみにしている。授業終了後、このブログに毎回報告を書いていく。欠席の際には、ご覧になって、様子をつかんでおいてほしい。

第一回目の特徴。13名の出席。ほとんどが開始時間には教室に。

最初は、私の授業のいつもと同じく、受講生相互が親しくなっていくためにゲーム的に進める。初対面どうしが多く、多少照れながらも、どんどん進んでいく。初体験ながら、皆さんよく話す。

ゲーム的進行の中で、「沖縄おこし」にかかわるキーワードをたくさん出していく。

それを、グループごとに設定したカテゴリーに分けて、大判の紙に貼り付けていく。

カテゴリーとして取り上げられたのは、文化、大学、音楽、食だ。

全体にテンポよく進む。来週もといきたいが、来週は「体育の日」で休日。さ来週は、さらに充実して発展することを願っている。

## 皆が話し明るく和やかな雰囲気 二回目

10月17日

公休日があって、ちょっと間のびした感じがある2回目。それでも10人の受講生、しかも開始時間には、6~7名が集まる。

「沖縄自慢」を中心に、いろいろなキーワードを発見し、10年後沖縄の予測も考えながら、ゲーム的に話し合う。「くろうと受け」するキーワード、海中道路、仲間郁江?、ベニイモタルト・・・なども登場。

途中のゲーム、自動車と運転手は、人間関係をぐんと密にした。運転手側が遠くから声をかけて、自動車が動きまわる、という新バージョンがとてもウケた。

今日初参加の野球部の二人は、「楽しかった」との感想。

今後の進行が楽しみな授業だ。

## 人生、何に価値をおくか

10月24日

今回は、テキストとして使用している「浅野誠ワークショップシリーズ5 人生創造」のなかの№7のbの「大切にす

る価値を順にならべよう」をしながら、討論した。

地位 名声 自己実現 収入 人間関係 正義 社会貢献 消費生活 というキーワードを各自で並べ、相互に見合いながら、討論していく。

いくつかの特徴

- 1) 収入を重視する人たちと、自己実現や人間関係を重視する人たちとに分かれた。以前は収入を大切にしたが、変化したという人もいた。
- 2) 地位や名声は、下の方にする人が多い。
- 3) 消費生活も下の方が多く、地味目の生活志向か。
- 4) 社会貢献は何か、というイメージがわかれた。ボランティア、納税、環境志向など、様々だった。
- 5) 過去のこうした活動事例と比較すると、各自が考えをしっかりとっていて、自己主張をきちんとしているという印象をうけた。

毎回するショートゲームは、「人間知恵の輪」。全員が初体験だったのには驚いた。かつては、小中高校時代に一度はしたという例が多かったのだが。でも、みんなかなり楽しんでいた。

授業スタイルに慣れてきたのか、時間通りに集合する受講生が大半。テンポよく授業は進み、かなり、深い討論。全員が数回は発言するようになる。

## 人生おこし・沖縄おこしへ

10月31日

今日は、「将来設計尋ね人」と「沖縄おこしアイデア大会」を中心に進行した。出された「沖縄おこしアイデア」を紹介しよう。



- ・黒糖ランド遊園地を作る
- ・一番街の活性化
- ・オニヒトデ退治の募金活動
- ・エイサーで新曲を出す
- ・沖縄から新たなメジャーバンド誕生
- ・沖縄に都心を増やす

今後、どんな風に発展していくか楽しみだ。

毎回している途中ゲームでは、「沖縄」のものをジェスチャーで表現をし、当てることをした。苦戦したのは、海ぶどう、美ら水族館、ガジュマル、ハブ。意外にすぐにあたったのは、沖縄大学、サーターアンダーギーなどだ。

受講生の人間関係も深まってきたし、授業にリズムが出てきた感じだ。

## いろいろな生き方をみつけよう

11月14日

今日は、「いろいろな生き方をみつけよう」のワークショップをしたが、受講生から出てきたのは、ほとんどが自分自身のイメージする「生き方」例だ。興味深いので、並べてみよう。

※印は、受講生たちから関心と呼んだもの

- ※ 正直に生きる
  - 自分の店をもつ
  - 外国で暮らしてみたい
  - 日本を代表する R&B シンガーになる
  - お金をためてハワイに住む。いろんなところに海外旅行に行く
  - 酒は身を滅ぼすモノなので、ホドホドな人生
  - 長野か愛知県で修行して沖縄に戻ってくる
  - お店をたててセレクトショップをする
- ※ 歳をとって、じじいになっても、好奇心をもち、楽しい老後にする
- ※ 他ジャンルの音楽にも興味を持ち、音楽を楽しむ人生
  - 死ぬまでにやりたいことをすべてやる
  - 自営業をする
  - プロゴルファーと一緒にしてみたい
  - 自衛隊員になって、年収はそこそこな人生を送る
  - おいしい食べ物を食べまくる旅に出たい
  - 大金持ち
  - 一生ニート暮らし
  - 無趣味な人生が想像できない

※印のものを書いた人に説明してもらって討論

受講生は、20才前後が大半だが、けっこうそれぞれの人生について考えているようだ。これからの授業の討論での交流・深まり・研究が期待される。

## 職業 人生

11月21日

今回は、二つの活動をした。

一つ目は、「就きたい職業・したことがある職業・就きたいと思ったことのある職業」を出し合って、「みんなの木」に貼りつけるものだ。製造業、販売・営業、経理・事務、農林漁業、福祉・医療、教育・公務、文化・スポーツ、その他に分類しながら、貼り付ける。

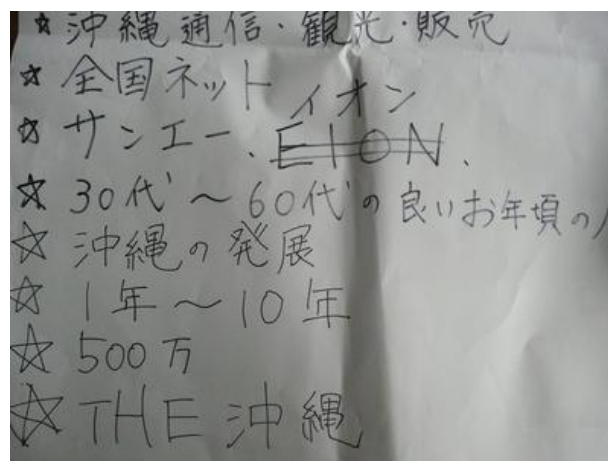
——「浅野誠ワークショップシリーズ№5. 人生創造」の№11の活動

皆の注目を浴びたものとして、漁士（漁師ではなく）、ソムリエ、秘書、スーパー、などだった。

上の分類の各々が一杯になったことが示すように、多彩なものが提示された。

二つ目は、「〇〇さんの人生」——「浅野誠ワークショップシリーズ№5. 人生創造」の№6の活動——を、インタビューではなく、自分自身について書きこむ活動。若い受講生ばかりなので、今後については、希望・予想をもとに書いた。そこで気付いたいくつかのこと。

- ・皆、結婚し子育てをする予定であること。
- ・学習は、学校卒業までで終わりの人が大半であるが、年齢と共に、学習時間を増やす人がいた。
- ・何歳まで書くかで迷う人が多かった。60歳以降のことは、書きにくい。
- ・収入は、300万円余りの人が多い。
- ・30代までは働くが、それ以降は収入ゼロに近づく人がいた。



多彩だ。

実際に何人かの人にインタビューして、レポートを書く人が出てくる人がでてくるのが期待される。

企画書を書く特別メニューがあるが、その募集もしている。その1案として、浅野宅で授業をする企画書作成案が持ち上がっている。

明るく活気のある授業だ。

## 起業プラン作成

11月29日

何をやる: 沖縄の情報提供  
サイト

場所: 沖縄県内

対象者: 沖縄県民、観光客

目的: 沖縄の総合的な情報を提供し、共有する。

日程: 1年~1年半

予算: 1000万円

やる人・組織: 高学歴人気ブローカー  
10~15人

特徴: 会員どうしの意見交換もあり、情報の書き変えもOK

28日は、まず起業アイデアを出し合い、それらをふくらす活動の後、希望で、三つのグループに分かれて、プラン作りをした。相当に盛り上がり、時間不足にもかかわらず、写真のようなプランが出された。

『海中レストラン』

場所 今帰仁

漁協・観光業合同プロジェクト

対象者 国民

目的: 娯楽とリハビリと環境意識の向上!!

～日程～

スポンサー集め、2012、冬に設計設工開始!!  
県に場所申請、許可を得る。

予算 10億円

特徴: お昼は、レストラン、夜は、ジャズが流れる小洒落たBAR

これをベースに個人でさらに発展精密化したプラン作りも期待される。授業は半ばの時期になり、一人一人が多様な特別メニューに挑戦し、その成果が全体場で発表し、さらに豊かにしていく段階へと移り始めた。

## 進路指導で大切にしたいこと

12月06日

5日の授業では、中学3年生の進路指導だとしたら、どんなことを大切にしたいか、について考えた。

「判断に迷うなら、とにかく高校に進学させよ」「親は子どもに期待し、金も出すのだから、生徒は親の意見を尊重すべきだ」など、10項目について、重要度順に並べるものだ。「普通の教師」「私の考え」の各々について、まず個人作業を試みる。それを、写真のようにホワイトボードに書きだす。

実に多様性にわかれた。かつてにはないほどの多様さだ。近年の状況を反映しているかもしれない。そして、判断を遅らせていく傾向が強いかもかもしれない。

意見が割れたものを中心に、討論を進めていく。学生が司会して進めたが、なかなかうまくいかなかった。

授業は後半期に入り、受講生自身の提起に基づいて、討論していく場面が増えていく。「特別メニュー」の提出が待たれる。第一次締め切りは10回目授業からだだが、8回目の今回、提出第一号があった。

| 項目        | 1  | 2  | 3  | 4 | 5  | 6 | 7 | 8  | 9  | 10 |
|-----------|----|----|----|---|----|---|---|----|----|----|
| 学校の実績     | 4  | 4  | 4  | 4 | 4  | 4 | 4 | 4  | 4  | 4  |
| 親の意見尊重    | 10 | 5  | 6  | 6 | 10 | 5 | 6 | 10 | 5  | 6  |
| 就職に社会勉強   | 9  | 7  | 9  | 2 | 10 | 7 | 9 | 2  | 10 | 7  |
| 英数国理社     | 3  | 5  | 2  | 3 | 4  | 5 | 2 | 3  | 4  | 5  |
| PIL以外の5教科 | 8  | 10 | 7  | 8 | 9  | 9 | 7 | 8  | 9  | 9  |
| 自分の考え     | 2  | 2  | 4  | 3 | 3  | 6 | 1 | 2  | 3  | 6  |
| その他       | 7  | 3  | 10 | 7 | 6  | 8 | 0 | 7  | 3  | 10 |

| 7つの教師 | 松本 | 伊藤 | 松井 | 大澤 |
|-------|----|----|----|----|
| 1     | 1  | 1  | 2  | 1  |
| 2     | 1  | 1  | 1  | 5  |
| 3     | 1  | 1  | 1  | 5  |
| 4     | 1  | 1  | 1  | 5  |
| 5     | 1  | 1  | 1  | 5  |
| 6     | 1  | 1  | 1  | 5  |
| 7     | 1  | 1  | 1  | 5  |
| 8     | 1  | 1  | 1  | 5  |
| 9     | 1  | 1  | 1  | 5  |
| 10    | 1  | 1  | 1  | 5  |

## 人生でいくつの職業をするか

12月13日

このところ、出席率がよく、毎回の授業は盛り上がりを見せている。

だが、今日は授業では、メインの役割を果たさずのA君が遅刻で、次週「開店」となったのは残念だった。

その代わりと言うわけではないが、「人生でいくつの職業をするか」のワークショップで盛り上がった。

受講生のほとんどが、すでにアルバイト経験を持つだけでなく、いくつもの経験をしている。そのことまでも含むと、一生のうちに、5つとか、7つとか、あるいは10以上になるのは、当然のことだろう。終身雇用制のイメージで行くと、一生に一つだが、実際は、一つなんて人は減多にいない。

今回も、これまでのアルバイトを除いたこれからの仕事数が1つと言う人は3人だけだった。だいたい、2~3、4~6、7つ以上だった。

浅野流の「肩たたき討論」でしたのだが、お互いのアルバイト経験、今後の希望などを交流討論することが、意外に新鮮な印象を与えたようだ。

珍しく私が話し、世界的動向のなかでの日本の特徴を語った。

授業の後半には、悪文例を板書し、それを皆で添削しあう活動を行った。

特別メニューの取り組みも始まり、次回がその第一次提出日なのだが、どんなものが出てくるか楽しみにしている。

## 進路物語 浅野宅での授業企画

12月20日

19日は、まず、「進路物語をつくろう」の活動をした。この活動のミソは、自分だけでなく、他の人の特徴や進路プランなどを、本人聴きとりや予測・期待で書いていくことだ。想定外のものが出てきて、書いた人への質問が飛び出したり、そう言われれば、そういう進路もありだな、と気付いたり、びっくりの連続だ。進路と言うと、個人の世界に閉じこもりがちだが、それを他の人と共有することで、楽しい世界を切り開くことができやすい。「沖縄おこし・人生おこしの教育」でも紹介した。

ゼミの後半は、懸案の浅野宅での授業企画の検討を行った。一番の問題は、受講生の日程があわせられるか、だ。バイトで忙しい人が多いので至難の業でもある。

次回、さらにより深化した企画案をもとに検討することになった。これは企画案作成の『実習』でもある。

## 12月26日なのに出席多数、多様な取り組み

12月28日

集中講義は別にして、年末の26日に授業をするのは、大学教員経験40年の私も初めてだ。

校内は閑散としていて、少々心配。しかし、開始時刻には10人を超え、最終的に13人。いつもより出席者が多い。授業が盛り上がってきたためか。

今日は、一人ひとりが作成する特別メニューのサンプルを紹介し、各自のプランを交流し合った。そこで出てきたものには、こんなものがあった。



邦楽と洋楽、どっちを好むか、インタビュー調査

ラーメンは、何味が好きか、調査

沖縄の空手人口を流派別に調べる

野球が好きか、サッカーが好きか調査

人生調べ

多様なものが登場。冬休み明けの1月16日授業で、どんな報告がでてくるか、楽しみだ。

今日はさらに、「浅野宅での懇親会企画」の第二企画案が提出され、検討討論。

そして、人生調べをすでに各世代の4名の女性に実施した学生から中間報告。

波に乗り始めた印象だ。

## ラストスパートがかかるか

1月17日

この授業もあとわずか。ポイントゲットの特別メニューへの取り組み本格化が期待される。

残念なことに、16日提出者はゼロ。出席者の取り組み計画を出し合い、アドバイスしあう。

多かったのは「いろいろな人生」のインタビュー。世代ごとに違いを調べたいというのが多かった。

盛り上がったのは、北中城の地域おこしプランづくり。アーサを使っただけのプランを作りたいとのこと。このクラスは中部出身者が多くて、北中の話題に、いろいろな発言が飛び出す。もっとも、私の昔話が多かったが。

30年前の若者と現在の若者の文化の違い、生活の違い、遊びの違いを調べるものも、盛り上がった。

さて、次週は、どんな特別メニュー報告が飛び出すか。楽しみである。

## 「現代の若者の特徴」など多様な調査発表

1月25日

今回は、3組4人から6つの発表があった。充実していて、討論が時間切れになるほどだった。

タイトルをならべてみよう

1. 野球とサッカーどっちが好きか？
2. 「浅野邸での宴」企画書
3. 「いろいろな人生調べ」の分析
4. 沖縄大学CM作り企画書
5. 米軍基地についてインタビュー調査
6. 現代の若者の特徴

6番目が「おおうけ」だった。

現代の20才前後と、30年前の20才前後の人、各々5人以上にインタビュー  
インタビュー項目は、

- 1) 近所との付き合いはどうでしたか
- 2) 大好物、よく食べた物は何ですか

- 3) ファッションとそれにかかる費用を教えてください
- 4) 趣味は何ですか
- 5) どんな遊びをしていますか
- 6) 学歴を教えてください
- 7) 仕事は何をしていますか
- 8) 小遣いはいくらですか  
というものだ。

この結果、調査者は次のようなまとめを書いた。

インタビュー結果からわかったこと

- ・現代の若者は大学に進学する人が多いことが分かった。
- ・現代の若者は昔と遊びが違いゲームで遊ぶ人が多い。
- ・現代の若者ほど服にかかる費用が高いことが分かった。
- ・現代の若い世代はあまり働く人がいなく、親からこずかいをもらっていることが分かった。
- ・豊見城と那覇で近所との付き合いに大きな違いがあることが分かった。
  - 那覇市は移住してきた人が多いので近所との付き合いがあまり良くない。
  - 田舎ほど近所付き合いがよい。

感想

もうやりたくない。嘘か本当なのかよくわからない。真剣に答えているのか、ふざけてるのかわからない（特に50代）。内容が恐ろしい。

自分の予想に対して当たっているところと、予想外なところがあり勉強になった。

質問を考えるのがたいへんだった。

質問のミスで関係のないことがわかった。

こうしたインタビューは初体験なので、苦労が大きかったようだ。それにしても発見したことが多かったようで、さらに分析をふかめることを期待したい。この経験は卒論にも生かせそうだ。

次回、どんな発表がでてくるか楽しみだ。

## 興味津々の発表が続く

1月31日

今回も、面白い調査発表が続いた。一覧にしよう。

- 1) 今の現代の遊びと昔の遊びの違い
- 2) 北中城村観光めぐり企画書
- 3) 年代別、携帯に求める機能性
- 4) もし明日地球が終わるなら何を食べたいか？

1) の焦点は、『お金』のあるなしだった。他の受講生から、お金がない時代の昔の若者が、もしお金があったら、ど

うしたかを調べてみる、というアイデアが出された。

2) 地元発見で、観光スポット巡り、物産、癒し体験、宿泊のセットの企画。2万8000円は高すぎる、という声が出た。

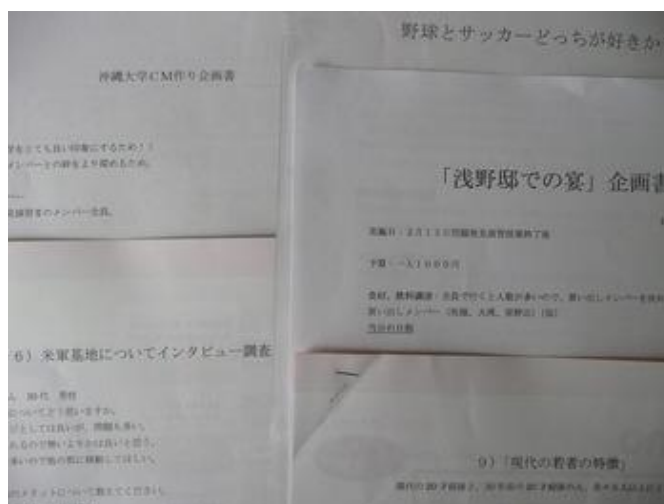
3) 50代以上と30代以下の違いが浮かび上がった。

4) 5択の調査だが、男女ともに「焼肉」がダントツ1位。次の調査の時は、「誰と行きたいか」も調べてみてはどうか、という提案が出た。

いよいよラストスパート。楽しく面白いアイデアがでてくる。すでに単位ゲット済が何人か誕生。よりよい成績に向けて奮闘中。

来週が楽しみ。

写真は、発表レポート一覧だ。



## 驚き すごいレポートが二つも登場

2月07日

いよいよ最終盤。今日は5本のレポートの報告と討論。

- ・沖大生へのアンケート 入学・大学生活・就職など
- ・『100万円あったら何しますか』
- ・沖縄遊園地設立企画書
- ・新・オキナワンヒーロー企画書
- ・「浅野邸での宴」企画書2

時間切れで、次回にも何本か出そうだ。

『100万円あったら何しますか』は、凄過ぎである。10代から50代までの男女各5名、総計50名への面接式アンケートの集計。実に充実したもので、今、当人にレポートのデータ転送要請中。到着したら、このブログで公開する予定。

新・オキナワンヒーロー企画書も、実に面白い。琉神マブヤーに代わる次のヒーローの提案のために、幼稚園生から50代までの30人へのインタビュー、理論的考察も踏まえて、具体的な提案。

その提案箇所を引用しておこう

### ○沖縄の新ヒーローの提案

現沖縄特撮の良い部分、革新するべき部分が明確になり、県民の声を反映した良いトコどりのヒーローとは・・・  
沖縄らしさを失わず、かつ、カッコ良くて教材になり、ドラマ性があり、脚本が面白い  
ヒーローのコンセプトとして仲間ゆきえ主演で人気の“テンペスト”を取り入れる。

○過去にもヒーローはいた!! 時代劇(琉球の歴史)を取り入れた、琉球時代のヒーロー!!

○空手を駆使し気を操る無敵のヒーロー!!

- 敵は琉球を支配下に置こうと企む薩摩藩が送り出す怪人!!
- あえて正義のダークヒーロー!!

最終盤の盛り上がりはすごい。来週は、我が家での懇親会

## 終了 打ち上げ会

2月15日

13日、半期の授業、無事終了。ラストスパートが効を奏して、常時出席者は全員単位取得できた。当初は、何人がたどり着けるだろうかを心配するほどだったが、だんだん盛り上がってきた。レポート例は、このブログでも紹介してきたが、最終日にも10本近くが提出された。

現代若者感覚での調査・提案などがでてきて、印象的なものが多い。これをきっかけにさらに本格的な調査研究が期待されるものも多い。

最終日、授業終了後、我が家で打ち上げ会をした。都合でこれない人もいたが、受講生たちで鍋を二つ作り、料理に歓談に盛り上がった。明るく元気ある学生が多く、今後の楽しい企画相談までですすんだ。



友達の友達で、実は間接的知り合いだったことがわかる例が続出。小さい時、出会っていたことに気付く例もあった。沖縄は人々がつながっているのだ。

若者たちの雰囲気はなんとかついていける私だが、若者言葉、と

くに若者文化の言葉にはついていけない。仕方がないことだろう。

元気のよい学生たちなので、他の大学の先生からを見ると、『枠を飛び越え』ているかもしれないが、私からみると、屈託なく創造的な学生ばかりだ。

ところで、こうやって、学生たちが教員宅にくるといって珍しがっている人がいる。しかし、私にとっては、ごく普通のことだ。私自身、高校時代に何人もの教師宅を訪問し、泊めていただいたことも数回以上だ。大学生時代もそうだった。いずれも楽しい経験だった。

ということで、私自身が教員になってから、学生を自宅に招くことは頻繁にした。それにとどまらず、忙しい時、子育てを学生に手伝ってもらったことがある。当時の言葉で言うとコンパやゼミ合宿を我が家でしたこともある。

家が狭い時もそうしていた。余裕がある時に限ってしたわけでもない。そうしたことが習慣だったのだ。





## 2011 年度後期 集中講義「問題発見演習 1」

### 充実満足のなか終了

2月27日

20日~24日の5日間、受講生4人という恵まれた条件のなか、内容もまさに『集中』して進行。毎日数時間の授業をすると、やはり疲労がたまる。まさに「年（とし）だ」。やむを得ない。

授業は、ワークショップ型で進行したが、以下のプログラムでの活動に加えて、受講生が提出したレポート類の検討討論、受講生企画の活動の三つで構成した。

新聞から、沖縄についてのキーワード発見  
物語づくり 私のしている仕事・したい仕事・いろんな仕事  
古今東西 キーワード「沖縄おこし人生おこし」  
沖縄自慢発見 コト モノ トコロなど  
「10年後の沖縄」討論  
沖縄おこしアイデア  
将来設計尋ね人  
10年後の年収  
どんな職業につきたいか  
いろいろな人生調べ  
沖縄起業アイデア  
起業プランをつくる  
中学3年生の進路担当教師だったら  
こんな科目をなくしてこんな科目をつくろう  
人生いくつの職業をするか  
進路物語をつくろう

途中にレクをはさんで進行。パークゴルフを企画担当が実施。実施報告書も、メンバーの特徴を見事に表現したものだだった。

少人数なので、お互いにとっても親しくなった。いつか同窓会をしようか、という話まで出てきた。人生計画をしっかり考えているメンバーなので、今後の人生が楽しみだ。

最近の授業タイトルには「沖縄おこし人生おこし」を掲げるのが、私の定番スタイルだ。それと大きく変わることはないが、受講生構成によるバリエーションは大きい。

今回は、少人数に加えて、一人一人が、自分なりのものをしっかり持っていること、しかもそれがバラエティに富んでいることが、内容充実に貢献した。

## 問題発見演習の1年を終えて

3月08日

4日記事の続きだが、ここで、私のクラスの話に絞ろう。

もっぱら再履修者向けということなので、「個性的」学生が集まる。従来スタイルの授業にあきたらないパワフルな学生。ちょっと元気をなくしたが、回復途上にある学生。

これまでのキャリアも多彩で、年齢・学年もまちまちだ。

そんなこともあって、関心分野が広い。それは、各自が取り組みプレゼンした特別メニュー作成例を見ればわかる。詳しくは、これまでの記事で何回も紹介してきた。

学外では多様な人間関係をもつが、学内ではつながりが少ない人が多いために、再履修になったという例もある。

授業スタート数回までは、受講生と私との、お互いのペースのからみあいをつくるのに、お互い試行錯誤的になる。しかし、おおげさにいうと、「なんでもあり」を楽しむ私の姿勢に、「居場所」を見つけたのか、4、5回目ぐらいから出席者が安定してくる。なぜか、時がたつにつれて、受講生が増えてくることもあった。

知性派も行動派も、私の授業のワークショップスタイルには、自分なりにかかわれることに気付いて安心するらしい。ゼミの題材として、「沖縄おこし」「人生おこし」を選んだのも、各々がからみやすいものだったようだ。

受講生のなかには、進路変更するかどうか「瀬戸際」の人もいる。

教務関係教職員にゲキを飛ばされて、出てきた学生もいる。どこの大学でも、入学して1、2年のうちに、休学退学する学生は、数十人、大規模大学では百数十人、二百人以上となる。そうした学生が、大学入門ゼミで、在学継続の瀬戸際判断をする。

その意味では、私のクラスは、とても重要だろう。

2012年度も、4クラス担当することになった。受講生たちと、どんなドラマを創っていくことができるだろうか。今から緊張と期待が入り混じった気分である。

ところで、多様なタイプの学生がいるわけだが、どんなタイプにせよ、共通するのはストレーターではないということだ。自分なりの人生おこしに踏み込んだ方、踏み込まざるを得なくなった方たちだ。それだけに、型通りではない新たな人生おこしのドラマを伴走できるという、私に与えられた「特権」のようなものがある。

私がこういう科目を複数担当していると話すと、びっくりする大学教員がいる。でも、いずれ、私だけのことではないだろう。そういう方に出あって、経験交流をしてみたいものだ。

## 2011 年度前期 「問題発見演習 I」

### レスペクトしています！ 授業スタート

4月12日

今日は、沖縄大学で新年度最初の授業。「授業大好き人間」の私は、春休みで2ヶ月近く授業がないと寂しい。授業で学生と出会えると、気分がまさに「春」になる。

無論、初めて出会う学生ばかりなので、緊張はある。学生たちと、どんなドラマが生まれるか、ちょっとしたスリルを感じながら、迎える。しかも、今回は、大学の学習へのアプローチとなる授業だ。10年近く前に中京大学で担当して以来なので、久々だ。

今日は、いろいろな活動をしながらか、「職」「商品」「仕事」などといったカテゴリーで、たくさんのキーワードを発見していくことを中心課題にした。学生相互も初対面がほとんど緊張気味だった。そして、動きが豊富な私の授業なので、驚いた感じだったが、すぐにうちとけてきた。

毎回、授業の最後に、個人シートに、「私の今日のキーワード三つ」「ふりかえり・発見二つ」を書いたうえで、そのシートに他の学生が「コメント」を書くことで、授業を終える。

それらをいくつか紹介しよう。

#### 「私の今日のキーワード」

手 発表 行動 口 耳 出会い 緊張 笑い 商品 元気 楽しい 足 頭 食 浅野誠 仕事 鼻 地球

#### 「ふりかえり・発見」

色々なゲームをして交流を深めることができた。

楽しく講義を受けることができた。

グループの人たちの話が聞けてよかったです。

授業が楽しかった

考え方がみんな違う

すごい授業だった

皆の仲が良くなった

坐って授業を受けるよりもやりやすい

先生が明るくていい感じだった

よくがんばった

体も動かした

今日は色々なことを知った

友だち増えるといいなと思いました

#### 「コメント」

音楽をやっている友だちがいるので、話があいそうです

気さくな人でよかった

〇〇さんのことが聞けてよかった。

友だちに顔が似ていたので、弟かと思いました。  
おもしろかった。  
よろしく  
仲良くしてください  
張り切っていました。  
がんばっていました

授業中の挨拶交換の時に、受講生の一人に「レスpektしています」と、言われて、私は、眼をパチクリ状態。  
この言葉は、最近の流行語なんだそうだ。でもいい気分だった。

## 明るい雰囲気、人生・地球・沖縄発見

4月18日

登録調整期間なので、受講生の変化がある。今日初めて顔を出した学生が8名。雰囲気がいっきに「にぎわい」トーンに。

今日は、人生創造バージョン「自己紹介・他者発見ビンゴゲーム」からスタート。

要領よく、横一列を埋めてビンゴになる人、たくさんの罫目を埋めるが、なかなかビンゴにならない人、実の様々。でも、その中で、相互にたくさんの人との会話。

地球イメージをグループ単位で、厚紙で示す。

古今東西方式で、沖縄の単語を出していく。

こんな風にして、今日は、『人生』『地球』『沖縄』のキーワードを出し合っていく。

「沖縄」の事を意外に知らないとの声が出る。どうやら、ほぼ全員が沖縄で生まれ育ったのに、だ。

では、前回同様、授業最後に書いた、「私の今日のキーワード」をいくつか紹介しよう。

ヒージャー がじゅまる 地球 人生 パス はぶ ビンゴ 海がきれい 仲間 知る 自己紹介 ちんすこう 仕事

※ 「パス」というのは、キーワードを順々に言っていく時に、出せなくて「パス」といったこと。この授業では「パス」ありなのだ。でも、あんまり出過ぎると、考える時間を取って、再度挑戦だ。

次は、「ふりかえり・発見」で書かれたものだ

グループで行動ができた

ちゃんと意見できた

グループが組めた

たくさんできたけど、ビンゴできなかった

新しい人が増えた。仲良くなった

地球にはたくさん自然がある

人生は色々

前回の授業とは違ったことをやって楽しかったです

全員のフルネームが知れてよかった



沖縄のことあんまり知らない自分がいた  
皆違う地球についての考えがあった  
初の顔合わせでしたが、とてもふんいきがよかった  
自己紹介して、他の受講生のことが分かった。  
沖縄のことがいろいろ分かった  
久しぶりに学校来た  
ちんすこうが渋かった  
少し頭がよくなった

個人シートに他の受講生がコメントをつける個所で出てきたもの

すばらしい  
優しそう  
すごい奴だね  
リーダー  
おつかれさまです  
いっしょにがんばりましょう  
いっしょに単位がとれるようにがんばりましょう  
考えが変。良いと思う。  
これから仲良くなって外で遊びたいです。  
とてもがんばっていたと思います  
渋い  
おもしろかった

次回以降、出てきたキーワードをもとに、調べたい事、深めたい事を絞っていく方向へと進んでいく。

## 受講生増加 新鮮な発見

4月25日

今日は18名出席。回ごとに増えてくる。

握手を通して伝えるゲームと『自動車と運転手』のゲームを通して、人間関係を深め発見

「こんな科目あったらいいな」を考えながら、学習について発見

3回の授業でたくさんのキーワードを発見する。

これで第一期を終え、次回から第二期へ。

第一期のグループはこれで終わり、と私が言うと、「えーっ」との声。第二期に、また同じグループになることもできるよ、と私がいうと、「ほっと」する顔が何人もあった。

いつものように、個人シートからいくつか紹介しよう。

[今日のキーワード]

思い 人生 意味 学習 アイディア 人間関係 思考 出会い おにぎり ちんすこう やる気UP 意味不明 仲間  
哲学

[今日の振り返り・発見]

友だちは大事

先生の授業はちょっと意味が深い それを理解して、最後に大きな「物」をつかみたい

いろいろな意見があって学習できた

もっとアイデアを出す

いろいろな人間関係の事について考えさせられた

考えるのは難しいです

みな一つの事象に対して価値観が色々で、それを理解したい

ゴールデンマイク

マイクのコメント

頭よくなりたいです

最初にやった車のゲームが楽しかった

最初の運転のやつはなかなかおもしろかった

人間を運転できてよかった

様々なキーワードのことが学べてよかった

友人関係

もっと仲良くなりたいたい

新しい人と知り合えたのでよかったです

新しい授業のやり方

ストレンジャーな先生だけど楽しかった

皆のコメントは短いけど、それを掘り下げるととても深いものだと感じた

今日の授業で、○○と□□がマジ路線だと思いました。

[コメント]

皆の経験もいろいろだから人間関係もいろいろなのかなー 出会い方とタイミングですかね

いっしょにグループでがんばりましょう

リーダー譲るよ

お疲れ様

すばらしい

でしゃばっていた

DJかな

今日もみんなマジな感じで意味のある授業だった

音楽について少し話してみたいね

すばらしい

初めての参加なので、次回からもっと仲良く楽しい授業にしていこう

グループで作成したキーワード一覧も紹介しておこう

○ 作りたい授業科目 …… バイト科 ファッション科 お金科 自由科 うちゅう科 遊ぶ科 ごや学 読書科

## 男道科

- 人間関係 …… 愛 友情 伝える 疲れる 複雑 タイミング つながり 信頼 裏切り 上辺
- 金銭商品 …… パソコン ギター お茶 けいたい メガネ 机 TV パンツ 水着 にんじん

## 人生で一番大切にすることは「親」

5月02日

今日の授業の最初に、『人生で大切にすることを並べる』活動をした。

テキストP30に掲載されている活動で、以下のものに、もし順番をつけるとすれば、どうなるか、というものだ。

恋人・配偶者 親 子ども 仕事 衣食住 趣味 睡眠 友人 沖縄 居住地 故郷・出生地 身体 休息 学習 学校 国 地球

上位にランクされたのは、ほとんどが人間関係であり、トップは、大半の受講生が「親」をあげた。

この活動は、人生をめぐる討論するきっかけとして、あちこちで、しばしば行ってきた。上位のほとんどが人間関係、わけても親をトップにあげるとするのは、初めてであった。今回の受講生の特徴を示しているのだろう。近年の若者の大半も同じような特徴を示すのだろうか。知りたい事、考えてみたい事である。

今日の授業は、連休中にもかかわらず、というか、連休中だからというか、出席率は60%ぐらいだった。

授業は第二期に入り、対象カテゴリーを絞り、『調べる』活動を始める。

受講生に関心が高い「地球」「人生」「仕事」「沖縄」に絞り、希望するカテゴリーごとに新しいグループを作った。人生の価値として「人間関係」に関心が高いのに、「人間関係」が選ばれなかったのは意外だった。

各グループで、前回までの第一期で出されたキーワードをマップ化する活動をした。

写真は、その「作品」の一つだ。

結構、面白いものができた。



いつものように、個人シートに書かれた今日の「ふりかえり・発見」と「コメント」をいくつか紹介しよう。

## 「ふりかえり・発見」

- ・自然は緑・青など色であらわせる
- ・みなそれぞれ価値観があって面白かった
- ・もうちょいがんばる
- ・最初にやった価値観のやつでは、似ていたので驚きました
- ・仕事に対する価値観が違っていった
- ・「人生」＝無限だと思った。定義するのは難しい

- ・一人一人価値観が違うと思った

「コメント」

- ・考えが面白いと思った
- ・もっと話がききたいと思った
- ・責任重大
- ・おもしろく説明ができていた
- ・ひとりだけ俺たちより頑張っていた
- ・沖縄のことについてたくさん考えていました

## グループ調査活動のテーマ

5月09日

今日の面白い発見。小学校以来ずっと一緒だったという二人組が、2組もいること。  
1組だけでも珍しいのに、少人数のゼミクラスで2組もいるとは信じられないことだ。

前回、取り組みカテゴリー「地球」「沖縄」「仕事」ごとにグループを作り、問題構造図を作成した。今回は、それをもとに、以下のように、焦点を絞り、「何について調べるか（考えるか、作るか）」を設定した。それに基づいて、調べてくることの分担を決めた。

沖縄・・・ちゅら海水族館の来客数、傾向を調べ、来客作戦を考える。

仕事・・・大学生の人気職業ランキング

地球・・・地球温暖化の沖縄への影響ビッグ3

## いろいろな調査テーマが浮かび上がる

5月23日

出欠の出入りがやや激しいが、グループでの調査活動のテーマがいろいろと興味深い。

「温暖化の沖縄への影響」にかかわって、風力発電の条件がいいのに、なぜ少ないのか。

首里城には、何人の人が住んでいたのか。

首里城はなぜ赤色なのか

沖縄大学生の将来「夢の目標と現実の目標」インタビュー

.....

3番目のテーマはすでにインタビューが20人ほど行われているが、なかには、夢は「料理人」、現実「教師」という、興味深い回答があり、これをどう分析するか。

授業は現在、中ごろの段階だが、後半に入ると、個人もしくはグループでの調査研究、提案、ワークショップなどへと発展していく。どんな展開になるだろうか。

多様な個性がどんなにかかわりあい、響き合いをしていくだろうか。



## 多様なテーマの発表と今後への発展

5月30日

30日の授業では、第二期のグループでの調査活動の発表をした。グループで集まりにくくて、調査計画段階のものとか、こんな調査がしたいというものもあったが、いずれも、「こんな調査研究があれば興味深いだろうな」というものがそろっていた。

今回は、間をおいての出席者が多数で、人の多さの活気もあった。廊下を通りかかる先生たちに授業後で出会うと、異口同音に「楽しい授業ですね」とおっしゃる。

では、今日の発表テーマを紹介しよう。

### テーマ

沖大生の人気職業——夢と現実

(アンケート結果は、夢が、教師、公務員、音楽関係 現実が、教師、会社員、公務員)

首里城の歴史

沖大生にアンケート「沖大に来て良かった？」

美ら海水族館の来場者

地球温暖化と沖縄の発電

次回から後半に入る

個人、ないしはグループをつくっての調査研究と発表へ

## 多彩な調査テーマとレポート添削大会

6月06日

今日は7名で充実した内容だった。まずレポートの書き方では、素材の文をきちんとしたレポートにするための添削大会。そこで出たキーワードは、逆接、語彙、接続詞、考察、論文、添削などなど。

そして、一人一人の第三期のテーマの交流。出てきた候補は、実に多彩で、発表への期待が高まる。

ラップにおける韻のふみ方

沖縄大学生に聞く「沖縄大学には行ってよかったか」

ギターの価格

帽子

地球

沖縄の方言

東京での一人暮らし

時間終了まで楽しい討論。全員が何回も発言した。

## レポート作成への流れができ始める

6月13日

今日は、久しぶりの出席者も多く、活気があった。

とくに「10年後の年収は？」の討論は、いろいろと発見があった。

- 100万円以下が、一人と少ない。
- 100~300万円、300~600万円が多い。
- 福岡で引っ越しのアルバイトで、月収50万を稼いだ経験者がいた。
- 現在、年収100万以上稼いでいる人が何人かいる。
- 収入と所得の違いを知らなかった人が多い。

もう終わろうと思うと、発言がでてくるような雰囲気だった。

余談 野球部経験者が多いことが分かった。高校時代、甲子園めざして奮闘した皆さんのようだ。

10年前に中京大学体育学部で教えていた頃を思い出した。

そういうタイプが半分近く、そして文系的雰囲気が漂う学生が半分近く。

ようやく学生集団としての雰囲気が出てきたかな。

次週から、レポートの中間報告（個人型とグループ型）がスタートする。

単位取得・好成績に向けての流れが少しずつ広がってきたかな。

## 中間報告スタート

6月20日

授業は後半は入りました。

今日から、テーマ追求の中間発表です。

第一弾として、「沖縄に強い地震がきて、津波がきたら、どこへ逃げるか」というチームの発表でした。

宜野湾バージョンと那覇バージョン。

皆からたくさん「入れ知恵」が寄せられました。

どんな風に報告がまとめられていくか、楽しみです。

## 出席者増加 多彩なテーマ

6月27日

このごろ、出席者数増えてくる。いよいよ終盤に差し掛かってきたためか。

毎回、多様なテーマでのレポート計画が出されてくる。

美ら海水族館研究

世代別「好きな魚」研究は面白そうだ。

東京での一人暮らし研究

やってみたい人が多くて、実践的アドバイスに関心が集まる。

携帯電話研究に関心をもつグループも現れた。  
とにかく多彩だ。

## 発表者欠席多数に驚く でもユンタクが有意義

7月04日

5組の発表予定者のうち、発表者は1人だけと、想定外の事態。  
でも、その発表討論は丁寧になされた。  
空白になった時間を使って、一人一人のウリを話してもらった。

資格取得 一人暮らし アパレル業界 ブランド 将来計画未定 外国暮らし 英語を使う仕事  
など、あちこちに話とはびながら、楽しいゆんたくタイムだった。  
来週の発表予定者の成功を祈る。  
今回欠席して発表できなかった方の再チャレンジ歓迎。

## 琉装 基地 電力

7月11日

今日は、3組が発表。  
多彩な分野で、調べていく。

最初は、だだ広くなって、膨大な時間がかかりそうな気配。  
それを焦点化して、レポート作成に結びつけていく。  
たとえば、琉装の結婚式でかぶる帽子は、王朝時代のどんな位の人がかぶる帽子なのか、に焦点をあてて調べる。

こんな討論をたくさんした。

## 「沖大に入学して良かったか」アンケートの発表

7月25日

今日は、二人の発表があった。  
二人とも、きちんとワープロにうったもので、なかなかよかった。

そのうちの一人の発表は、「沖大に入学して良かったか」というアンケートを37名も集めてきた結果だったので、関心もたれた。

その考察では、  
「入学して良かったと思っている人が少ないのに対して大学が楽しいと思っている人は多かった。それは、なぜか。私の

考えでは、一応大学に入学しておこう、という考えで入学してきている人が多いので、高校の時とあまり変わらず将来に対して真剣になれていない。と考えた。でも大学に入学したので、友達も増えて楽しい。と私は考えた。」と書かれている。

興味深い。

このレポートをさらに良くし、発展させるためのアドバイスを皆で考えた。

## 沖縄の風力発電 東京の一人暮らし 吉田カバン

8月01日

今日は、三つの発表

- 1) 沖縄の電力について、火力と風力に焦点化したの発表  
とくに風力について おのおののメリット・デメリット 将来性について
- 2) 東京の一人暮らしをは、亀有に焦点をあてて、現実的に住める物件があるかどうかをチェック。東京生活体験のある知人にインタビューなど、多角的に調査。
- 3) 吉田カバン製品のあらましについて調べ、学生たちが持っているかどうか、持つ持たないの理由のアンケート結果の発表

この発表に全くついていけない私ばかりが質問していた。

今回は最後の週。成績評価だけでなく、今日発表しきれなかった二人の発表も予定。

一人一品をもちよって、「打ち上げ」をすることとなった。

お互い、打ち解け、いい雰囲気になってきたが、もう最終回を迎える。

## 演習終了 「水族館は虐待か？」

8月08日

今日が最後。

「地震」「水族館は虐待か？」の発表があった。

「水族館は虐待か？」は、50人以上に送付したメールアンケートで、回答があった39名の集計。

「そう思う人」が、10代・20代で29名中5名、30代、40代で10名中4名。という結果。

「そう思う」理由も、「人間のエゴ」「見世物でストレスがたまる」「輸送の途中で死ぬ魚も多い」「狭い場所に入れ、自由を奪っている」と様々。

興味深い発表に、出席者皆が感心した。

最後に、半年間を振り返り、懇談。

今日の出席者全員が、飲食店でアルバイト。厨房でがんばるベテランも多い。しかし、将来プランには入っていない。将来プランは確定していない人が多いが、いろいろと論議は広がった。

新しい人間関係が広がった半年だった。



# 愛知教育大学大学院「教育方法特論」2009年

2009年9月に集中講義で担当した授業だ。その全体像は、浅野誠ワークショップシリーズNo.4『授業づくり 大学』に掲載したので、参照してほしい。

## 充実&充実

2009年09月15日

昨日終えた集中講義を終えて、さきほど我が家に帰る。寒～い愛知からもどって、ほどよい暑さの我が家でほっとする時間は20分で、わが中山合唱団練習に参加した後、書いています。

極め付きの充実だったが、いま思いつく原因は、思いつくところ

- 1) 多世代 60～20代
- 2) 多様な分野 生活科、理科、数学、・・・・・・  
学校以外で活躍している人 社会教育、市役所・・・・・・
- 3) 魅きつけるものをもっている人の参加  
さとうきびを育てている人、すぐに沖縄ツアーを企画する人、皮膚マッサージをする人、でかいマイクをつくる人、茶番の名人、・・・・・・
- 4)・・・・・・

## 概要

2009年09月19日

授業では、次の6つのテーマにわけてすすめました。

- A 多様な教育方法の分類を通しての発見
- B 場・物的環境
- C 対象者による教育方法の変化・差異
- D 多様な授業・ワークショップ
- E 学校以外の場での教育方法
- F 異質協同での学び 生き方を創る教育

各テーマは、二つのセクションにわけて、両者を別の日に行いました。

第一セクションは、水平的拡散的思考で、多様なものを発見し、それをマップ化することを主眼にしました。

第二セクションは、垂直的思考で、第一セクションで浮かび上がった問題を、一つに絞って深く掘り下げることを主眼にしました。

第一セクションは、まず私が受講生の視野を大胆に広げるためのレクチュアをしました。

それに基づいて、受講生がおもいついたキーワードをポストイットに何枚もかいてもらい、模造紙上にならべました。

担当グループが、その並べ方を提起します。たとえば、X軸には歴史性、Y軸には対象者の年齢を設定します。

ならべられたマップをもとに討論します。最初のうちは、感想・発見の意見が多いのですが、キーワードの置かれた位置をめぐる質問・意見などがでてきて、それが論争めいたことになる場合もあります。

第二セクションは、担当グループの問題提起から始まります。第一セクションで議論になったことを活用したりします。

その問題提起も、小グループをつくってマトリックス記入したり、あるいは、いくつかの場面について、その解決策をグループ単位に提示させたりすることからはじめます。そして、全体討論です。

こんな時、わかりやすくするために、ロールプレイがしばしばかわれたのが、今回の特筆事項でしょう。

第一セクション、第二セクションの終わりに、受講生は、コメントを書いて、担当グループに渡し、それはコピーされて、全員に配布されます。

以上のような流れで進行しました。受講生だけでなく、私も、新しいことを沢山発見しました。心地よい知的疲労が莫大という感じでした。

いずれも討論が深まり、予定時間延長の事態におちいりました。最終日は、二時間も延びてしまいました。当初は、もうテーマ、討論のなかで浮かび上がったものをする予定でしたが、時間不足で断念しました。

充実&充実 でした

# 沖縄国際大学「教職総合演習」2007年

2004年から4年間、沖縄国際大学で、いくつかの科目を担当した。そのなかの最後の「教職総合演習」の一部を紹介しよう。

## 昨年の学生による授業評価

2007年10月13日

木曜日のこの授業は2回目を終わり、順調に船出している。「学生自身が積極的に動く」私の授業スタイルにとまどいながら、少しずつ楽しみはじめている感じである。発言も増えはじめて。今年はどんな風になっていくのか、楽しみにしている。

ところで、先日昨年のこの授業についての学生による授業評価アンケートの結果をいただいた。おそらく、春には、大学教務課にあるメールボックスに入れてあったのだろうが、私の出勤開始は10月なので、最近目を通したところである。学生の授業評価を検討して授業改善をすることを求めるなら、もっと以前に手にとどくようにしていただければありがたいと思うのだが。

この評価は4点満点で、全学の総合平均得点は3.4であり、2クラス担当した私の科目は、3.8と3.9である。4.0の満点項目が多数であるが、低い項目をみると、まず「黒板などの使用」項目である。しかし、ワークショップスタイルで展開しているので、黒板などの使用ではなく、私が提供するものはプリントなどの素材が中心となっているので、この項目の表現では、低くなるのは致し方がない。それは私だけでなく、黒板などを使用しない科目では、低い評価にならざるをえない。もう一つは「シラバスに沿っていたか」というのであるが、今年の授業で、「シラバスを読んで、このクラスを選んだ人」と尋ねたら、学生たちの全員がシラバスを読んでないとのこと。だから、学生たちにとって評価記入しにくい項目であろうし、評価データの信頼性が疑われる項目である。

この二つの項目を除いて平均値を出すと、3.9~4.0になってしまう。ということで、私にとっては、授業改善の手掛かりを、この評価からまったくえられないということになる。

授業評価は、教員が授業改善の手掛かりとしておこなわれるものだと思っているが、その役割を果たせない評価のありようは、いかがなものだろう、と思う。

## 学校で学んだことの役立ち具合

2007年10月19日

### 3回目の授業終了

今回のテーマの中心は学校。これまでいろいろと学んだこと――外国語の専門書の読み方、はしのもち方、ケンカの仕方、サッカーのシュート・・・などを列挙し、それらをどこで学んだのか、25才以上になって役立つのか、という基準で分類。黒板全体にカードを貼りつける。見渡したところ、学校で学んだことより、学校外で学んだことのほうがはるかに多い。とくに受験勉強で学んだことはほとんどない。笑いの渦の一つは、「サッカーシュートは、25才以上になっ

ても役立つのか」に対しての「子どもを産んで、子どもと遊びながら育てるときに役立つ」という名回答。

多様な意見が登場。3回目もの授業となると、これまで静かだったクラスに活発な雰囲気が徐々にあらわれ、意見をたかかわす場面も登場。この討論のあとに、「学校への提言」「こんな科目あったら」「発見」「感想」をポストイットに書いて討論。科目のところでは「農業科」「一芸科」「問題処理科」なども登場。

5限では、私が板書すると、討論がとだえ、急に静かになる。私をもっと討論をつづけてと要請したのにもかかわらずにである。教師の板書中は静かにするという習慣が、これまでの学校生活のなかで徹底されてきたんだ、ということのみなさんで発見。授業で熱い討論する習慣がこれまでととても少ない受講生のみなさんが、熱い討論へとゆっくと進んでいる。

5限には、今回「もぐり」登場。多様な意見の登場と交流を期待する。この授業では「もぐり」歓迎である。とくに、多世代、多職業、多所属の人歓迎。

6限は、小人数で、なごやかに進行。それでも、個性的なメンバーばかりでおもしろい。

## 仕事 ジェンダー

2007年10月26日

25日の授業では、インテリア・塗装業、朝食づくり、兵士、家庭科教員、菊づくり、産婦人科医、宗教家といった仕事、現実に行っている女性と男性の比率、男性・女性のいずれが適性と考えるのか、ということで、受講生各自が表に並べたあとで、討論した。

受講生自身の経験や考えが多様な語られた。10名内外だが、多様な意見が交流され、なるほどと思わせられる発言が続いた。朝食づくり、家庭科教員などは、父親の朝食づくりや男性家庭科教員の授業体験などもいくつも紹介され、盛り上がった。産婦人科医は、助産師との違いも話題になった。

私の印象だと、たとえば愛知県の大学で同じことをしたとして、それと比べると、ジェンダーバイアスはかなり低い受講生たちだった。夫婦共稼ぎの親のもとで育った受講生が多かったこともあろう。また、それが沖縄の特質なのかもしれない。

一つ気づいたことがある。こうしたことは社会的動向にかなり影響をうけていることだが、ひとりひとりが、自分はどうしようとしていくのか、たとえば結婚して家庭をつくる場合に、朝食づくりをどうしていくのか、という、自らの主体的かかわりのなかで、考えるという視点がまだまだだということである。社会的にはこうだろうからそれに従うという受身ではなく、自分ならこうしたいという主体的選択・創造をしてほしいということである。

意外に、社会的にモデルとされているものに引きづらて考えてしまうことがおおいのではなからうか。ジェンダーが社会的につくられたものであることを考えるとき、この視点は大切だと思う。

## 10年後の沖縄

2007年11月01日





写真は、この授業の目玉であるワークショッププラン作成のために、各グループが関心マップをポスターにして発表した際に出てきた一つのグループのもの。「子どもの未来」にかかわって、絵で表現したという。なかなかおもしろいが、解説が必要。記事へのコメントで書いてもらうことにした。

今年各グループは、環境問題、健康問題、宇宙・地球・自己などといった、なかなか興味深いテーマで、取り組みをスタートしている。期待している。

さて、今回の授業でのワークショップは、「10年後の沖縄 こ

んな沖縄であってほしい」をめぐっての討論。

「米軍基地が半分以下になってほしい」

「沖縄らしい地域産業が活発になり、若者の1/3がそこに就職するようになってほしい」

「モノレールが名護・糸満まで開通し、車社会からの脱皮がはじまってほしい」

ほか、サンゴ礁の復活、新しいタイプの観光の活発化、男性の平均寿命日本一の復活、平均県民所得が300万円以上、といった選択肢のなかから、一つを選んで、それらの間での討論である。

これをきっかけに、沖縄についてより新しい角度で、より深く考えるきっかけをつかむことをねらいにした討論である。

このワークショップは、何度かしているのだが、毎回、討論焦点が移動する。今回は、「地域産業」と「モノレール」が焦点になった。

受講生たちは、知っているようで、知らない沖縄のこと、また沖縄の将来のことについて、新しい発見を多くしたようだ。

最初のころは恥ずかしそうにしていた受講生たちも、毎回ほとんどの学生が発言するようになってきた。

## 学生たちによるワークショップづくりスタート

2007年12月14日

これまで私が作成しコーディネートしてきたワークショップをおこなってきたが、今回からは、学生たちがグループ活動のなかで作成したワークショップを、彼ら自身がコーディネートして行うワークショップを実施することになった。

領域は、病と健康、人間関係、多文化、環境、健康と癒し、未来、地球と多彩だ。

ワークショップのやり方も、学生らしく新鮮さ溢れる多彩なものとなった。

対照的な二人の人物絵をもとに、ふたつの4コママンガを書かせてから、それをもとに討論。

人間関係をめぐる多彩な場面を、クジであたった人によるロールプレイによって、発見創造。

床にX軸Y軸の線を引き、その平面のなかの該当する位置、自分の健康生活をめぐる考え・行動を置かせるもの。

クジであたった身体の部位になりきって表現し、それを他の人にあてさせ、さらにその部位に有効な食品を考えさせる。

いずれも、アイスブレーキングと本題ワークショップを組み合わせたものだった。

いずれもワークショップづくり初体験としては、合格点をはるかに越えるできばえだった。この後、それをさらにいいものにするために第2回目に挑むことになりそうだ。その際に、ワークショップのねらいをしぼって、活動の焦点をさらに

わかりやすく鮮明なものにしていくことがのぞまれる。

## 学生のワークショップづくりすごい 2007年12月21日

20日の授業は、13日に引き続いて、学生たちがつくったワークショップの実施だった。ワークショップづくり体験が積み重ねられていくためか、だんだんすごいワークショップがつくられてくる。1月に入ると、各グループとも第二バージョンになるので、さらにすごいのができそうだ。

20日のなかで印象的なのは、「地球と人間」のワークショップだ。テーマのイメージをふくらませるアイスブレイキングの後、大きなボール紙が一人ひとりに渡され、用意されているハサミとカラーペン、クレヨンを使用し

て、「地球をつくってください」という活動。参加者の一人となった私は大変苦戦したが、参加者全員が実に多様な地球をつくった。花籠のなかに多様な人々を花になぞらえて美しく満載しているもの、いくつかの「わか」で囲まれ、そのなかにボール紙が自在な形で入っているもの。など、参加者をうならせる名作が続々登場。



そして、制作したものに、「地球」というテーマで各自がお話を語る。その後、同じ作品をもとに「人間」というテーマでお話を語る。このふたつのお話のなかに実に多様な意味が創造的に語られる。

作成中も終了後も感嘆の声が続く。

## 4年間の沖縄国際大学の授業終える 2008年01月26日

24日の教職総合演習は、最後の授業。自己評価・相互評価、懇親会で終了。

2004年から引き受けてきた授業をひとまず終えることになった。特別活動研究、特別活動演習、教職総合演習で、合計10数クラス、数百名の学生を教えた。随分な数になるので、その後再会する人も結構多い。

学生の印象というと、第一に、まじめ、第二に熱心、ということである。

15年くらい前まで、沖縄で教えたいたころと比べると、学生の雰囲気も随分変わった。「粗削りの熱心さ」が、「スタイルのいい熱心さ」にかわった感じがする。それは受身的傾向が強まったということでもある。今、話題の沖縄の学力問題にひきつけていうと、与えられたものを熱心にやる点ではすごいが、自分からどんどん切り開いていくという点では、大きな課題があるということである。

その点も考えて、授業では、学生自身の積極的なかわりを重視した。教職総合演習での、学生によるワークショップづくりもそうである。そうした積極的創造的な活動に不慣れで、最初「抵抗」を感じる学生が多かったが、それだけに、逆に、創造的活動の楽しさを知ると、どんだんのってきた、という実感である。今期の授業でいうと、長くワークショップをしてきた私が驚くほど創造的なワークショップが学生たちによってつくられてきた。

こんな積極的創造的な取り組みを今後もさらに発展していってくださることを期待している。

# 授業についてのエッセイ

## 私の学生との接し方の変化物語

2013年3~4月

### 1. 鬼の浅野から、仏の浅野、そして仙人の浅野へ

大学教師になって満41年が終わった。最初のころの数期間は、文字通り「鬼の浅野」だったし、鬼の要素は、その後の10年ぐらいは続いたが、徐々に「仏の浅野」に移って行った。

受講生に対する要求水準は高いし、評価も厳しく、不可を取る学生も多い。挽回するために、レポートを何度も修正加筆させたりした。私の授業を取れば忙しくなり、他の科目の単位を落とすことが多いともいわれた。

少しは、授業の進め方、学生への対し方の工夫ができるようになると、「仏」に移り始めた。単位取得が危なくて留年しそうな学生が、私のゼミを選択することも出始めた。困ったら、私のところに相談に来る学生も増え始めた。

長い移行期間をくぐりぬけた後、大学教師生活10数年たったころ、「鬼の浅野」説は消えていった。

その後20年がたった8年ほど前、ある学生が私のイメージは「仙人」だと言った。当時白いあごひげを伸ばしていたことも、その一因だろう。でも、私の授業の進め方、学生への対し方も、「仙人」風になってきた。授業での存在感も「霞を食べる仙人」風になってきて、「仏は終わり」になってしまった。

そこで、「仙人の浅野」式を書き出していこう。

授業で、「怒らない、腹を立てない」。「怒れない、腹を立てられない」というのが、実のところだ。だから、学生を「叱らない」。これまた「叱れない」ないのが、実のところだ。

かといって、学生への要求水準を下げたとか、ということ、そういうわけではない。異なるアプローチをするようになっただけのことだ。

たとえば、学生が課題をやってこない時に、「叱らない」し「注意をしない」。困って、「困った顔はする」が。やってこない学生には、別のチャンスを用意してある。授業の進行に困らないような段取りを作っておく。たとえば、やってこないことがありうることを予想し、授業の別の展開を用意しておく。

あるいは、課題を複数用意しておいて、学生が選択して課題ができるように、多様な選択肢を用意しておくことも多い。

歳を取ると、「怒る、腹が立つ」のは、私の精神衛生上、とても悪い。無論、「困ったなあ」「まずいなあ」という事はある、結構ある、というか、日常的にあるといったほうがよいだろう。それを、「怒り」「腹立ち」「叱る」という方向に向けなくて、「やり方を変えてみよう」「さらにチャンスを与えよう」ということにしている。

いい方を変えると、「困った事」をした受講生の「責任」を問題にしたり、彼/彼女を追求したりはしないのだ。追求すると逃げるが、追求しないと、当人が何とかしなくてはと動きだすことも多い。

### 2. 多様な学生に関心をもつ仙人スタイル

今回は、「まあいいや」「いろいろあるね」「テーゲー精神」「良い加減にする」を大切にする、である。

こう書くと、「いい加減」な授業をしていると受け取られるかもしれない。しかし、私自身がすることは、いい加減にしない。学生に対して、「良い加減にする」である。

自分の設定した枠組み・基準を、学生に徹底して順守することを、教師が求めるのとは正反対である。学生たちは、大



学入学前に、学校システムの流れに合わせることを徹底して求められ、それができないものから、順に振り落とされていく。『落ちこぼされていく』。同じことを大学教師がやれば、学生は「またか」ということになる。振り落とされ、落ちこぼされていくなかで、「個性」「自己主張」「自己尊重」を失わされてきたというのが、大半の学生の特徴と言っていいかもしれない。だから、大学授業にそれほど期待していない。そして、受身になり、自分の考え・疑問・課題を授業にぶつけてくることをしなくなる。そこに、大学教師が悩む「居眠り・私語」の大量発生を生む基盤が生まれる。また、学生は「問題意識がない」とよくいわれるが、その問題意識未熟状況が広がる。

そうした学生の実事を受け止め、認めることから、授業は出発するしかない。優等生は、「仮面」をかぶって、枠組み・基準に合わせようとする。だが、どれだけ本心なのか、主体的なのかを疑ってみる必要がある。

「鬼の時代」の私は、私流ではあるが、そうした枠組み・基準に学生が乗ることを厳しく求めてきた。しかし、現実には、そこからはみ出るものが大量に出てくる。それに対して、若いエネルギーで、彼らを枠・基準に誘導しようとしてきた。そのために、恥ずかしいほどの失敗を繰り返してきた。

「仏時代」になってくると、学生を枠になんとか入れると言うよりも、学生の多様な状況を見出しそれに寄り添おうとすることに比重がかかる。枠に入れる事の無理さ加減がわかるようになる。その際に、私自身の考えを我慢して抑えると言うよりも、それを「保留する」という感じになる。

「仙人時代」になると、「保留する」から、学生の多様さに「関心をもつ」ようになる。だからと言って、学生のことがよく分かるようになったというわけではない。世代・キャリアなど多くの面で、私と共通しないところをたくさん持つ現在の学生たちだから、なおさらそうだ。「分からないから関心をもつ」のだ。そういう姿勢をもって学生と接すると、学生の方も私に対して「変な先生だな」といって興味を持ってくれるようだ。加えて、学生に「自分を出してもいいんだ」という安心感を与えるようだ。「何を言ってもいい、何をしてもいい」という気分になるらしい。だからといって、限度を超えた無茶をするわけでもなく、「加減」を測りながら、自分を出しているようだ。

学生に関心を持つという「仙人」姿勢だと、学生に接する授業が楽しくなり、長続きする。

### 3. ほめる

私が、大学教師になって半年後から今に至るまで一貫しているのは、「学生が活躍する授業をつくる」ことだ。最初の半年間は、旧来のレクチャー中心スタイルでやり、大失敗したことはこれまで何度となく書いてきた。

しかし、「学生が活躍する授業をつくる」を基本にしながらも、そのやり方は「鬼→仏→仙人」と変化してきた。

「仏→仙人」の時期に大切にしたことの一つは、学生を「ほめる」ことだった。「鬼」の時代は、「きちんと要求して譲らない」ということを前面に出していたから、「鬼」に見えただろう。「きちんと要求する」ことは、「仏→仙人」時代も変わらないが、「ほめる」ことを前面に出した点が異なる。

「ほめる」といっても、「歯が浮くような」ほめ方ではなく、具体的な事実をもとにしてほめる。たとえば、「〇〇ということがよかったね」といういい方だ。仮に学生当人が上手くやれなかったと思う時でも、「みんなの前でやったことが立派だね。初体験だから、やりきったこと自体が大いに自信になるよね。しかも、みんなより率先してやった事が凄いね」などとほめる。

そして、次の具体的な行動ステップを明示して、期待を表明する。「今回は、皆の前でやれたから、次は、聞き手の眼を見ながら話すようにしたら、もっとうまくいくよ。」などと語る。

33年ぐらい前のエピソード。私は、体育の先生たちとともに、渡嘉敷島で、遠泳を含めた水泳の指導に加わっていた。各クラスで、なかなか泳げない学生を何人か引き受けて指導することが多かった。その日も、息継ぎができず、5メートルが精いっぱいの子に、息継ぎを指導していた。



一回できた直後、「今度は、2回連続に挑戦しようね。」と語りかけたら、うまくいったから、「もう一回やってみて」といって、そのまま続けた。この調子で、「すごいね。せっかくだからもう少しやってみるかい」といった具合に、泳いでいる学生相手に何十回となく語りかけていったら、その学生は、ついに500メートルも泳いでしまった。その間、足を一度もつけていない。プールでなく海なので、手もついていない。完璧におよぎきったのだ。

当人だけでなく、私も大感動。息つきが初めてでき泳げるようになった途端に500メートル泳いだなんて、私の経験・見聞では、それ以前もそれ以後もない。その学生は、その後教師になり、もう30年間も続けている。

初心者指導ですごい実績のあるドル平泳法指導のお陰、そして当人のしっかりした姿勢、これに私の「ほめ言葉」が合体したものだ。

いまでも、こんな風にやっている。学生にとっての関心事項である成績評価についていうと、最初の授業で、学生がなにをすれば、どのレベルの成績を取れるかの基準をわかりやすく明確に提示し、希望の成績を取るためには、何をすればよいのかを鮮明にしている。それは、獲得したポイントを積み上げて希望成績ランクをゲットするというものだ。たとえば、優をとるには16ポイントが必要で、その機会は、毎回の授業でのミニメモ、何回かの随意レポート、学生企画の提出・実施などがある、という具合だ。

足し算、つまりプラス思考なのだ。「これがダメ。これがない」というマイナス思考を避ける。「鬼」時代には、叱咤激励して学生を発奮させることを中心にやってきたが、それは随分昔の話になってしまった。「仙人」の今は、学生を楽しく「のせる」ことばかりだ。

こんなスタイルだから、学生たちはほぼ希望通りの成績を獲得する段階に至る。なかには「可でもなんでも、単位がとれさえすればいい」といって、「可」で満足する学生もいることはいる。

#### 4. 学生たちに頼む 学生と目線の高さを同じにする

私が担当する授業はどんな科目でも、学生が活躍するようにすることを主眼としている。しかも、できる限り、学生たち自身が企画し運営するようになることを目指し、15回の授業の後半の8~9回目ごろから、そうした様相を見せていく。

そのようにするために、ゼミなどを除くと、どうしても私と数十人の受講生と1対1関係で始まるしかない段階を早目に終わらせて、学生相互の人間関係を築き、学生たちが企画運営する方向へともっていくことを、授業前半で、私が精力を注ぐ最大の課題の一つにする。

余談だが、学生が中心になる授業展開は、学生たちが一緒に活動・討論しながらやって行くことになるので、居眠りや私語がなくなるという副次効果がある。欠席や遅刻も減る。

こういう運びにもっていくために、私がしていること。「鬼の浅野」時代は、学生に「自分たちでやりなさい」と強い要請を出していた。それも「鬼」に見えた理由の一つかもしれない。

「仏」や「仙人」になってくると、「自分たちでやったらいいのではないですか。面白いですよ。」とか「自分たちでやってくれと、うれしいなあ」というトーンで語る。「気楽に頼む」「提案する」スタイルだ。「絶対に引き受けてくれ」といういい方よりも、「やってくれたらいいなあ」という優柔不断ないい方をする。

その際、引き受けてやってくれる可能性を100%だとは考えてはいない。「ダメモト」で頼む感じだ。しかし、こういう言い方をすると、引き受けることへ敷居が低くなるらしく、イエスの確率が高くなる。強く頼むとかえって敷居が高くなり、引き受ける学生が減る事が多い。

そして、頼む場合、「上から目線」ではなく、目線を学生と同じ高さにする。頼む時以外も含めて私の授業全体が、そんな感じだ。授業中、私が話す際、学生が椅子に座っている時は、私も椅子に座っていることが多いし、学生が立って活

動する時は、私も立っている。学生と同じ高さなのだ。各グループの討論や作業に出向く時も、グループの中に入り込んで座ることが多い。

授業中、学生に助けを求める事も多い。学生に甘えるといつてもよいかもしれない。「今の言葉、私にはわからない。教えて」と隣の学生に聞くことはいつもだ。「これを皆に配るのは大変だなあ。誰か助けて」「私は老人性難聴なので、今の発言が聴きとれないけど」などとつぶやいたりする。すると、学生たちが助け舟を出してくれたり、大きな声で話してくれたりする。「鬼」の時代なら、「若いんだから、大きな声で話さない」といって、かえって委縮させたりもした。

また、学生からの提案が出てくるように仕向ける。出た提案は、小さいものでも喜び実現しようとする。グループ討論などの時に、学生の間を回っていると、つぶやきでの提案が結構出てくる。そんな時、「〇〇さんが、〜〜という面白い提案をささやいていたけど、やってみたいなあ。やってみる？」という風に持ちかける。

「仙人」になってくると、若い学生に合わせて話したり動いたりすると、へばってくる。そんな時、学生の若いエネルギーをだしてもらおうと、とても助かるし、その方が学生自身の成長つながることが多い。

## 講義式から学生たちの知的共同創造活動へと授業の転換

2013年05月13日

※この記事は、「大学改革の方向」というタイトルの連載のなかの4回目に書いたもの。それまでの記事内容をひきついで書いている

これまで述べてきた、1) 若者の居場所としての大学、2) 学生の社会性を伸ばすこと、3) 職業に結びついた力量の増大、4) 知的創造力を育むこと、といったことを展開していくうえで必要な大学教育原理、大学教育実践の創造について述べていこう。

4つの各々に対応した教育活動の展開が求められるが、それらを統合した実践展開が有効だし、効率的でもある。そこで、これまでの大学教育の中心を占めてきた講義形態を大胆に転換することが一つの焦点となろう。教員が話し、学生が聴きノートに取ることを軸にする一方向的教育形態という大学教育原理を転換するのだ。

授業の基本を、学生たちの知的共同創造活動を教員が促進することへと転換させることは、私の長期にわたる提案である。それによって、上記の4つを並行的に推進していく。まず、知識の収集記憶よりも知識の創造に比重を移し、知識創造活動を学生たち自身が展開するという形で、4) が展開される。3) は、職業に関わる実技・制作、調査探求活動を含みこんだ知的創造活動として、授業を展開する。学生の共同活動として展開するのだから、2) の学生の社会性育成に直結することはわかりやすいことだろう。そうした展開のなかで、授業そのものが、1) の学生の居場所的機能を担い始めていこう。

こうした形での授業展開は、私自身が、これまでの41年間のなかの9割以上の期間に模索創造してきたことだ。その自覚がなかった、ないしは薄かったのは、大学教員なりたての時期だけだ。

一つ付け加えておこう。研究中心型の大学教員には、そうした実践展開をするには、授業を研究型ワークショップとして展開する発想が有効だろう。

たとえば、教室に中央広場をつくり、床に模造紙など巨大な紙をおき、教師のコーディネートによって、その授業で追求しているテーマにもとづいて、受講生たちが自ら書いたポストイットを貼りつけていく。貼られたポストイットを再構成してマップ化あるいは体系化し、それらに基づいて討論を展開する。その際に、床ではなくホワイトボードや壁面を活

用するのよ。

必要に応じて、教師がコメントし、追求深化方向を示唆し、ポストイット記入→マップ化体系化→討論を繰り返していく展開である。受講生が多ければ、5~10人単位のそうしたグループを教室内に、5~20ほど作り、グループ内での研究討論を展開し、時にはグループ間討論、全体討論をはさみこみ、教員が研究討論を促進深化させるコメントをはさみこんでいく。

そうしたスタイルを毎時間積み重ね、課外学習で、必要な情報知識を収集取得する作業を、受講生が個別にあるいは共同で展開する形を取る。これまでの講義形態でレクチャしていたことの多くを、配布資料にし、それらを学生の必修課外学習として展開させる。

こんなイメージだ。これらは、私自身がしてきたことだ。具体例は、「大学の授業を変える 16 章」「一挙公開授業のワザ」などで繰り返し紹介してきた。

他にも、多様なありようがあろうが、こうした模索創造によって、従来の講義形態を大転換することが、今日に大学教育改革に不可欠だと言えよう。

## おじいちゃん先生=私を助ける、やさしく勢いのいい学生たち

2013年6月26日

今年の前半は、4つの大学・専門学校で4クラス担当しているが、学生の新しい動向を感じる。

- ・受講生がワークショップをする企画に立候補するグループが多い。
- ・その企画実施への準備がかなり用意周到
- ・10分間ぐらいの「教師役」を頼むと、引かずにやりぬく学生が多い。
- ・元気過ぎる学生が多く、「騒音」レベルに近くなると、受講生のなかから「シーツ」コールが起きる。
- ・音楽・美術などの表現力が多様で豊か。リレーお絵かきや集団表現で発揮。写真は琉球大学授業で受講生が描いた10年後の島の子どもたちの絵と物語。こんな作品が続出。
- ・クラスの人間関係が深まるスピードが速い。

まとめていうと、学生の勢いがよく、初対面の学生であっても人間関係を深めるのが速く、自分たちでなにかしようという動きを生み出すのも速い。

なぜかな、と考える。こうした動きを、私は促進し歓迎してはいるが、それが想定以上なのだ。時に受講生パワーに私が圧倒されることさえある。すると、受講生の中から、私を助ける動きが生まれる。

鬼→仏→仙人と変化してきた私だが、どうも最近は「おじいちゃん」と見られているようだ。「仏」や「仙人」時代にはまだあった「迫力」が、最近では減ってきて、迫力不足を受講生が補うようになってきたという感じか。

学生との年齢の開きは、親子よりはおじいちゃんと孫の距離に近くなってきたので、学生は私を「おじいちゃん」感覚でつきあっているのだろうか。

この他にも、学生たちの特徴をいくつかあげてみよう。

テレビ文化の影響が、学生時代まで続いている。テレビ視聴番組傾向が学生と全く異なる私は、そういう話題になると、手も足もでない。

携帯文化ではなく、スマホ文化へと移行している。パソコン文化は思ったほどには浸透していない。

受験文化の浸透度は、すごい。

リアルな人間関係の中で作りだされた経験が、同世代の仲間の文化の枠内に収まりがちで、多様な体験と言う点ではかなり少ない。だから、私のような授業にはびっくりであり、私の授業の中で出会う多様な文化は、ほとんど初体験のようだ。それでも、というか、それだからこそ、勢いのある動きが生まれるのだろうか。たとえば、沖縄出身学生でも、沖縄話題には新鮮さを感じているようだ。

こんな学生の変化に対応して、私の授業も時々刻々変化していく。

## 沖縄県立芸術大学大学院で「芸術表現総合比較研究Ⅰ」の授業担当

### 我ながら驚き

2013年08月09日

5月芸大の先生から非常勤講師依頼の電話。当初は、教職科目だろうと推理し、過剰状態なので、「お断り」を軸に応答するつもりだった。

ところがだ。今年大学院の博士課程に進学した院生が、私の「沖縄県の教育史」を読んだことをきっかけに、授業を受けたいと申し出たそう。大学院の授業では、院生の希望を生かす方向で設定するということらしい。

なにも私が音楽の授業をするわけでもなく、音楽研究の指導するわけでもない。その院生が沖縄音楽教育史を専攻しているの、彼女に必要な沖縄教育史を語りながら、一緒に研究をすすめるという流れでいいのだ、という話を聞く。受講希望の院生とも話す。修士論文を戦前沖縄の学校音楽史で書いたとのことだ。それをベースにして、近世と近代をつなげた沖縄音楽教育史をしたいとのことだ。

そういうことなら、ということで受諾した。

これに類したことは、10年以上前、中京大学大学院であった。体育・健康教育分野で文系型の博論を目指す院生がいて、理系を中心にする教員構成の中で、担当できることが限られるので、私が「健康科学セミナー」のうちの1クラスを担当することになった。3年余り続けたが、数人~10人ぐらいの院生を対象に、この分野の研究課題について、研究ワークショップ風に展開した事が、私にとっても印象深い体験になっている。

私にとって、院生であるにしても、異分野の人と研究討論していくことは、やりがいがあるだけでなく、新しい発見・創造があって、とても有意義だし、それだけに楽しいことだ。

ということで、9月から月一回8時間の授業を開講することになった。この分野に関心を持って言う方にも、参加してもらい、授業を充実させようという話も進んでいる。

ということで、授業準備を始めた。まずは、久しぶりに、私が書いた「沖縄県の教育史」を読み直し、その後の研究進展にあわせて補足発展させるべきポイントを調べている。これについては、このブログで連載しようかな、と思っている。

後期は、このほかに、琉球大学で「特別活動の研究」を、金曜日4、5限、10~11月に担当することになった。4コマの授業をフーフーいいつつ担当した前期と比べて、落ち着いて進められる点でよかった。そして今、次年度前期が4コマにならないように、いろいろとお願いしている最中だ。



## 大学授業での、身体交流・人間関係・レクチャー

2012年09月13日

生活指導学会での討論のなかで、大学授業を事例に興味深い討論が飛び出した。

「何人もの現場実践者に、すぐれた事例をオムニバス型で話してもらった。しかし、受講生が提出したレポートを読むと、自分たちが実践を作り出すよりも、誰か立派な人に取り組んでもらえばいいのではないか、という、結果的に逆の体制順応的メッセージを受け取ってしまったようだ。」という発言があった。

レクチャー型で授業を展開すると、おうおうにしてそういう結果をうみやすい。知識を知識としてのみ受け取り、自らが実践主体としてかかわるうえでの知恵として受け取る姿勢ができていない、とも言えそうだ。

そうした事態を避けるためには、レクチャーをする以前に、受講生相互が人間関係を構成することも重要だ、という指摘もあった。だが、その人間関係は、既存の2, 3人の人間関係の中に閉じこもりがちで、新たな人間関係を構築することに拒否的になるという発言もあった。

そこには、過去の人間関係形成体験の希薄さが反映していそうだ。2, 3人の既存の人間関係だけで閉鎖的になるのだ。私自身も、この2~3年実見することが多い。彼らが成長していくうえで、そうした状況を越える体験が必要だろう。そのためには、多分に受講生相互の身体接触・感情交流的なものを含んだワークショップが一つの有効なアプローチだろう。

以上をまとめると、大学での授業実践には、次のような流れの構想が求められる。

- 1) 多分に身体接触・感情交流的なものを含んだワークショップでの展開。
- 2) グループ活動などをおした人間関係形成
- 3) 事例的体験的のものがイメージされる形でのレクチャー、ないしは共同調査共同作業的活動

ここ数年の私の大学での授業実践を、こうした角度から読み解くことができるかもしれない。

## 前期の授業終了 学生から発見する特徴 後期の授業準備へ

2012年8月8日

今年の前期授業が終わった。

3クラス担当したが、学校の性格も科目も異なって多様な学生とつきあったことで見えてくることが多い。いくつかメモしよう。

1年→2年→3年という学年変化に加えて、社会人経験者もいるので、その経験による差異も大きい。さらに、同じクラスに、異世代がいる場合とそうでない場合との違いもある。

異世代がいる場合、異世代間の相互関係がどれだけできているかにもよる。当然ながら、10歳前後、あるいはそれ以上の開きがあると、文化・人間関係の持ち方が異なるので、最初から異世代としての付き合いを前提にする。それでも、異世代と教室をともにすることで、上の世代は、下の世代のエネルギーに刺激を受け、下の世代は、上の世代の落ち着きと経験から学ぶ。

こういう関係が、私は好きだ。こういう異世代共在のクラスがもっともっとあってよいと思う。残念ながら、日本では、30代以上が学校で学ぶ条件がとても狭い。しかし、日本的雇用が限定されてくるなかで、この方向が広がるだろうが、長時間労働と経済的支援の弱さゆえに、希望者のほとんどが潜在化している状況にある。

話はとんだが、若い世代、とくに、18歳、19歳の学生は、高校生の雰囲気を残している。特に、受験専門校で長時

間学習を管理されてきて、多様な経験が乏しい学生の場合は、「今が青春」「今が高校生」といった雰囲気になる。たとえば、以前なら高校時代ないしは中学時代に特有と思われた、数人以下の「密着」型の仲良し関係に執着するタイプが激増している。高校時代に、そうした関係の蓄積が少ないために、同じ高校の卒業者どうしが、大学入学後、仲間を組む例がとて多い。

授業で、グループを作る場合に、そうした既存の人間関係に執着し、新しいメンバーと組むと、俄然沈黙がちになるタイプが目立つ。20歳前後になっても、そうした3人前後の関係への執着が強く、5人以上というのはほとんど見ない。

また、20人ぐらいを越すと、全体場で発言することに強い抵抗を示し、討論がストップすることがしばしばだ。このあたりは、いろいろと対処してきたが、年々難しくなっているから、アプローチを変えなくてはならないかもしれない。

こうした背景には、対人関係経験の乏しさが多分にある。だからといって、よく言われるメール等をとおしてのバーチャルな関係がどれほどあるのだろうか。以前よりは多いのだろうが、この世代の大多数が参加しているとは思えない。こうした世界に関わるものとそうでないものとの開きが大きいように思える。

ついでにだが、インターネットの日常使用率は高くない。日常レポート提出で、インターネット利用を設定すると、その開きが見える。年々、利用率が高まるかと言うとそうでもない。ケータイ利用は、圧倒的に多いが。

もう一つ。おしゃれな学生が増えている。愛知の大学にいるころから気付いたことだが、高校時代に「おしゃれ」が許されない環境にあったものが、大学入学後、猛然と試行錯誤的ではあるが「おしゃれ」に飛び込む例が、結構多い。入学前から経験の蓄積があった学生は、自分に合ったおしゃれ表現ができているが、入学後開始した学生は、本当に試行錯誤的だ。なかには、アルバイト収入の大半を注ぎ込む者もある。また、おしゃれには「大人」的なものと、少年少女的なものがある。後者は失われた少年少女時代を取り戻すかの如きだ。10代半ばから後半にかけて、豊かな経験が希薄になっているのかもしれない。

大学授業と言う意味で、本題に戻そう。私は、大学授業を、学術・文化の伝達だけでなく、共同創造の場として位置付け、教師と学生との世代間協働として、授業の場を構想している。特に、私が担当する、生き方・人生・人間関係・学びにかかわる科目では、なおさらそうした色彩が濃くなる。

そのために、学生が企画し実践する場を多様に設ける。最初の戸惑いはすさまじい。自分たちでできると喜ぶ光景などは、もう10年、いや20年、いやさらに30年以上前の話になったのだろうか。自分たちでやるの？、と嫌そうな顔さえ見せる。

それでも、時間をかけていくと、これは面白い、もっとその機会を増やしてほしい、と言うのが、授業全体の終了後の声に出てきた。

いずれにしても、高校大学で、学生自身が授業の企画実施にかかわる機会が皆無に近いことを反映している。近年、学生参加の授業が強調されているのだが、現実には全くそうっていないのだ。

こんなことを振り返りながら、今、後期授業の準備をしている。後期は総計4コマ担当だから、大変だ。これだけの数を担当するのは9年ぶりだ。体調管理に気をつけるためにも、早目に準備をスタートさせた。ある科目では、先日の最後の授業で、継続して受講する学生と授業プランを練った。これも、学生に授業参加だろう。久しぶりに授業で合宿をしようかな、と考えてもいる。

## 「ためぐち」で話す学生 気になる学生への対応

2011年07月19日

先日、教職員にとって「気になる学生」への対応についての学習会があったので、参加してみた。この種の会に参加する経験は初めてだ。

たとえば、こんな話が出る。

教職員に「ためぐち」で話す学生。彼らに『公式の場』での話し方を教える必要がある。

この話は、すでに20年、30年前からある。かつては、そうした学生に『公式の場』での話し方を教えれば、それだけで、ほぼ片付いた。というのは、『公式の場』での話し方を習っていなかっただけのことだから。私も、30年前に、電話の応対ができない学生のやり方の指導をし、容易に成果を上げることができた。

現在は、問題の質が異なる。

「ためぐち」でも話せない学生が増えた。彼らには、「ためぐち」でも話せば、それを一步前進と考えた方がよい。自分なりのコミュニケーションを取れるようになるなかで、『公式の場』と「ためぐちの場」を使い分けるようにしていくのだ。それが二歩目だ。

もう一つのタイプとして、『公式の場』の会話はできるが、そこに自分の意思・気持ちが入らない話しかできない若者が増えている問題である。いい方を変えると、マニュアル的話し方、ビジネス的会話ができるのにとどまっているのだ。

自分の意思・気持ちを『公式の場』のスタイルで主張できることをどう教えるのか。

高校までも大学でも、教師側が、こうしたことを教えていないのではないか。その前提である、自分の意思・考えを持ち、それを伝えることを促進する教育をしていないのではないか。

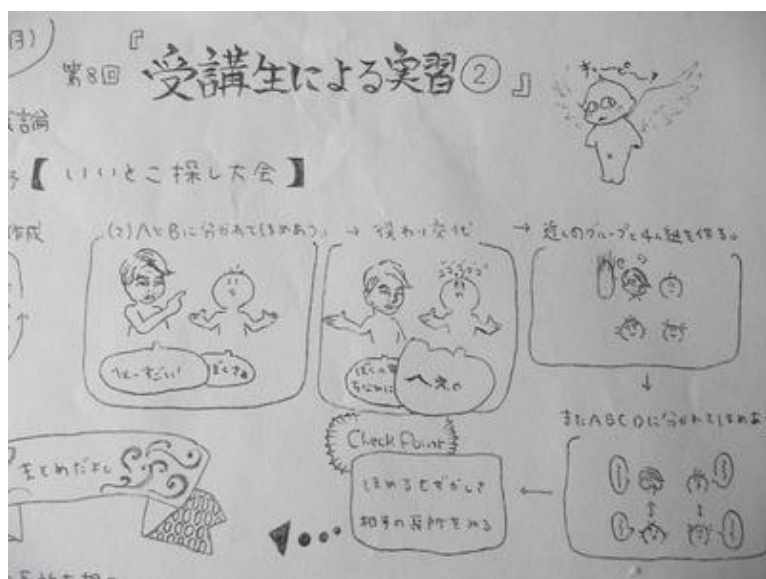
世界的動向と全く異なって、高校大学で、教師が話し生徒学生は聞くだけという授業が圧倒的に多いことの『成果』であろう。

ここを組み替える必要がある。

もう一つ、「ためぐち」にしろ『公式の場』にしろ、コミュニケーションの前提となる人間関係が広がっていないことがある。数人の人間関係でコミュニケーションをする機会さえ少ない若者がごく普通に存在するようになっている。

教職員は、そういう場をどれだけ準備できるかが大きなポイントになるが、意外に無関心である。一方通行型授業は、そうした人間関係を促進しないどころか、むしろ抑制さえする。

だから、「気になる学生」の話は、『気になる教職員』の話なのだ。相手の学生にそうした力をつけるより、そうした力がつかないように教育しながら、相手の学生に「気になる話し方」だと言っているのは、どうにもならないのである。



答、授業の補足、注目したい学生レポート、学生への連絡事項などを書くものだ。私自身も発行したことがあった。とくに、1990年代半ばから2000年代初めまでは、よく発行した。

毎回オリジナルなものを発行するには結構、労力と時間が必要だ。ある程度、パターンが決まってくると、前年発行したものに、その時々が必要に応じて加筆する形をとった。レクチャーのレジメを掲載することもあった。

熱心な教師は、毎回の授業で、結構な枚数のプリントを配布する。教師の期待に応えない学生が、それを読まず、どこかに散乱させることさえある。

だから、私は、学生の整理に役立てようと、規格を統一して、連番を打って配布した。また、単位取得に必要なレポート課題・作成要領・提出要領なども含めて、授業に必要な情報をすべて、授業通信にまとめた。そして、授業通信が、それなしにはやっていけない「必読文献」になるように工夫した。

授業通信発刊は、非常勤講師だと、常時その大学にいるわけではないので、発行しにくい面がある。集中講義だとほぼ無理だ。

そこで、非常勤になってからは、開始日に半年分のプリントをすべてまとめて作成し配布することになっている。そこに必要な情報をすべて盛り込むのだ。40年近くも大学教師をしていると、こういうことが可能になってくる。それでも新規科目を担当する時は、受講生とのからみ合いに予測不可能な面があるので、途中で追加作成発行がでてくるのは当然だ。

最近の、私の授業は、ほぼすべてがワークショップ形式なので、授業過程で、受講生が出してくるものに貴重なものが大変多い。

## 学生授業アイデア

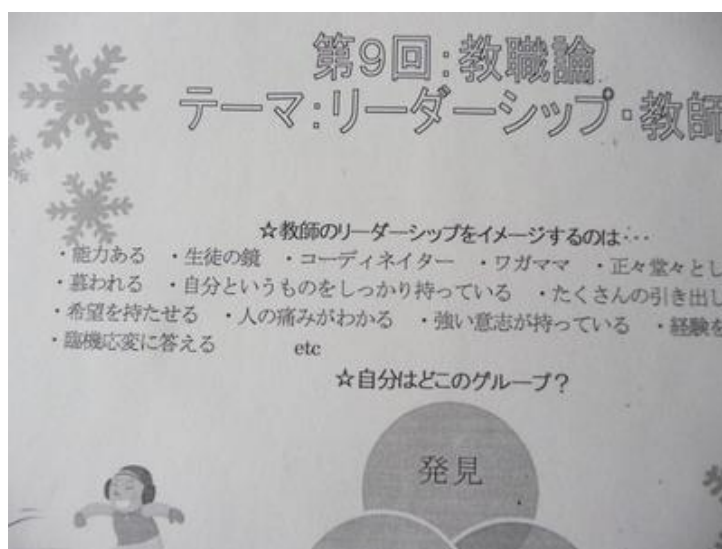
2011年4～5月

### 1、学生発行の授業通信

学生と教職員で一緒につくる授業についての、私なりのアイデアを連載していくことにする。

熱心な教員が、授業通信・授業便りを発行することは、1980年代からあった。1970年代ごろから全国に広がった小中学校の学級通信の大学授業版だといえるかもしれない。

授業中のエピソード、学生からの質問への回





そこで、毎回の授業に、複数の担当者を置き、その学生たちが、授業のまとめをA4、1枚程度にまとめ、次回の授業に配布する。

記事内容の実際例を紹介しよう。

「振り返り」時間の際に、受講生から出された「発見」「感想」などのポストイットの記入事項を。マップにして書きだす。

授業の流れ・レクチャーの項目など

グループ単位に作成したものを、一覧やマップにして掲載

授業風景を写真に取って掲載

など

最初は、慣れないが、だんだんすごい新聞が作られるようになってくる。担当者は、輪番で行う場合と、立候補で行う場合とがある。私の授業評価は、ポイント積み重ね方式だが、授業通信発行はポイントゲットのチャンスなので、立候補者は多い。多すぎる時は、未経験者優先にしている。

## 2. 30分以上を討論・共同作業に

授業を学生参加型にする入り口として、まずは、90分すべてを教師がレクチャーするのではなく、少なくとも30分以上を、学生たちによる討論、または共同作業の時間にすることからはじめてはどうだろう。

20年ほど前の私は、授業前に90分の時間配分を用紙に書いて、授業の流れを作っていた。

※ 詳しくは、「大学の授業を変える16章」（大月書店1994年）をご覧ください。

その際、「レクチャー」「討論」「共同作業」という分類をしていた。そして、討論なら、そのテーマと討論形態、共同作業なら、作業内容と準備用具をメモしておく。

当時から、30分といわず60分ぐらいは討論と共同作業の時間にし、1つないしは2つの討論と共同作業の中味を設定することに授業準備の最大のエネルギーを用意した。今では、さらに多く、70~80分を討論と共同作業にしている。

こんな風にすると、学生参加型の授業が無理なく自然にできていく。

こうした経験のない人が、最初から本格的にするのは難しいかもしれない。そこで、討論か共同作業を一つだけ、20~30分かけて行うことから始めてはどうだろうか。その討論・共同作業の準備・まとめとしてレクチャーを用意するのだ。

ともかく、やってみるしかない。

## 3. 教員と学生の委員会で授業運営

学生のなかの希望者、または選出された者と、教員で授業運営委員会を作り、授業の企画と運営を行うというものだ。無論、いろいろなタイプがある。

沖縄大学では、2、3年前、文部科学省のGP予算をとって、「障がい原論」という科目で行っている。私は直接かかわ

ったわけではないが、すごく盛り上がった報告を聞いている。アシスタントもついて、企画進行を盛り上げたようだ。

ゲストを読んで、話を聞き、討論するなど、多様な授業企画が実施された。ゲスト候補を学生が中心になって選定し、折衝も行ったようだ。

世話役の教員もいろいろと大変かもしれないが、やりがいがあり、教育効果も高い授業のようだ。

私は、だいぶ以前に、授業ごとに受講生会を作って、運営したことがある。教職科目で、学級経営を学ぶ事を中心にした科目であったので、学級経営の実演のようなものであった。1泊2日で合宿をし、そこで[行事]を創造実施するということをしばしばやった。実際に小中学校教師になって、おおいに役立ったと言われたこともある。

受講生会会長には、なかなかの実力者がなっていた。早世したプロサーファーの飯島夏樹君もその一人だった。

このスタイルの授業は、私にとっても思い出が多い。

教師がまずは企画し、学生に持ちかけて始めることが多いので、担当教師は大変だが、いったん流れができると、学生主体でどんどん進んでいくので、教師の負担はそれほどでもない。学生の気持ちやアイデアがでてくるのだ、それが豊かさを作り出すことが多い。

そして、毎年開かれるようになると、前年までの実績を継承する形になるので、年々さらに楽しい展開になっていくことが多い。

#### 4. 学生が現場で実践する授業科目

10年近く前、ある国立の商業系学部で出会った科目例を紹介しよう。

確か中小企業論というような科目名だと記憶しているが、いくつかの実際の経営現場に学生が数カ月以上長期に、継続的に出かけ、経営者とも話し合いながら、その企業に対して提案をするという科目だった。提案は、商品開発などで、経営者が実際に活用できるかどうか、学生の成績評価にもつながるといったものであった。大学の授業時間では、学生がレポートをして、討論することを中心に進んでいく。教員は経営者とのかかわりをもちながら、その授業を進めるのだ。

それに類したものとして、実業高校で、シャッター通り化した商店街を活性化させるために、高校生が商品を作り販売することを軸に進める科目は、いまではあちこちで行われている。

私が二十数年前に、毎年開講していた科目例を紹介しよう。自治体の企画で、保育所や児童館などを、日曜日に地域開放するとりくみがあったが、遊びに来る子どもたちを適切に管理しながら、一緒に遊び、盛り上げていく役目を果たすことを中心に進めた。また、学童クラブをアシストする取り組みも含めた。

学生たちには大変な人気で、最終的には、一年生が中心になって、子どもがかかわり、二年生はその一年生を指導し、三年生はその二年生を指導するというしくみにし、学年によって異なる科目の受講ということにした。

教育実習とは異なる効果を果たす取り組みだった。子どもたちが、[楽しくなければ遊びにこない]、という現実の中で、学生たちは工夫に工夫を重ね、豊かな取り組みを生み出していった。その取り組みは、一人一人の学生が実践記録を書くという形でまとめた。その記録集は、何十冊にもなるが、いまでも私は保存している。

他にも、現場教師が中心になって、夏休みに開かれる子ども学校に学生たちが参加するという形態を取ったこともある。

こうした取り組みは、最近ではボランティアという形で、「サービス・ラーニング」という名称をつけたりして行う大学もあるようだが、私のように、授業科目として設定するのもいいと考える。いろいろなやり方があるように思う。

## 5. 学生アシスタントの活用1

教員は忙しくて、授業に思うように時間を割けないという愚痴を聞く。それに加えて、学生参加となるとさらに時間が必要で、それに取り組む余裕など、とてもない、という声も聞く。

しかし、私自身の体験からいうと、時間が足りないからなおのこと学生参加を進め、学生の自己教育力、相互教育力を引き出すことに力を入れるのだ。時間があるから、授業改善、学生参加をすすめるのではなく、逆に、時間がたらないからこそ、それらに取り組む。

私がとても忙しかった時期は、実は、学生・大学院生アシスタントの活用にもっとも熱心な時だった。90年代半ばごろから、大学院生をTA（ティーチングアシスタント）として活用することへの予算がついた。皆さんが余り活用しない中、私はどんどん活用した。大学院生をTAとして採用するのは、将来大学教員になる修行の意味も込められている。その通りだと思う。だが、それだけではない。教員以上に活躍する面がある。

中京大学では、体育学部を中心に100人内外の教職必修科目で、TAを使うことが多かった。体育学部というのは不思議なもので、教員より先輩の「権威」が高い。宿題点検をTAがすると、効果てきめんなのである。と同時、グループ作業課題に取り組む時に、相談タイムを設定すると、私よりTAにアポイントメント希望が殺到する。

体調を崩していた1990年代後半から2003年ごろまで、高熱のため出勤できないことがしばしばあった。しかし、TAが対応してくれた。だから、休講をしなくて済んだ。そのTAは現在大学教員で活躍している。

実は、それ以前から、1980年代初めより1990年代半ばまで、予算措置が行われる以前から、私の個人的支出で、3、4年生の先輩学生、卒業生などを中心に活用していた。研究等必要な時間確保のために不可欠だと思っていたからだ。

ではその活用方法を、私の経験したことを、他の方がしていることで聞いた話も混ぜて紹介していこう。

1) 普通のやりかた。実務的管理的なことをTAにしてもらう。プリント配布。出欠チェック。課題のチェック。グループ編成の際の補助。機器の設定、機器操作の補助。

2) レクチャー以外、たとえば討論や共同作業過程のグループ活動のサポート。

大規模授業の際に、教員がレクチャーとグループ活動について提起したあと、それを受けて、クラスを2~3教室に分割して、TAがグループ活動を進行することもある。実験などでは、そういう形態がよく取られる。

それとは別に、私の場合、たとえば200人以上の受講生を、最初から3分割して、70~80人クラスにして、教員のレクチャーとグループ活動指示——学生の共同作業——共同作業のプレゼンテーションと討論、という三つのサイクルを、順にまわしていくやり方をとったことがある。TAが、2~3名いれば、こうしたスタイルを取ることができる。

3) 討論過程で、受講生が気付きにくい視点の提示。特定の事項についての報告。

いずれのやり方でも、教員とTAとの事前事後の協議・連絡が欠かせない。TAが、その科目の受講経験があると、とてもよい。私の場合は、必ずそうしてきた。

## 6. 学生アシスタントの活用2

大学院生にしても先輩学生にしても、私が積極的に活用してきたのは、私自身の必要もあるが、受講生に対しても、教育効果が大変高いものだし、さらにアシスタント自身の成長に大いに貢献するからだ。

教育効果ということでは、一人で教えるよりも多数で教える方が、受講生一人当たりの教える人数の比率がいいということだけでなく、前にも述べたが、受講生により近いアシスタントのもつ教育力があるからだ。また、多様なものを

持つ複数のアシスタントがかかわることで、より多様な世界を提供できるということもある。

4節の記事で紹介した、現場での授業をした生活指導演習では、当初のころは、私が直接指導する場面が多かったが、2、3年たつと、先輩学生の指導が中心になり、そのうち、私はたんなる調整的役割へとおさまっていった。学生相互の教育力の偉大さをまさに感じた科目だった。

アシスタント自身の成長ということでは、前にも述べたように、現在大学教員をしているアシスタントがいる。さらに教職科目でアシスタントを大量活用したのであるが、彼らのほとんどが現在小中高校教員になって活躍している。

私の授業のTAをすることを通して、ワークショップやワークショップ型授業の進め方を体得していったと思われる。私は、数年間、中京大学大学院体育学研究科博士課程のゼミを担当していたが、修士課程院生を含めて、学部授業のTAを務めることを並行させている受講生が何人もいた。かれらの何人かは、ワークショップ型授業にかかわる修士論文を書いた。そういえば、いろいろなところで活用されている「紙飛行機討論」のアイデア提出者もその一人だ。

大学授業ではないが、10年以上前、愛知県のたくさんの看護学校の全教員を対象に、授業づくりの一日ワークショップをしたことがある。参加者400名で、名古屋市公会堂の大ホールでした。開始そうそうゲーム形式で、10人に一人のアシスタントを選び、昼休みに10分余りの超短期アシスタント「養成講座」をして、午後の実際の授業づくりワークショップを進行させたことがあった。作業・討論をすすめるための段取りを鮮明にしていけば、こういう形もありうるのだ。

ところで、200年前、近代学校生成時代に、教師が数人のアシスタントに教え、そのアシスタントが担当受講生に教えるというチュートリアルシステムが採用されたことがあった。それは効率よく大量の生徒を教えるという狙いであったが、その発想を、効率以上の意味を含めて、アレンジして、現代に採用することがありえるかもしれない。

そのことを、先日の愛知教育大学のワークショップで話題にしたら、すでに経験が御有りなのか、どなたかが、関心を強く持たれた。100人以上、中には数百人規模の授業がひんぱんにある大学では、こうしたことを視野に入れざるを得ない現実だろう。大学教育予算での公的資金比率の極度に低い日本では、こうしたことの工夫を現実にするべきをえない。

## 7. 学生参加と成績評価1

成績評価というと、もっぱら教員の仕事であり、学生が関与するものではない、という考え方が普通だ。

しかし、果たして成績評価への学生参加などあり得ない、と言えるのだろうか。

評価というのは、学習の進み具合、成長具合などを、学習者自身がつかんで、次にはどんな学習をどんな風にしたらよいか、をはっきりさせるため、という目的がまずある。

授業のように、指導者（教師）がいて、その指導のもとで、学習が進められる場合には、どの程度教えられたか、教え方はどうだったのか、をふりかえり、次に、どんなことをどんなにして教えればよいか、をはっきりさせるため、という目的がある。近年、広がっているように受講生側が、教師の教え方を評価する「授業アンケート」というものもある。

その他にもある。受講生が協同して学習する場合、学生たちが自分たちを評価するとか、学生たちが相互を評価し合う、というものもある。

最近では、学ぶ、教えるという当事者ではない第三者による評価というもの、見かける。

こんな多様な評価が、並行するのが現実だ。



授業展開場面に絞って考えてみても、多様な評価場面が登場する。たとえば、90分の授業を振り返って、受講生にまとめのメモ・コメントを書かせることは、よく用いられる。その際に、「～の点で、よく頑張った」「～の点がまだよくのみ込めない」などと、学生当人の自己評価が書かれることが多い。「～の説明が良く分かった（わからなかった）」と教師の評価が出てくることもある。あるいは、「～の～という発言は大変役立った」というように、他の受講生への評価も出てくる。

出席を取る形を、こうしたものを書かせることで代用するのは、生産的なことだと思う。私などは、それを日常点として、最後の成績評価に加算する方式を取ることが多い。

このやり方のコツは、A6ぐらいの小さな紙に、全部で20～50文字程度ぐらいに絞って、5分ぐらいで、書かせることだ。「自由に書かせる」というのがよさそうだが、かえって大変だ。絞る方が、キチンと書いてくれる。

こうした評価がオープンにされる時、とくに肯定的評価がなされる時、授業は前進的トーンに包まれやすい。私は、こういう事を多用している。

評価は、○×だとか、数字だとかいうイメージが濃厚な人がいるが、それは便宜上使われるのであって、本来は文章のものなのだ。本当いえば、半年の授業の終了時に、一行でも文章による評価があるといい。

そして、それらは、教師→学生という評価だけでなく、学生→教師、学生→学生、といった多様なものであればなおのこと良い。

それでも、数字による評価、優良可不可という段階による評価を避けて通れない現実がある。これについては次回に書く。

## 8. 最終成績評価 成績評価2

文章や口頭での日常評価を多様に駆使すると言っても、授業終了時点で、(S) ABCD とか (秀) 優良可不可とかの単位認定につながる成績評価を提出することを避けるわけにはいかない。大学によっては、100点満点で何点かという数字で出すことを求めるところもある。

最近では、シラバスで予め評価方法を明示することが多くなってきたとはいえ、学生にとっては、学期終了後に受け取る通知をみて、始めて評価結果が分かることが大半だ。

私は、かつてそうしたことを最高裁判決システムだ、と書いたことがある。一審、二審があればまだよいが、最初から最高裁判決になってしまう。15回授業を終えた後、一週間の試験期間でおこなうテストでその評価のほとんどが決まるシステムが圧倒的に多い。

テストに代えて、レポートも多い。それも、最高裁判決型が多い。学期終了後の成績報告書で始めて結果を知ることが普通だ。かつて、私はレポートを評価付けて返却して、それに不満足な学生は再提出OKとか、個人面接で出来具合と加筆の仕方を教え、何度でも再提出OKというスタイルを取ったことがある。

テストやレポートのほかに、教員によっては、日常点を加味することもある。

現在の私は、これらとは、かなり異なる。まずポイント制を取る。学生自身が、どれだけポイントを取れたかどうか、授業の途中でも分かるシステムである。

現在、担当している沖縄大学問題発見演習Iで、最初の授業の時に配布したプリント集で、受講生に提示したものを紹

介しよう。

~~~~~

#### 成績評価の基準・方法

以下に示す1)~3)について、授業のなかで獲得したポイントの総計によって行う。

$D < 12 \leq C < 14 \leq B < 16 \leq A < 18 \leq S$

- |                   |      |                       |
|-------------------|------|-----------------------|
| 1) 個人シート (毎回提出)   | 別紙使用 | 各1ポイント                |
| 2) 共同創造シート        | 別紙使用 | 各3~12ポイントを、グループ内で配分する |
| 3) 特別レポート (希望者のみ) |      | 各0~5ポイント              |

~~~~~

科目によってバリエーションはあるが、おおよそこういうスタイルだ。

説明を加えよう。

・100点満点システムではない。この科目の場合、1ポイントが5点のイメージだが、20ポイント=100点以上獲得する学生が、現実にいる。大学・科目によっては、点数表記を求められることがあるが、その際は、100点と記入する。学生たちが奮闘して、半数以上が20ポイント=100点以上になることはしばしばである。そのように私も努力する。

・シートなど、ポイントをゲットしたものは翌週には返却するので、学生は自分のポイントを把握しながら、希望評価に到達するまでガンバル。無論、それ以上に奮闘する学生が多い。

・この問題発見演習は、大学入門科目であり、性格上、学生の学習意欲・姿勢・力量をつけるための工夫をしながら、何とか、単位取得段階まで達するような対応が求められる。そこで、3)のような臨機応変型を組み込む。

また、2)3)もそうだが、学生からの積極的参加をポイント制の中に組み込むことも多い。連載の中で紹介した、学生による授業のまとめや授業新聞等もそうである。

(さらに続く)

## 9. 学生参加と成績評価3

成績評価への学生参加ということであると、学生にレポート課題を立てさせる、ということをしたことがある。今年の1月のブログ記事に、その実例を載せた。

授業をうけていれば、どういうことを、この授業では求めているのか、受講生自身が分かってくる。そう考えれば、そうしたやり方は当然ありうる。

また、最後の授業の際に、学生自身の自己評価をかかせたり、他の受講生に対する評価を書かせる形をとり、それもポイントに加えることを、近年の授業ではしている。それは、授業を通しての自己成長、さらに他者成長を評価できる、ということ自体が、私の授業における成長課題だからである。

ところで、評価対象には、1) 授業に関わる知識量、2) 授業に関わる学生の活動・実績、3) 学生の力量などがある。テスト形式では1)を把握しやすいが、既存の基準で、既存の知識の習得量をはかることにとどまりやすい。

しかし、大学では1)は前提であり、必要条件であるが、十分条件では決していない。むしろ、2)3)を求める。その意味では2)3)をはかるにはどうしたらいいか、その方式の開発研究が必要だ。それらは学生自身も掌握していることが多いし、学生自身が掌握できるように教育する必要がある。その意味では、学生参加型評価というのは、重要なアプローチになるろう。

いずれにしても、教師が行う評価は、学生自身の自己評価を高める機能をもっていることを踏まえ、学生の学習意欲を高める方向で活用したい。

## 10. いろいろなアイデア

愛知教育大学のワークショップでは、以上紹介してきたもののほかにも、いくつかアイデアを出した。詳しい説明は省いて、紹介していこう。これで連載は閉じる。

1) 90分の授業時間のうち、30分を学生企画タイムとする。企画運営担当チームを募集し、任せる。その際、企画案を出させて、それを教員が審査するのもいいし、学生の投票で決めるのもよいだろう。

2) 授業時間の半ばに、前半の授業に基づいて、小さな用紙に超ミニレポートを書かせるとともに、後半の進行への提案や質問を書かせたりして、それを参照して後半の授業を進める。

3) 紙飛行機討論 これについては、いろいろなところで書いたので、詳細はそれらを参照してください。

4) 授業にゲストを招いて、話してもらったり、担当教員との対話を進めたり、受講生からのインタビュー・質問で進めたりする。そのゲスト・スピーカーを学生が提案し、学生の投票で決め、学生が交渉する。

以上述べてきたように、授業への学生参加は、発想の幅を広げ、いろいろな教員・学生と会話をする中で、どんどんアイデアが生まれてくる。

まずは、やれることからやってみることだ。

## マニュアルへの対応が上手い学生 下手な教員 マニュアルの功罪

2011年5月7日

最近の学生は、マニュアルへの対応が上手い。授業でも、教材をマニュアル化すると、流れに乗りやすく、課題を順調にこなす学生が多い。だから、難しく複雑な内容でも、マニュアル化して提示して作業をさせると対応できる学生が多い。

学生たちがくぐってきた受験学習の大半が、マニュアル化した教材を使用しているから、当然のことだ。

それに対して、授業をする教員の方は、マニュアルへの対応が下手な人が多い。コンピュータなどの機器使用の際にも、マニュアルを使う人は少ない。とくに60歳以上はそうだ。だから、授業内容を、多少なりともマニュアル化して提示すること自体に、抵抗感を持つ人も多い。

ここに学生と教員間のギャップがある。

だが、教員自身も、何らかのマニュアル化をしながら、研究・教育活動を行ってきたのだから、マニュアル化は避けら

れない。問題の焦点は、マニュアルをどのように製作し使用するかにあると思う。

その焦点の一つは、すべてをマニュアル化して、マニュアル通りにすれば、すべてうまくいく、という発想を持つかどうかである。受験学習などには、その傾向が強い。そのため「できる」学生、入試偏差値の高い学生には、大学授業をマニュアル的に進めることを切望しがちだ。問題意識が弱い学生、卒論が書けない学生には、そうしたタイプが多い。

だが、元々研究者である大学教員は、マニュアル化はするが、すべてをそうはしない。マニュアル化を活用しつつも、自分たちで創造することを重視するし、創造が本体であると考えている。

私がこれまで繰り返し使ってきた表現でいうと、ルールを活用することは必要だが、ルールだけではどうにもならない。物語をつくるように創造していくことが不可欠だ。

ということで、私は、授業では、教材などをマニュアル化をして学生に提示するが、それは学生自身の物語創造につながるものにしていくのだ。私のワークショップ型授業は、そうしたスタイルを取っている。

## 私の授業参加原点

2011年04月16日

私の体験。高校生のころ、ほとんど先生の説明で進行する授業があった。生徒たちのほとんどは「どうせ教科書を読めばわかることだし、テストの時は教科書を覚えればいい」というので、居眠りの時間にしていて。先生の話は、子守歌に絶好でもあった。

そういうのはよくない、何とかしようという機運が生徒の中に出てきた。その機運を代弁して、クラス役員をしていた私が、担当の先生に説明だけの授業を変えてほしいと発言した。

すると、その先生は、「どんな授業か」と逆に尋ねた。そこで私は「生徒が調べてきたことを発表するとか」と答えた。すると先生は「浅野君、実際にやってみてくれ」と発言。そこで私が授業する羽目になった。それが私の初授業だった。

実際、大学では、居眠り学生が大半を占める授業によく出会う。とくに大規模授業の3限目がすごい。私も参観していた公開授業で、8割もが居眠りしていたことがある。30年ぐらい前だと、そういう学生は欠席しており、出席率20%の授業などがあったが、近年では出席はする。その「かわり」といってはなんだが、居眠りだ。

こうした事態に、教師に責任があるのか学生に責任があるのか、と議論してはキリがない。そんな授業を変え、学生が興味をもち、いろいろと関わっていく授業、教師側からいえば、学生がどんどん食いついてくる授業、学生たちが自主的に関わってくる授業をどう作るか。

こんなことに、授業への学生参加の原点があるように思うが、いかがだろうか。

## うまい講義の仕方

2011年04月19日

大学教員は、多くの場合、研究者にアイデンティティをもち、教育者にアイデンティティをもつことが少ないようです。近年では、そういうわけにはいなくなっているようですが。



随分前のことですが、教員養成学部に在学していたが、小中学校教員になる自信がなくて、教えなくてもいい研究者になるということで、大学教員になったという人に会ったことがありました。

研究者は、どうしても、大学での授業よりも、学会などでの研究発表のほうを優先することになります。そこで、大学での授業を、学会での研究発表スタイルとする人が結構います。そこでは、「発表テーマに関心を持ち、発表を聞くだけで、研究的思考ができる人」が集まります。

しかし、大学授業ではそういうわけにはいきません。「講義内容＝発表テーマに関心を持ち、講義＝発表を聞くだけで、研究的思考ができる人」を育てることが課題だからです。

だから、説明だけで授業ができるわけではないのです。

それでも、説明型の授業をうまくやるにはどうしたらよいか、という相談を、大学教員から受けることがあります。その時は、こんなアイデアを紹介したりします。

1) 一人の学生の目を見て話す。その目を何人かに移していく。それは、受講生の反応を確かめながら話すということです。その際、教員養成系学生には、「うなずき症候群」が多いことを勘定に入れておく必要があります。

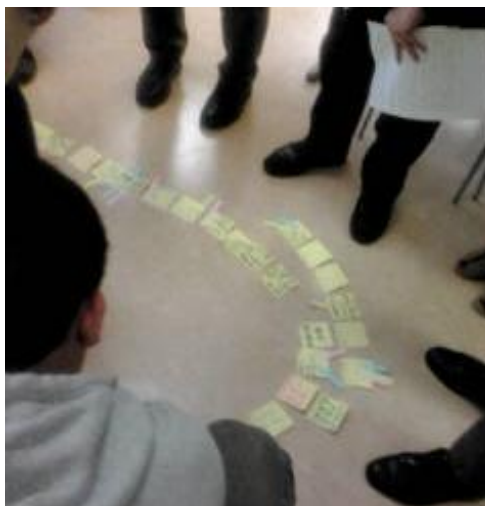
2) その際、できれば、応答を多くする。一方向型ではなく、双方向型というスタイルです。しかしそれが、大半の受講生には、圧迫感を与えることも、勘定に入れておく必要があります。そこで、教師対受講生という双方向だけでなく、受講生相互間の多方向型を工夫することが求められます。

3) 説明に、実物提示などの小道具を使うこと。言葉の説明だけで講義をうまくやるのは、「超名人」です。ビデオやパワーポイント使用も有効ですが、15分以上流しっぱなしにすると、居眠り促進剤になることも勘定に入れておく必要があります。

4) 教室の机椅子配置、教師がいる位置を工夫すること。

5) 話し方は・・・

※こう書く私ですが、1972年に初めて大学授業をした時は、ひどいものでした。学生の目を見る代わりに、講義ノート約13ページを見ながら、話まくる授業をやって、学生に大変な迷惑をかけました。後で録音したテープを聞いて、「これでは学生が分かるわけがないな」と気づいて、授業工夫にはまりこみ、今年で40年目の授業年を迎えました。



## 学生と教職員がいっしょに大学授業改善を考える

2011年04月23～25日

4月20日午後、愛知教育大学での授業改善を考えるワークショップにかかわった。

主催は、『あいこね』という面白い組織だ。

『あいこね』が作成したチラシ文によると、

『あいこね』とは、「もともと、大学教員・職員で大学教育改善活動を行っていたものを、「学生」を中心に一緒に展開していこう!というのが、私たちの活動の趣旨です。」というもので、正式には『愛知教育大学FD組織あいこね』という名前だ。

昨年8月の愛知教育大学の学報には、こう書かれている。

「学生・教職員による教育改善のためのボランティア委員会「愛教大CoNandE委員会」、通称「あいこね委員会」（中略）同委員会は、大学教育・教員養成開発センターが支援し、よりよい教育環境や授業づくりに興味・関心のある学生や教職員がボランティアとして参加する組織。本学の憲章に謳われた「教育改善への学生参画の保障」に基づき、大学の義務であるFD活動に対して、構成員である個々の学生、職員、教員の立場から具体的に提案するのが目的。ちなみに「愛教大CoNandE委員会」とは、Committee of Non-obligation and Edutainmentの略で、「義務でなく、教育を楽しむための委員会」という意味。

（中略）同委員会では今後、定期的な会合を開き、大学教育の改善に関する提案をしていく予定で、当面は学外の学生・職員参画型のFD研修に参加し、本学のFDのあり方を研究する。

8月28（土）、29日（日）に立命館大学、9月4（土）、5日（日）に岡山大学での「FDサミット」にメンバーを派遣。さらに、委員会主催で、学内外の講師を招いた講演会・シンポジウムの開催、大学改善のための提言や実践活動も行うという。」

日本の大学が、授業改善つまりFDが本格化してから10年余りだったが、ほとんど教員の間での取り組みだった。それに学生も加わり、教員・職員と学生と一緒に組んで組織をつくって取り組む例に直接出会うのは、初めてだ。

実際、あいこねスタッフには、教員・職員・学生がおり、会議を頻繁に開いて、色々な取り組みをしている。4月の新入生オリエンテーションでも、入会勧誘が行われ、すでに1年生スタッフも誕生している。その学生が、○○サークルに入りたかったが、愛知教育大学にはないので、「あいこね」に入った、と語っていた。

最初は教員肝いりでスタートしたようだが、実際に、教員・職員・学生が対等に、いっしょになって活動している雰囲気が十二分に伝わってきた。教員にも、役職上、スタッフになった方ばかりではなく、ボランティアでスタッフになっている人もおられた。

20日のワークショップの運営も、まさにそうだった。教員・職員・学生がまったく違和感なしにワークショップに参加している様子に、好感がもてた。学生の方が、むしろ積極的だったかもしれない。

ワークショップの中では、教員・職員・学生が一緒になって、授業を中心とする教育改善のアイデアがたくさんでてきた。

当日の前半のなかで一番興味深い話は、学生からたくさん出された授業への率直な注文だ。なかなかよく考えられている。さすが「あいこね」メンバーたちだ。

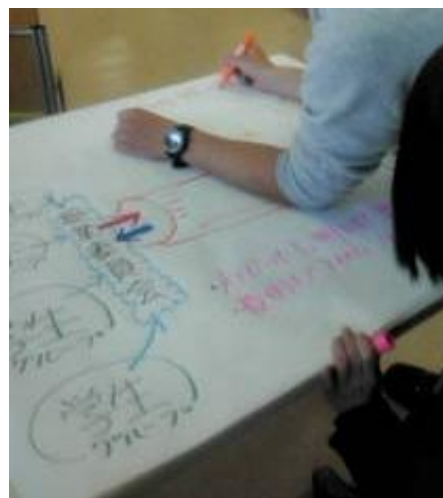
ワークショップは実質2時間行った。楽しいアイスブレーキングからスタートして、最終的には、「学生と教職員で作る授業」の数十のアイデア、そのなかから4つを選んでの具体化プランという形になった。

その流れを紹介しておこう。

アイスブレーキング 本題への導入を兼ねて。

「授業開始時、教室に入る時間の順」で一列に並ぶ。

5分前—3分前—1分前—ベルと同じ時—2分後—5分後、といった具合だ。結構、学生と教員が入り乱れる。



1, 2, 3, 4, 1, 2, ...と、番号をかける。

同じ番号の人で4つのグループを作る。

グループの中で、「古今東西 『授業』に関する単語」をして、たくさんの単語を出していく

「こんな授業をつくりたい」というテーマで、グループのなかで順々に文章を言って、物語をつくっていく。

「〇〇という科目で、学生参加ができるように」 → 「色紙で、教材用の▽▽を一人一人につくるように言うと」 → 「■■さんが、カラーマジックを使ってもいいですか」という → 「それはいいアイデアだね。じゃあ・・・」 →

他に一つ二つの活動をして、頭がやわらかくなり、いろいろな発想も生まれやすくなり、人間関係もできてきたころを見計らって、「学生と教職員で作る授業のアイデアをたくさん出し合おう」という、本題の活動に入る。

呼び水として、私のアイデアを紹介していく。

何枚でもOKということでしたら、一人当たり2~8枚ほど出された。

会場中央の床面に並べる。

そこで『人気投票』をする。付箋紙を一人当たり3~4枚配り、気に入ったアイデアに貼り付けていく。

投票上位8枚ほどを、床面のあちこちに置く。

そのなかで、もっとも気に入ったアイデアの一つを選び、その場所に行き、集まった3~5名でチームを作り、具体化作戦を考える。(写真参照)

## 私の授業は「一番、頭を使って体を使う」という学生の声

2011年3月7日

授業が終わると、学生たちに、私の授業の仕方についての批評をお願いしている。

いろいろな類いのものが寄せられるが、最近いただいた一つがとても印象的だった。

まず、最初に「最近、ほめられる事って少なくなってきたような気がするので、ほめる授業やった方がいいと思います。」とあった。

授業で、ほめることをかなり意識的にやり始めたのは、20年近く前だ。日本の若者のセルフ・エスティームが低いということが話題になり始めたころだ。愛知にいたころだが、偏差値システムが「見事な」までに「完成」されている愛知だから、セルフ・エスティームが低く、「ほめる」ことが重要な意味があることは想定できた。

7年前から沖縄の大学でも再び教え始めたが、沖縄の若者たちのセルフ・エスティームも低くなっていることに気づいた。とくに受験システムにかかわってきた大学生にその特徴が見られた。高校までの教育で「褒められる」経験がとても少ない事を反映しているだろうと推理する。

さて、この学生は、私の授業について、こんな批評をしてくれた。

「先生の授業は私が今まで経験してきた授業の中で、一番頭を使って体をつかって自分で一生懸命考えた楽しい授業でした!!

今までの授業はほぼ受け身な内容ですが、先生の授業は自分から考えなくては成り立たない能動的な授業だったと思い

ます!!

だからその分エネルギーもいるし、少し大変だなと思う時もあったけど、学ぶ事は多かったし自分の為になりました。前に出る事にあまり抵抗がなくなったのはこの授業のおかげですね。ほんとに。」

私にとって、とてもうれしい批評だ。私のワークショップ型授業は、体を使うことに特徴があることは分かりやすく、「遊び感覚」の反応を受けることもある。それはそれでいいのだが、実は頭も大いに使うこと、「遊び風」の中で、頭を大いに使うことを指摘してくれた、この批評を嬉しく思う。

もう一つ、近年の学生が「褒められ経験」が少ないと同様に、「能動的に」授業にかかわる経験が大変少ない状況にあることを考えて、意識的に学生の能動的活動を取り入れている。「学生がつくる授業」「学生が作るワークショップ」などは、その典型だ。その点でも、コメントをもらえて嬉しい。

私が授業にかけた願いをいくつも見事に受けとめてくれて大変うれしい。

## 「人見知り」「人前で話すのが苦手」という学生たち

2011年2月23日

私の授業の最終日に、学生たちは自己評価・他者評価を書くわけだが、そこでもっとも多いパターンは、こういうものだ。

- 1) (自己評価文で) 私は、大勢の人前で話すことがとっても苦手だった。人見知りのせいかもしれないし、そういう体験がないためかもしれない。高校や大学の授業でそういうタイプの授業がなかったせいかもしれない。
- 2) (自己評価文で) 今回の授業で、私は、他の受講生の前で発表したり演技したり討論したりする体験をもった。最初は緊張したが、数を重ねて行くうちに少しずつ慣れてきて、なんとかできるようになったと思う。
- 3) (他者評価文で)、○○さん(自己評価文を書いた本人)が、人前で発表できるようになったと書いていますが、しっかりと上手にやっていました。自信をもっていると思います。今後磨きをかけて行って下さい。
- 4) (本人の最後のまとめの文で) 他者評価文で何人かが、私の発表や演技を褒めてくれました。自分ではうまくできていない、と思っていたのですが、他の人から良い評価をもらってとてもうれしい。これからも努力していきたい。

こういうパターンは数年前にもあったが、今年ほど多い年はない。受講生の半数以上が、このパターンを含んだ文を書くと言えるほどだ。今後はどうなるだろうか。

ところで、このパターンを書く人たちは、「私は人見知りの性格」と書くことが多い。「人見知り」の性格が半数以上もいては大変だ。私は、「性格」のせいではなく、そういう機会をもつことが少なかったのか、あるいはそういう機会でも前向きな評価を得られずに、そういう姿勢、力量を押しとどめられてきたのではないかと推理する。

それは、日本の学校教育特有の現象ではないか、沖縄の学校ではより一層そうではないのか、と危惧する。教師から生徒への一方的な授業が蔓延し、教師の話すこと・指示することをひたすらこなすことに、生徒が追いまかれるという学習スタイルがそのことを生み出したのではないかと、思う。

これからの社会では、こうしたありようを変えて行かなくては「人生おこし」は難しいし、「沖縄おこし」も難しいと



思う。教師側学校側も、高校大学ともにそのあたりを変えていく必要がある。

## 大学授業で人間関係を育てる

2011年2月21日

最近私が担当する科目は、非常勤講師をしている沖縄県立看護大学、沖縄大学、沖縄リハビリテーション福祉学院のいずれでも、1、2年生が対象だ。長い間、3、4年生を中心対象にした授業をしてきたので、私にとって、1、2年生との出会いは新鮮な印象であり、発見も多かった。

1、2年生というと、とくに1年生の場合、受講生相互の人間関係がそれほどできていない段階なので、その相互関係を育てながらの授業となる。授業での学生の成長は、教師である私から「与えるもの」も無論あるが、学生相互に「与えあうもの」が、かなりの比重を占めるというのが、私の考えだ。それは、一方向型授業から双方向型授業へというだけでなく、多方向型授業へと授業改善を推し進めようというものだ。ワークショップ型授業は、まさにそういうものだ。

また、担当する科目は教育関連科目であるが、教育の前提として、人間関係を育むことがあるので、学生相互関係を促進すること自体が、教育内容でもある。

沖縄大学で、次年度から新しく担当する問題発見演習も、そうした色彩を濃厚にもって進めることになる。また、次年度も担当する沖縄リハビリテーション福祉学院言語聴覚学科の「コミュニケーションと対人援助（実践教育学）」は、まさにそうした科目だ。

これらの科目では、授業時間のかなりを使って、コミュニケーションとか対人関係を実習的に学ぶ。その具体的な展開に即して、私からの説明、そして受講生個人の発見・学習、受講生討論が挿入されていく。

こんな授業に、学生たちは驚く。高校までの授業とまるで異なる実情があるからだ。それらは、教師が伝えることを生徒がそのまま受け取って覚えることがほとんどで、生徒相互の討論・協同作業がほとんどない。討論・協同作業があるとしても、「私語」の形になり、「授業妨害」として「取り締まられてしまう」。生徒から教師への質問もほとんどなく、まさに一方向型授業なのが、日本の高校、とくに受験専門校の実情だ。他の「先進国」では、今や「化石」となっている授業形態だ。

大学でも高校でも、こうした授業形態を改善していくことが大きな課題となっている。

そうした改善型の授業である私の授業に対して、受講生たちはほぼ初体験なので、驚くのは止むを得ないと思う。

## 学期末最後の私の授業でする自己評価・他者評価はドラマが多い

2011年02月20日

半期続いた大学の授業の最終日は、「自己評価他者評価」を学生たちに記入してもらうことが、ここ数年間の通常スタイルになっている。「試験期間」とされているので、多くの授業ではテストやレポートを課しているが、私の授業ではユニークなスタイルを取っている。

それは、授業開講当初に配布したプリント集の末尾に綴じて置いた、自己評価・他者評価記入用紙を記入するのだ。ま

ず、授業期間を通して学んだこと・成長したことなどを2~3ヶ条、この授業を通して得たことを今後どう生かし発展させていくかなどを2~3ヶ条、自分自身で記入する。

記入後、全員のを裏返してかさねていく。全員がそこから1枚をアットランダムにとる。取った用紙を書いた本人について、他者評価を記入する。本人との授業での出会い・見聞した本人の活動ぶり、そして最初に記入してある上記の自己評価文を参照して書くのだ。

書き終えたら、また全員分を裏返して重ね置く。そして、そこから再び1枚を取って、他者評価の2番目の欄に記入する。こうしたことを繰り返す。時間の都合もあるので、一人につき4~8人の他者が記入する。他者評価の記入が終わったら、自己評価を書いた本人に用紙を戻し、書かれた数人の他者評価を読んだうえで、本人が最後のまとめを記入する。

そして、その用紙をもって、私のところに来て、私もその用紙に書かれた文を読んだうえで、受講期間に受講生が獲得したポイントの集計を私と本人とで確認しあい、当初から明記してある基準値をもとに、ABCといった成績評価を確定する。

これが授業最終日である。この中で、他者評価記入と、それを本人が読む過程が一つのドラマになる。受講生が多いと、顔と名前が一致しない場合があるが、それでも、プロセスのなかで、「あの人のね」と分かり記入することもある。

評価というと、点数評価ばかりイメージしがちな中で、文章で書くということが意義深い。私からのアドバイスとしては、事実をあげながら書くこと、読んだ本人がやる気が高まるように書くことなどを言う。

そのなかで、他者がこんな風に自分を見ているんだということを知り、新たな発見・感動を得ることが多い。同じ学科・学年で日常的に出会っている人でも、ホンネで話した人は少ないのが現実のなか、「あの人は、こんな風に私を見てるんだ」「こんなところがダメだ、と思っていたのに、それをほめられてびっくりした」などと、「最後のまとめ」に書かれていることがしばしばだ。

## 学生が、テスト問題・レポート課題をつくる

2011年01月29日

学期末で、授業も終了に近づき、レポートの執筆課題を出す時期だ。

その時突然、思いついた。受講生に課題設定をしてもらおう、と。

私になぜ、これをいままでしてこなかったのかは不思議だ。もしかするとやったかもしれないが、記憶には残っていない。

教員は何かを教えるために授業をし、それがどの程度成果があがっているかどうかを調べるために、テストやレポートを課す。これを受講生の立場からいうと、自分たちがどの程度学べたかどうかを確認評価するために、テストを受けたり、レポートを書いたりする。それらに成績評価・単位取得が伴うというわけだ。

だったら、そのテスト問題やレポート課題を出題できるかどうか、ということも実は受講生がどの程度学べたかどうかの指標になる。だから、受講生が出題するのは、決しておかしいわけではない。教員は、その科目の授業を最終管理する教員としての最終責任を果たせばよいのであって、テスト・レポート課題まですべて自分でしなければならぬ、というわけではない。

ひるがえって思い起こすと、小中学校教師でも、そうしたことを試みている人がいる。

これまた授業における学生参加なのだ。

ということで、レポート課題募集を行った。

たくさんの案が集まった。私では思いつかないような素晴らしいものもある。一人の知恵よりたくさんの知恵だ。どれだけいい案が出るかどうか、わたしの授業の出来具合を反映しているのだろう。看護大学の2年生対象の「教育原論」での話だ。

紹介しよう。

- 1 私が一番好きなワークショップについて
- 2 自分が思う人付き合いのポイントとは？
- 3 今の子どもたちのライフスタイルについて
- 4 教育原論の授業を通して、自分自身が変わった事について
- 5 ワークショップを通して学んだこと、自分の成長したところ
- 6 教育原論の授業を通して学んだことを、今後の看護や日常生活にどう生かすか
- 7 この授業をどうして自分が学んだこと、成長したこと、考えさせられたことについて
- 8 教育原論の講義を通して学んだこと
- 9 授業を振り返って考える自分が提案する学校の授業
- 10 もし、浅野誠先生を看護の視点でアセスメントしたら・・・
- 11 一番笑った瞬間
- 12 私がするならこんな授業！ ～人間関係をどう育てるか
- 13 人と関わり学べること
- 14 印象に残る授業
- 15 沖縄における特徴的な授業としてどのようなことが考えられるか
- 16 自分でワークショップを作ろう
- 17 以下の公開ブログ(引用略)を読んで、  
「あなたがコミュニケーションをとるうえで普段心がけていることを体験談を踏まえて書きなさい」
- 18 教育原論の特徴やメリット・デメリット（あるなら）記述せよ
- 19 教育原論を受けての感想
- 20 私が養護教諭だったらこんな関わり方をする
- 21 人と関わる事の意味について考えたこと
- 22 これまで印象に残った授業
- 23 これまで出会った嫌いな教師または面白くない授業について
- 24 今までに出会ったよい先生、悪い先生 また自分が理想とする先生像について
- 25 いじめが発覚した後のいじめっことその家族の心理と関係、ケアを考える
- 26 ドラエもんはのび太の社会性や生活能力にどのような影響を与えたか
- 27 自身が受けた教育（親・親戚・先生だけからのでも可）で最も印象に残っているもの。またそれについての考察。

## 大学非常勤講師での担当科目と来年の授業計画

2010年12月15日

この時期、次年度の大学授業依頼が来る。大学によって、早いところ遅いところまちまちだが。沖縄の大学・専門学校は比較的ゆったりしたペースだ。私の最後の勤務先の中京大学では、10月に、非常勤講師の内諾を踏まえて計画が確定し、11月に入ったら正式依頼の運びだったから、かなり早い。

実のところ、ほぼ同じ時期に依頼があると、時間割設定などやりやすい。でも、学校事情が違うので、そうはいっておれない。同一科目・時間割の継続の場合は、それほど問題ではない。

体力上、週3コマを上限にして引き受けている。私は、その授業だけでなく、毎回の準備とまとめに同じくらいの時間を使う。また、授業が始まる4月、10月の各々半月以上前に、半年分の授業プランを作成する。それをプリントして、受講生に配布するものだ。

ということで、依頼の際には、早目を希望する。

現在、次年度の「りんかく」ができつつある。ほぼ確定するのは1月だろう。

2004年以降、アメラジアンスクール・イン・オキナワ校長の時を除くと、おおよそ週2~3コマをしてきた。いくつか集中講義形式もあったが。

琉球大学、沖縄国際大学、沖縄県立看護大学、沖縄リハビリテーション福祉学院、沖縄大学である。加えて、2005年までは、中京大学に隔週で出かけていた。

いろいろな大学で、いろいろな学生に教えるのは、大変面白い。専門分野、学習スタイル、学年・年齢等の差異があればあるほど面白い。学生相互だけでなく、私にとっても新鮮な出会い・発見があるからだ。

科目も多様な方がいい。この2、3年は、私のもともとの専門分野である生活指導関連科目は担当していない。それが楽しい。私にとって新鮮な体験になるからだ。

次年度からは、またもや新たな分野を担当することになりそうな気配だ。

余談だが、私が担当した「変わり科目」を並べよう。

「指導技術演習」（琉球大学）、「健康科学セミナー」（中京大学大学院）、「基礎ゼミ」（中京大学）、「対人援助とコミュニケーション」（沖縄リハビリテーション福祉学院）、「集団論」（沖縄キリスト教短期大学）、「社会科教育法」（沖縄大学）

担当した科目数を総計すると、30ぐらいになるのかな。

やってみたいな、と今思う科目を並べよう。「人生創造」「ワークショップ」「沖縄おこしと教育」「世界発見」「沖縄教育史」……

※ フルに担当した科目以外に、ゲストティーチャーを何回かした。琉球大学、沖縄県立芸術大学、沖縄大学など。受講生とはたった1、2回の出会いだが、これまた楽しい。

1、2時間の授業・ワークショップは、大学よりも小中高校でしてきたことが多い。最近で言うと、那覇西高校、伊江村立西小学校、沖縄工業高校定時制、玉城小学校、アメラジアンスクール・イン・オキナワなどだ。

## 成績評価を、100点満点方式以外でやってみてはどうですか

2010年12月07日



テストなど、学校での成績評価というと、ほとんどが100点満点方式だ。学校だけではない。自動車免許試験など、いろいろなところで行われている。100点ではなくて、10点、50点などもあるが、考え方は同じだ。

習得し使用できる知識やワザが、すでに存在していて、本来ならそれが全部できるという前提があつて、「満点」が設定され、そのうち、どれだけできているかを調べるという発想だ。だから全員満点が理想であるし、そうであるべきなのだ。

なかには、序列をだすために、わざと差が出るようにするものがある。そのために、間違いが出るようにし、平均点が50点とか、70点になるようにするテストもある。ほとんどの入試は、そうなっている。そうしたありように、なにか「汚さ」を感じないだろうか。人の間違いを推進しているような感じさえする。プラス思考ではないのだ。受験者は間違いを避けたいため、という気持ちが先行し、より良いものを追求したい、とはなりにくい。

大学授業で、私はテストをほとんどしない。でも成績評価はしなければならない。成績評価は、ほとんどの大学が100点評価法を採用している。優良可とかABCとかの方式をとる大学でも、数字では何点なのかを示すことを求める大学が多い。80点から100点は優ないしはAである、というように。

では、どうして120点をとる学生はいないのか、さらに160点をとる学生はいないのか、と尋ねると、絶句する人が多い。

レポート評価などでは、100点満点で付けられるものは減多にない。点数にかかわらず優良可不可といった評価する大学教師も多い。私のようにポイント制を取り、他の評価と合算する形式を取る例もある。ポイント1、ポイント3という具合だが、なかにはポイント7とかのものまででてる、という形である。

到達度目標という用語があるが、それは到達度に達していれば100点という発想だが、レポートの場合、一定水準に達したら、到達していると評価し、さらにそれを越えるものがあることはしばしばだ。だから仮に到達目標に達しているの、100点、それを越えているので140点ということがあつて不思議ではない。

こんなことを考えて、わたしの大学授業での評価は、積み上げ形式だ。事例をあげておこう。  
看護大学の教育原論の例だ。開講時点で受講生に明示する。

.....

- 1) 毎回のレポート 8回 各1ポイント (状況によっては、2や0もある)
- 2) 特別レポート 授業の流れのなかで、2~3回出します。提出するかどうかは、自分で判断して下さい。各0~5ポイント
- 3) 学生が行うワークショップ  
グループで取り組みます。担当したグループにまとめてつけます。配分は、寄与状態を考えて、グループ内で配分して下さい。グループで、3~15ポイント

以上のポイントの総計×7=総得点

$D < 60 \leq C < 70 \leq B < 80 \leq A$

.....

積み上げ形式でやると、100点以上がでてくるが、このやり方をすれば、80点以上はすべてAになるので問題は生じない。点数で成績表示を求める大学には、120点というような点数を提出すると、事務手続き上の問題が生じるので、100点と記入する。過半数の学生が100点だった時もある。

このやり方を取ると、学生が自分が希望する評価になるように「頑張る」という例が多い。単位さえ取ればいい、という学生は、その程度にやる。どうしても「優」を取りたい学生は、そのようにやる。

なお、3)は、共同制作の場合である。グループ内でのポイント配分が難しい。いろいろと試みてきたが、一緒にやった者同士が一番知っているので、彼らに任せることにしている。

評価がほぼすべて個人別評価になっている現状のなかで、個人に評価を配分することは避けて通れない。しかし、個人別評価に過剰に依存している現状は、お互いが協力しあうとか、お互いの知恵を出し合うという、「世間をわたる」場合に大切な精神を育てないといった問題があることは指摘しておきたい。

## 学生が企画運営する授業——沖縄大学の挑戦

2009年05月

沖縄大学では昨年「障がい原論」が、学生が企画運営する科目として大変充実し大成功を収めたとのこと。この型の授業をもっと増やそうと、検討がすすんでいる。科目設定提案も学生ができるようにしようということも含んでだ。

このアイデアは、2001年に私が中京大学で提案したものだ。当時は時期尚早だったが、今沖縄大学で実現しそうで、私にとっても感慨深いことだ。

たとえば、「南城学」という科目が開設されたら、学生だけでなく、南城市民も参加しておもしろくなるだろう。沖縄大学ですでに「国場学」という、沖縄大学のある地元研究の科目があるという。

こんなふうに「手作り大学」は楽しいし生き生きしている。

## 教員の物語と学生の物語——大学教育・授業の物語性

2010年7月23日

授業を中心とする大学教育を、『物語』という角度からとらえてみたい。その物語には、教える側からのものと、学ぶ側からのものとの二つがある。

広くこの両者の関係のあり方に焦点があてられるようになったのは、そう古いことではない。2000年ごろから文部科学省の文書に、「一方向型授業から双方向型授業へ」ということが頻繁に登場して以降だ。

無論、優れた大学人、授業熱心な大学教師は、それよりずっと以前からこの問題を考えていた。他方、これだけ言われながら、この問題にリアリティをもって取り組もうとしている大学教員は未だに多くはない。というか、実質的には多数にはなっていない。そして、看板は別にして、この問題に取り組む体制・態勢になっていない大学が多い。

なぜか。それは、依然として、教員が伝える中身を学生が受け取るという一方向的な授業観がまだまだ支配的だからだ。そこでは、教員側の教える「物語」のみが存在し、意識化されている。

そして、授業において、学生は教員に従属して存在するという発想がともなっており、授業に対して学生には学生独自のアプローチ、つまり『物語』があるのだ、という見方を受け入れられていない。

そうした見方だと、授業での不都合の大半は学生の責任にされ、学生管理をいかにするか、ということに授業改善の一つの柱が据えられる。授業での遅刻・私語・居眠りをどうするか、にそれがよくあらわれる。

もう一つの柱は、学生に授業内容をいかに伝えるか、という提示方法に向けられる。内容を学生に分かりやすく構成し、説明、パワーポイント、板書をいかにうまくやるか、とかである。

これらの特徴は、授業における学生の「物語」認知が大変希薄だ。教員が構成する物語だけで、大学が動いているとい

う発想から卒業しきれていないのだ。それは個々の教員レベルだけでなく、大学のカリキュラム構成も、大学の教える側だけから構成される「物語」がほとんどである。例外に近いのは、「大学入門」的な科目ぐらいだろう。それととも、教員側からの「物語」で構成されることがほとんどである。

10年以上前の話。私のかつての勤め先で「大学入門」的な科目を設置し、担当教員が授業内容を示し、学生がクラスを選ぶということがあった。クラス人数に激しい差異が出た。2~3人から100人ぐらいまでと、大変な幅であった。教室収容数から調整が必要となった。授業内容をみれば歴然としていた。

従来の大学教育の「常識」、つまり教員の物語で構成されたクラスは数人で、学生の物語から構成されたものは、数十人以上だった。だが、この事態を理解する教員は少ない。いまでも、こうした事態が、あちこちの大学でみられ、その解決法として、クラス指定制度に依存している大学が圧倒的に多いのだ。

こんな例からみても、学生の物語から大学教育を構成するという課題に全く未熟な状況が日本の大学の『平均』なのだ。断わっておくが、「学生の物語からの大学教育を作れ」というのではない。「学生の物語と教員の物語をかみ合わせて大学教育を作れ。教員の物語だけで作るな」と言っているのである。

では「学生の物語」とは、どんなものだろうか。「学生に物語」のなかから発するメッセージはどんなものだろうか。一年生を中心に、例をあげておこう。その説明、そして対応については、またの機会にしよう。

- ・一日4コマも、坐りっぱなし聞きっぱなしの授業で、気分転換に私語・居眠りでもしたくなる。
- ・学術用語連発の教員の話には分からないことだらけで、集中を続けるのは難しい。
- ・自分の問題関心を持って、といわれるが、そういうものを持つ習慣がないし、それを考え始めると、逆に授業についていけなくなる。
- ・教員の話聞くだけでは、自分なりの学習ができない。レポートを書け、といわれても、書き方は教えてくれないので、どう書いていいかわからない。
- ・成績評価の仕方がわからない。高校までは覚えることなどがはっきりしていたが、大学のやり方がわからない。
- ・自分の希望というより、たまたまこの大学のこの学科に入った。教員が、「この学問領域では~~だ」と強調しても、「上の空」だ。
- ・たくさんの受講生がいるが、知り合いはほんの少しだ。わからなくなっても聞ける人はほとんどいない。
- ・自分のやりたいこと、知りたいことにかみあうような授業を期待しているが、今のところ1~2割だ。
- ・先生の話より、サークルや学科の先輩の話の方が、ずっと有益だ。先生の評判についての、先輩たちの話が面白い。

これには、現役の学生のかたが書きこみしてくれた方が、うんとリアリティがあるだろう。